

成 岡 遺 跡
西ノ平 遺 跡
上ノ原 遺 跡

一般国道3号線限之城バイパス建設に伴う発掘調査報告書(1)

(本 文)

1 9 8 3 · 3

鹿児島県教育委員会

序 文

国道3号線隈之城バイパスの建設に伴う埋蔵文化財について

昭和55年度は、その確認調査を、昭和56年・昭和57年の2年間は、発

掘調査を実施してきましたが、その結果旧石器時代から明治・大正

時代までの長期にわたる生活跡をはじめ、多くの貴重な文化財の発

見がありました。

ここにその報告書を発刊することになりました。この報告書が文化

財の保護と学術研究のため広く活用されることを願っております。

発刊に当たり、発掘調査及び報告書作成に御指導、御協力をいた

だきました関係者各位に心から感謝の意を表します。

昭和58年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 井之口 恒雄

例　　言

- この報告書は、一般国道3号線限之城バイパスの建設によって消滅する成岡・西ノ平・上ノ原遺跡の発掘調査報告書である。
- 発掘調査は、建設省鹿児島国工事事務所から委託を受け、鹿児島県教育委員会が実施した。
- 本遺跡の名称は、当初霧島遺跡としていたが、地形・立地条件および遺跡の性格などから3遺跡に分けることが適当と思われる所以、小字名の検討から成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡と呼ぶことにした。
- 本書の執筆は次のとおりである。

I 第1・3章、III 第6～8章、IV 第6・7章	川畠昭光
I 第2章、II、III 第1・4・5・9章、IV 第1・4・5・8章、V	池畠耕一
III 第2章、IV 第2章	長野真一
III 第3章、IV 第3章	弥栄久志
III 第4章1(1)・第5章7(3)(4)	青崎和憲
III 第5章7(1)(2)・IV 第5章6(1)(2)	堂込秀人
III 第5章7(5)・第6章3・IV 第5章6(5)～(6)第6章3(2)	山口俊博
III 第5章7(6)～(10)、第7章、IV 第7章	戸崎勝洋
IV 第5章6(3)(4)	宮田栄二
IV 第5章6(7)～(16)	繁昌正幸・戸崎勝洋
VII 第1章	松下孝幸・石田肇・佐熊正史・用丸英博
VII 第2章	分部哲秋
VII	五味克夫

- 現地での実測図作成、写真撮影等は調査担当者が行ない、遺物実測、トレース等も主として担当者が当たったが、他に吉永正史・中村耕治・峯崎幸晴（文化課）などの協力を得た。なお上ノ原遺跡の分については新東晃一氏の協力を得た。
- レベル記入については限之城川にかかる寺田橋の脚付近にある基準点（10.589m）から移して用いた。
- 調査・整理期間中、遺物・遺構の指導に次の方々をお願いした。
河口貞徳氏・五味克夫氏・河野治雄氏・沢村仁氏・亀井明徳氏・西弘海氏・小田富士雄氏・横山浩一氏・松本建郎氏・森田勉氏

目 次

序文

例言

I 環境

第1章 遺跡の立地および環境	9
第2章 歴史的環境	10
第3章 層序	14

II 調査の経過

第1章 調査に至るまでの経過	15
第2章 第1次調査の経過	15
第3章 第2次調査の経過	17

III 成岡遺跡の調査

第1章 概要	21
第2章 旧石器時代	23
第3章 繩文時代	24
第4章 古墳時代	33
第5章 奈良～鎌倉時代	81
第6章 室町・安土桃山時代	155
第7章 江戸時代	165
第8章 明治・大正時代	189
第9章 まとめ	191

IV 西ノ平遺跡の調査

第1章 概要	205
第2章 旧石器時代	207
第3章 繩文時代	209
第4章 古墳時代	217
第5章 奈良～鎌倉時代	219
第6章 室町・安土桃山時代	318
第7章 江戸時代	324
第8章 まとめ	349

V 上ノ原遺跡の調査

第1章 概要	351
第2章 繩文時代	352
第3章 古墳時代	352

第4章 奈良～鎌倉時代	353
第5章 室町・安土桃山時代	353
第6章 まとめ	354
VI 人骨所見	
第1章 成岡・西ノ平遺跡出土の中世・近世人骨	355
第2章 成岡・西ノ平遺跡出土の幼小兒骨	383
VII 薩摩郡平札石寺と守護・地頭・郡司との関係一旧記録前編所収山内文書について一	

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	9	第26図 4号住居跡出土の土器(5)	44
第2図 周辺の遺跡地図	11	第27図 4号住居跡出土の土器(6)	45
第3図 湯之谷奥周辺地形図	13	第28図 4号住居跡出土の土器(7)	46
第4図 湯之谷奥採集の土器	13	第29図 4号住居跡出土の土器(8)	47
第5図 模式柱状図	14	第30図 4号住居跡出土の土器(9)	48
第6図 成岡遺跡グリッド配置図	22	第31図 5号住居跡	49
第7図 旧石器時代の石器	23	第32図 5号住居跡出土の土器(1)	49
第8図 繩文式土器(1)	27	第33図 5号住居跡出土の土器(2)	50
第9図 繩文式土器(2)	28	第34図 6号住居跡	51
第10図 繩文式土器(3)	29	第35図 6号住居跡出土の遺物(1)	52
第11図 石器(1)	30	第36図 6号住居跡出土の遺物(2)	53
第12図 石器(2)	31	第37図 7号住居跡	54
第13図 石器(3)	32	第38図 7号住居跡出土の土器(1)	54
第14図 古墳時代の竪穴住居跡配置図	33	第39図 7号住居跡出土の土器(2)	55
第15図 1号住居跡	34	第40図 7号住居跡出土の土器(3)	56
第16図 1号住居跡出土の土器	34	第41図 8号住居跡	57
第17図 2号住居跡	35	第42図 8号住居跡出土の土器(1)	57
第18図 2号住居跡出土の土器	36	第43図 8号住居跡出土の土器(2)	58
第19図 3号住居跡	37	第44図 9号住居跡	59
第20図 3号住居跡出土の土器	38	第45図 9号住居跡出土の鉄器	59
第21図 4号住居跡	39	第46図 9号住居跡出土の土器	60
第22図 4号住居跡出土の土器(1)	40	第47図 10号住居跡とその出土土器	61
第23図 4号住居跡出土の土器(2)	41	第48図 11号住居跡とその出土土器(1)	62
第24図 4号住居跡出土の土器(3)	42	第49図 11号住居跡出土の土器(2)	63
第25図 4号住居跡出土の土器(4)	43	第50図 12号住居跡	64

第51図	12号住居跡出土の遺物（1）…	65	第82図	土塹A と土塹B ………………	93
第52図	12号住居跡出土の遺物（2）…	66	第83図	土塹A・土塹B出土の土器 ……	93
第53図	13号住居跡出土の土器（1）…	67	第84図	土塹C ………………	94
第54図	13号住居跡…	68	第85図	土塹C・土塹D出土の土器 ……	94
第55図	13号住居跡出土の土器（2）…	68	第86図	土塹D ………………	95
第56図	14号住居跡とその出土遺物1)…	69	第87図	土塹E ………………	96
第57図	14号住居跡出土の遺物（2）…	70	第88図	土塹E出土の土器…	97
第58図	15号住居跡…	71	第89図	土塹F ………………	97
第59図	15号住居跡出土の土器（1）…	72	第90図	土塹F出土の土器…	98
第60図	15号住居跡出土の土器（2）…	72	第91図	土塹G ………………	98
第61図	19号住居跡とその出土土器…	73	第92図	土塹H ………………	99
第62図	土塹…	73	第93図	土塹H出土の土器…	100
第63図	擾乱層出土の古墳時代土師器		第94図	土塹I ………………	101
	(1)…	74	第95図	土塹I出土の土器…	101
第64図	擾乱層出土の古墳時代土師器		第96図	土塹J ………………	102
	(2)…	75	第97図	土塹J出土の土器…	103
第65図	擾乱層出土の古墳時代土師器		第98図	土塹K ………………	104
	(3)…	77	第99図	土塹K出土の土器…	105
第66図	古墳時代の須恵器…	79	第100図	集石造構…	105
第67図	奈良～鎌倉時代の造構配置図	80	第101図	溝状造構1の断面図…	106
第68図	掘立柱建物1…	81	第102図	溝状造構2の断面図…	107
第69図	掘立柱建物2…	82	第103図	溝状造構1と溝状造構2出土の	
第70図	掘立柱建物3…	83		土器（1）（土師器）…	108
第71図	掘立柱建物4…	84	第104図	溝状造構2出土の土器（2）	
第72図	掘立柱建物5と掘立柱建物7…	85		(土師器・黒色土器)…	109
第73図	掘立柱建物6…	86	第105図	溝状造構2出土の土器（3）	
第74図	掘立柱建物8と掘立柱建物9…	87		(須恵器)…	110
第75図	掘立柱建物10…	88	第106図	溝状造構2出土の土器（4）	
第76図	掘立柱建物の出土土器…	88		(磁器)…	111
第77図	掘立柱建物11…	89	第107図	溝状造構2出土の土製品…	
第78図	16号住居跡…	90		石製品…	112
第79図	16号住居跡・18号住居跡出土の 土器…	90	第108図	柱穴出土の黒色土器・土製品…	114
第80図	17号住居跡…	91	第109図	柱穴出土の土師器…	115
第81図	18号住居跡…	92	第110図	土師器（1）（皿）…	118
			第111図	土師器（2）（皿・壺）…	119

第112図 土師器 (3).....	120	第146図 染付・天目	163
第113図 土師器 (4).....	121	第147図 陶器 (妻・摺鉢)	164
第114図 土師器 (5).....	122	第148図 振立柱建物12	165
第115図 土師器 (6).....	123	第149図 振立柱建物12の出土遺物	166
第116図 土師器 (7).....	124	第150図 構造遺構4断面図	166
第117図 土師器 (8).....	125	第151図 近世墓1群配置図	167
第118図 土師器 (9).....	126	第152図 近世墓2群配置図	167
第119図 黒色土器	130	第153図 近世墓2群の墓石平面図	168
第120図 須恵器 (1).....	131	第154図 1・13号墓	169
第121図 須恵器 (2).....	132	第155図 2・27号墓	170
第122図 須恵器 (3).....	133	第156図 3・4号墓	170
第123図 須恵器 (4).....	134	第157図 5・6・7号墓	171
第124図 須恵器 (5).....	135	第158図 8・9・10号墓	172
第125図 須恵器 (6).....	136	第159図 11・12・14号墓	173
第126図 須恵器 (7).....	137	第160図 15・16・17号墓	174
第127図 須恵器 (8).....	138	第161図 18・19・20号墓	175
第128図 須恵器 (9).....	139	第162図 21・22号墓	176
第129図 陶器	142	第163図 23・24号墓	177
第130図 青磁 (1).....	144	第164図 25・26・28号墓	178
第131図 青磁 (2).....	145	第165図 古銭実測図	179
第132図 白磁	151	第166図 古銭拓影	181
第133図 古銭拓影	152	第167図 キセル・扇子実測図	181
第134図 緑釉土器・墨書き土器・土 製品	153	第168図 鉄釘実測図	181
第135図 石製品	154	第169図 碗類 (1)	183
第136図 室町時代以降の遺構配置図	155	第170図 碗類 (2)・皿	184
第137図 中世墓A出土の白磁	156	第171図 鉢・高环	185
第138図 古銭拓影	156	第172図 摺鉢・茶家・茶家蓋	187
第139図 中世墓B~I 配置図	156	第173図 妻・徳利・壺	188
第140図 中世墓A	157	第174図 チリ溜め	189
第141図 中世墓B~F	158	第175図 チリ溜め出土遺物	190
第142図 中世墓G~I	159	第176図 橋文式土器出土区図	192
第143図 土塙Lとその出土遺物	160	第177図 古墳時代の土師器分類図 (1)	192
第144図 青磁	161	第178図 古墳時代の土師器分類図 (2)	193
第145図 白磁	163	第179図 古墳時代の土師器分類図 (3)	194
		第180図 古墳時代の土師器分類図 (4)	195

第181図 古墳時代の土師器分類図	第206図 堀立柱建物 7	230
(5) 196	第207図 堀立柱建物 9	231
第182図 古墳時代の土師器分類図	第208図 堀立柱建物 3 ~ 堀立柱建物 9	
(6) 197	の出土土器	232
第183図 古墳時代の土師器分類図	第209図 堀立柱建物 10	233
(7) 198	第210図 堀立柱建物 11	234
第184図 古墳時代の土師器分類図	第211図 堀立柱建物 12	235
(8) 199	第212図 堀立柱建物 13	236
第185図 古墳時代の土師器分類図	第213図 堀立柱建物 14	237 ~ 238
(9) 200	第214図 堀立柱建物 10 ~ 堀立柱建物 14	
第186図 磁器分類図	の出土土器	239
第187図 西ノ平遺跡グリッド配置 図	第215図 土塙 A と土塙 B	240
206	第216図 土塙 C と土塙 D	241
第188図 旧石器時代の石器 (1)	第217図 土塙 E	242
第189図 旧石器時代の石器 (2)	第218図 土塙 B · C · D · E の出土	
第190図 楪文式土器 (1)	土器	242
第191図 楪文式土器 (2)	第219図 土塙 F	243
第192図 楪文式土器 (3)	第220図 土塙 G と土塙 H	244
第193図 石器 (1)	第221図 土塙 I と土塙 J	245
第194図 石器 (2)	第222図 土塙 F · G · H · I · J の 出土土器	245
第195図 石器 (3)	216	
第196図 古墳時代の土師器・須恵器	第223図 土塙 K と土塙 L	246
第197図 奈良~鎌倉時代の遺構配置 図 (南半)	第224図 土塙 M	247
219	第225図 土塙 K · L · M の出土土器	248
第198図 奈良~鎌倉時代の遺構配置 図 (北半)	第226図 土塙 N	249
220	第227図 土塙 O	250
第199図 堀立柱建物 1	第228図 土塙 P	251
第200図 堀立柱建物 2	第229図 土塙 P · R · S の出土土器	251
第201図 堀立柱建物 1 と 2 の出土土 器	第230図 土塙 Q	252
225	第231図 土塙 S	252
第202図 堀立柱建物 3	第232図 土塙 R	253
226	第233図 溝状遺構 1 · 2 · 3 の断面図	254
第203図 堀立柱建物 4	第234図 溝状遺構 1 出土の土器	255
227	第235図 溝状遺構 2 · 3 および古道 出土の土器	256
第204図 堀立柱建物 5		
228		
第205図 堀立柱建物 6 と堀立柱建物 8		
229		

第236図 古道の断面図	257	第269図 青磁（2）・白磁（1）	306
第237図 土塹Aと土器集積遺構1の 古銭	257	第270図 白磁（2）・青白磁・褐釉陶器	309
		第271図 緑釉土器・墨書き土器	310
第238図 土器集積遺構	257	第272図 墨書き土器	311
第239図 土器集積遺構の土器	258	第273図 土製品	314
第240図 柱穴出土の遺物	260	第274図 石製品（1）滑石製品	315
第241図 土師器（1）（皿）	267	第275図 石製品（2）砥石	316
第242図 土師器（2）（皿）	268	第276図 古銭	317
第243図 土師器（3）（皿）	269	第277図 帯金具および青銅製品	317
第244図 土師器（4）（环）	270	第278図 中世墓A・B	318
第245図 土師器（5）（环）	271	第279図 古銭拓影	318
第246図 土師器（6）（环）	272	第280図 火葬遺構とその出土遺物	319
第247図 土師器（7）（环・碗）	273	第281図 青磁	320
第248図 土師器（8）（碗）	274	第282図 白磁・染付・陶器・天目	323
第249図 土師器（9）（蓋・妻）	275	第283図 江戸時代の遺構配置図	324
第250図 土師器（10）（妻）	276	第284図 掘立柱建物①	325
第251図 土師器（11）（妻・鉢）	277	第285図 掘立柱建物②	326
第252図 土師器（12）（壺など）	278	第286図 掘立柱建物③	327
第253図 黒色土器（1）	281	第287図 掘立柱建物④	328
第254図 黒色土器（2）	282	第288図 掘立柱建物⑤	329
第255図 須恵器（1）（环蓋・ 环身）	283	第289図 掘立柱建物⑥	330
		第290図 掘立柱建物①・④の出土遺物	331
第256図 須恵器（2）（环身）	284	第291図 かまどA～D配置図	331
第257図 須恵器（3）（壺）	285	第292図 かまどA～E実測図	332
第258図 須恵器（4）（壺）	287	第293図 粘土貼り遺構と土塙⑤	333
第259図 須恵器（5）（妻の口縁）	289	第294図 土塙①～④・⑥と土塙出土遺物	334
第260図 須恵器（6）（妻）	290	第295図 道路跡断面図	335
第261図 須恵器（7）（妻）	291	第296図 近世墓群配置図	335
第262図 須恵器（8）（妻）	292	第297図 近世墓群墓石平面図	335
第263図 須恵器（9）（妻）	293	第298図 1号墓	336
第264図 須恵器（10）（妻）	294	第299図 2・3号墓	337
第265図 須恵器（11）（妻）	295	第300図 4・5号墓	338
第266図 須恵器（12）（鉢）	296	第301図 6号墓	339
第267図 陶器	300	第302図 墓塙出土古銭拓影	339
第268図 青磁（1）	305	第303図 墓書き土器	340

第304図 碗類（1）	341	第309図 茶家・摺鉢・鉢・壺	347
第305図 碗類（2）	342	第310図 壺	348
第306図 盆	344	第311図 上ノ原遺跡トレンチ配置図	351
第307図 盆・鉢・猪口・高环・ その他	345	第312図 桧文時代の遺物	352
第308図 茶家・茶家蓋・その他	346	第313図 古墳時代～室町時代の遺物	354

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	12	第24表 鉄釘一覧表	181
第2表 桧文式土器一覧表(1)	24	第25表 碗類・皿計測表	182
第3表 桧文式土器一覧表(2)	25	第26表 盆・鉢計測表	186
第4表 石器一覧表	27	第27表 年表	191
第5表 捣乱層出土の古墳時代土師 器出土地区表	76	第28表 穫穴住居跡一覧表	200
第6表 捣乱層出土の古墳時代須恵 器出土地区表	78	第29表 主な遺構とその出土遺物	201
第7表 溝状造構 1・2出土の遺物出土 地区表	113	第30表 墓址一覧表	203
第8表 柱穴出土の遺物一覧表	114	第31表 桧文式土器一覧表(1)	209
第9表 土師器出土地区表(1)	127	第32表 桧文式土器一覧表(2)	210
第10表 土師器出土地区表(2)	128	第33表 石器一覧表	213
第11表 土師器出土地区表(3)	129	第34表 古墳時代の土師器・須恵器出 土地地区表	218
第12表 須恵器一覧表(1)	140	第35表 柱穴出土の遺物出土地区表	259
第13表 須恵器一覧表(2)	141	第36表 土師器出土地区及び計測表(1)	264
第14表 青磁出土地区表(1)	146	第37表 土師器出土地区及び計測表(2)	265
第15表 青磁出土地区表(2)	147	第38表 土師器出土地区及び計測表(3)	266
第16表 青磁出土地区表(3)	148	第39表 黒色土器出土地区及び計測表	280
第17表 白磁出土地区表(1)	149	第40表 須恵器一覧表(1)	297
第18表 白磁出土地区表(2)	150	第41表 須恵器一覧表(2)	298
第19表 白磁出土地区表	163	第42表 須恵器一覧表(3)・陶器一覧表	299
第20表 染付・天目出土地区表	164	第43表 青磁出土地区表(1)	301
第21表 陶器出土地区表	164	第44表 青磁出土地区表(2)	302
第22表 墓址出土古錢一覧表(その1)	179	第45表 青磁出土地区表(3)	303
第23表 墓址出土古錢一覧表(その2)	180	第46表 青磁出土地区表(4)	304
		第47表 白磁出土地区表(1)	307
		第48表 白磁出土地区表(2)	308

第49表 墨書・刻書土器出土地区表(1)	312	第54表 青磁出土地区表(2)	321
第50表 墨書・刻書土器出土地区表(2)	313	第55表 青磁出土地区表(3)	322
第51表 土製品出土地区表	314	第56表 白磁・染付・陶器・天目出土地 区表	323
第52表 石製品出土地区表	316	第57表 墓塚出土古錢一覽表	340
第53表 青磁出土地区表(1)	320		

付 図 目 次

- 付図 1 成岡遺跡全体図
- 付図 2 西ノ平遺跡全体図
- 付図 3 成岡遺跡地層断面図
- 付図 4 西ノ平遺跡地層断面図

I 環 境

第1章 遺跡の立地および環境

第2章 歴史的環境

第3章 層 序

第1章 遺跡の立地および環境

成岡・西ノ平・上ノ原の3遺跡は、鹿児島県川内市中福良町に所存し、川内市街地の南約3km、国鉄鹿児島本線限之城駅の西約1kmの位置にある。

川内市は、鹿児島県の北西部に位置し、北および北東は紫尾山（標高1067m）に続く出水山地で阿久根市・東郷町、東は上床山山地で樋脇町、南は東西に連なる冠岳山地と高江山地で串木野市と境をなしている。川内市の市街地は三方を山に囲まれた盆地状の沖積平野に位置し、その中央部を、熊本県白髪岳に源を発した川内川が西流して東シナ海に注いでいる。

遺跡の所在する中福良町は、標高519mの弁財天山を最高峰とする高江山地の東北部に形成された山頂の比較的平坦な永野段から南東にのびる丘陵末端部に位置する。丘陵の南側には、川内川の支流の限之城川が東流したのち、百次川を合流して丘陵をかすめるように北流するため、丘陵の南から東にかけて沖積平野が発達している。また、丘陵末端部に形成された台地の縁辺部には、湧水点が数ヶ所あって、最近まで飲料水等に利用されていた。

成岡遺跡は、3遺跡で最も南に位置し、東へ延びる標高20m程の舌状台地上にある。水田面からの比高が約10mの平坦な台地で、畑地と利用されている。遺跡の北半分にはゴボウが栽培されて、部分的に深さ約1mの掘削が行われている。

西ノ平遺跡は、成岡遺跡の北方約200mに位置し、幅約80mの小谷を挟んで対峙する。北に上ノ原遺跡の所在する標高約35mの台地を背にして、南向きの傾斜地（標高約20~30m）を削平して3段の畑地となっている。北端はやや急傾斜を呈し約5mの比高をもって上ノ原遺跡に続く。

上ノ原遺跡は、市道を挟んで西ノ平遺跡の北に位置し、3遺跡で最も高位の標高35mの平坦な台地上にある。



第1図 遺跡位置図（・印）

第2章 歴史的環境

川内市は奈良時代には薩摩国府が置かれ、以来薩摩国の中心地として栄えた所である。先・原史時代の遺跡としても、鹿児島県最初の旧石器時代遺物（尖頭器）が確認された楠元遺跡や石庵丁・石鎌など弥生時代前期の遺物を出す若宮遺跡、小形仿製鏡の出土した外川江遺跡、地下式板石積石室の調査された横岡遺跡などが知られている。

ところが、当遺跡周辺にはこれまで先・原史時代の遺跡はあまり知られていない。「川内市史」上巻に写真のある隈之城町觀音橋下採集の石器には旧石器時代の石器らしきものがある。縄文時代の遺跡としては約1700mほど北々東の位置にある尾賀台遺跡、西ノ平遺跡と同じ台地上にある川内実業高グランド遺跡などがある。尾賀台遺跡は標高40mを測る狭い台地で、市来式土器を出土する。石斧・敲石等も出ており、台地の東斜面には貝塚もつくられている。また周辺の低地からも石斧などが出土している。川内実業高グランド遺跡からは後期の土器が、グランド造成時に出土している。宮崎町赤沢津遺跡、寄田町寄田遺跡でも市来式土器が出ている。青山町では川底より石斧が出土している。

弥生時代終末から古墳時代にかけては宮里町日吉、同安養寺丘、宮崎町赤沢津、向田町日暮丘などの遺跡に土器の散布がみられ、安養寺丘には地下式板石積石室もある。これらの中には赤沢津遺跡のように広大な低台地上にあるものもあって、この隈之城平野に生産の基盤を置いた人達の集落が、周辺の台地上に形成されたであろうことをうかがわせる。また安養寺丘で検出された地下式板石積石室はその分布圏としては最南部にあたるものである。

奈良時代には薩摩国薩摩郡に属しており、当遺跡付近は避石郷であろうとされる。川内川対岸の高城郡が国府・国分寺など主要な役所・寺を残すのに対し、こちらにはそうしたものがない。現在、山頂付近に公園のつくられている寺山の山麓には平安時代後半の軒丸瓦・軒平瓦などを出土する天保寺があり、礎石と思われる巨石も残っている。宮里町清水寺近くには経塚があり、滑石製の經筒などが出土している。湯之谷の谷頭は永野段あたりからの地下水が湧出し、巨石が累々としているが、この傾斜面の一部に土師器の壺・壺・皿などが集積し、完形品も多く出土している。

鎌倉時代以降、武士の起りとともに各地で戦いが多くなり山城等がつくられるが、当地周辺でも多くの激しい戦いが行われている。1339年、1372年の碇山城の戦い、1418年の永利城の戦い、1587年の豊臣秀吉の九州征討などがその主なものである。この他にも百次城・隈之城などの山城があった。

平札石寺は文献では平安時代にすでに存在したことがわかっているが、現在残っているものには古石塔や仁王像など中世以降のものだけがある。当遺跡の西方約500mの所には魔寺前の寺跡が残っている。現在、雜木林となっているが、礎石群・池跡などの他に、五輪塔などが転がっている。創建時の寺跡などは不明である。



第2図 周辺の遺跡地図

図番	遺跡名	所在地	地形	概要
1	久留巣原	五代町久留巣	台地	弥生時代中期～平安時代の散布地
2	大将軍神社	タタタ	タ	祭神はタケミカヅチノミコト
3	崎原	タタ崎原	微高地	弥生式土器散布地
4	若宮	タタ若宮	タ	弥生式土器・石庵丁・石鎌、板石積石室
5	戦の原	タタ戦原	タ	弥生式土器散布地
6	新田神社	宮内町可愛山	丘陵	中世以降、薩摩国一の宮
7	弥勒寺	タ	川底	『弥勒寺』の逆プリント文字のある瓦出土
8	薩摩国府跡	御陵下町	台地	六町四方の広域
9	薩摩国分寺跡	国分寺町	タ	国指定史跡。史跡公園として整備中
10	泰平寺	大小路町	微高地	2町×1.5町の寺城。鎌倉時代には存在
11	天辰	天辰町坊下	台地	古墳時代土師器散布地
12	天辰廃寺	タ川原	山麓	平安時代後半の軒丸瓦・軒平瓦が出土
13	碇山城	タ碇山	丘陵	中世山城
14	白羽火雷神社	平佐町	微高地	
15	清水経塚	宮里町清水	山麓	嘉永3年5月1日銘、滑石製蓋付外筒
16	志奈尾神社	タ	タ	
17	日吉	タ堀之内日吉	微高地	古墳時代土師器散布地。鉄刀
18	安養寺丘	タ安養寺丘	山麓	タ地下式板石積石室
19	平佐城	平佐町藤崎	丘陵端	中世山城
20	日暮丘	向田町日暮丘	独立丘	弥生式土器散布地
21	尾賀台貝塚	隈之城町尾賀古寺	タ	縄文式土器（後期）散布地。石斧。貝塚
22	赤沢津	タ赤沢津	台地	古墳時代土師器散布地
23	若宮神社	永利町	タ	土師器散布地
24	百次城	百次町	丘陵端	中世山城
25	坪塚	勝目町	タ	条里制施行の基点
26	隈之城	隈之城町	丘陵	中世山城
27	川実高グランド	中福良町	台地	縄文式土器（後期）散布地。消滅
28	上ノ原	タ上ノ原	タ	本書
29	西ノ平	タ西ノ平	タ	タ
30	成岡	タ成岡	タ	タ
31	平札石寺	タタタ	タ	タ
32	湯之谷奥	タ	山麓	タ
33		青山町	川底	磨製石斧採集

第1表 周辺の遺跡一覧表

2 湯之谷奥採集の土師器

限之城平野に西側からのびる丘陵は、末端部で幾条もの枝に分かれしており、その間には深浅あるいは広狭様々な谷がはいり込んでいる。川内実業高校付近へ出てくる湯之谷もそのひとつである。湯之谷はその谷頭が3つに分かれ、この南端の谷頭は平石寺の北を画する谷にあたる。北端にのびる谷頭では周辺に湧水する清水を集めて小川をつくり、この小川はさらに東へ下り限之城小学校付近で限之城川に注いでいる。

遺物の散布しているのは北端の谷頭が丘陵へあがる斜面途中で、ごく限られた範囲である。立地条件からみると生活跡の可能性はほとんどなく、巨石が多く散在していることから巨石を対象とした祭祀遺跡の可能性がある。

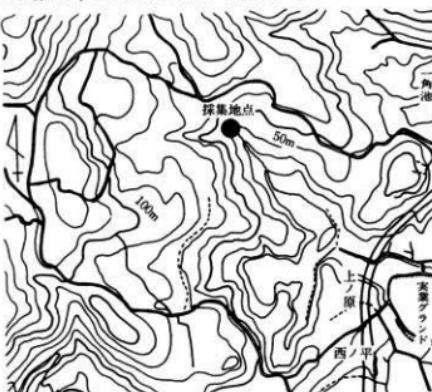
採集した土器はすべて土師器で、坪・高坪・壺がある。表面には黒色石粒（マンガン粒？）がこびりつき、磨滅もみられる。

坪はすべて底部の切り離しがヘラ切りによるものであり、器形によって2種に分けられる。1類は内面の底部と立ちあがりの境が不明瞭なもので、口縁直径が10.2cm～11.0cmのものと、12.6cmとやや大型のものとがある。2類は立ちあがりが直に近く立ちあがるものである。

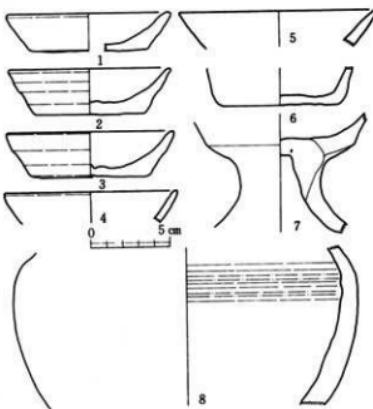
高坪の坪部は、底部と立ちあがりの境に段をもち、脚部は短かい筒部からゆるやかに広がる裾部へと移る。

壺は丸みをおびた器形をしている。

これらは坪の特長などから平安時代のものであろう。



第3図 湯之谷奥周辺地形図 (15,000分の1)



第4図 湯之谷奥採集の土器

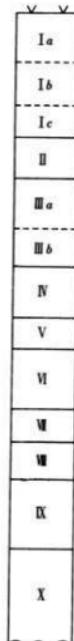
第3章 層序

遺跡の所在する成岡・西ノ平・上ノ原の台地は、基盤岩の溶結凝灰岩を入戸火碎流（シラス）が厚さ3~5mで覆いその上に砂礫層や新期火山灰層などが堆積している。基本的な層序は、西ノ平遺跡の28~30区付近で表層からシラス層まで10層に分類された。成岡・上ノ原両遺跡の中央付近はV・VI層を欠くところが多い。

Ia層 表層であり、現在の耕作土である。

Ib層 旧耕作土で、淡茶褐色を呈する。

Ic層 濁茶褐色土層で、近世の遺物を包含する。西ノ平遺跡でみられる。



II層 黒色の腐植土層で、奈良時代~中世の遺物を包含する。

IIIa層 黄褐色軟質土層で、通称赤ホヤ、赤ボッコと呼ばれるものである。台地の平坦部では厚さ30~40cmであるが、傾斜面では、二次堆積的な濁黄褐色を呈するところがある。縄文式土器を包含する。

IIIb層 黄褐色バミス層で、連続した堆積ではなく、ブロック状になるところもある。無遺物層である。

IV層 黒色粘質土層で、成岡・西ノ平・上ノ原遺跡全体でみられ、縄文時代早期の遺物を包含する。

V層 濁茶褐色粘質土層（チョコレート層）で、無遺物層である。西ノ平遺跡の28~30区付近のみに堆積している。成岡・上ノ原遺跡には堆積しない。

VI層 IV層と漸移関係にある黒色粘質土層で、無遺物層である。

VII層 黄褐色粘質土層で、層厚は5~15cmである。

VIII層 淡黄色砂質土層で、シラスの2次堆積的性格をもつ。成岡遺跡では、VII層とVIII層に旧石器時代の細石核、細石刃等の旧石器時代の遺物を包含する

IX層 砂礫層で、台地中央付近では約1.5m堆積し、部分的にバミスと砂層の互層を挟む。無遺物層である。

X層 シラス層（入戸火碎流）である。

第5図
模式柱状図

II 調査の経過

第1章 調査に至るまでの経過

第2章 第1次調査の経過

第3章 第2次調査の経過

第1章 調査に至るまでの経過

建設省は隈之城駅付近で終日、渋滞を続ける一般国道3号線の緩和を図るために、昭和47年に木場茶屋駅付近から川内駅付近に至るバイパスの建設を計画した。

一方、昭和41年頃に行われた川内実業高校のグラウンド造成工事で、縄文式土器などが出土し遺跡の存在が周知された。この隣接地にバイパス建設の計画があることを聞いた県文化課では昭和53年11月に分布調査を実施し、字成岡・西ノ平・上ノ原の台地上に土師器等が散布していることを確認した。

第2章 第1次調査の経過

分布調査の結果にもとづき、建設省と鹿児島県教育委員会は遺跡の処置について協議を重ねていたが、とりあえず確認調査を実施することになった。そして昭和55年12月1日に建設省と鹿児島県教育委員会との間で委託契約が結ばれた。この契約にもとづいて、昭和55年12月1日から確認調査が開始された。

1. 調査体制

調査主体者	鹿児島県教育委員会
調査責任者	鹿児島県教育委員会文化課 課長 山下典夫
調査企画者	専門員 本藏久三
調査担当者	主事 新東晃一
タ	専門員 池畠耕一
タ	専門員 青崎和憲
タ	専門員 中村耕治

2. 概要および日誌抄

調査対象は字成岡の台地端から湯之谷まで約500mにおよぶ範囲だったが、用地買収が完了しておらず、買収済の場所に限って実施した。調査は原則として2m幅のトレンチ調査で実施し、隨時拡張の調査をした。現地での調査は2月5日に終了し、3月19日まで重富の収蔵庫にて図面・遺物の整理をした。

(1) 成岡遺跡（12月1日～11日、1月29日～2月5日）

成岡遺跡では農道より北の部分（26区付近以北）が未買収地域だったため、調査は農道より南側に限定された。12月1日より調査を開始し、12月11日まで続行した。

12月1日（月） 午前中、北薩教育事務所、川内市社会教育課へあいさつ。発掘用具搬入。

午後よりテント設営、調査開始。

12月8日（月） 18・19・F・G区の住居跡（1号住居跡）を調査開始。

西ノ平・上ノ原遺跡の調査をほぼ終了した1月29日より11区以南の調査を重点的に実施し、特に8～10、C～G区付近では多くの柱穴が検出されたため、拡張して調査した。

2月5日（木） 平面図作成、レベル記入のあと用具片づけ、用具運搬。

以上の調査によって、豊穴住居跡・柱穴・溝状造構などが検出された。11区以南については江戸時代以降の建物跡が検出されたので記録保存のための調査をした。安土・桃山時代以前については造構・遺物とも見出せなかつたので調査完了とした。また、27区以北については調査できなかつたが、地表散布がみられたため、本調査では12区以北の全地域の調査が必要とされた。

(2)西ノ平遺跡（12月11日～23日、1月20～28日）

12月11日（木） 成岡遺跡より道具の移動、南側の調査を開始。

12月17日（水） 15D・E区に大柱穴があり、規模確認のため13・14E区と15D・E区を拡張する。12～15区には柱穴が多いため幅を広げる。

12月18日（木） 11D区に溝検出。12～15D区の住居跡落込みは方形土塀である。

北側は未買収地域であったが、途中で用地の買取がほぼ解決したため、上ノ原遺跡の調査が一段落したあとで南側の補充調査を再開。

1月20日（火） 26D～G区の掘り下げ開始、奈良時代末～平安時代初頭の遺物多量に出土。

1月28日（水） 8D・E区に11D・E区より続く溝が検出され、包含層の遺物も多量に出土。西ノ平遺跡の調査は本日で終了したため、土盛りなどして次の調査に備える。

以上の調査によって、建物・溝状造構など奈良・平安時代を中心とする遺構の検出が予想され、その範囲はほぼ全域にわたることが判明した。

(3)上ノ原遺跡（12月22日～1月26日）

部分的に未買収地域があったが、ほぼ全域の調査ができた。

12月22日（月） 午後よりトレンチ調査を開始する。

12月23日（火） 10～12D区付近に縄文式土器が出土。

12月26日（金） 雪のため発掘作業は中止したが、年内の作業が本日までのため、テント・道具の整理。

1月6日（火） 本日より作業再開。19～24F区の調査。石匙が出土。

1月19日（月） 10～12C～F区は縄文時代晩期と古墳時代の上器が出土しているため、拡張して調査を実施。4・5E区では表層の下にシラスが出てくる。

1月20日・21日（火・水） 10～12C～F区の拡張区では縄文時代晩期と古墳時代の上器が少量出土。

1月22日（木） 平面調査は終了。10～12D区の深掘り。

1月23日（金） 4・5D区深掘り。

1月26日（月） 4・5F区深掘り。表層下はシラスとなる。本日で終了する。

上ノ原遺跡では一部を除いて遺物の出土は少なく、包含層なども検出されなかつたので、第1次調査で終了した。

第3章 第2次調査の経過

第1次調査の結果、成岡・西ノ平遺跡については第2次調査が必要となり、建設省鹿児島国道路工事事務所と鹿児島県教育委員会文化課との間で話し合いが続けられた。そして、昭和56年10月1日に委託者分任支出負担行為担当官九州地方建設局鹿児島国道工事事務所長安藤和人と受託者鹿児島県知事鎌田要人との間に委託契約が締結され、10月12日より調査が始まった。

I. 調査体制

調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査責任者	鹿児島県教育委員会文化課 課長 猪渡侯昭 タマシキハサウエイ		
調査企画者	主任文化財研究員 謙訪昭千代 カミカツカヨシチカ		
調査担当者	主事 池畠耕一 シロタケイイチ 文化財調査員 川畑昭光 カワハタヒロアキ 牛ノ浜修 ウシノハマヒaru 中村耕治 ナカムラケイジ 宮田栄二 ミヤタエイジ		
事務担当者	主幹兼係長 川畑栄造 カワハタエイゾウ 主查 安藤幸次 アンドウキョウジ 主事 山下玲子 サンジョウ		
調査作業員	(中福良町) 山内正利・橋口光男・橋口政吉・土川行盛・徳守キクエ 福田敏子・木練フルエ・森木サヲ・森木チエ・森木幸子・出来スミ子 出来照代・永吉きぬ子・森木キミ・永吉ノリ子・西山玲子・永田サチ 盛岡イク子・小牟田鈴子・吉留マツエ・徳重幸・山内澄子・山崎唯子 山内ノブ子・宮内和子・多田スミ子・橋口ワキ・原口スミ・星原陽子 新満シズエ・小牟田フミエ・伊達エツ子 (隈之城町) 村野春次・木練光夫・上村清志・村野カヨ子・馬場京子 柏木ツタエ・永田キヌ子・森山盛子・芝原アイ子・上青木ハツミ 橋口イッ子・上青木恵美子 (尾白江町) 尾崎精熊・小西キヨ子・辻キヨ子 (都町) 若宮アサノ・若宮秋子・山下スミ子・新盛ユキエ (青山町) 徳重岩歌・徳重ノブ子・有田静子 (永利町) 松下重信・若松美利・車田鈴子・松下みち子・野元サダ子 福別エミ・勝岡チヅ子 (平佐町) 相良靖文・上園敏郎・土屋伸寿・瀬戸口朋子		

(その他) 碓山浩美・上尾崎幸治・有馬通子・福元由美子・前園
瀬口

(整理作業員) 喜入カツエ・陣之内サチ子・坂口テル・重信紀子・竹之内由利子
山下治子・鎮守セツ子・川口セツ子・前之園俊子・中原己美子

2. 概要および日誌抄

(1)昭和56年度

①成岡遺跡（10月12日～12月23日）

農道を挟んで北側はいぜんとして未買収地域があったため、南側から表土はぎを始めた。江戸時代以降の調査を終えた時点では、用地買収が完了しなかったため、調査を中断して、西ノ平遺跡へ移動した。北側は買収地域の中で確認調査をし、遺跡の広がりを確認した。

10月12日（月） 作業員へ調査の工程、遺跡の性格、雇用条件等を説明。プレハブ設置場所の清掃。器材搬入。遺跡の草刈り。川内市教委社会教育課へあいさつ。

10月14日（水） プレハブへ道具搬入。遺跡の草刈り。テント・看板の設置。杭打ち。北半分のトレーンチ調査開始（15日まで）。

10月15日（木） 21～23A・B区より表土はぎ開始。北半分からも遺物が出土する。

10月19日（月） 20～23A・B区の表土はぎはほぼ終了。古墳時代の竪穴住居跡2基。

11月4日（水） 寺田橋のたもとにあるベンチマーク（LH 10,589m）よりレベルを移動。

11月10日（火） 16・17B区付近に墓石が散在しており、そのうちいくらかは元位置にある。

11月12日（木） 18・19A区製糸工場の跡を検出する。

11月13日（金） 19B区にも墓石があり、その付近で3基の墓塚。2基には人骨が残存。

11月17日（火） 24C～F区の溝（近世）掘りあげ。

11月19日（木） 17B～20B区の墓塚にある人骨を4体取りあげ（長崎大学）

12月2日（水） 17B区付近の墓塚は16基で、うち11基に人骨が残存。多くの墓塚に寛永通宝がある。台地北側の低い段にグリッドを設定し、掘り下げる。

12月3日（木） 16・17B区の墓塚を写真撮影、実測（9日まで）。

12月7日（月） 土の埋め戻し（14日まで）。平面実測およびレベル記入（23日まで）。

12月9日（水） 人骨取りあげ（長崎大学、10日まで）。

②西ノ平遺跡（12月7日～3月31日）

拂土場所がないため20区以南と、21区以北とに分けて調査した。20区以南の土は12区以南、H区以東の地点と、21区以北および、西側の畑を借用して置き、20区以南の調査終了後、ベルトコンベアを使用して土を元に戻した。

12月7日（月） 道具を移動。草刈り。テント設置場所・進入路・駐車場などの整地。

12月8日（火） 草刈り。ベルトコンベアすえつけ。南端から表土はぎ開始。

12月10日（木） 7F区に土師器・壺・皿の完形品が5点出土。7G区からは軽石製岩偶出土。

12月18日（金） 7F区の土器は数段になっており、総計11個出土。他に古鏡2点ある。

12月23日（水） 20H・I区にかまと・炉などが集中している。
 12月25日（金） 年末のため現場作業は本日で終わる。道具の整理・点検。
 1月5日（火） 調査再開。
 1月8日（金） 16E・F区の2層から多量の土師器壺・皿、須恵器、青磁、白磁が出土。
 1月12日（火） 南より遺構検出開始。
 1月25日（月） 21区以北も表土はぎ開始。
 1月26日（火） 坪事業のある建物が2棟（建物1と建物2）ある。
 2月12日（金） 建物1の柱穴にはすべて底に礎板がある。
 2月13日（土） 14時より現地説明会（約150名参加）。
 2月17日（水） 建物2もすべて柱痕跡があり、礎板をもつ。
 2月26日（金） 20区以南の航空写真撮影。
 3月9日（火） 建物2掘りあげ。柱穴中に青白磁などがある。7D区～8F区に道路跡。
 3月11日（木） 盛り土返しを開始する。
 3月19日（金） 19G区に土師器壺・皿が7点並んでいる。
 3月27日（土） 今年度の発掘調査を終了する。道具の清掃・点検。
 3月29日（月） 図面・写真・遺物の整理（31日まで）。

(2)昭和57年度

57年度も引き続き当初から再開する予定であったが、両者に行き違いがあつて2ヶ月足らずの間、空白期間が生じた。したがって、委託者分任支出負担行為担当官九州地方建設局鹿児島国道工事事務所長伊東仁史と受託者鹿児島県知事鎌田要人との間に委託契約が締結されたのは5月1日であった。調査は5月24日に、まず西ノ平遺跡から開始された。

①西ノ平遺跡（5月24日～9月10日、10月13日～10月27日）

5月24日（月） 午前中に電話申し込み、川内市教委へあいさつ。午後道具搬入。調査再開。
 5月26日（水） 盛り土返しをブルドーザー、ショベルカーを使って実施（28日まで）。
 6月7日（月） 23E区で円面鏡が出土した。
 6月11日（金） 25K区で宝町時代の火葬場を検出する。骨片・古銭が共伴。
 6月30日（水） 中世人骨の取りあげ（長崎大学、7月1日まで）。
 7月5日（月） 25G区、28G区に深い円形ピットがある。
 7月13日（火） 近世墓石の写真撮影。
 7月14日（水） 地神のあった巨木の下から多くの層塔が出土した（21D・E区）。
 7月15日（木） 近世墓塚の掘りあげを開始。
 7月20日（火） 中福良地区の児童に公民館でスライドを使って遺跡説明（約70名参加）。
 7月22日（木） 23E区のピットには土師器かめが立位で置かれている。
 8月2日（月） 人骨の取りあげ（長崎大学）。テントを成岡遺跡へ移動。
 8月4日（水） 平面実測のみを続行する（9月10日まで）。

- 8月7日（土） 14時より現地説明会（約20名参加）。
- 9月27日（月） 航空写真のために北半部を清掃（28日まで）。
- 10月13日（水） 11H区・25F区の土塁を写真撮影。
- 10月14日（木） 建物のつながりを検討。地層断面図作成のための深掘り開始（19日まで）。
- 10月18日（月） 北東隅の調査をするため表土をショベルカーで除去（20日まで）。
- 10月21日（木） 北東隅の調査を開始する。
- 10月27日（水） すべての調査を完了した。
- ②成岡遺跡（8月3日～11月25日）
- 8月3日（火） 草刈り。ベルトコンベア移動、すえつけ。
- 8月4日（水） 北半区の表土はぎを開始する。
- 8月19日（木） 北半区の表土はぎをほぼ終了し、南半区の表土削りにはいる。
- 8月23日（月） 17L区の土塁から白磁台付皿や洪武通宝・ガラス玉が出土する。
- 8月24日（火） J区で南北に続く溝からは平安末～鎌倉初の磁器などが多量に出土する。
- 8月31日（火） 18号住居跡からは鎌倉時代の須恵器などが出土する。
- 9月22日（水） 7号住居跡の周辺に墓塚があり、2基には人骨がある。
- 10月18日（金） 航空写真撮影。全体写真撮影。
- 10月12日（火） 断面実測用のための深掘り作業中、28～30I区付近で細石刃・細石核出土
- 10月14日（木） 平面実測のみを継続する。
- 10月27日（水） 深掘りを開始する。
- 11月1日（月） 遺物を収蔵庫へ搬出する。
- 11月6日（土） 14時より現地説明会（約40名参加）。
- 11月9日（火） 19時より中福良下公民館で、スライド説明会（60名参加）。
- 11月16日（火） 器材を重富へ搬出。プレハブの撤去。
- 11月17日（水） 以後は実測および遺物の取りあげ。
- 11月25日（木） 本日で、今年度の調査はすべて完了した。

③重富収蔵庫（5月10日～3月31日）

5月10日より2名で遺物の水洗・注記・接合・復元等を開始し、11月1日にはさらに5名増員した。11月26日からは調査員2名も加わって、本格的に整理作業を開始し、2月25日の入札に間にあわせた。

3. 調査中のおもな見学者

木場武則（川内市立図書館）新東晃一（明治百年記念館準備室）富田逸郎（出水高校）高倉洋彰・高橋章（九州歴史資料館）中村明藏・永山修一（ラサール高校）村田熙（県文化財審議員）上村俊雄（鹿児島大学）日高孝治（宮崎県教委文化課）宮本長二郎（奈良文化財研究所）島津義昭・広瀬正照・鶴島俊彦・西往欣一郎（熊本県教委文化課）川内市文化財審議会・川内市ふるさと学級・川辺郡の図書館関係者、川内実業高校土木科、川内市教育委員会

III 成岡遺跡の調査

- 第1章 概要
- 第2章 旧石器時代
- 第3章 繩文時代
- 第4章 古墳時代
- 第5章 奈良～鎌倉時代
- 第6章 室町・安土桃山時代
- 第7章 江戸時代
- 第8章 明治・大正時代
- 第9章 まとめ

第1章 概 要

バイパスは遺跡の東端付近を縱走して抜ける。バイパス予定地域で、台地は3段に分かれる。南から記すと、まず11区以南の部分がそれで、幅は30~50mある。この段は台地縁部だったのを江戸時代あるいは明治時代になって北端付近を削ったため段となったものである。この段では8~10C~D区付近に江戸時代あるいは明治時代以降に建物があり、10C区にはコンクリート柱のはいった井戸もあった。大小多くの柱穴あるいは土塁があり、中には陶磁器もはいっていたが、建物としてのまとまりはつかめなかった。約800m²を調査した。

次の段がもっとも広大な段で、いわゆる遺跡のある段である。12区~38区のほぼ全域を調査したが、江戸時代以前に深く削り取られた場所、掘り切り道路、山林は残存度が悪いため調査しなかった。24~33区、A~E区の部分は未買収のため、次回の調査分として残した。したがって、今回の調査面積は約5600m²だった。次に時代を追って概要を記したい。

旧石器時代の遺物は散在しているが、特に27~30区、I~K区付近には集中して出土するため再度、調査をやることとし、今回は未完了のままでおいた。剝片尖頭器・細石核などが出土。

縄文時代の遺物も広く散布しているが、集中的に出る所ではなく、遺構も検出できなかった。前平式土器から夜日式土器まで各時期の土器が出土したが、晩期の土器を除いて多くは数片のみの出土であった。

古墳時代は14区から30区の範囲に16軒の竪穴住居跡が検出された。すべて方形をしており、中央に炉跡をもっている点は共通している。主柱穴は検出されなかった。住居内にはかめ形土器・壺形土器・鉢形土器・高杯形土器・砥石などはいっていたが、4号住居跡は廐棄場所として使われたらしく多量の土器が含まれていた。1号・5号・10号・12号・15号住居跡の遺物には須恵器壺・かめなどが含まれており、時期を決める資料として重要である。

奈良・平安時代の遺物も多く出土したが、はっきりした遺構は12G・H区の土塁のみであった。多くの遺物の中には越州窯系青磁・緑釉土器・猿面鏡・転用鏡なども含まれており、土塁より出土した土師器は編年上重要である。

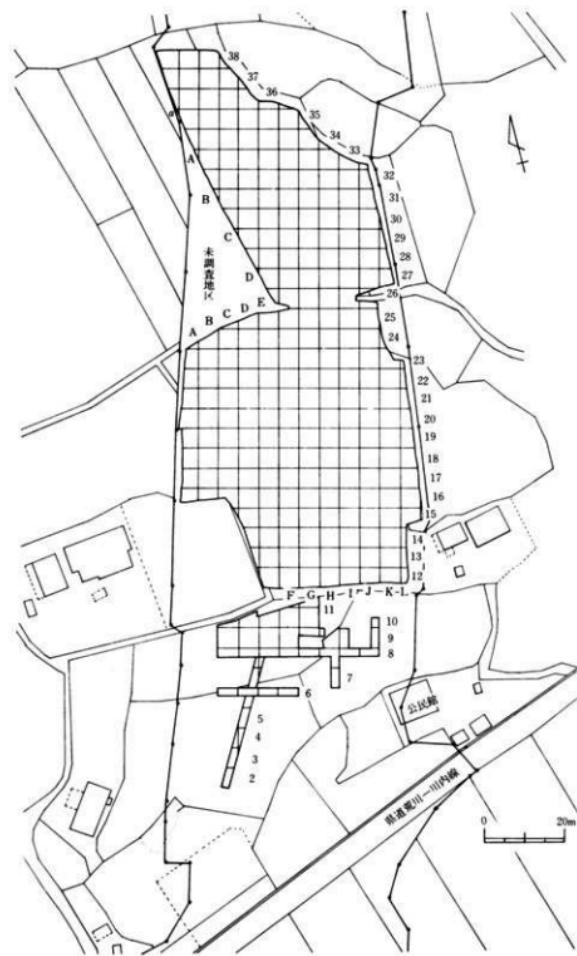
鎌倉時代前半の溝と竪穴住居跡3軒が検出された。竪穴住居跡は3軒とも小型で、竪穴周囲に柱穴を配した形態は似ている。溝からは磁器・魚住焼など多くの遺物が出土した。

室町・安土桃山時代の青磁・白磁なども出ているが、割合に少ない。数珠・洪武通宝などを副葬した墓跡が1基検出された。20H-I区付近にある円形土塁も同時期の可能性が強い。

江戸時代の遺物も多量に出土した。墓石を伴う墓など、長方形の墓跡が28基検出され、このうち24基には人骨も残っていた。寛永通宝・キセルなどが副葬されていた。建物跡は遺構として残っておらず、検出できなかった。

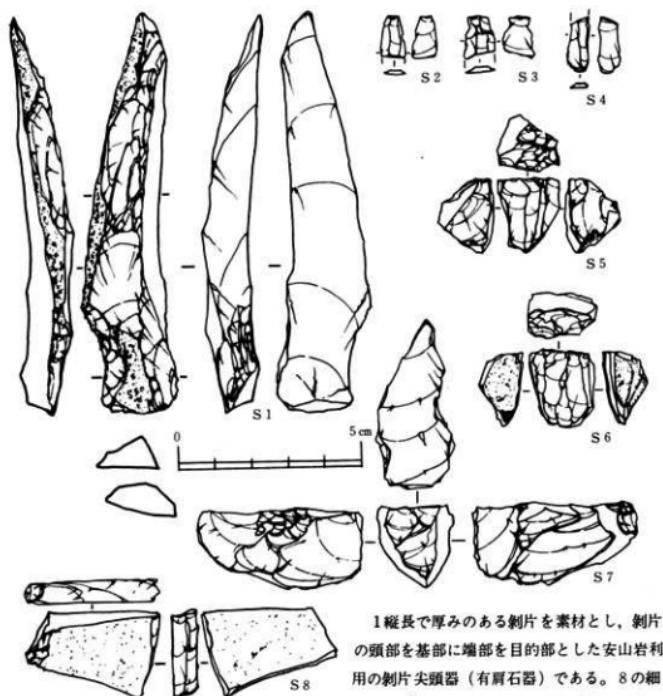
明治末ないしは大正初めには製糸工場があったようで、17・18AB区にその跡が検出された。

北端の段は段差10mと急崖でおりており、さらに北の谷水田との比高2mを測る。この段は崖下を削って幅15mほどの平坦地にしたもので、2m×2mの穴を4ヶ所掘った。



第6図 成岡遺跡グリッド配置図

第2章 旧石器時代



1 横長で厚みのある剝片を素材とし、剝片の頭部を基部に端部を目的部とした安山岩利用の剝片尖頭器（有肩石器）である。8の細石刃核は「加治屋園型細石刃核」と呼ばれるもので、石材に凝灰岩質頁岩、打面は一回の加撃

により作り出し打面調整は行われない。なお

第7図 旧石器時代の石器

打面は、細石刃剝離面に対し鈍角をなす面が選ばれる条件となっている。5・6の細石刃核は、黒曜石を用い、扁平で板状の小礫を素材とし、打面形成の後、側面・背面に粗い（密でない）石核調整剝離を行い、その結果、多くの礫面を残すこととなる。7はブランクと思われ、舟形状を呈している。側面・細石刃剝離面への石核調整は、全て打面方向より行っている。このことより「舟野型細石刃核」を意図していることがうかがえる。

第3章 繩文時代

1 土器および分布

土器は早期・後期・晩期の3時期にわたって出土した。分布としては33~39-A~D区に集中して晩期が出土しているが全体的に北部に晩期、南部に早期が多い。表層中が主であるため包含状態は不明である。ただ晩期の小さなまとまりが5~6ヶ所、早期のまとまりが3ヶ所みられる。

早期の遺物は押型文土器系の手向山式、貝殻文土器系の前平式、石坂式と円筒の土器が出土している。

第2表 繩文式土器一覧表 (1) ……早期

番号	出土区	層	特徴	型式
6 35C	2	円筒土器の口縁部で波状口縁の形態をなしている。 文様は口部が貝殻模様による押圧文で外器面は貝殻模様の地文に3条の貝殻模様による斜交文を施している。 塗装は良い。 脱土は、石英・長石・角閃石を含んでいる。 色調は茶褐色を呈する。		石坂
7 27H	1	角閃石土器の口縁部で波状口縁の形態をなしている。 文様は口部が貝殻模様による押圧文で外器面は口縁部に横位の貝殻模様、押圧文があり、横位の貝殻模様条痕の地文に横位と斜位の貝殻模様斜交文が施してある。 脱土は石英・長石・角閃石を含み、塗装は良い。 色調は茶褐色を呈する。		前平
8 17J	溝	円筒土器の口縁部である。 口部は丸味を帯び、外器面は横位の貝殻模様による条痕がみられる。 脱土は、石英・長石・角閃石を含み、塗装は良い。 色調は明茶褐色を呈す。 鹿児島県鹿児島より搬入された土器と考えられる。		不詳
9 18F	1	押型文土器で外反する口縁部である。 文様は口部が押圧刻印文を、外器面には山形押型文を横位に全面、内器面に横位に1条施している。 脱土は、石英・長石を含む。 塗装は良い。 色調は淡茶褐色。		手向山?
10 32F	1	押型文土器で外反する口縁部である。 文様は口部が押圧刻印文を外器面には山形押型文を横位に施している。 脱土は石英・長石を含む。 塗装は良い。 この土器の文様の差体の大きさは約3cmと思われる。		手向山?
11 20G	P-1	押型文土器の口縁部である。 口外側には押圧刻印文を施し、外器面には山形押型文を横位に施す。 内器面には横位に施している。 脱土は石英・長石を含む。 塗装は良い。 色調は明茶褐色。		手向山?
12 18D	1	押型文土器である。 部位としては脚部と思われる。 山形押型文を横位に施してある。 脱土は石英・長石を含む。 塗装は良い。 色調は明茶褐色。		手向山?
13 18F	1	押型文土器である。 部位としては脚部と思われる。 山形押型文を横位に施している。 脱土は長石・石英を含んでいるが砂も混入している。 塗装はやや不良。 色調は茶褐色。		
14 H 8	埋土	押型文土器である。 部位としては脚部と思われる。 山形押型文を横位に施している。 塗装は長石・石英を含んでいる。 塗装は良い。 色調は茶褐色である。		
15 17E	1	押型文土器である。 部位としては脚部と思われる。 山形押型文を横位に施している。 脱土は小礫が混入している。 塗装は良い。 色調は明茶褐色。		
16 22N	P-4	押型文土器である。 部位としては脚部と思われる山形押型文を横位に施している。 脱土は長石・石英を含んでいる。 塗装は良い。 色調は茶褐色。		
17 23G	1	押型文土器である。 部位としては脚部と思われる。 若子輪の長い山形押型文を施している。 脱土は石英・長石を含み、塗装は赤茶褐色を呈している。		
18 23B	P-1	押型文土器の底部が平底である。 山形押型文が若干みられる。 底面の調整は差調である。 脱土は石英・長石を含み焼成は良い。 色調は茶褐色。		
19 18F	1	押型文土器の底部である。 この底部は平底で幅2cm帯粘土を縁に取り付けている。 文様は山形押型文を横位に施している。 脱土は長石・石英を含む。 塗装は良い。 色調は茶褐色を呈す。		
20 26B	1	押型文土器の底部である。 この底部は平底で角丸跡をもつている。 文様は山形押型文を横位に施している。 脱土は石英・長石を含む。 塗装は明茶褐色を呈す。		
21 26G	2	押型文土器の底部である。 19と同一個体である。		
22 33F	2	押型文土器である。 口縁部に山形押型文を斜状に施している。 この山形押型文は前述のと異なり2条の山形を斜状に施している。 口部は断面三角形で内側に押圧刻印がある。 塗装は良い。 脱土は小礫混入。		不詳

23	H - 8	埋上	押形文土器の口縁部である。 押形押型文で大形である。 埋土は長石・石英を含み、焼成は若干良い。 色調は茶褐色を呈す。	
24	H - 8	埋上	押形押型文土器の口縁部である。 口縁部は断面三角形をなす。 24と同一個体と思われる。	
25	18 - F	3	押形押型文土器である。 部位としては、縁部にあたり、弯曲している。 埋土は長石・石英・小礫を含み、焼成は良い。 色調は茶褐色を呈す。	
26	H - 12	埋上	押形押型文土器である。 「く」字形である。 烧型文は小さく、横径に施している。 埋土は石英・長石を含み、小礫もみられる。 焼成は若干良い。 色調は茶褐色を呈す。	
27	20-H	P-13	押形押型文土器の脚部である。 异形の支撑柱である。 埋土は石英・長石を含むが小礫も含んでいる。 焼成は良い。 色調は茶褐色である。 調整は粗い。	
28	B探		押形押型文の脚部である。 調整は粗い。 埋土は石英・長石を含み、焼成は良い。 色調は茶褐色を呈す。	
29	19D	I	押形押型文の脚部である。 調整は粗い。 埋土は石英・長石を含み、焼成は良くない。 色調は茶褐色を呈す。	
30	H - 6	埋上	押形押型文の脚部である。 埋土は石英・長石を含み、焼成は良い。 色調は茶褐色を呈す。	
31	B探		押形押型文の脚部であるが、原体は押形板を貼り込む脚部の模型をしていると思われる。 埋土は小さく密である。 埋土は長石・石英・小礫も含むが小礫も含んでいる。 焼成は良い。 色調は茶褐色を呈す。	

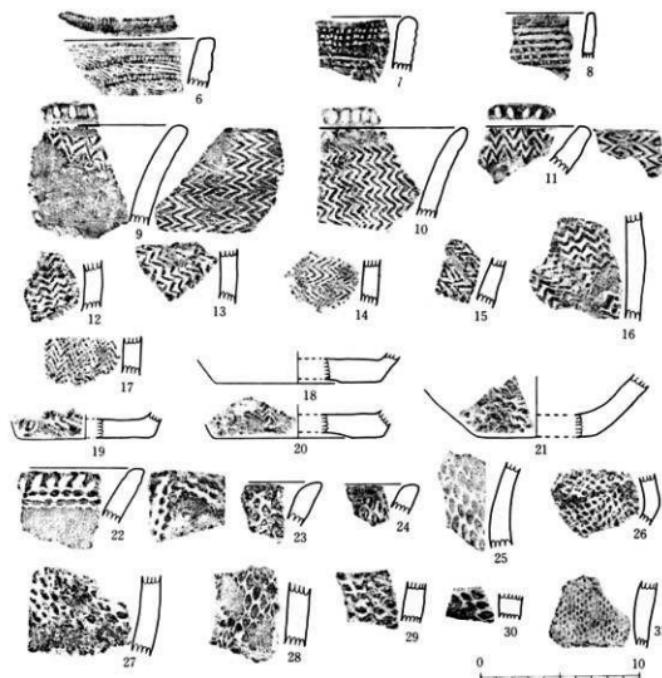
晩期の遺物は晩期II式、III式が出土している。器形としては變形土器・鉢形土器・浅鉢形土器が出土している。晩期II式でも變形土器はIIa式・IIb式とが出土している。IIa式は35~43、IIb式は44~46があるた。

第3表 繩文式土器一覧表 (2) ……後期・晩期

番号	出土区	層	特徴	型式
32	37A	1	南浦遺文土器である。 部位としては口縁部であり、山形変形部の近くであるため口縁部に5点の刻印がある。	縫ヶ崎
			口縁部は広く、色調もみられる。 支柱は比較的高さがある。 埋土は小礫が混入する。 焼成は良く、調整が悪い。 色調は茶褐色を呈す。	
33	30 E	P 1	口縁部が肥厚する土器である。 文字は日輪模様の押型である。 埋土は小礫が混入する。 焼成は良く、調整が悪い。 色調は茶褐色を呈す。	南浦
34	H - 12	埋上	若干上部の気孔部である。 気孔の角は丸味を帯びている。 茶褐色を呈し、焼成は良い。 埋土は小礫を含む。 細面には凹凸物が付いている。 後期の土期と思われる。	
35	38E	1	晩期II式変形土器の口縁部である。「く」字形の内部内溝である。 山形は山形にならずと思われる。 埋土は条状が両面ともみられる。 埋土は長石・石英が混入され、焼成は良い。 色調は茶褐色を呈す。	晩期II式
36	31D	1	變形土器の口縁部である。「く」字形の外反する中で「1」字形の山形が付いている。 埋土は裏側調整とナゲ調整である。 埋土は長石・石英を含み焼成は良い。 色調は茶褐色を呈す。	*
37	35C	P - 3	變形土器の口縁部である。「く」の字形に外反するもので、山形は山形にならずと思われる。 埋土はパケ口調調整があり、茶褐色を呈す。 埋土は長石・石英を含み焼成は良い。	*
38	34D	1	變形土器の口縁部である。 埋土は内側に凹による条痕がみられ、色調は暗茶褐色を呈す。 埋土は長石・石英を含み焼成は良い。	*
39	19D	1	變形土器の口縁部である。 埋土には横張の表面調整がみられる。 埋土は長石・石英を含み焼成は良い。 色調は外が茶褐色で、内側が茶褐色を呈す。	*
40	表探		變形土器の口縁部である。 埋土は条痕の表面調整がみられ、内側の調整精緻に近い。 この土器片は山形口縁と思われる。 色調は茶褐色を呈す。	*
41	34D	1	變形土器の口縁部である。 外唇部は柔軟性が良い。 埋土は茶褐色を呈す。 埋土は長石・石英を含み焼成は良い。	*
42	33C	1	變形土器の口縁部である。 埋土調査は施さず(剥離)して上でびくびく部近は横径に調整している。 内面は横位の尾端調整である。 埋土は石英・長石を含み、焼成は良い。 色調は茶褐色を呈す。	*
43	35C	1	變形土器の口縁部である。 埋土調査は施さず。 埋土は石英・長石を含み焼成は良い。 色調は茶褐色を呈す。	*
44	21R	1	變形土器の口縁部である。 口縁部は丸く丸味を帯びている。 調整は手精緻であり、色調は茶褐色を呈している。 埋土は長石・石英を含み焼成は良い。 晚期II式でも、後半ではあると思われる。	晩期II式
45	31C	1	變形土器の口縁部である。 口縁部は厚く、丸味を帯びている。 調整は手精緻部分と薄い部分がある。 色調は表面が茶褐色を呈し、内面が茶褐色を呈している。 埋土は小礫が混入され、焼成は良い。	*
46	14E	1	變形土器の口縁部である。「く」字形は丸丸味を帯び、外側は裏側が優先になっている。「1」字形は内側している。 埋土は小礫を含み、長石・石英がみられる。 色調は茶褐色を呈す。	*
47	32E	P - 3	變形土器の頭部である。 長石や石英を含み小礫も混入している。 焼成は良い。 色調は茶褐色を呈す。	晩期II式
48	34C	P - 2	變形土器の頭部である。 長石や石英を含み小礫を含んでいる。 埋土調査は裏側調整で埋土は小礫を含む。 色調は外表面が茶褐色を呈す。	*
49	30G	1	變形土器の底部である。 茎部の外周に粘土を纏めてつくった厚手の底部であるため、若干下がり底状になっている。 調整はヘリナダで焼成は良い。 埋土は小礫が混入。 色調は茶褐色。	*
50	37a	1	變形土器の底部である。 外周に粘土を纏めた厚手の底部であるため、若干下がり底状になっている。 色調は茶褐色を呈し、焼成は良い。 埋土は長石・石英を含み焼成は良い。	*
51	36D	1	變形土器の底部である。 外周に粘土を纏めた底部である。 若干下がり底状になっている。 埋土調査は悪い。 埋土は長石・石英を含み、色調は茶褐色を呈している。	*
52	33C	1	鉢形土器の底部である。 外周に粘土を纏めた底部で、中央部は粘土板を貼りつけている。 色調は茶褐色で、調整は良いが後から部分的に剥がされている。 内面は茶褐色を呈し、外側は茶褐色を呈す。 埋土は長石・石英を含む。	晩期II式

53	37A	2	變形土器の底部である。円盤貼り付けの形態で平底である。調整は悪いが焼成は良い。胎土は小礫を含み色調は赤褐色を呈する。	塊頭目式
54	34A	1	變形土器の底部である。円盤貼り付けの形態で平底である。焼成は良い。胎土は長石・石英等を含み色調は赤褐色を呈する。	*
55	22D	1	變形土器の口縁部である。肥厚したため底部近くには組織痕がみられる。組織痕は癒合と思われる。 内面は尾翼調査がみられる。 色調は暗茶褐色を呈している。 焼成は良い。 小礫を少々含む。	塊頭目式
56	23C	1	變形土器の口縁部である。尾翼調査の上部で赤茶褐色を呈している。 下部には組織痕がみられる。 組織痕は癒合と思われる。 焼成は良い。 胎土は石英・長石を含む。 内面は半精製である。	*
57	35B	1	變形土器の口縁部である。尾翼調査で半精製である。胎土は石英・長石を含み焼成は良い。色調は茶褐色を呈する。	*
58	H-4	理土	變形土器の口縁部である。半精製上部で外側が暗茶褐色で、内側も暗茶褐色である。胎土は小礫混入で焼成は良い。	*
59	21D	溝	變形土器の口縁部である。口縁部に肥厚している。 下部は雁目状痕の組織痕である。 胎土は小礫混入で焼成は良い。 色調は暗茶褐色を呈する。	*
62	H-5	理土	變形土器の底部である。雁目状痕土器で焼成は良い。 胎土は長石・石英を含み色調は赤褐色を呈する。	*
60	30G	1	變形土器で雁目状痕土器である。 色調は茶褐色を呈し、焼成は良い。 胎土は長石・石英を含む。	*
61	20C	上-1	變形土器で雁目状痕土器である。 色調は暗茶褐色で焼成は良い。 胎土は長石・石英を含む。 繊維を基本に横糸を通している。 内面は半精製である。	*
63	H-5	理土	變形土器の底部である。雁目状痕土器である。 色調は赤茶褐色で焼成は良い。 胎土は長石・石英を含む。 繊維を基本に横糸を通している。 内面は尾翼調査である。	*
64	34C	1	汽泡の口部で口縁部である。 外反し、口部は肥厚し、丸味をもっている。 内面は黑色研磨をしてているが、外側は茶褐色の研磨である。 胎土は長石・石英を含み良い。 焼成は良い。	*
65	34	P-4	汽泡の口部である。 精製された黒色研磨土器である。 口縁部は肥厚して「く」字状になる薄手の土器である。 焼成は良い。 胎土も細紗を使用している。	*
66	13G	1	汽泡の口部である。 口部が肥厚して黒色研磨土器である。 胎土は細紗を使用して黒色をしている。 焼成は良い。	*
67	34C	D-3	汽泡の口部である。 精製された黑色研磨土器である。 口部の肥厚は少ない胎土は細紗を使用して黒色をしていい。 焼成は良い。	*
68	H-2	理土	汽泡の口部である。 精製された土器である。 口部は肥厚している。 色調は茶褐色をしている。 胎土は細紗を使用している。 焼成は良い。	*
69	34C	1	汽泡の口部である。 細紗は「く」字状に折れ部分から側部に移る部分も同様である。 黑色研磨土器で胎土は良い。 黑色をしている。 焼成は良い。	*
70	32C	1	汽泡の肩、肩部がある。 肩部、肩部とも「く」字状に折れる。 精製土器で黒色研磨土器である。 胎土は細紗を使用して黒色である。 地面は良い。	*
71	34D	1	汽泡の肩部である。 肩部は「く」字状に折れている精製土器で黑色研磨土器である。 胎土は細紗を使用して黒色である。 焼成は良い。	*
72	13G	1	汽泡の肩部で側部にかけてある。 肩部、肩部ともに「く」字状に折れている。 精製された黒色研磨土器である。 胎土は細紗を使用して黒色を呈する。 焼成は良い。	*
73	H-12	理土	汽泡で、精製された黒色研磨土器にはいるが精度度は良くない。 口部から腹部にかけて狭く、口縁部肥厚も無い。 色調は「く」字状に折れる部分は丸味をもつ。 胎土は薄手を呈し、細紗を使用している。 焼成は良い。	*
74	5D	1	汽泡で精製された黒色研磨土器である。 口部は肥厚が少なく、口縁部は短かい。 肩部は「く」字状に折れていたものが外側の谷縫合丸味をもっている。 肩部、「く」字状に折れる内側は丸味をもつ谷縫合。 外側は山縫合の折れ縫合で折曲している。 胎土は黒色を呈し、焼成は良い。	*
75	38A	1	汽泡で精製された黒色研磨土器である。 口部は肥厚し、口縁部は「く」字状に折れている。 内側は山縫合がみえるが、外側の谷縫合丸味をもっている。 肩部、「く」字状に折れる内側は丸味をもつ谷縫合。 外側は山縫合の折れ縫合で折曲している。 胎土は黒色を呈し、焼成は良い。	*
76	30C	1	變形土器である。 茶褐色を呈した脚部と思われる。 胎土は小礫が混入されていて。 焼成は良い。 56~63の中にはいいと思われる。	*
78	24B	1	上げ底の形態をしている。 汽泡の底部であると思われる。 胎土は細紗を使用して茶褐色を呈している精製度は良くない。 色調は茶褐色を呈し、焼成は良い。	*
77	24B	1	變形土器の口縁部である。 口縁部に突起をもつて目口部を施している。 実際は口部より貼り付けている。 外側の器皿は柔軟な調整痕がみられ茶褐色を呈し、内側は黒色を呈する。 焼成は良い。 胎土は黒褐色を呈す。	*

早期の押型文土器の形式で手向山式としたのは器形上類似しているためである。口縁部が外反し「く」字状の肩部をもち、平底を呈するものである。文様は文様上では2種類以上の施文がないため手向山式とはいえない。一応ここでは器形を重視した。なお手向山式の類は今後この資料をまたねばならない。



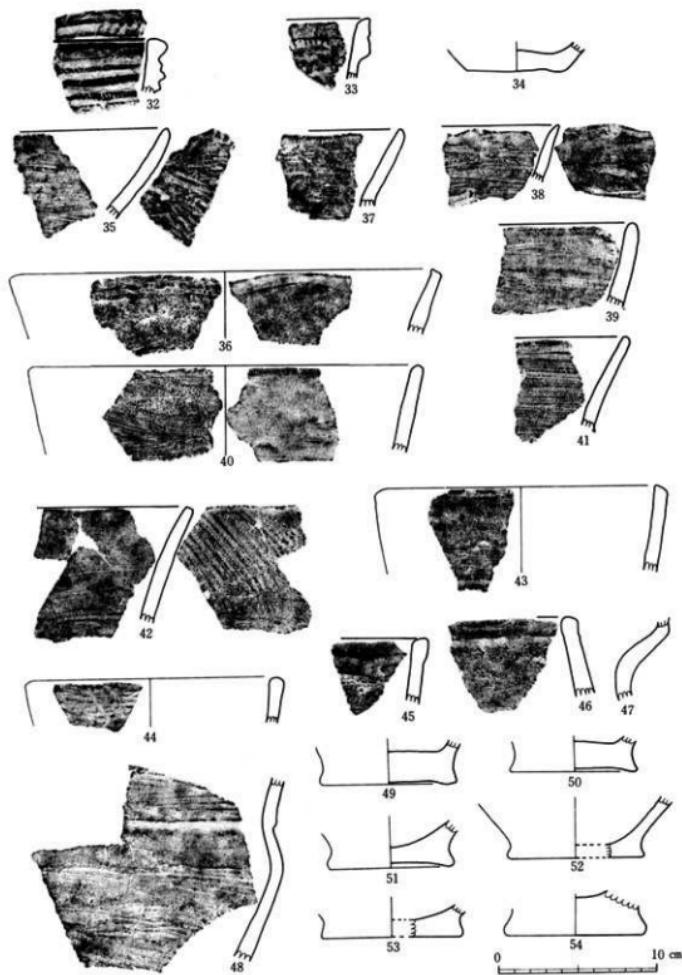
第8図 繩文式土器 (1)

2 石器

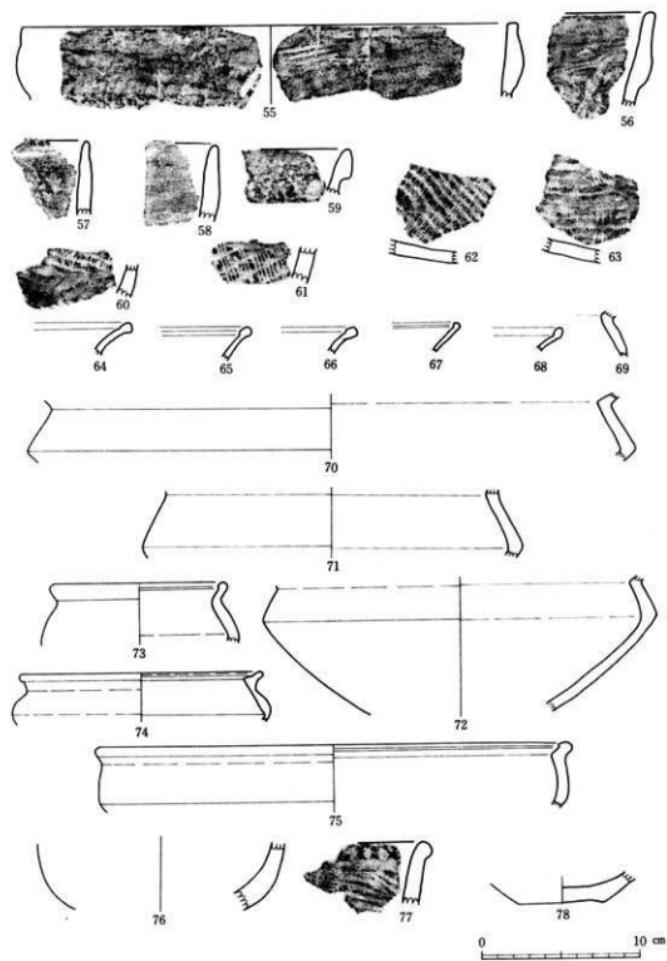
石器は11点出土した。石匙・磨製石斧・凹石・敲石である。

第4表 石器一覧表

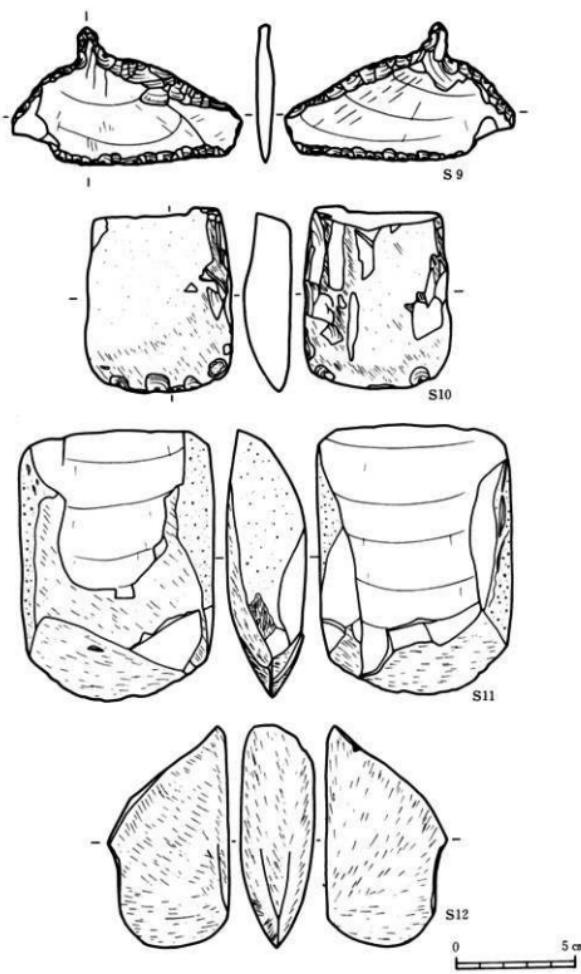
番号	出土区	層	石材	特徴	番号	出土区	層	石材	特徴
S 9	17J	溝	玄武岩	横削の石匙	S 15	24J	溝	安山岩	凹石および敲石
S 10	31E	3	安山岩	自然縫を利用した局部磨製石斧	S 16	表探		安山岩	両面の凹石
S 11	26G	1	砂岩	自然縫を利用した局部磨製石斧	S 17	21E	1	安山岩	両面の凹石
S 12	38A	3	砂岩	磨製石斧	S 18	18E	1	花崗斑岩	敲石
S 13	31C	2	安山岩	凹石	S 19	34A	1	安山岩	敲石
S 14	18J	1	安山岩	凹石					



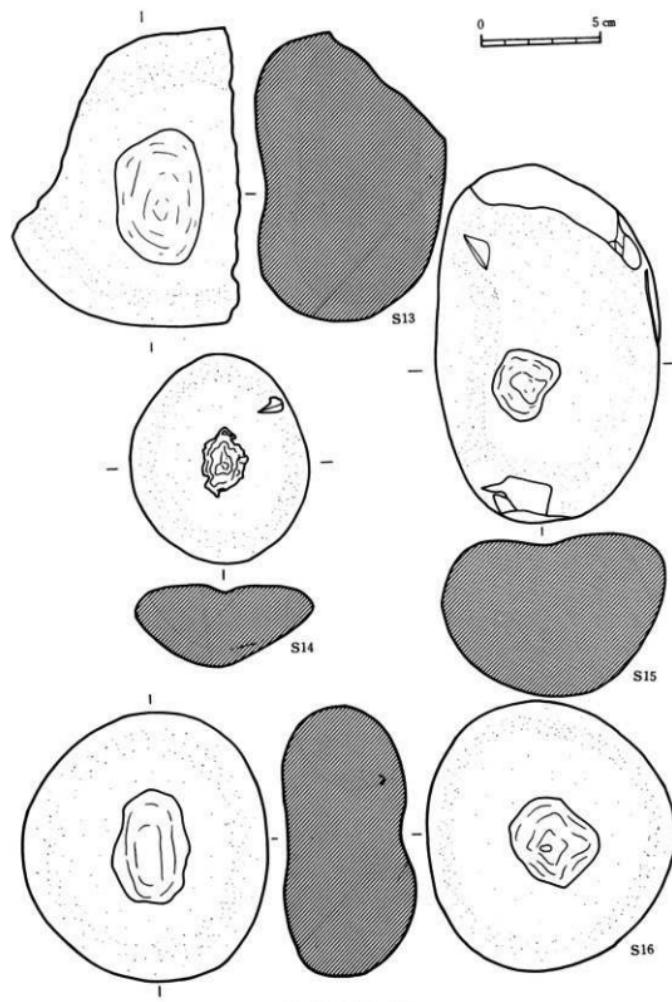
第9図 繩文式土器（2）



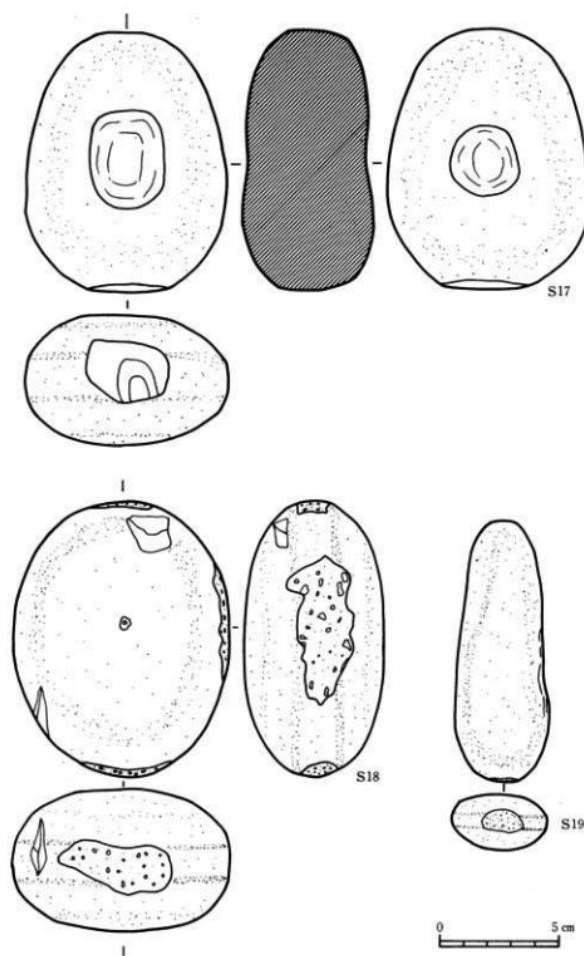
第10図 條文式土器（3）



第11図 石器 (1)



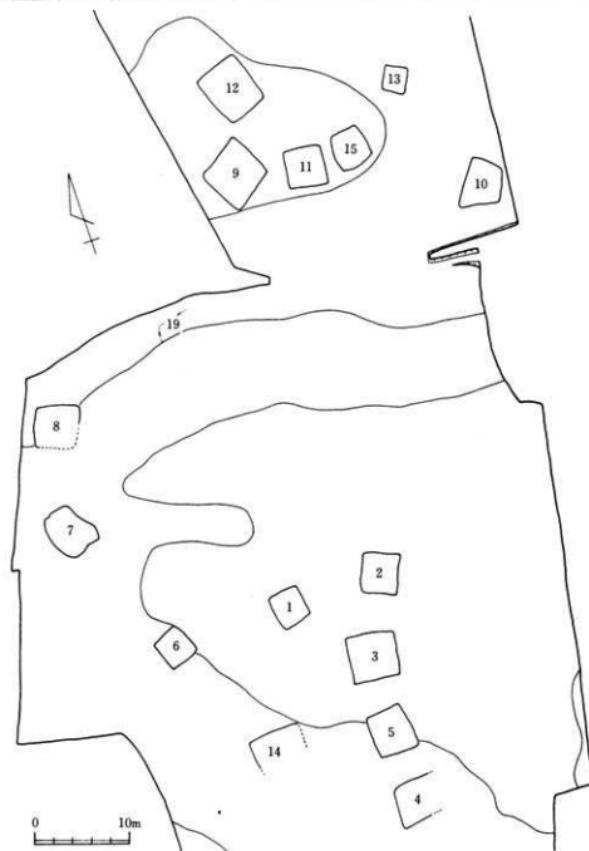
第12図 石器 (2)



第13図 石器（3）

第4章 古墳時代

古墳時代には台地一帯で集落が営まれており、土器の散布はバイパス用地外にも広がっている。調査区内では16軒の整穴住居跡と、土塁1が検出されたが、22~25区付近では江戸時代の



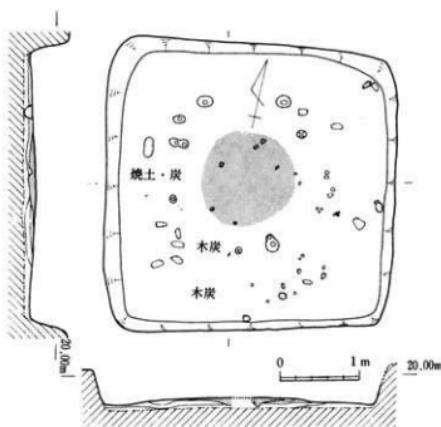
第14図 古墳時代の整穴住居跡配置図

溝状遺構からも多量の土師器が出土しており、この付近にも数軒の住居跡があったらしい。遺物の多くは住居跡内からであったが、他に周辺から土師器・須恵器が出土している。

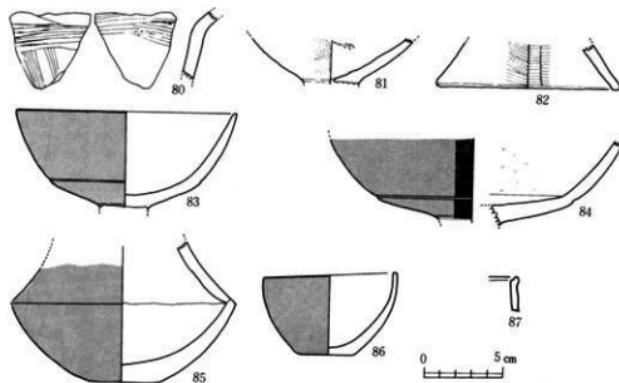
1. 穫穴住居跡

(1) 1号住居跡

1号住居跡は18・19-F・G区で発見された。平面プランは長軸3.64m、短軸3.63mのほぼ正方形を呈し、遺構検出面からの深さは約48cmである。側壁は比較的しっかりしたもので急傾斜で立ち上がる。主軸の方向はN 9度W。住居跡内の中央部には径120cmの範囲に焼土や炭がレンズ状に堆積している地炉が検出された。さらに床は、濁黒灰色土や二次シラスの埋土がみ



第15図 1号住居跡



第16図 1号住居跡出土の土器

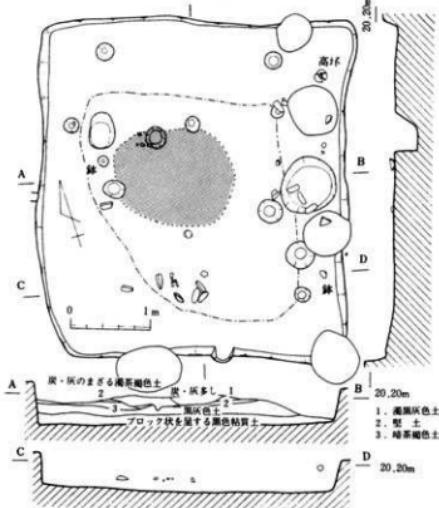
られ、貼り床をした痕跡が認められ、地炉を囲むように堅く踏みつけられた部分も検出された。その他、小ピットが9個発見された。

住居跡内より多数の土器の小破片や自然礫が出土した。

80は頸部から口縁にかけて「く」の字に折れる變形土器片である。内外面の頸部から上位にかけては横方向、外面の胴部は縱方向に太めのハケ目痕がみられる。82は變形土器台脚部であるが、80と同様な太めのハケ目痕がみられる。胎土は石英粒や小礫粒を含み、全体的に粗いものとなる。焼成は良好、色調は赤褐色を呈す。81は高坏の坏部である。坏部の立ち上りは急でやや直線的である。外面にハケ目調整のあと、ナデ調整を施している。胎土には細かな石英を含む。焼成は良好。色調は赤褐色を呈す。83は口縁径14cmの坏部である。脚部は欠損している。体部に1本の浅い凹線を施す。外面はていねいなヘラ調整を施す。84は坏部片である。体部に浅い凹線を有す。外面はこまかにハケ目がみられる。内面は風化し、部分的に剥落を受けている。両者ともに丹塗り土器である。85は口縁部を欠損しているが、胴部の直径は14.3cmを測り、底部径4.6cmの平底となる変形土器である。器面はていねいなハケ目がみられる。丹塗り土器である。小鉢(86)は口縁径8.4cm、高さ5cm、底部径3.6cmを測る。胴部は丸く、直口する口縁部で平底となる。口唇部は平坦である。外面はヘラ調整後、ていねいなハケ目調整が施されている。丹塗り土器である。87は須恵器坏身の立ちあがり部分で、口縁端近くの内面にくぼみがみられる。

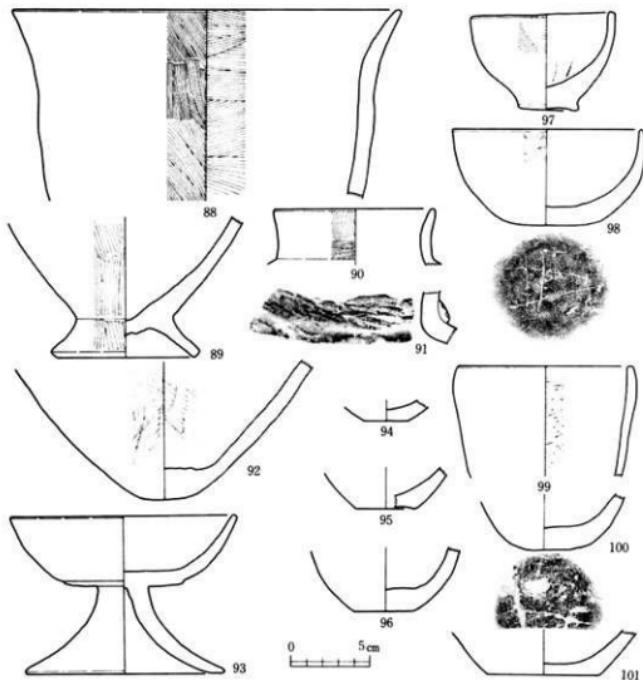
(2) 2号住居跡

19・20-H・I区につくられた3.9m×4.2mのやや南北方向に長い方形住居跡で、検出面からの深さは約30cmである。主軸方向はN7度Eを測る。2.4m×2.8mの範囲に堅土面があり、ほぼ中央には1.2m×1.5mの範囲に炭・灰が10cmの厚さで堆積している。内部で11本の柱穴を検出したが、主柱穴等は確認できなかった。南西隅付近に直径約1m、深さ3cmほどの浅いくぼみがあり、ここには變形土器や礫などがあった。東側でも浅いくぼみの中に礫などがあったが、整然とした配列ではなかった。



第17図 2号住居跡

菱形土器・壺形土器・壺形土器・鉢形土器・高環形土器などが出土している。菱形土器(88・89)は口縁部がゆるやかに外反する長胴形の器形をしており、浅い脚台が付く。口縁直径約25cm、脚台端直径8.5cm、脚台高2.5cmを測る。外面は右下がり、あるいは縦方向のハケナデ調整、内面は横向のハケナデ調整で仕上げる。脚台の内面は横向にハケナデがされ、中央がやや突起している。壺形土器(90~92・100)は口縁部がわずかに外反し、丸底である。頸部はくびれ、そこに木目押圧が斜方向に三段程付された断面半円形の貼り付け突帯が付されたものもある。90は口縁直径12cmと小型である。100は小さい平底で、ここにわら・もみ殻の圧痕が残っている。外面は左下がりあるいは縦方向のハケナデ調整、内面は右下がりあるいは縦方向のハケナデ調整で仕上げるが、内面底付近はヘラナデもみられる。壺形土器(94~96)は底部直径が2.8cm~3.8cmの安定した平底で、ややあげ底のものもある。外面はヘラでていね



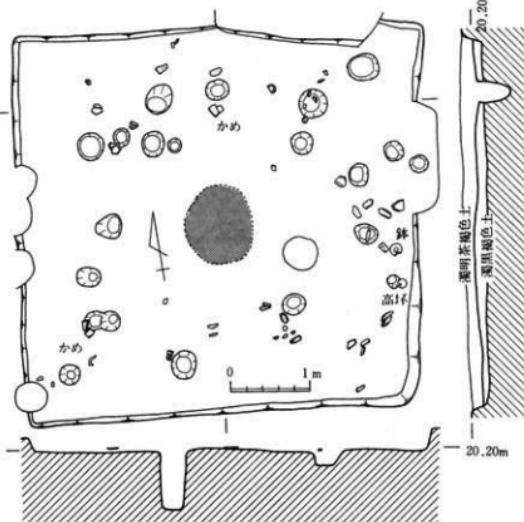
第18図 2号住居跡出土の土器

いに研磨され、全体に丹が塗られる。内面はていねいなヘラナデで仕上げられる。鉢形土器（97～101）は口縁直径11cmを測る直立に近い立ちあがりをするものと、外へ強く開きながら伸びる安定した平底のものがある。97は口縁直径9cm、底部直径4cm、高さ6cmであげ底風の脚台が付く。外面の上半がハケナデ、下半および内面はヘラナデで仕上げる。98は口縁直径12cm、高さ6cmの安定した丸底をしており、底部に縱横2本ずつの格子状ヘラ描き文がかれている。内外とも丹塗りである。99は外面が輻方向のヘラナデ調整、内面が横方向の研磨に近いヘラナデ調整で仕上げる。100は内外面とも斜方向のヘラナデ調整で仕上げ、底部には丹の跡が付着している。93は口縁直径14cm、脚端直径12.5cm、坏部高さ4.5cm、全体高10cmの高坏形土器である。外面はていねいに研磨され、全体に丹が塗られる。内面もていねいにナデられており、坏部と脚部ははめ込みとなっている。

(3) 3号住居跡

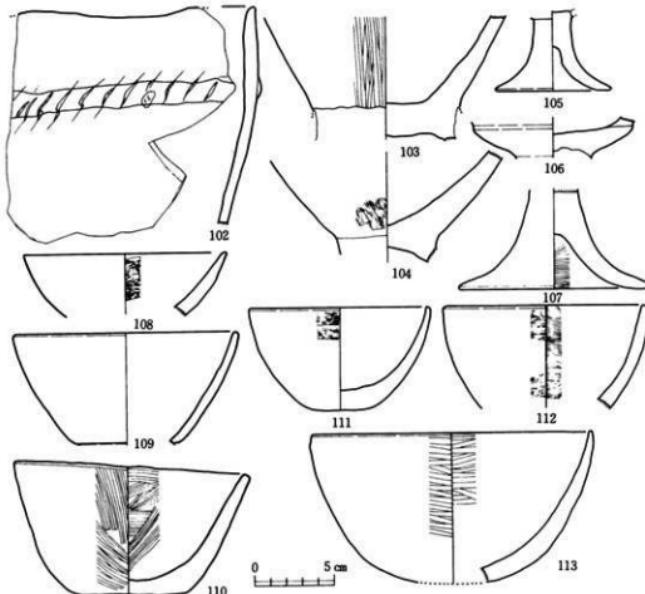
17・18・19・I区につくられた5m四方の正方形住居跡で、検出面からの深さは約30cmを測る。主軸方向はN 9度Eである。北東側は16号住居跡によってこわされ、土塙・柱穴などによってもいくらかこわされている。ほぼ中央の直径90cmの範囲には炭・灰が10cmほどの厚さで堆積している。内部には22本の柱穴を検出したが、主柱穴等は確認できなかった。礫が周辺に散在しており、特に東側では礫とともに4面を使用した砥石があった。床面下約10cmの所に基盤層があり、その間には暗茶褐色あるいは濁黒褐色土がある。

菱形土器(102～104)の口縁は内反しており、口縁下部には左下がりの刻みがある断面半円形の突帯が貼り付けられる。底部には浅い脚台が貼り付けられる。



第19図 3号住居跡

内面はすべてヘラナデであるが、外面は103・104が縦方向のハケナデ、102が横方向のヘラナデで仕上げる。壺形土器（108・109）の口縁は直径13～14cmと大型で、やや内反しながらまっすぐ伸びている。丹塗りで、頸部付近に凹線状くぼみがみられる。鉢形土器（110～113）はやや内反ぎみにまっすぐ立ちあがるもので、浅いものと深いものとがある。110は口縁直径15cm、底部直径7cm、高さ7cmの完形品で、口縁に向かってまっすぐ伸びている。111は平底のもので、口縁直径11cm、底部直径3cm、高さ6.5cmを測る。112は口縁直径が13cm、113は口縁直径が15cmあり、丸底である。110は外面があらいハケナデ、内面がハケナデのあとヘラナデで仕上げる。他の3点はヘラナデで、研磨に近いものもある。高不形土器（105～107）は3点とも丹塗りで、脚端直径が12cmのものと、7cmしかない小型のものとがある。105の坯部と脚部の貼り付けはさしこみによるもので脚部内面には多くの爪跡が残っている。106は坯底部の貼り付け部にハケナデ痕がみられ、装着の際の剥脱を防いでいる。砥石は砂岩製のもので4面を使用している。平面形は方形で、割に薄い自然縫を用いている。広い方の2面はよく使い込んでいる。



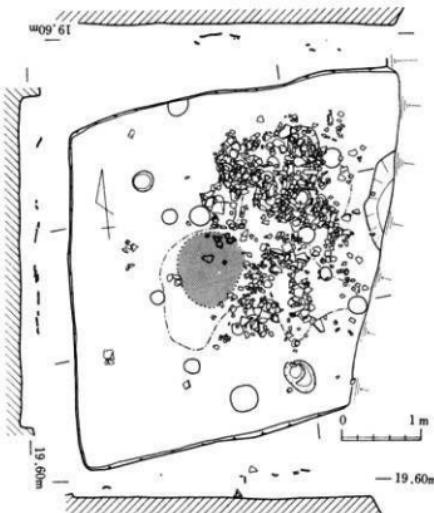
第20図 3号住居跡出土の土器

(4) 4号住居跡

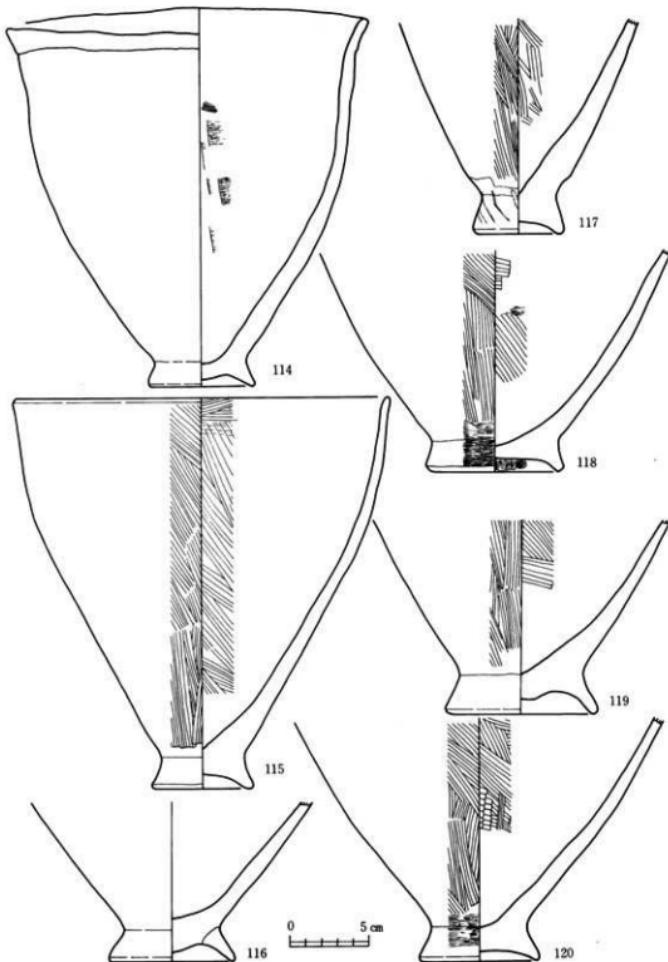
14・15区につくられた4.4m × 4.3 (+α)mの方形住居跡で、東側は溝状造構2によつて削除されている。残存の深さは5cm~25cmで、特に西側の残りが悪い。1.9m × 2.8mの範囲に堅土面があり、ほぼ中央の直径1mの範囲には炭・灰が堆積している。床面上にも鉢形土器・高杯形土器などがあるが、やや床面より浮いた所に多量の土器が、ぎっしりと堆積しており、この中には礫も含まれている。柱穴も多く検出されたが、主柱穴は不明である。

甕形土器・壺形土器・蓋形土器・壺形土器・高杯形土器・鉢形土器がある。

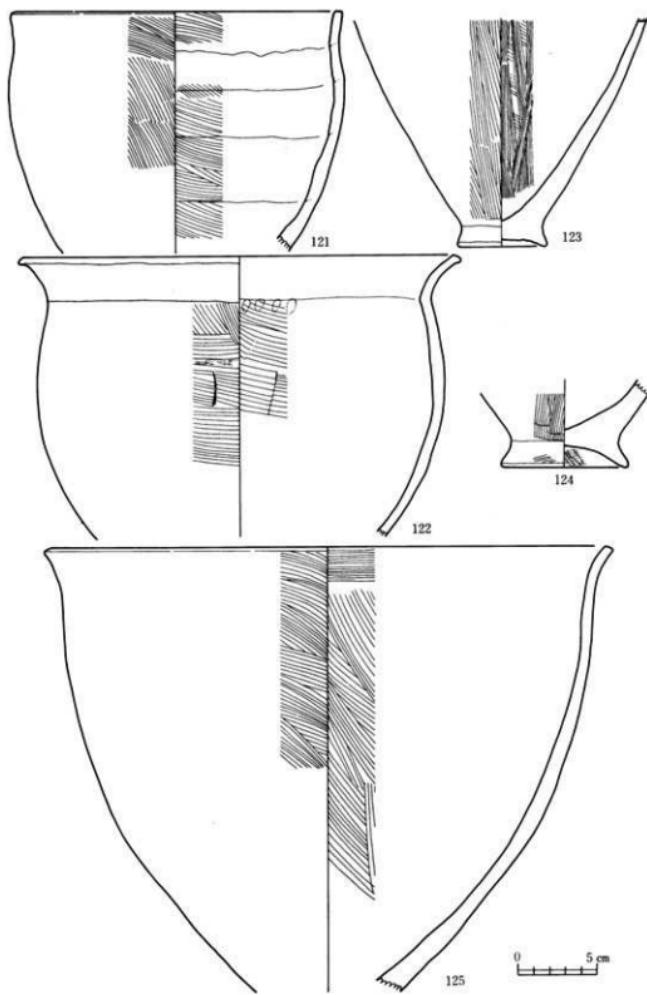
甕形土器の口縁部は、くの字状に外反するものと、やや内反するものがあり、圧倒的に多くの字状に外反するものには、突帯のつかないもの（114~126）、つくもの（127~134）がある。114はやや外反する口縁であるが、端部がやや肥厚している。口縁直径23cm、脚台直径6.5cm、高さ24cmと小型である。115は直立ぎみだが、やや外反する。口縁直径24cm、脚台直径6.5cm、高さ25cmを測る。121は口縁直径21cmと小型で5回以上の輪積み痕をよく残している。122は口縁直径28cmを測り、口縁部の外反度が強い。125は口縁直径36cmと大型であるが、割に浅い。突帯は頸部付近に貼り付けられるが、だいぶ下方に貼り付けたものもある。127は強く屈曲しており、突带上には鋸歯状の板押圧がみられる。128・131~134の突帶には左下がりの板押圧がみられる。口縁直径は27cm~29cm位であるが、133は36cmと大型で、134は逆に25cmと小さい。132~134などは端が小さく屈曲している。135は口縁直径24cmを測り、やや内反する。138はまっすぐ外へ開いて伸びるもので、口縁直径33cmを測る。すべてに脚台が付き、概して浅い。多くは無帯であるが、136・137のように板状压痕の押された貼り付け突帶を有するものもある。整形は、外面がハケナデ、内面の頸部より上がハケナデ、下がヘラナデのものが多い。外面にヘラナデのあるもの、内面をハケナデにするものもある。5mmほどまでの小石粒を多く含む砂質の胎土を用いている。



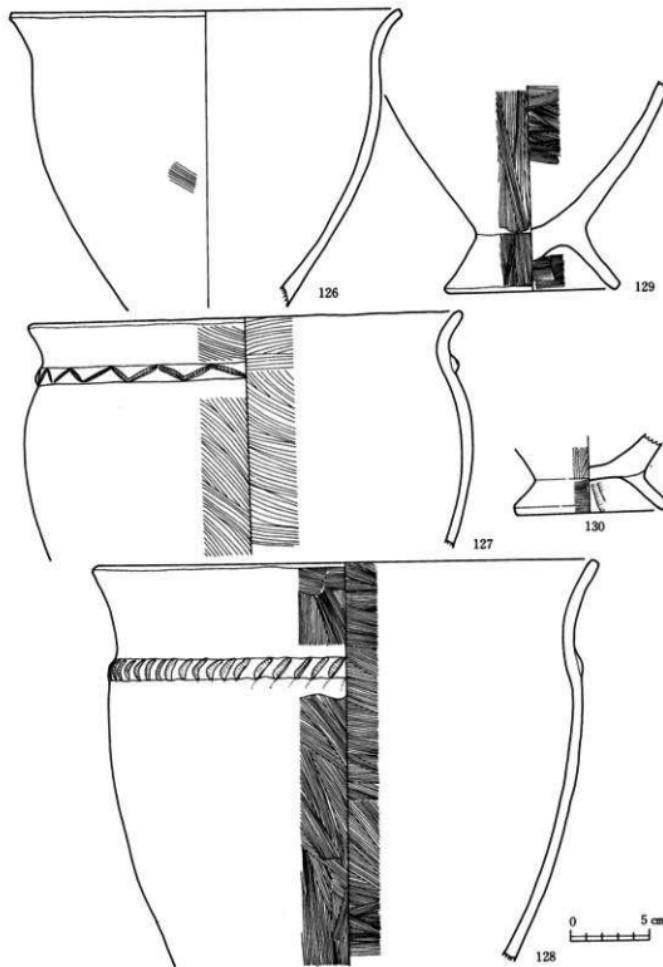
第21図 4号住居跡



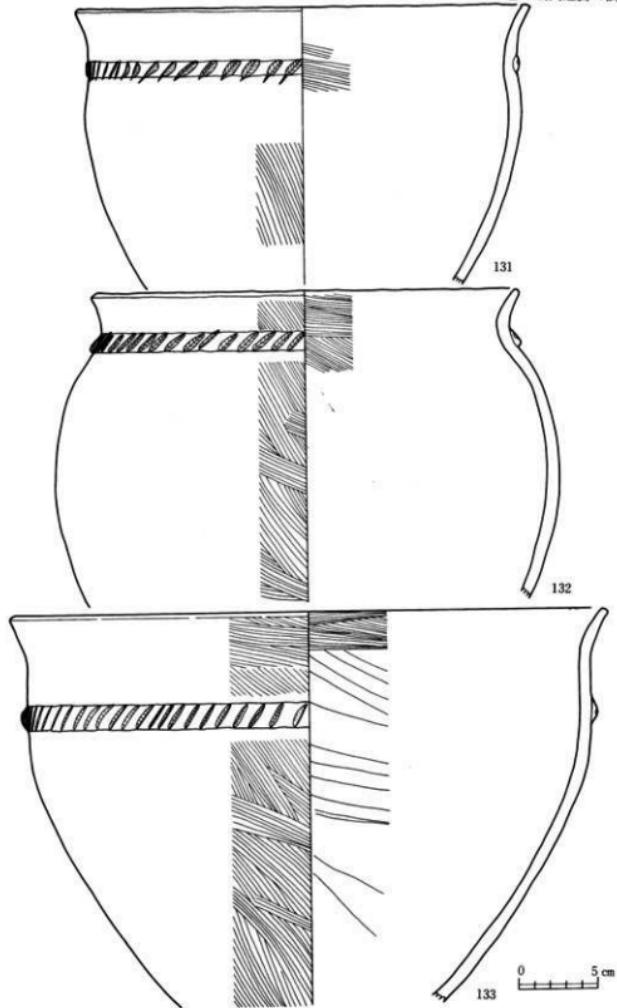
第22図 4号住居跡出土の土器(1)(斐)



第23図 4号住居跡出土の土器(2)(甕)

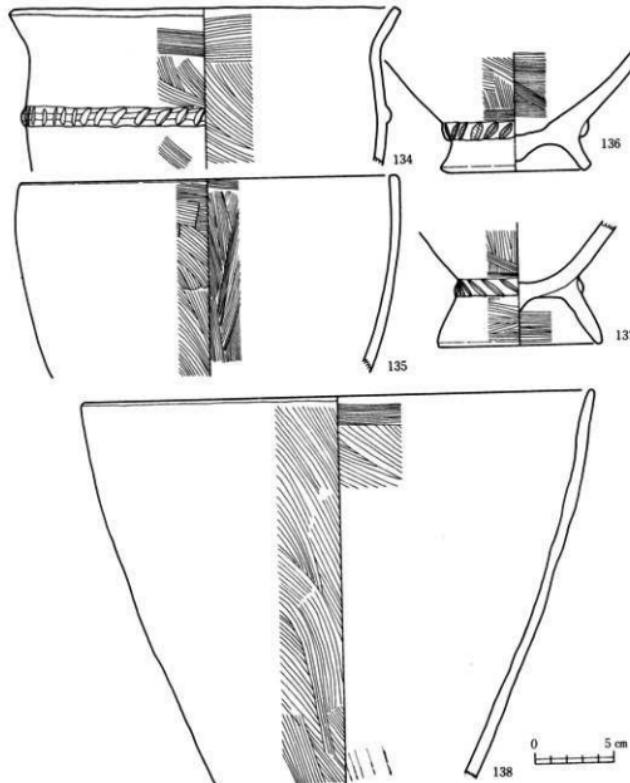


第24図 4号住居跡出土の土器(3)(要)



第25図 4号住居跡出土の土器(4)(縦)

壺形土器（139～147）の底部はほとんどが丸底である。139はよく磨滅して表面に小石粒の突出した土器で、口縁直径11.5cm、高さ30cmを測る。口縁は直立し、頸部に八形のヘラ痕がある。140は口縁が外反し、頸部に矢形の板押圧のある貼り付け突帯が巡る。口縁直径19cm、高さ32.5cmを測る。141～143は外反する口縁をもち、141は頸部に矢形の板押圧が付される。142は口縁直径13cmと小型である。143は口縁部で積みあげており、段になっている。口縁部はヘラ押しのみで仕上げている。147は胴部と口縁部を貼りつけており、段になっている。口



第26図 4号住居跡出土の土器（5）（壺）

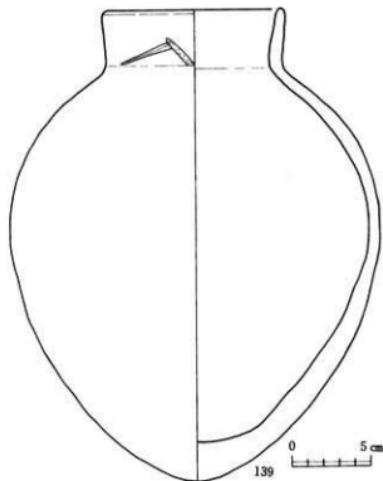
縁部は直立している。底は丸底であるが、145は平底である。144の底にはもみ痕がある。

菱形土器（148）は倒鉢状の器形をしており、天井部直径7cm、口縁部直径25cm、高さ12cmを測る。外面・内面ともハケナデによって仕上げている。

咲形土器（149～152）の外側はていねいなヘラナデあるいはヘラミガキで仕上げ、丹塗りがされる。149は内反する口縁部、口縁直径10cmを測る。150はソロバン玉状を呈する胸部である。151・152は丸みをもった胸部で平底を呈す。

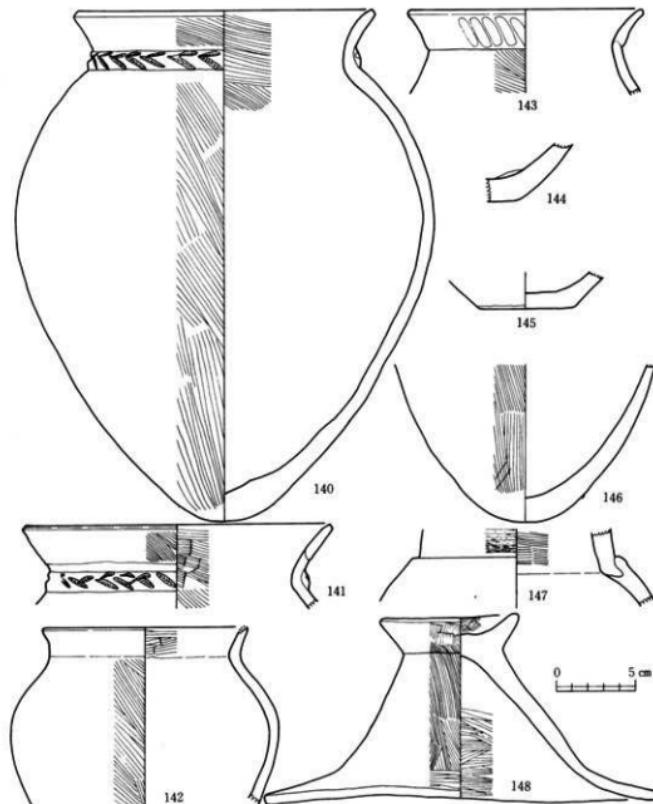
鉢形土器（153～163）には色々の形態・大きさがあるが、概して内反ぎみの器形をしている。153・156・161は丸底・平底の違いはあるが、口縁直径が12cm～16cm、高さ6～8.5cmを測り、外側には丹が塗られる。内面もていねいなナデで、良質の土を使用している。154・155は口縁の整形が難で、凹凸が激しい。口縁直径12cm、高さ8cm前後を測り、底は安定した平底である。ハケナデあるいはヘラナデで仕上げている。157は口縁部が外反する丸底の鉢形土器で、床面で出土した。口縁直径18cm、高さ7cmを測り、上部はハケナデ、下部はヘラナデで仕上げている。158・159は外へ開きながらまっすぐ伸びるもので、厚いつくりである。内面ともハケナデで仕上げ、安定した平底である。160も厚手のつくりで、口縁が整然としておらず整形もハケで粗くナデしている。底部近くでやや外へ張り出しており、段をつくる。162は口縁直径21cm、高さ13.5cmと大型である。外面・内面とも一部ハケナデ痕を残しているが、ヘラナデで仕上げている。163も口縁直径22cm、高さ15.5cmと大型で、小さい平底をもっている。内面・外側ともヘラナデで仕上げているが、外面の一部にハケ目を残している。

高壺形土器（164～179）は外側が丹塗りの土器である。壺部は壺形を呈しているが、167は立ちあがりが外反するもので、口縁直径11.5cmと小型である。口縁直径が17cm位で深さ3.5cm～4cmの浅いものと、口縁直径が19cm～20cmで、深さ6cm～7cmの深いものがある。立ちあがりと底部は貼り付けによってつくられて、外面は板で押すために1条の凹線ができる。168は棱ができる。166は完形品で、口縁直径20cm、壺部深さ6cm、壺部高さ7.3cm、幅部直径15cm、脚部高さ8.2cm、全体高

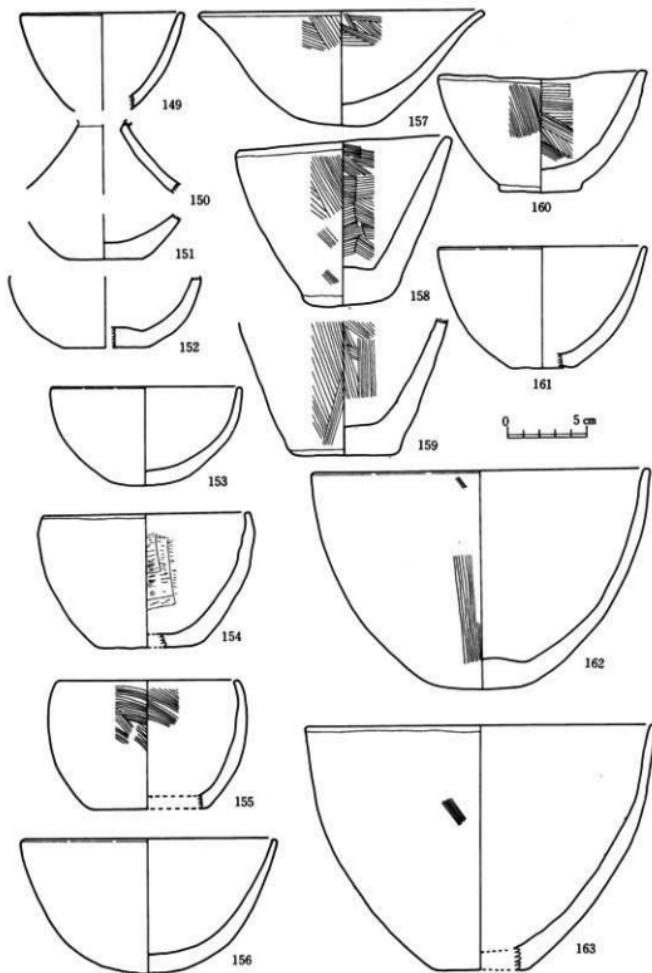


第27図 4号住居跡出土の土器（6）（壺）

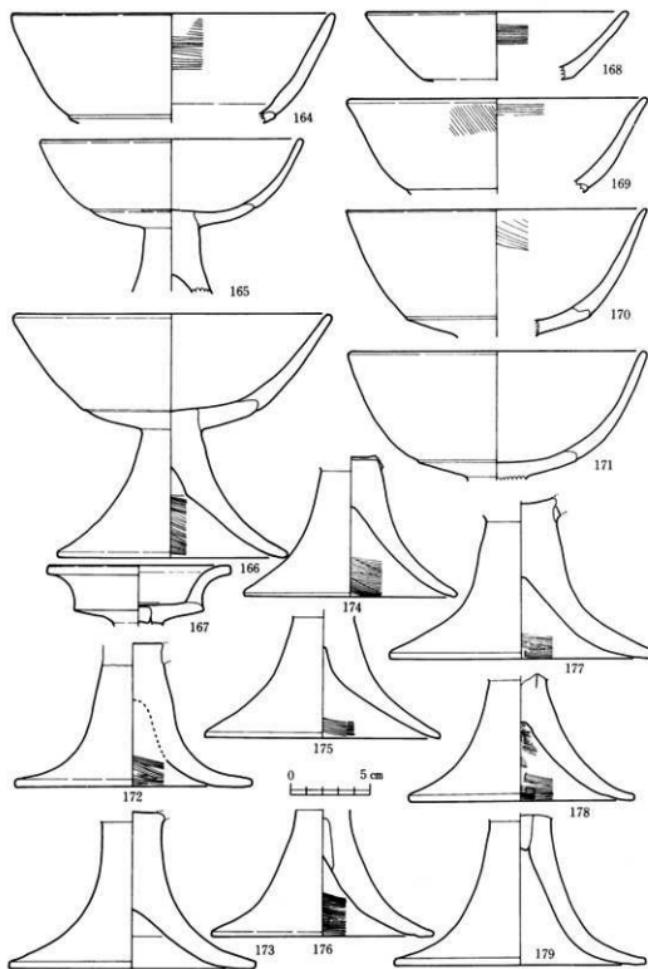
15.5 cmを測る。脚部は筒部と裾部との境がはっきりせず、なだらかにおりる。裾部直径14cm～16cm、脚高8cm～9cmを測る。坏部と脚部の貼りつけは、脚部に坏部をのせて中央から芯を入れて接合するものと、脚部のまわりに坏部を巻くようにするものとがある。167は坏部内面にも丹が塗られる。外面はほとんどヘラミガキかていねいなヘラナデで、内面はハケナデあるいはヘラナデで仕上げる。



第28図 4号住居跡出土の土器(7) (壺・蓋)



第29図 4号住居跡出土の土器(8) (増・鉢)



第30図 4号住居跡出土の土器（9）（高環）

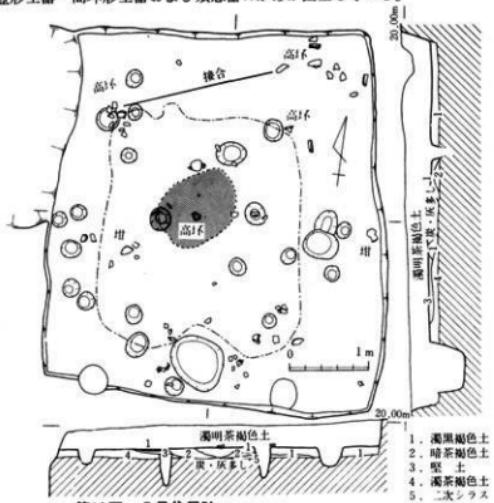
(5) 5号住居跡

16・17-H・I 区につくられた4.3m×4.7m のやや南北方向に長い方形住居跡で、検出面からの深さは10~30cmを測る。主軸方向はN 7度Wである。2.5m×3m の範囲に堅土面が広がっており、ほぼ中央の0.8m×1m の範囲に炭・灰などが約10cmの厚さで堆積している。内部では多くの柱穴を検出したが、主柱穴は不明だった。

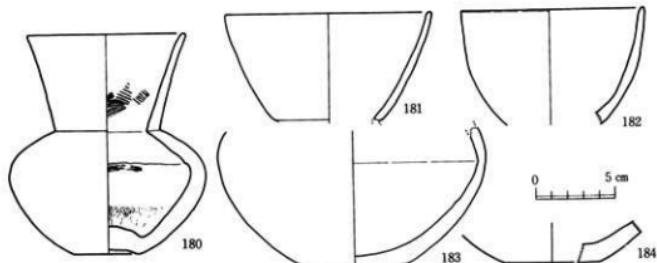
土器類の壺形土器・壺形土器・高環形土器および須恵器のかめが出土している。

180 ~ 184 は壺形土器で、180 は完形品である。口縁直径10cm、底部直径4cm、高さ14cmを測り、まっすぐ伸びる長い口縁と上半部に最大径のある胴部とからなる。ややあげ底である。181と182は口縁直径11~13cmとやや大きく、内反する口縁である。183はこの胴部と思われる大型のもので、平底である。

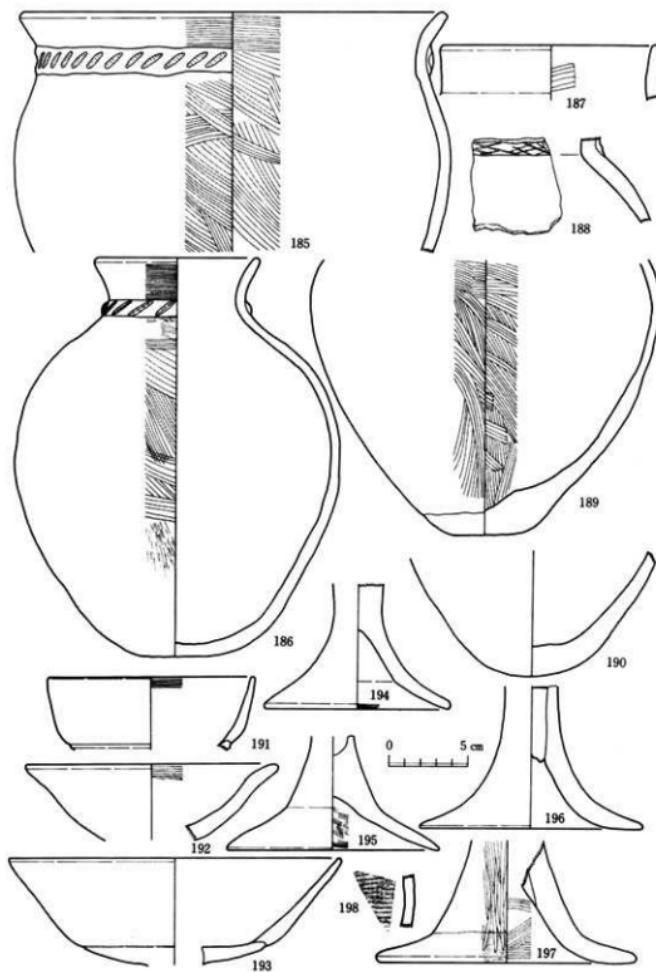
壺形土器（185）はくの字形に外反する口縁部で、頸部には貼り付け突帯が巡っている。



第31図 5号住居跡



第32図 5号住居跡出土の土器（1）



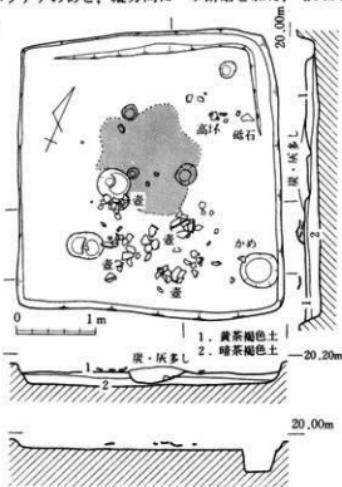
第33図 5号住居跡出土の土器（2）

口縁直径は27cmを測る。外面の整形は横あるいは斜方向のハケナデで、同じ施工具を用いて断面半円形の突帯には左下がりの押圧紋が付される。内面の整形も横あるいは斜方向のハケナデである。186～190は壺形土器である。186は口縁直径10cm、高さ25cmを測る完形品である。外反する口縁部をもち、頸部には左下がりの木目压痕をもつ断面半円形の貼り付け突帯が巡っている。胸部中ほどに最大径があり、底部は安定した丸底である。外面の整形は上半部が横あるいは斜方向のハケナデ、下半部はヘラナデ、内面の整形はヘラナデである。187は直立する口縁である。188は頸部に貼り付け突帯が巡っており、この突帯には斜格子状のヘラ描き文がみられる。189はやや安定した丸底であり、外面・内面とも粗いハケナデで仕上げ、薄く仕上げている。190も丸底である。191～197は高环形土器である。191は口縁直径13cm、环部の深さ約4.5cmとやや小型で、环部の立ちあがりは直に近く立ち上がっている。环部の底部と立ち上がりは貼り付けによって作られ、この境はややくぼんでいる。192は口縁直径16cm、环部の深さ4cmを測るもので、口縁端部が外反するものである。193は口縁直径21cm、环部の深さ5.5cmを測るもので、环部の立ち上がりは外へ開きながらまっすぐ伸びている。环部の底部と立ち上がりは貼り付けによってつくられ、その境はややくぼんでいる。脚部は筒部と裾部との境が明瞭でなく、裾部はゆるやかに開いていく。环部との接合は195のように脚部の上に环部をのせてくっつけるものと、196のようにくっつけて芯の部分に棒状のものを押し込むものとがある。197の外面はていねいな横方向のヘラナデのあと、縱方向にヘラ研磨を加え、暗文風になっている。多くは丹塗りであるが、195は丹がない。198は須恵器裏の破片で、表面は内外とも灰青色を呈しているが、中央は紫灰色を呈している。外面はこまかい平行叩きで仕上げ、内面はタタキをスリケシしている。

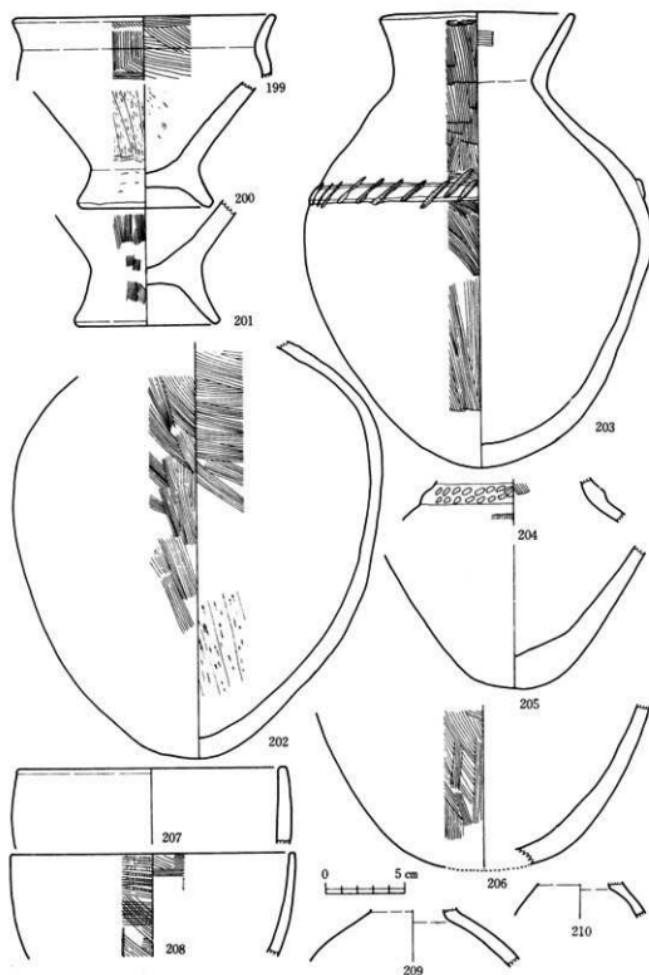
(6) 6号住居跡

17・18D区につくられた3.3m×3.6mの方形住居跡で、深さ20cmほどを残している。西側と、北側の一部には幅30cm、深さ5cmの溝が壁に沿ってつくられている。ほぼ中央の1.2m×1.4mの範囲には炭・灰が堆積しており、直径70cm位の範囲では落ち込んでいる。主柱穴らしき2本の柱穴があるが、はっきりしない。床面上には多くの土器があるが、壺形土器が多い。

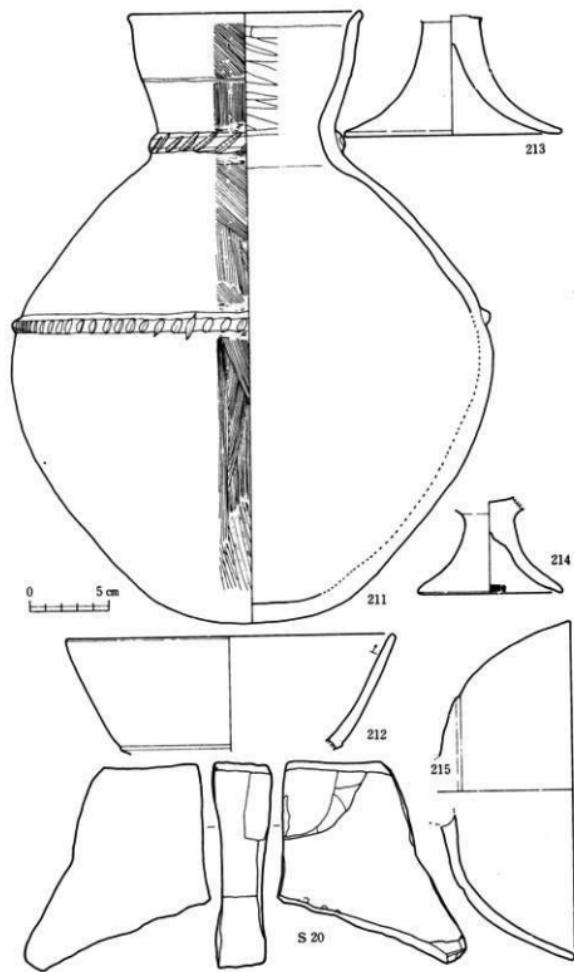
壺形土器(199～201)はくの字状に外反する口縁をもち、脚台がつく。壺形土器



第34図 6号住居跡



第35図 6号住居跡出土の土器（1）



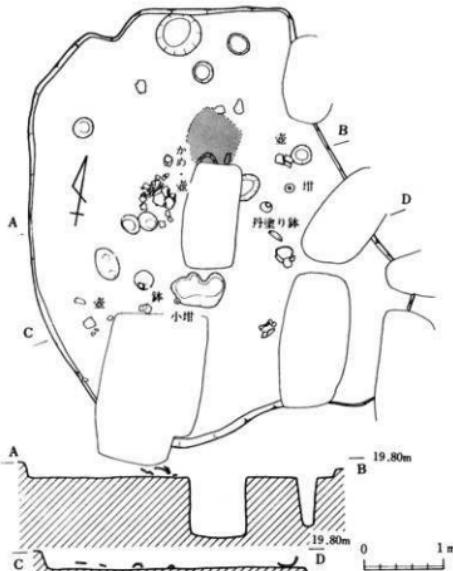
第36図 6号住居跡出土の遺物（2）

(202～206)は丸底で、長胴形の器形をしている。203は口縁直径12cm、高さ29cmを測る完品で、口縁部は外反する。肩部に木目の押圧痕をもつ貼り付け突帯を有する。211は口縁直径15cm、高さ39cmを測る大形のもので、頸部と胸部に木目の押圧痕をもつ貼り付け突帯を有する。鉢形土器(207・208)はやや内反するもので、ハケやヘラを使ったナデ整形で仕上げられる。増形土器(209・210)は精製したこまかい粘土を用いており、外面と、内面の頸部より上は丹塗りである。丸みをもった胴部に、外反する口縁部がつく。

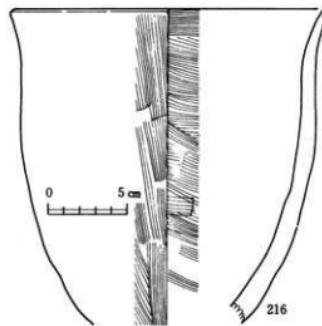
高环形土器(212～215)は、口縁直径21cm、深さ8cmの環部と、筒部と裾部の境がはっきりしない脚部からなる。ともに外面はヘラ研磨で仕上げ、丹が塗られる。床面上にあった砥石は砂岩製で、4面を使用している。

(7) 7号住居跡

20・21A・B区につくられたやや変形した方形住居跡で、江戸時代につくられた墓塚によって広くこわされている。南北方向に5.4m、東西方向に4mほどを測り、深さ20cm位を残している。中央よりやや北寄



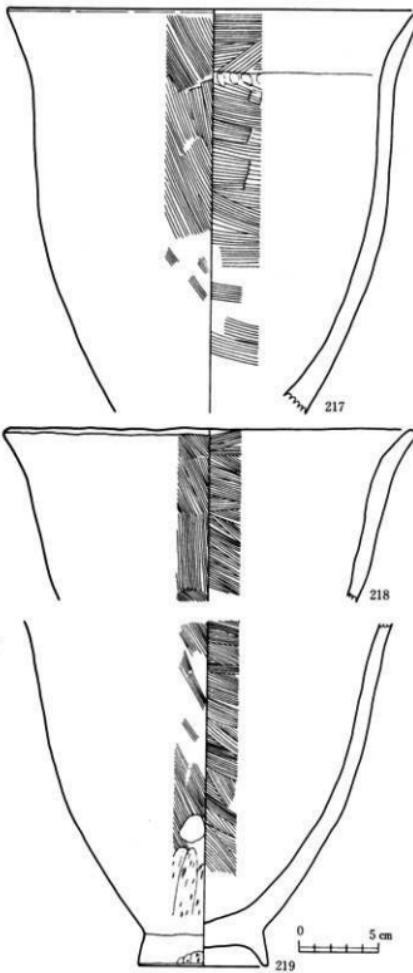
第37図 7号住居跡



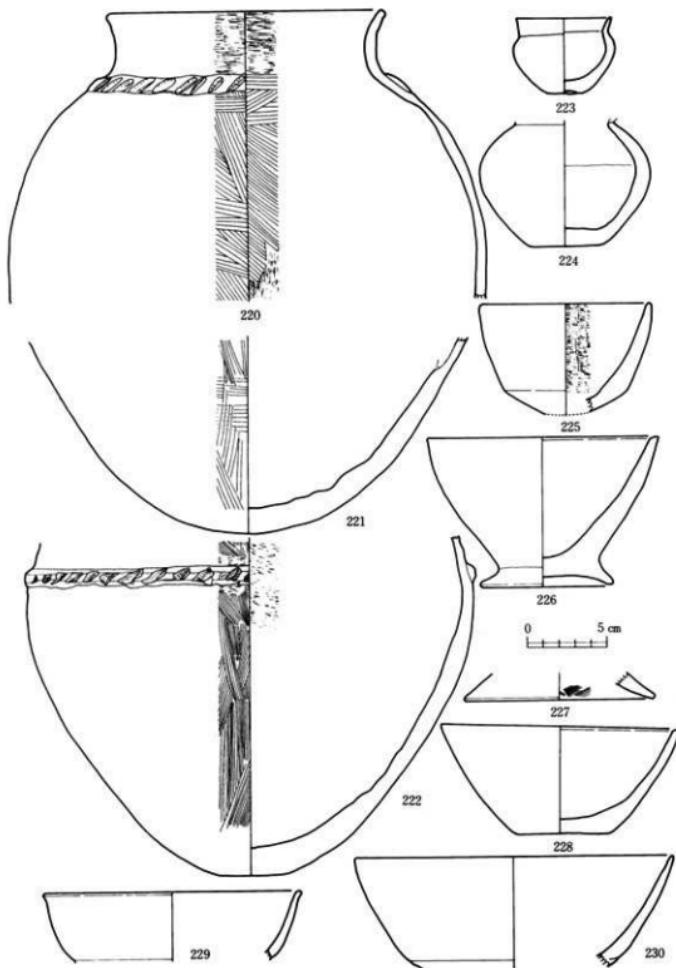
第38図 7号住居跡出土の土器(1)

りに直径70cm位の範囲で炭・灰の堆積がある。床面には多くの完形品を含む土器があるが、特に灰・炭の堆積している所の南西側には變形土器が集中している。

變形土器（216～219）は、口縁部がくの字状に外反し、低い脚台が付く。口縁直径20cm～26cm、高さ22～28cmを測る。内外面ともハケナデを主とした調整がされ、一部ヘラナデが加えられる。壺形土器（220～222）は丸底のものと、小さい平底のものとがある。220は長胴形をして、口縁部が外反するものである。頸部のやや下部に、断面が平たい突帯が貼り付けられ、これには木目の浅い押圧痕が押される。内・外面とも粗いハケナデで調整され、薄くなっている。221・222は外面がハケナデ、内面が、ヘラナデで仕上げている。罐形土器（223・224）は丸みをもった胴部に外へ開く口縁がつく。底部は平底である。外面と、内面の立ちあがり部分には丹が塗られる。鉢形土器（225～228）には丸底、台付、平底の3種類がある。225は凹凸の目立つ器形をしており、内外ともにヘラナデで仕上げる。226・228は外面が丹塗りの土器で、228は内面も丹塗りである。調整はともにていねいである。



第39図 7号住居跡出土の土器(2)



第40図 7号住居跡出土の土器（3）

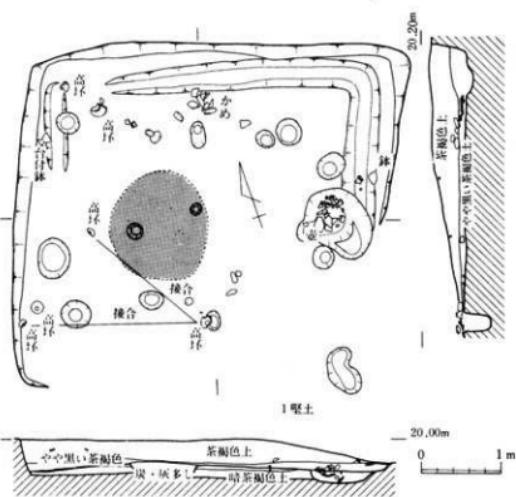
る。高環形土器（227・229・230）の口縁は端部がやや外反するものと、塊形のものとがあり、底部はゆるやかに広がる。いずれも丹塗りである。

(8) 8号住居跡
22・23A・B区

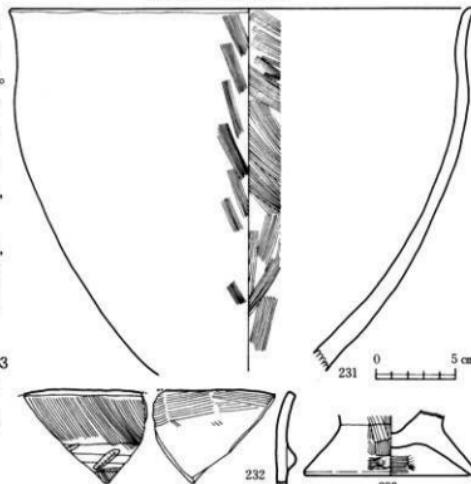
につくられた4.5m × 4.7m の方形住居で、北側は深さ40cm とよく残っているが、南側は江戸時代の溝など

によってこわされている。北半分では周囲に幅30cm、深さ10cm ほどの溝が巡っている。3m 四方には堅土面が広がっており、中央の直径1.2m の範囲には炭・灰が堆積しており、くぼみになっている。柱穴もいくらかあるが、はっきりしない。床面には高環形土器・鉢形土器などがある。

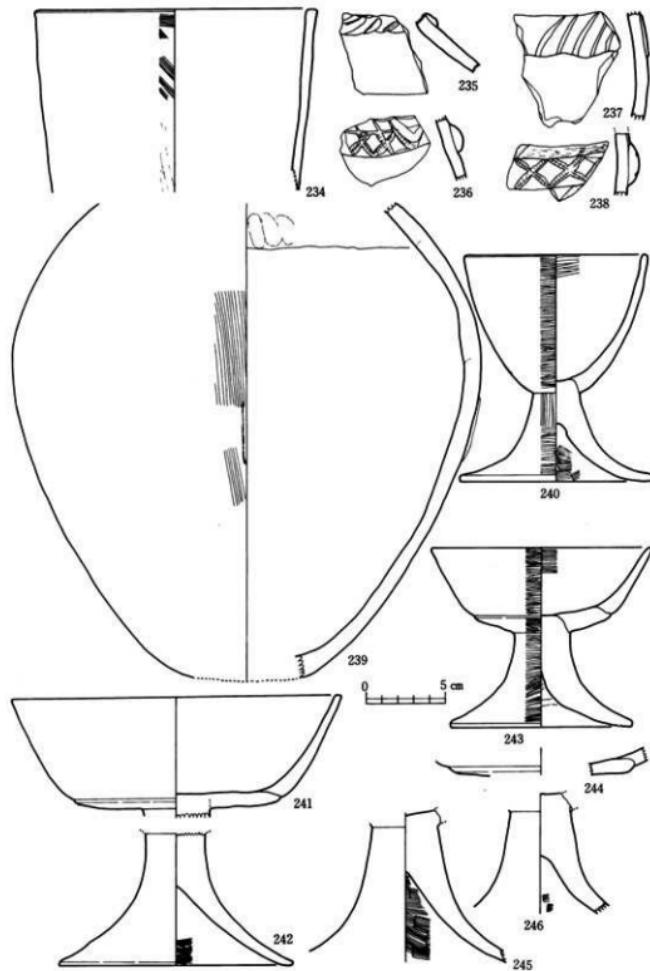
菱形土器（231～233）はくの字状に外反する口縁をもち、低い脚台が貼り付けられる。口縁直径28cm を測り、頸部に突帯の付くもの



第41図 8号住居跡



第42図 8号住居跡出土の土器（1）



第43図 8号住居跡出土の土器（2）

と付かないものがある。壺形土器（235～239）は丸底で、長胴形の器形をしている。頸部・肩部には斜方向あるいは格子状のきざみが付された突帯が付く。239の腹部には縱方向の突起が1条ある。鉢形土器（234・240）には直立する口縁部をもち、ヘラナデで仕上げるものと、丹塗りの台付のものとがある。240は完形品で、口縁直径11.5cm、深さ8cmの鉢部と、裾部直径12cm、高さ5.5cmの脚部からなる。高円形土器（241～246）はすべて丹塗りである。243は口縁部直径14cm、裾部直径11.5cm、高さ11.3cmの完形品である。241はやや大型で、口縁直径21cmを測る。环部は脚部のまわりに挿入する形で接合される。

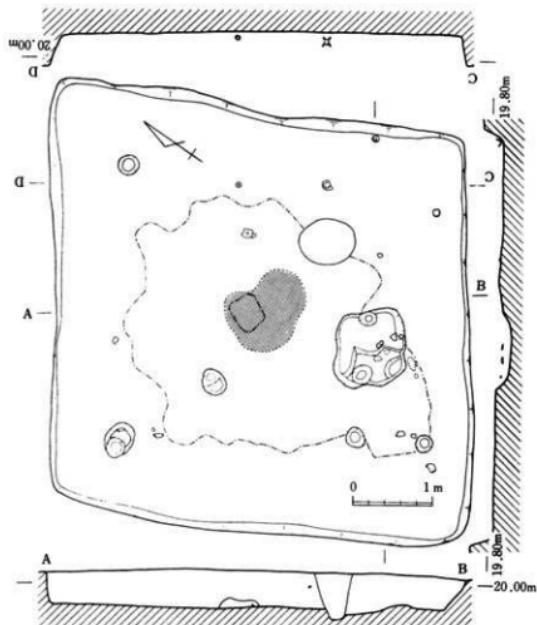
(9)9号住居

跡
28・29E・F
区につくられた
5.3m四方の方
形住居跡で、深
さ30cmを残して
いる。中央付近
の3m四方くら
いは堅くなっ
て
いる。またその
中央の70×110
cmの範囲には炭
や灰が堆積して
おり、その一角
の40cm四方は床
面が赤く焼けて
おり、炉跡と思
われる。南側に
は浅いくぼみが
ある。土器の出
土は少ないが、

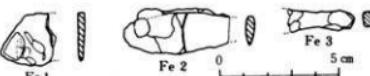
壺形土器・鉢形

土器・高円形土器が多く完形品も含まれて
いる。他に鉄製品も出土している。

變形土器（247～249）の脚台は低く小
さいものと、やや大きくて深いものがあ
る。壺形土器（250）はやや小型で、頸部

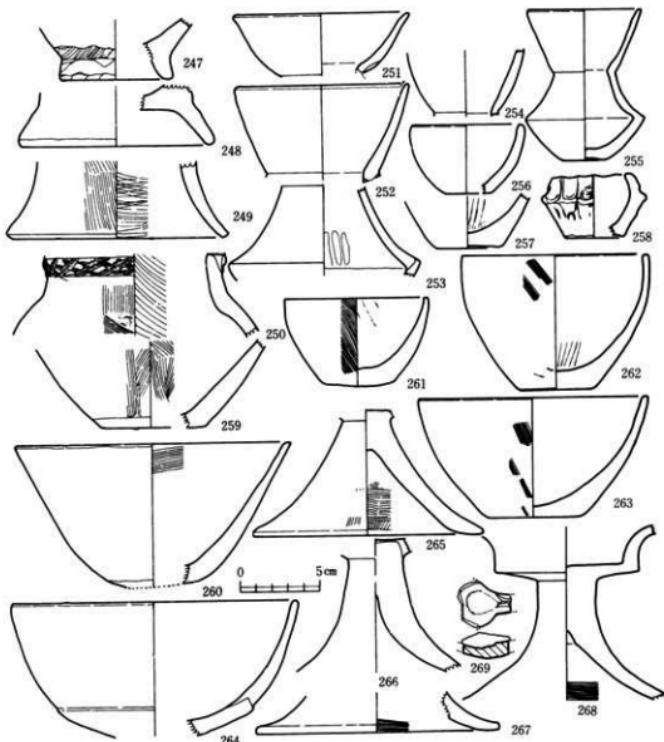


第44図 9号住居跡



第45図 9号住居跡出土の鐵器

には格子状押圧のある突帯が貼り付けられる。辯形土器（251～255）は内反する口縁部と、肩部がくぼんで中央に最大径のある胸部、ややあげ底の底部からなる。口縁部は内外とも丹塗りである。255は完成品で口縁直径7cm、高さ9.6cmを測る。鉢形土器（256～263）は形態が数種あり、260が不安定な他はほとんど安定した平底である。258のように手づくね風のもの、ハケやヘラのナデ仕上げのもの、研磨して丹塗りのものなどがある。高环形土器（264～268）の口縁部は内反して塊状のものと、外反するものがあり、脚部はゆるやかに広がる。匙形土製品（269）は浅いものである。鉄器は刀子状のもの（1・2）と柄の部分（3）がある。

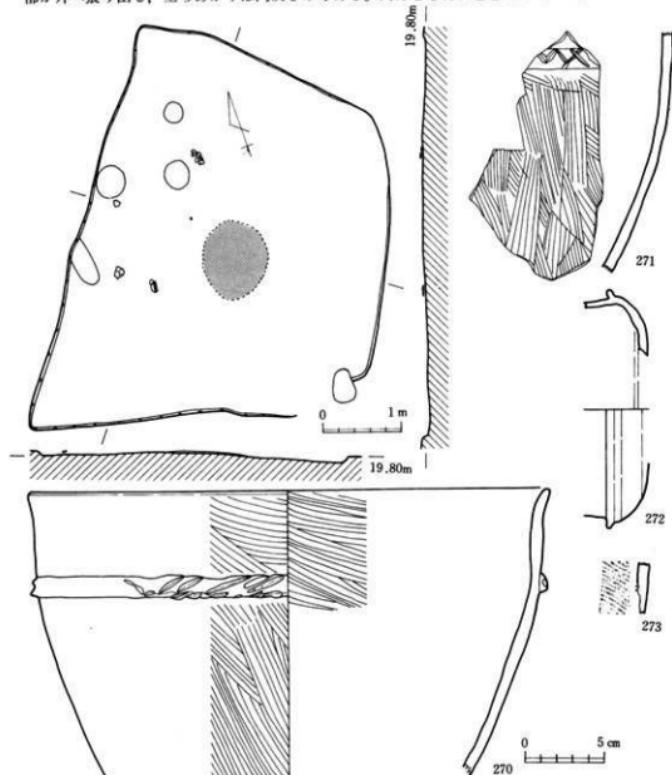


第46図 9号住居跡出土の土器

⑩10号住居跡

27・28J・K区につくられた上辺2.3m、下辺5.3m、高さ4mを測る台形状の住居跡で、ゴボウ栽培のため残りは悪い。深さも5cmほどしか残っていない。中央に80cm×1mの範囲で炭・灰などが堆積している。床面に變形土器などあるが、これも残りはよくない。

變形土器は内反ぎみの器形をしているが、端部近くでは外反する。肩部付近に斜方向あるいは格子状の押圧が付された突帯が付されている。須恵器は环身と變が出土している。环身は受部が外へ張り出し、立ちあがりは内反ぎみである。両方とも青灰色を呈している。



第47図 10号住居跡とその出土土器

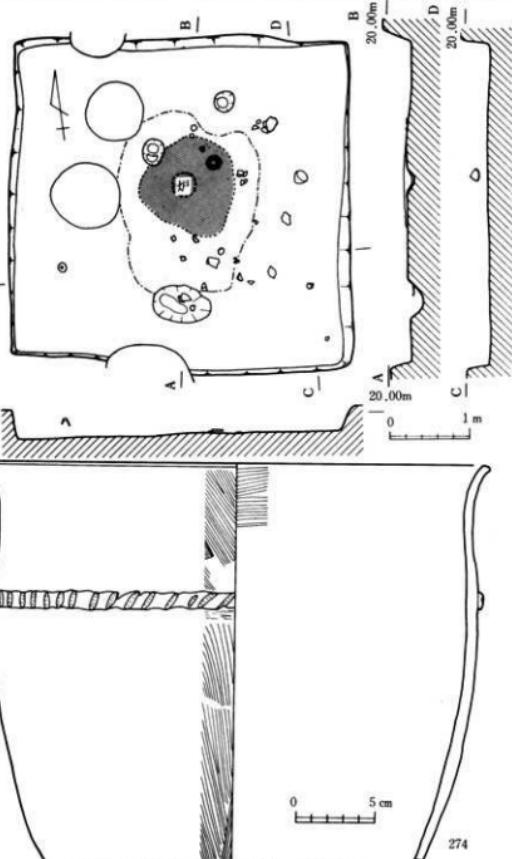
(1) 11号住居跡

28F・G区につくられた4.3m四方の方形住居跡で、深さ30cmとよく残っているが、イモ穴が多く各所でこわされている。1.7m×2.2mの範囲に堅土面が広がり、その中央の直径1.2mの範囲には炭・灰が堆積している。また、その中央の下面では直径30cmの範囲に焼土面があり、炉跡と思われる。南壁に近い所では長径70cm、短径40cm、深さ20cmのくぼみがあり、高壇形土器などがある。主柱穴等は不明である。

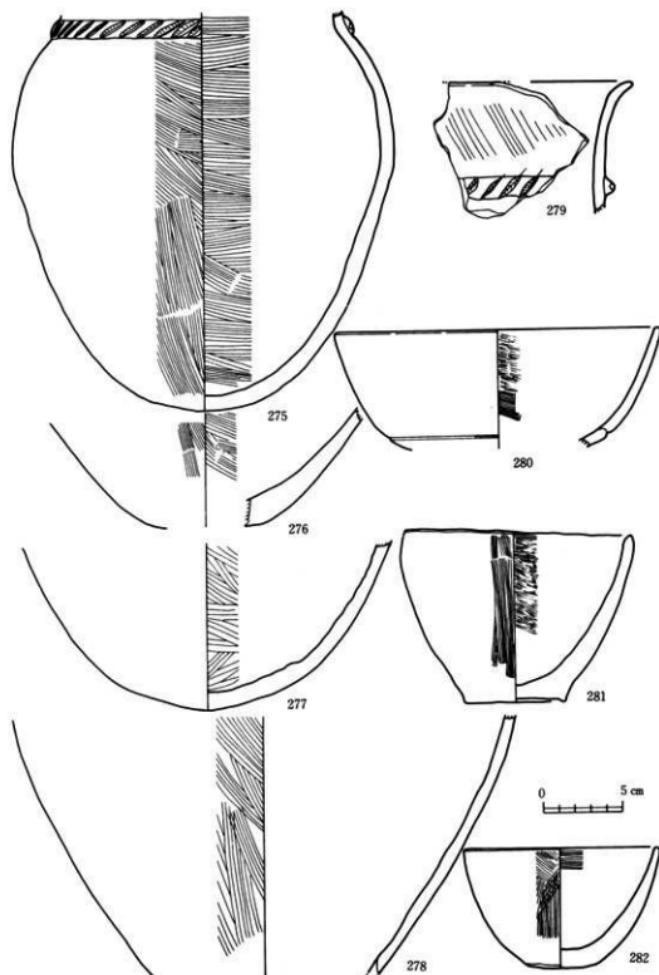
変形土器（
274・279）

はくの字状に
外反する口縁
をもっており、

7~8cm位下
に斜方向の板
押圧痕が付さ
れた貼り付け
突帯が巡って
いる。外面は
斜方向のハケ
ナデ、内面の
口縁付近は横
方向のハケナ
デ、下半部は
ヘラナデで仕
上げる。壺形
土器（275~
278）は頭部



第48図 11号住居跡とその出土土器（1）



第49図 11号住居跡出土の土器（2）

に斜方向の板押痕のある断面半円形の貼り付け突帯があり、丸底である。外面・内面ともハケナデで仕上げているが、外面の底付近はヘラナデで仕上げている。277は底部付近に棒状の敷き物の痕跡を残している。高円形土器（280）の坏部は口縁直径20cm、深さ7.5cmを測り、塊状を呈する。立ちあがりと底部は貼り付けであり、その境は板押圧によって、凹線が巡っている。外面は横方向のヘラ研磨のあと丹が塗られ、内面はこまかい横方向のハケナデのあと、ていねいなヘラナデで仕上げられる。鉢形土器は内反する完形品が2点出土している。281は口縁直径14.5cm、底部直徑6.5cm、高さ11cmを測り、浅いあげ底になっている。外面はていねいな縦方向のハケナデ、内面は横方向のヘラナデで仕上げる。282は口縁直径12.5cm、底部直徑4cm、高さ7.7cmを測り、不安定な平底である。外面は斜あるいは縦方向のあらいハケナデで、内面は口縁近くが横方向のハケナデ、下半部が横方向のヘラナデで仕上げる。

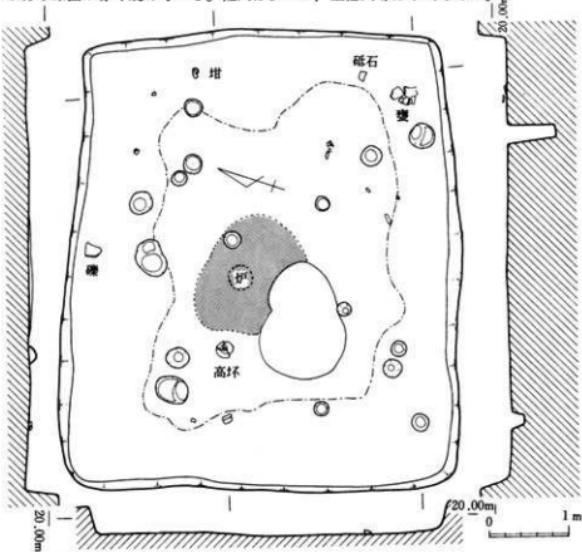
(1) 12号住居跡

29・30E・F区につくられた5m×5.8mの方形住居跡で、深さは30~40cmと残りがよい。イモ穴によってこわされている所もある。3m×3.5mの範囲に堅上面が広がっている。中央の1.2m×1.5mの範囲には炭・灰が堆積しており、その中央部の直径30cmの範囲では深さ10cmのくぼみがあり床面が赤く焼けている。柱穴は多いが、主柱穴等は不明である。

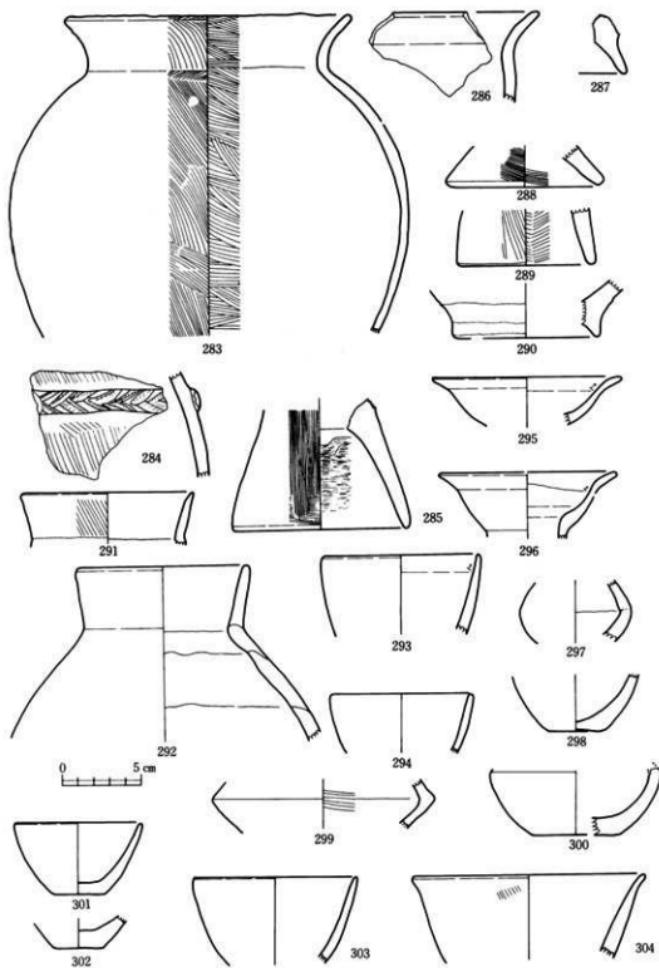
變形土

器（283
~290）

には肥後系のものと土着のものがある。283が肥後系の土器である。口縁がぐくの字状に外反するもので、口縁直径18cmを測る長脚形をしており内外とも

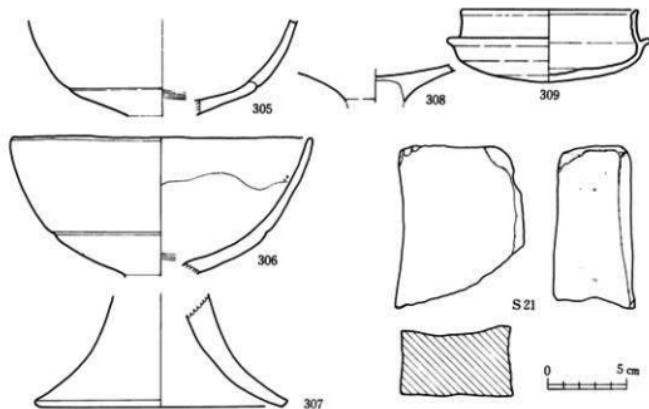


第50図 12号住居跡



第51図 12号住居跡出土の遺物（1）

に斜方向のハケナデで強く調整され、薄く仕上げられる。小礫を多く含む砂質土を用い、焼成が良く堅致である。土着の土器もくの字状に外反する口縁をもち、脚台が付けられる。頭部より下がったところに矢形の板押圧が付された突審が貼り付けられる。脚台は浅いものと、長脚のものとがある。浅いものは1cm足らずであるが、深いものは6cm余りもある。外面・内面ともハケナデのものと、ヘラナデのものとがある。壺形土器(291・292)の口縁はやや外へ開いてまっすぐ伸びている。外面整形はハケナデのものと、ヘラナデのものとがあるが、内面整形はヘラナデである。2cm~4cmの粘土板を積みあげてつくっている。壺形土器(293~300)の口縁部は外反して広がるものと、やや内反するものとがある。外反するものの口縁直径は12cm、内反するものも口縁直径は9~10cmある。胴部は丸みをもつものと、上半部がややくぼむものとがあり、底は平底あるいはややあげ底である。外面整形はヘラによる横方向のミガキかていねいなナデであり、丹が塗られる。内面整形はヘラによるていねいなナデで、口縁部近くには丹が塗られることもある。293は内面の丹が整然と塗られており、丹塗りの道具がハケ状のものであったことを伺わせる。鉢形土器(301~304)は内反ぎみに立ちあがるものと、端部近くで外反するものがある。301は口縁直径8cm、底部直径3cm、高さ4.5cmを測り、内・外面ともヘラミガキで仕上げ、丹が塗られる。302と303も301と同じような器形・大きさをしており、外面・内面の整形はともにていねいなヘラナデである。304もヘラナデで仕上げているが、外面はその前にハケナデをしている。高杯形土器(305~308)は壺形の器形をした壺部と、裾部と筒部の境がはっきりしない脚部からなる。壺部は口縁直径19cm、深さ8cmを測り、底部と立ちあがりの境に凹線が巡る。壺部は脚部を巻くようにして接合される。外面はヘラミ



第52図 12号住居跡出土の遺物(2)

ガキ、内面はていねいなヘラナデで仕上げるが、内面の底は一部ハケ目が残っている。須恵器は東側の床面と、柱穴から出土したもので、口縁直径11cm、高さ4.5cmを測る完形の坏身である。立ちあがりはやや内反しながらまっすぐ立ちあがり、端部内面はくぼんでいる。受部は外へ広がる。0.1mm～2mm大の石英など

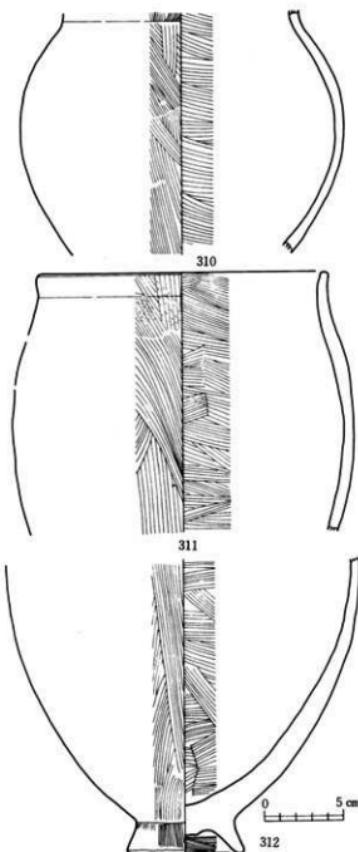
白色石粒を含む土を用い、焼成良好である。内外面とも青灰色を呈している。

砥石も床面から出土しており花崗岩を使用している。2面を使用しており、よく使い込んでいる。

(13) 13号住居跡

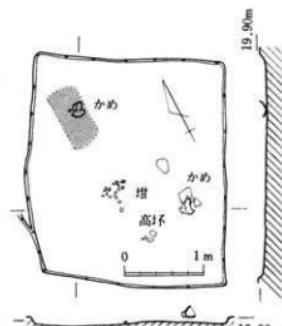
29・30Ⅰ区につくられているが、ゴボウ栽培によってこわされており、現在確認できる広さは2.5m×2.8mの方形である。深さは5cmほどと浅い。北西隅近くの直径80cmの範囲に炭・灰などが堆積している。床面には多くの土器がある。

變形土器（310～315）は肥後系のものと、土着のものがある。310が肥後系のもので、長胴形の器形をしている。頭部が細くなっている。外面・内面とも斜あるいは横方向のハケナデで仕上げられ、薄く仕上がっている。外面にはスヌが多く付着している。土着の變形土器は口縁部が外反するもので、底には低い脚台が付く。311は内反する器形をしているが、口縁部が外反している。口縁直径は18cmを測る。313は口縁直径27cmを測り、口縁部が外反している。頭部ははっきりしていないが、下部が斜方向のナデになっているのに対し、口縁部のナデは縦方向になっている。315は口縁端部に板の押圧痕があり、端部の断面を矩形にしている。外面整形は斜あるいは縦方向のハ

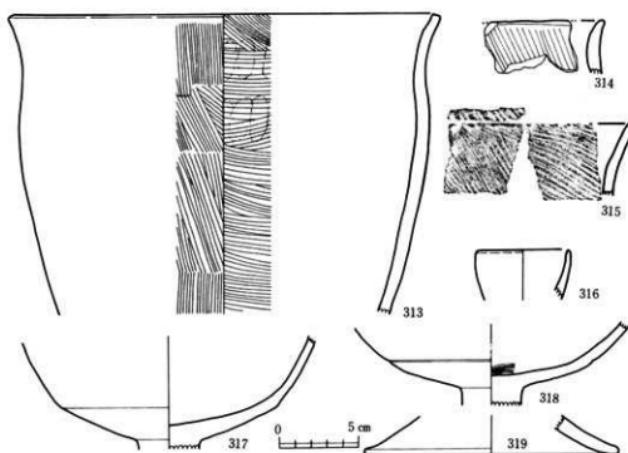


第53図 13号住居跡出土の土器（1）

ケナデ、内面整形は斜あるいは横方向のハケナデで仕上げる。313は内面にヘラ押圧の痕跡が残っている。増形土器（316）の口縁部は内反し、直径6cmを測る。外面・内面とも横方向のヘラミガキで仕あげ、丹が塗られる。高坏形土器（317～319）の坏部は塊形をしており、立ちあがりと底部の境は明瞭でないが、317は境に棱がつき、318は浅い凹線が巡っている。裾部はゆるやかに広がり、端部の直径16cmを測る。坏部は脚部のまわりにさし込むように接合されている。外面はヘラミガキで仕上げ、丹が塗られる。内面はミガキに近いヘラナデで調整するが、底部付近にはハケ目が残っている。變形土器の胎土は0.1mm～5mm大の石英や黒雲母などの細石粒を多く含む砂質土である。肥後系變の胎土は石英などの細石粒を相当の割合で含んでおり、ざらざらした感じをいだかせる。黄みがかった茶褐色、あるいは赤みがかった茶褐色を呈し、焼成度は良好である。増形土器・高坏形土器の胎土は石英・黒雲母・茶色粘土を多く含んでいるが、こまかい土を使用している。

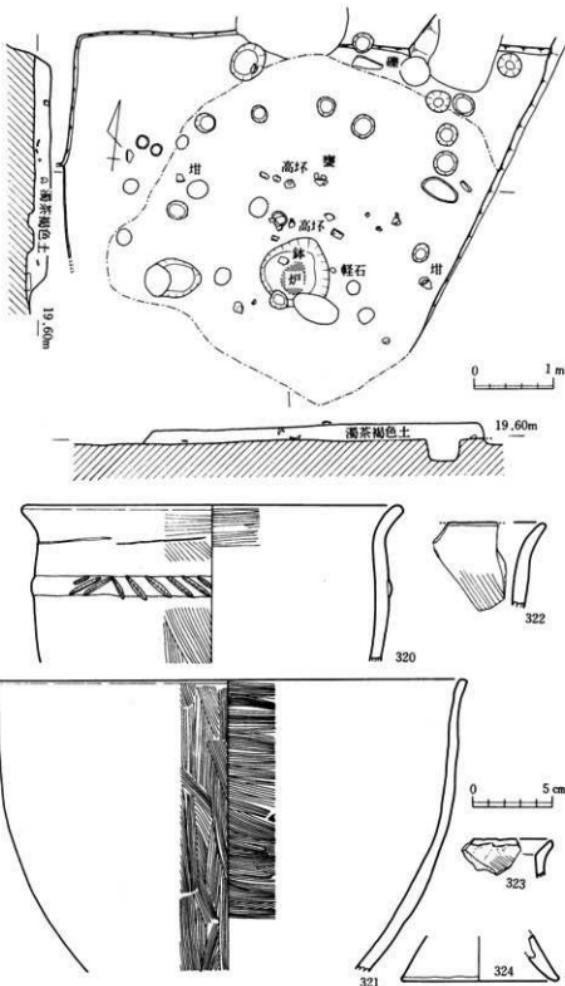


第54図 13号住居跡

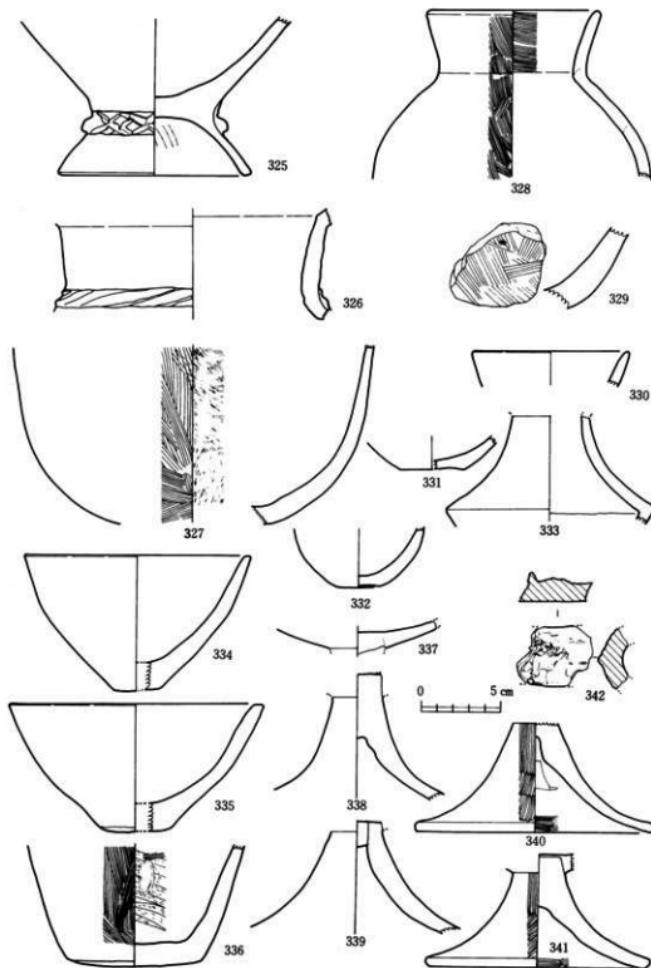


第55図 13号住居跡出土の土器（2）

(14) 14
号住居跡
15・16
F・G区
につくら
れた方形
住居で、
東西方向
に6m、
南北方向
に4.8m
検出した
が、東側
と南側が
削平され
ているた
め全容を
検出でき
なかった。
深さは北
側で20cm
を浅して
いる。中
央付近の
4m四方
の範囲に
は堅土面
が広がっ
ている。
中央近く
には直径
0.8m、
深さ10cm
のくぼみ
があり、



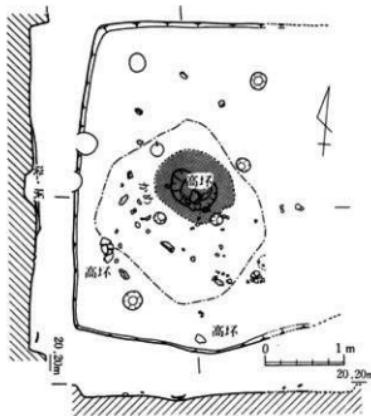
第56図 14号住居跡とその出土遺物 (1)



第57図 14号住居跡出土の遺物 (2)

中央は赤く焼けている。炉跡と思われる。小さな柱穴が多く検出されたが、主柱穴は不明であった。床面上に高環形土器などがあったが、小さな破片が多かった。

變形土器（320～325）の口縁部はゆるやかに外反し、頸部の下に突帯の貼り付けられるものと、ないものがある。320は口縁直径が24cmあり、頸部は深くナデで段をつくる。頸部より上は、外面・内面とも横方向のハケナデ、下は外面が斜あるいは縦方向のハケナデ。内面が横方向のヘラナデで仕上げる。突帶には板状圧痕が付されており、途中で右下がりから左下がりへ向きを変える。321・322は突帯がつかず、調整はハケナデを主とする。323は小型の變形土器で、外反度が強い。整形は外面がハケナデ、内面がヘラナデである。脚台付近はヘラナデで仕上げており、325には付け根に突帯が貼り付けられている。突帯には格子状の板押圧痕が付される。324は底に押しつけられるように脚台が貼り付けられる。臺形土器（326～329）の口縁は直立ぎみでやや外反するものと、外へ開いて立ちあがり、端部付近で外へ屈曲するものとがあり、屈曲するものは頸部にヘラ押圧の付された突帯が貼り付けられる。底部は丸底であるが、327は安定した丸底でうすく仕上げている。整形は外面がハケナデ、内面がヘラナデであるが、326は両面ともヘラナデ、328は口縁内面がハケナデである。329は底部にモミ痕が付いている。壺形土器（330～333）には大きいものと小さいものがある。口縁部は外へ開きながら、まっすぐ伸びている。肩部は外反するものと、丸みをもつものとがあり、底は浅いあげ底である。外面・内面ともヘラミガキあるいはていねいなヘラナデで仕上げ、外面は丹が塗られる。口縁内面も丹が塗られ、332は内面の下半まで丹が塗られている。鉢形土器（334～336）は口縁部が広くて、底部の小さいものと、安定した平底のものとがある。334は口縁直径14cm、底部直径3cm、高さ8.5cm、335は口縁直径16cm、底部直径3cm、高さ8cmを測り、内・外面ともていねいなヘラナデで仕上げる。336は底部直径8cmを測り、外面がこまかいハケナデ、内面がヘラナデで仕上げ、底にはせんい状の圧痕が付く。高環形土器（337～341）の脚部は筒部と裾部の境が明瞭でなく、ゆるやかに広がる。外面は横あるいは縦方向のヘラミガキで仕上げられ、丹が塗られる。内面はヘラナデであるが裾部のみはハケナデである。环部と脚部の接合は、脚部に裾部を押し込むようにして行われる。339は筒状のもの



第58図 15号住居跡

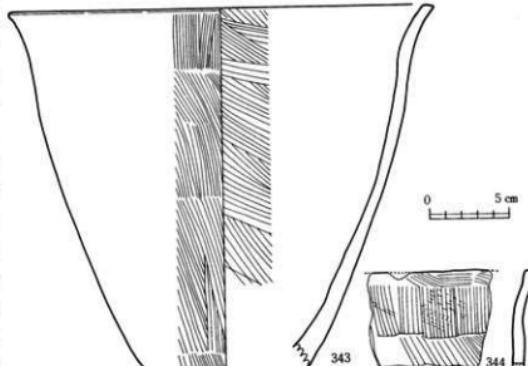
を脚部に押し込んでいる。342はふいごの羽口で、内側の直径2.3cmを測る。厚さが1.2cmあり、周囲には鉄かすが付着している。

(15)15号住居跡

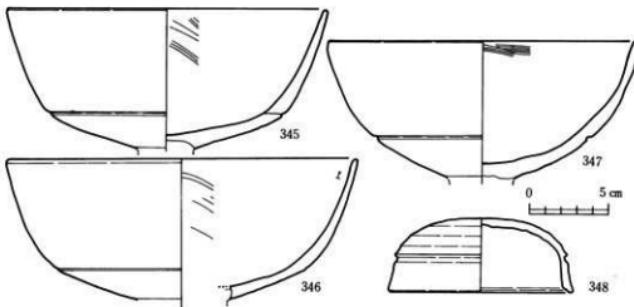
28・29G・H区につくられた3.5m×4mの方形住居跡で、東側をゴボウ栽培によってこわされている。1.8m×2.1mの範囲に堅土面が広がっており、その中央付近の直径1mの範囲には炭・灰などが堆積している。その下部では45cm×60cmのだ円形をした浅いくぼみがあり、赤く焼けている。主柱穴は不明であるが、くぼみのまわりに4本の柱穴がある。

343は口縁直径27cmを測り、やや外反する變形土器で、内・外面ともハケナデで仕上げている。344も變

形土器の口縁で、外反しているが端部付近が直立している。内外ともハケナデである。高環形土器(345～347)は口縁直径20～22cm深さ8cmを測る塊形の環部で、外面はヘラミガキで仕



第59図 15号住居跡出土の土器(1)



第60図 15号住居跡出土の土器(2)

上げ、丹塗りである。内面はハケナデのあと、ていねいなヘラナデで仕上げ、346の上半は丹が塗られる。348は黒灰色を呈する須恵器の壺蓋で、口縁直径11.5cm、高さ4.7cmを測る。口縁内面は段をもっており、天井部と口縁部の境もくぼんでいる。白色砂粒を多く含む密な胎土を使用している。

(I) 19号住居跡

24・25D区につくられた方形住居跡であるが、江戸時代の溝状造構や道路跡によってほとんどここわされている。堅土面が2.4m~3.5mの範囲に広がっており、その中央に直径50cmの範囲で炭・灰が堆積している。溝状造構からは多くの土器が出土しており、この住居跡のものも含まれていると思われる。床面にも少量の土器がある。

變形土器はくの字形に外反する器形をしており、内面・外面とも横方向のヘラナデで仕上げられる。鉢形土器はやや内反しており、外面・内面とも横方向のヘラナデで仕上げている。

2. 土塙

28G・H区につくられた略円形の土塙であるが、東側を15号住居跡にこわされている。残存規模は南北方向に2.2m、東西方向に1mある。深さ10~20cmを残している。

3. 表土層出土の土器

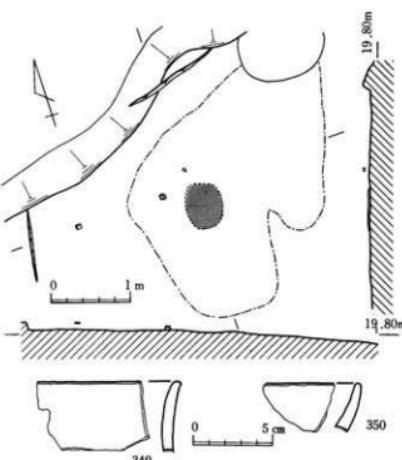
表土層や古代以降の遺構などからも古墳時代の土器が出土している。

(1) 弥生式土器 (351)

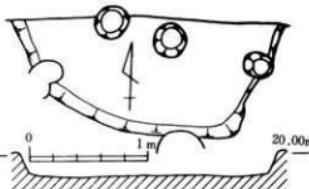
磨滅しているが、逆L字形の口縁をもつ弥生時代中期の變形土器が1点出土している。口縁はやや下がっており、端部はくぼんでいる。6mm大までの小礫を多く含む砂質土を用いている。

(2) 土師器

變形土器（352~365）の口縁部は外反するものがほとんどで、頸部に突帯の付くものと、

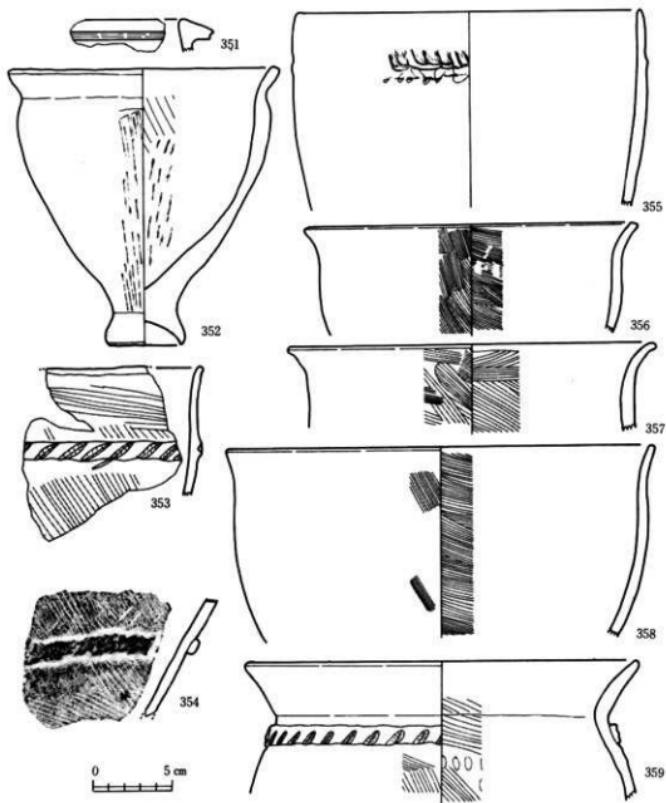


第61図 19号住居跡とその出土土器



第62図 土塙

付かないものがある。352は口縁直径17cm、底部直径5cm、高さ17.5cmを測る完形品である。くの字状に曲がる口縁をもち、浅く、小さい脚台が付く。整形は内外ともに粗く、ケズリに近い粗いヘラナデで仕上げる。脚台のつくりも粗い。353と354はまっすぐ立ちあがる口縁をしており、左下がりの板押しがされた突帯が貼り付けられる。355はやや内反する口縁部をもっており、口縁下部に突帯は付かないものの、ヘラ引きとヘラ押しにより凝突帯とでもいえそう



第63図 搾乱層出土の古墳時代土器（1）

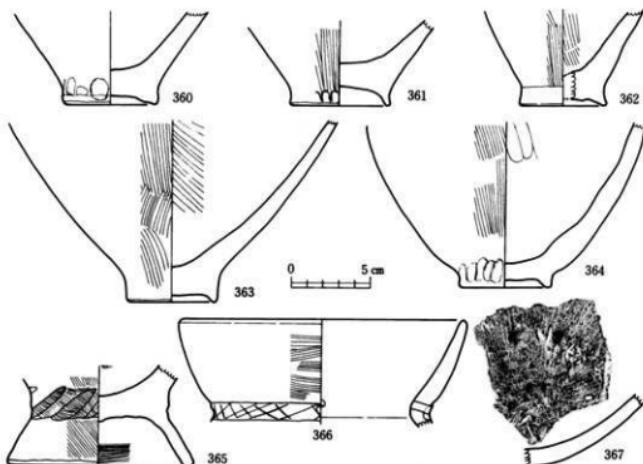
な文様をつくっている。359は強く外反するくの字状口縁で、頸部に板押しのある突帯が貼り付けられる。脚台は浅いものが多く、申しわけ程度に引き伸ばしたものもある。凸凹が激しい。

365は胴部と脚台の境を板で強く押し、突帯を貼り付けたような文様をつくっている。

366は壺形土器の口縁で、くの字状に折れているが、やや内反する。頸部にヘラの格子状文が付された突帯が貼り付けられ、直徑6mmほどの円孔が1個ある。367の底には織維状の圧痕が多くあり、もみ痕も3ヶ所にみられる。

壺形土器（368～374）は大きく2種に分けられる。ひとつは小さい胴部に長い口縁部のつく小型丸底壺の系統である（368）。他種がこまかい致密土を使い、丹塗りであるのに対し、これは砂質土を用い、ヘラナデで仕上げ丹を塗らない。あとひとつは平底あるいはあげ底で、丸みをもつ胴部に内反してまっすぐのびる口縁の付くものと、胴部からまっすぐ立ちあがり外へ強く曲がる口縁をもつものとがある。胴部も最大径が肩にあるものと、下半部にあるものとがある。374は口縁直徑8.5cm、底部直徑3cm、高さ11cmを測る完形品で、胴部に直徑1.2cmの円孔が1個ある。

鉢形土器（375～388）にも多くの形態がある。まず、内反ぎみに立ちあがり、平底のものがある（375～377）。これは外面がハケナデ、内面がハケあるいはヘラナデで仕上げる。378と381はていねいなヘラナデで仕上げ、外面および内面の上半部に丹が塗られる。379は丸底



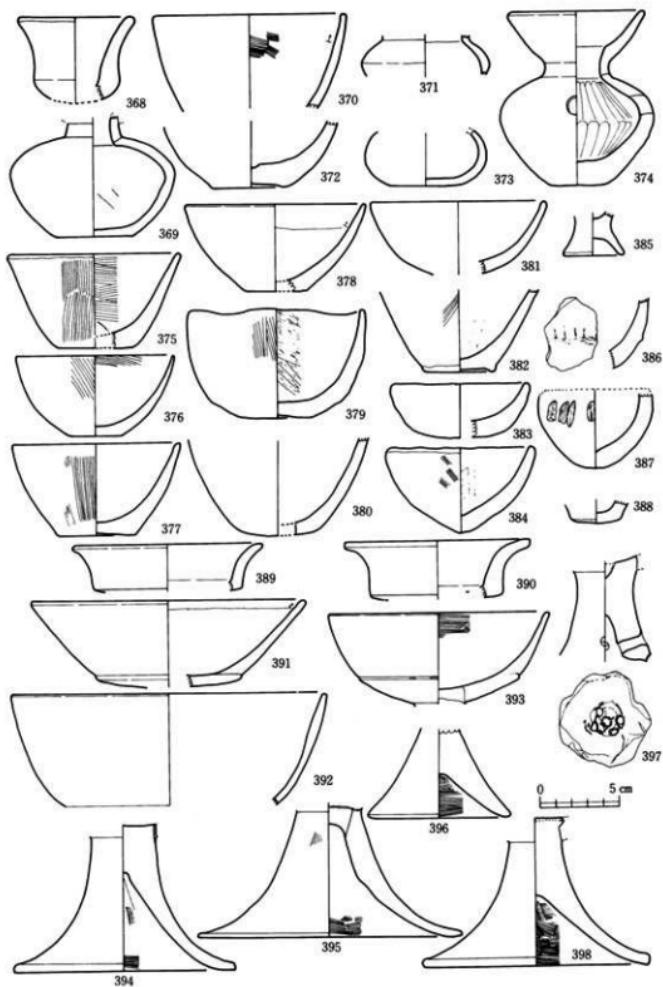
第64図 撫亂層出土の古墳時代土器（2）

ぎみの器形をしており、凹凸が激しい。382はややあげ底ぎみである。383～388は手づくね土器で、多くはヘラナデで仕上げる。385は壺形土器の脚台である。386と387はとがり底の器形をしており、外面の口縁下部に並行するヘラ引きがくり返される。388は平たい底をした小型のものである。

高壺形土器（389～398）も丹塗りのものと、丹の塗られないものとがある。丹塗りのものの壺部は、直径12cmで立ちあがりが強く外反するもの、直径17cm、深さ4.7cmと壺形のもの、直径14cm、深さ5cmあるいは直径20cm、深さ8cmと壺形のものの3種に分けられる。ほとんどは外面と、内面の口縁のみ丹塗りだが、390は内面全体にも丹が塗られる。脚部はゆるやかに裾部が開くが、丹のない397は裾部が段をもって広がり、屈曲部に4つの円孔があがたれる。

図番	器種	出土区	層	備考	図番	器種	出土区	層	備考
351	弥生式土器	23H	1		375	鉢形土器	19C	1	
352	壺形土器	34B	1		376	〃	28E	1	
353	〃	16E	1		377	〃	19C	1	
354	〃				378	〃	20～23G	1	丹塗り
355	〃	23C～D	1		379	〃	25E	1	
356	〃	24G	1		380	〃	24・25E	2	
357	〃	23C～D	1		381	〃	18D	1	丹塗り
358	〃	22B	1		382	〃	23C～D	1	
359	〃	H 7			383	〃	37B	P 2	手づくね
360	〃	24C	1		384	〃	24C	1	〃
361	〃	24C	1		385	〃	18L	土塙	〃
362	〃	25G	1		386	〃	22・23	1	〃
363	〃	24・25E	1		387	〃	22F	1	〃
364	〃	25E	1		388	〃	33B	1	〃
365	〃	18D	1		389	高壺形土器	15I	2	
366	壺形土器	17I	1	円孔アリ	390	〃	20～23G	1	
367	〃	22C	1	もみ痕アリ	391	〃	23C～D	1	
368	壺形土器	26D	1	小型丸底壺	392	〃	16I	1	
369	〃	30H	P 1		393	〃	16E	1	
370	〃	19E	1		394	〃	19C	1	
371	〃	23C～D	1		395	〃	24C	1	
372	〃	25D	1		396	〃	24・25E	2	
373	〃	36A	P 2		397	〃	20A	1	丹ナシ
374	〃	18D	1	はそう	398	〃	25E	1	

第5表 摂乱層出土の古墳時代土師器出土地区表



第65図 摂乱層出土の古墳時代土師器（3）

(3) 須恵器

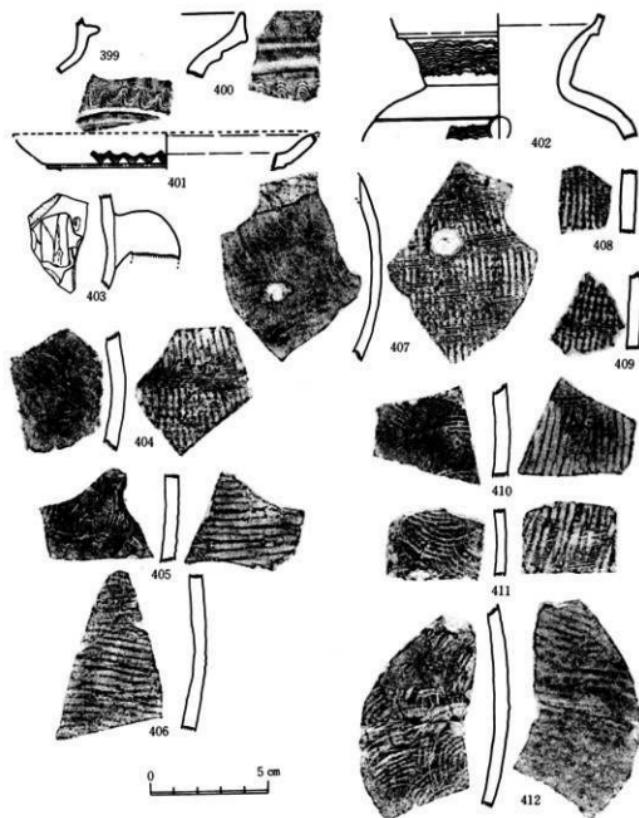
5ヶ所の住居跡から須恵器が出土しているが、表土層や2層から多くの須恵器が出土しており、器種も壺身・壺・はそう・把手塊と色々ある。

399は受部が外へ突き出た壺身である。400は口縁端部が上下に張り出した壺で、外面・内面とも鉛軸がかかっている。口縁下に三角突帯が巡り、その下には櫛描き波状文が巡らされる。401と402ははそうである。401は口縁直径13cmを測り、外へ張り出している。口縁下には櫛描き波状文が巡り、その下には深いえぐりがあって突帯風になっている。402は頸部直径が6cmあり、そこから外へ開きながら立ちあがる。頸部の上には15条の櫛描き波状文が巡っておりさらにその上を突帯が巡っている。頸部の下は丸みをもった胴部をしており、肩部に一条の凹線が巡っており、その下には櫛描き波状文がある。この付近に円孔がひとつある。外面はやや光沢のある黒っぽい灰青色を呈し、内面は灰青色をしているが、口縁付近には鉛軸がかかっている。0.1mm~4mmの大白色・黒色砂粒を多く含んでいる。403は器厚0.4mmほどの薄いものに把手が貼り付けられており、把手付塊と思われる。壺(404~412)も破片が多く出土して

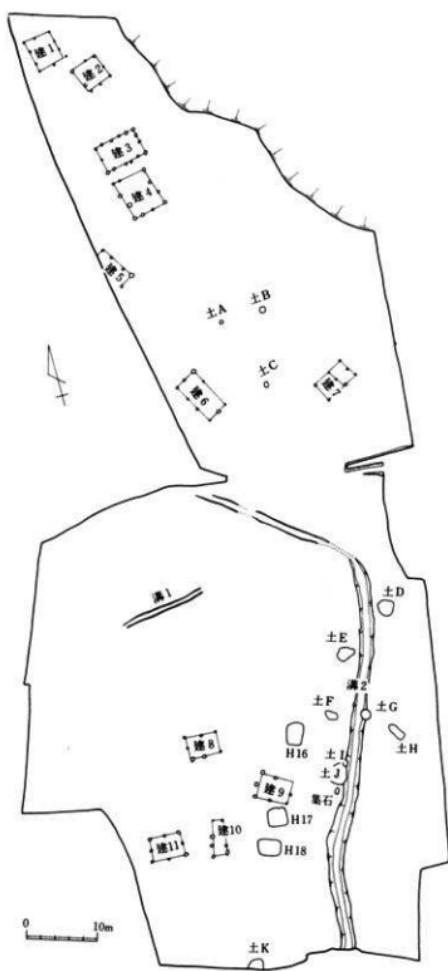
図番	器種	出土区	層	備考	図番	器種	出土区	層	備考
399	壺身					壺	19G	1	
400	壺	18I	2		*	20~23 G·H	1		
401	はそう	H 5			*	21~22D	溝		
402	々	20G	P 6		*	23C	1		
403	把手塊	22G	1		*	30E	1		
404	壺	31E 16D	P 1		*	30F	1		
405	々	24H	1		*	30G	1		
406	々	23J	1		*	31C	1		
407	々	30F	P 4		*	31E	1		
408	々	30F 34E	1		*	31F	1		
409	々	19F	1		*	31G	1		
410	々	15H	2		*	31H	1		
411	々	15F	1		*	32E	1		
412	々	30G	1		*	32H	1		
	々	31D	1		*	32I	1		
	々	31E	1		*	33D	1		
	々	13L	1		*	34C	1		
	々	14H	1		*	34H	2		
	々	17I	1		*	34I	1		
	々	18K	P 2		*	36F	1		

第6表 撫亂層出土の古墳時代須恵器出土地区表

おり、器厚が5mm～6mmと薄いことより小型の甕である。外面は平行タタキが行われ、その上面に櫛状施文具でナデたものもある。内面は円弧タタキがあるが、そのあとスリケシており、タタキのあとが残っているものと、完全にスリケシしたものとがある。外面は灰青色あるいは青灰色をしており、釉釉がかかって黒灰色あるいは緑色を呈したものもある。内面も同じ色をしているが、中央は紫灰色を呈したものもある。白色あるいは黒色石粒を含んだ土を用いている。



第66図 古墳時代の須恵器 (縮尺: 1/2)



第67図 奈良～鎌倉時代の遺構配置図

第5章 奈良～鎌倉時代

調査区内には多くの柱穴・土塙などがあり、出土遺物・埋土からみてこの多くは平安時代から室町時代頃までのものと思われる。また中央付近には弧状に巡る溝状遺構もあり、これも平安時代から鎌倉時代のものである。表土・包含層から多くの遺物が出土している。

1. 捩立柱建物

多くの柱穴のなかでまとまりそうなものの11棟を紹介するが、調査途中で十分な検討ができないかったため、該当する柱穴が不足するものもあった。

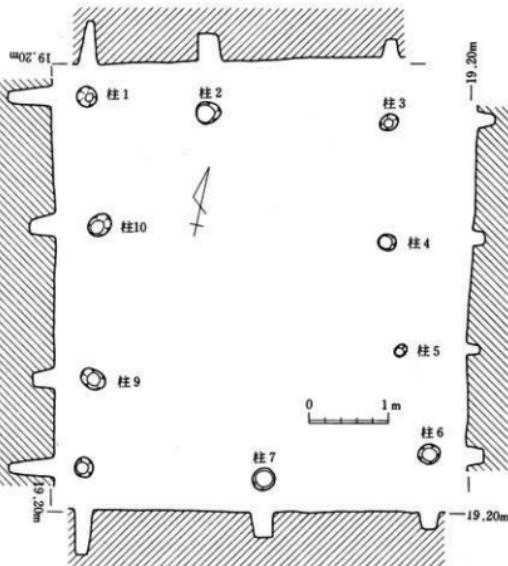
(1) 捩立柱建物 1

37・38a・A区にある東西の柱間2間、南北の柱間3間である。北側の柱間は1.5mと2.3mで3.8m、南側の柱間は2.2mずつで4.4mを測る。東側の柱間は1.5m、1.4m、1.3mで4.2m、西側の柱間は1.6m、1.9m、1.2mで4.7mを測る。主軸方向はN10度Wである。それぞれの柱穴は直径15cm～25cmを測り、深さは15cmほどの浅いものから60cmの深いものまである。

柱穴から出土した土器はなく
時期がはっきりしない。

(2) 捩立柱建物 2

36・37A・B区にある柱間が2間×2間の建物である。柱間隔が均一でなく整然としていない。北側の柱間は2.8mと1mで3.8m、南側の柱間が1.8mずつで3.6mである。東側の柱間は1.9mと1.6mで3.5m、西側の柱間が2.6m



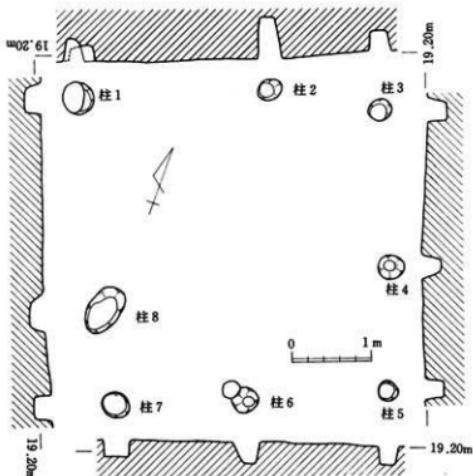
第68図 捩立柱建物 1

mと1.2mで3.8mある。主軸方向はN19度Wである。それぞれの柱穴は直径25～35cmを測る円形をしているが、柱穴8だけは40cm×60cmのだ円形をしている。柱穴の深さは25cm～50cmとほぼ似た深さをしている。

柱穴から出土した土器はなく、時期ははつきりしない。

(3) 捏立柱建物3

34・35B・C区にある東西の柱間5間、南北の柱間2間の建物で東西方向に長い。北側の柱間は西側から1m



第69図 捏立柱建物2

1.5m、1.3m、1m、1.2mで総長6.0mである。南側の柱間は西側から1.0m、1.8m、0.8m、1.2m、1.2mで総長6.0mである。東側の柱間は1.9mずつで3.8m、西側の柱間は1.7mと2.1mで3.8mある。主軸方向はN10度Wである。それぞれの柱穴は直径25cm～50cmを測る円形ピットで、深さ35cm～60cmを測る。柱穴から土師器壺・壇・かめなどが出ている。

413は外へ開きながらまっすぐ伸びる环で、端部は丸く收める。414は壇で、口縁近くは横方向のナデ整形であるが、底部近くはケズリに近いナデ整形で仕上げる。ともに精製した良質土を用いており、淡茶褐色を呈している。図化できなかったが、この他にヘラ切底の环も出土している。

(4) 捏立柱建物4

33・34C・D区にある3間×3間の建物で、柱間隔の違いから東西方向に長い。北側の柱間は西側から1.8m、1.8m、2.1mで総長5.7mである。南側の柱間は西側から1.8m、1.8m、2.1mで総長5.7mを測る。東側は北から3本目の柱跡が欠けているが、北側の1本目と2本目の間隔が1.0m、総長4.8mを測る。西側は北から1.2m、1.6m、2.0mで総長4.8mを測る。主軸方向はN14度Wを測る。それぞれの柱穴は直径30cm～60cmを測る円形で、深さは30cm～60cmを残している。柱穴から土師器の壺・皿・蓋・甕などが出土している。

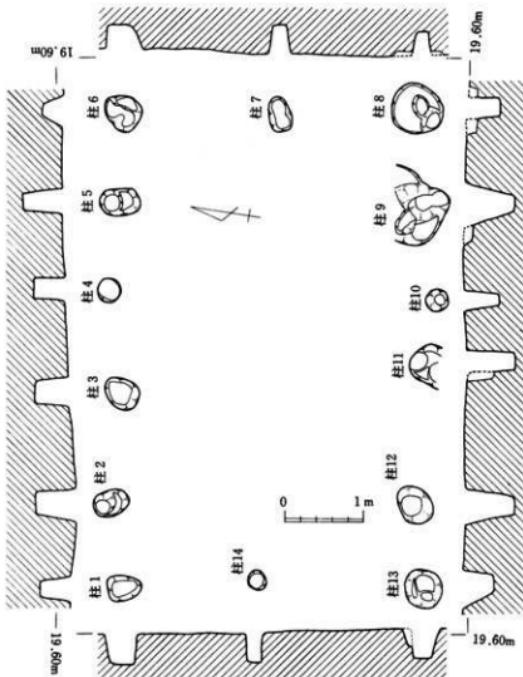
415は环で外へ開いて口縁へまっすぐ伸び、端部は丸く收まる。416と417はまっすぐ口縁

へ開いて伸びる皿で、底部切り離しは糸切りである。

(5) 撫立柱

建物 5

31・32B・C区にある建物で未買取地へ続いているために全容は不明である。南北方向には柱間3間を測るが、東西方向には1間以上伸びており、どこまで伸びるかは不明である。東側の柱間は北から1.5m、2.4m、1.5mで、総長5.4mを測る。南側の柱間は2.4mを測る。主軸方向はN38度30分Wである。それ



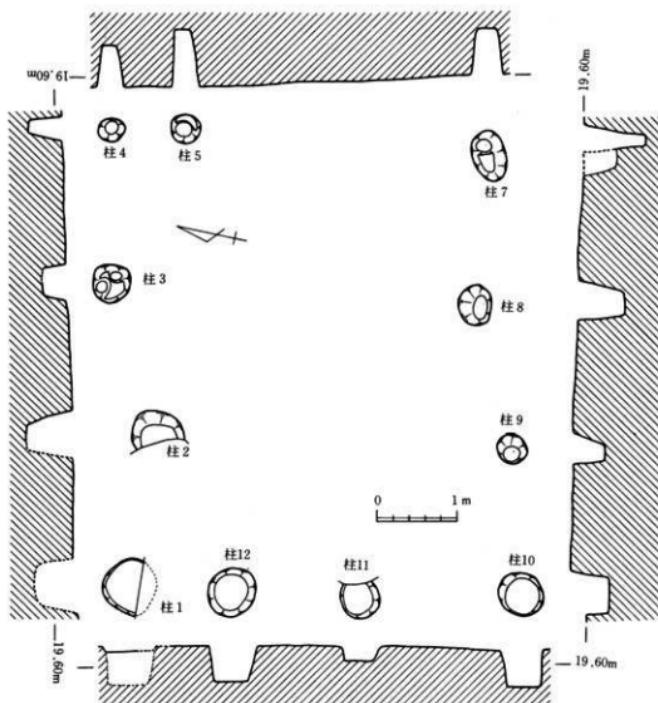
第70図 撫立柱建物 3

ぞれの柱穴は直径25cm~60cmを測る円形で、深さは30cm~40cmを残している。柱穴からは土師器の环・甕、内黒土器の塊、須恵器の甕が出土している。

418は外面、内面ともきれいにミガいた土師器の环で、ほぼまっすぐ外へ伸びているが、端部付近でやや外反している。端部は丸くおさまる。明るい茶褐色を呈し、良質の土を使用している。須恵器の甕には外面・内面とも平行線タタキがみられる。

(6) 撫立柱建物 6

27~29E・F区にある柱間が2間×3間の南北方向に長い建物である。北側の柱間は西から1.5mと1.8mで総長3.3m、南側の柱間は西から1.8m、1.3mで総長3.1mを測る。西側の柱間は北から2.3m、1.9m、2.3mで総長6.5mを測る。東側の柱列は北から3本目が不



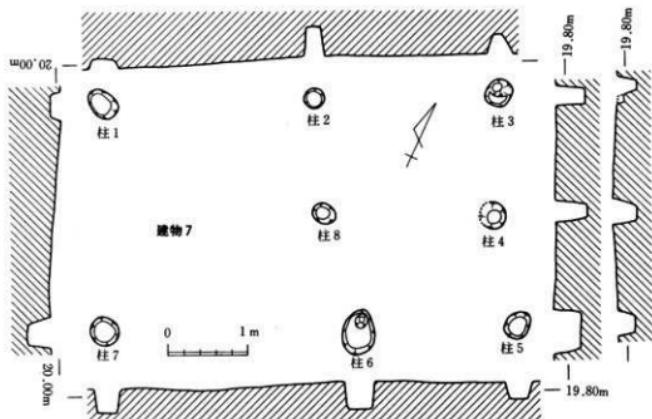
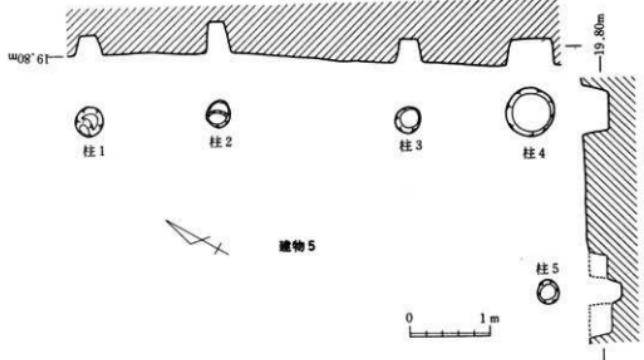
第71図 捏立柱建物 4

明であるが、北側の柱間は 1.8m、総長 6.3m を測る。主軸方向は N26度Wである。それぞれの柱穴は直径25cm～50cmを測る円形で、深さは20cm～65cmを残している。柱穴からは土師器の環・壇・甕が出土している。

419は口縁端がやや外反する壺で、内面には丹らしきものが付着している。420は口縁直径15.5cmを測る土師器壺で、外へ開きながらまっすぐ伸びている。421はヘラ切底の土師器壺である。底部直径7cmを測り、底部付近で段をもっている。422は高台壺直径6.5cm、高台の高さ1.1cmを測る土師器壺である。内面の底は中央部がややくぼんで薄くなっている。他に板状圧痕のある土師器壺の底部がある。淡茶褐色あるいは乳褐色を呈しており、胎土は茶色粘土などを含む良質土である。

(7) 据立柱建物 7

28 I・J区にある柱間が2間×2間の東西方向に長い建物である。総柱建物と思われるが、西側の中央にある柱穴は不明であった。北端の柱間は西から2.6mと2.4mで総長5.0m、中央の東側は2.1m、南端の柱間は西から3.2mと2.0mで総長5.2mある。南北方向には西端



第72図 据立柱建物 5 と 据立柱建物 7

の柱間が総長 2.8m、中央の柱間が北から 1.4m と 1.6m で総長 3.0m、東端の柱間が北から 1.6m と 1.4m で 3.0m を測る。主軸方向は N25度30分Wである。それぞれの柱穴は直径25cm～35cmを測る円形で、深さは10cm～35cmを残している。

柱穴から出土した土器はなく、時期ははっきりしない。

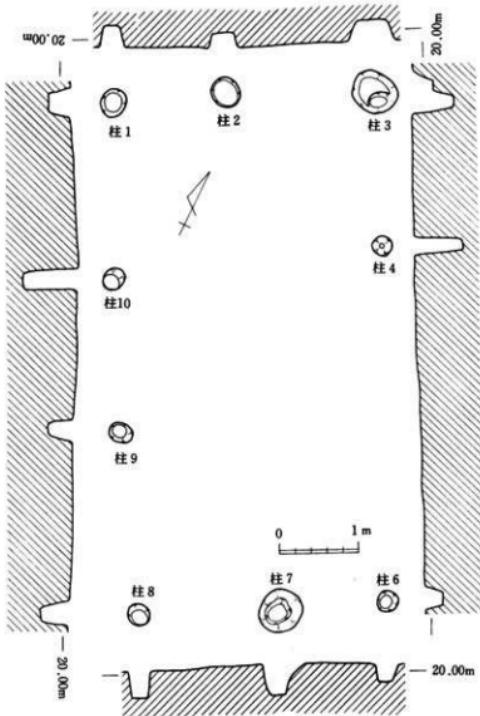
(8) 摺立柱建物 8

18E・F区にある柱間が 2 間 × 2 間の東西方向に長い建物である。東側の中央にある柱穴が不明であった。北側の柱間は西から 2.5m と 2.0m で総長 4.5m、南側の柱間は西から 1.8m と 2.3m で総長 4.2m を測る。西側の柱間は北から 1.7m と 1.7m で総長 3.4m、東側の柱間は総長 2.9m を測る。

主軸方向は N 1 度 30 分 E である。それぞれの柱穴は直径30cm～50cm の円形をしており、深さは15cm～55cmを残している。柱穴からは土師器の环・甕が出土している。

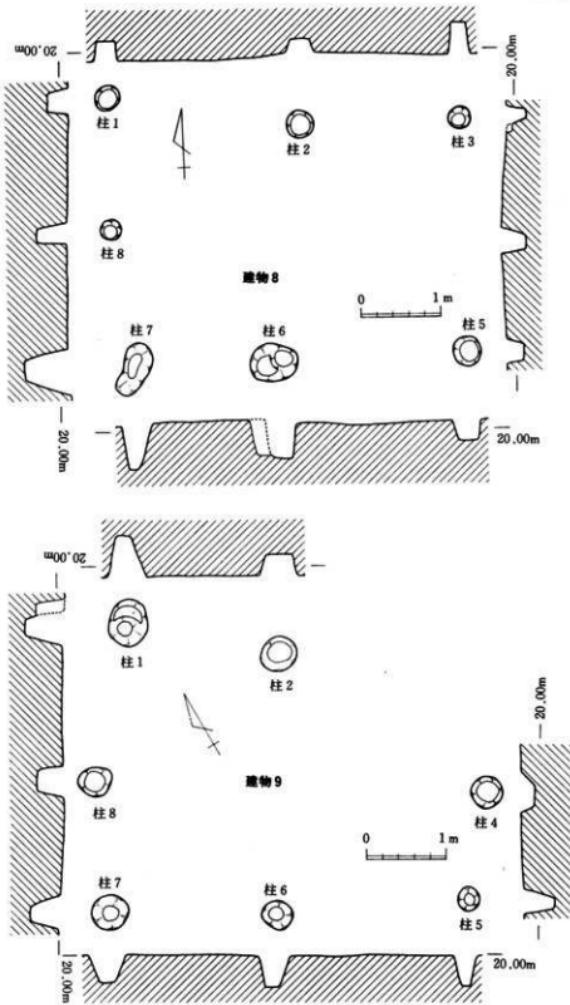
423と425は外へ開きながらまっすぐ伸びる土師器の环である。

425は口縁直径14.5cm 底部直径 9 cm、高さが 3.4cm を測り、底部の切り離しは糸切りである。424は口縁直径が 10cm、底部直径が 8 cm、高さ 1.4cm を測る土師器の皿で、底部の切り離しは糸切りである。つくり方は底部の外側に口縁付近を貼り付け上乗せる作り方をしている。いずれも精製した粘土を用いており焼成はふつうである。



第73図 摺立柱建物 6

III 成岡遺跡の調査



第74図 据立柱建物 8 と 据立柱建物 9

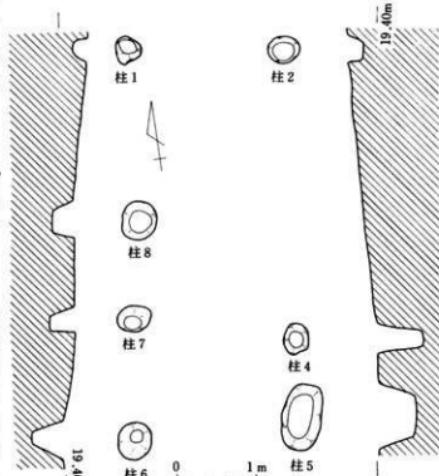
(9) 振立柱建物 9

16・17G・H区にある柱間が2間×2間の建物で、東西方向に長い。北東隅の柱穴は不明である。北側の柱間は1.9m、南側の柱間は西より2.1mと2.4mで総長4.5mある。西側の柱間は北より1.9mと1.7mで総長3.6m、東側の柱間は1.4mである。主軸方向はN30度30分Eを測る。それぞれの柱穴は直径が30cm～45cmあり、深さ25cm～50cmを残している。柱穴より土師器の壺・甕が出土している。

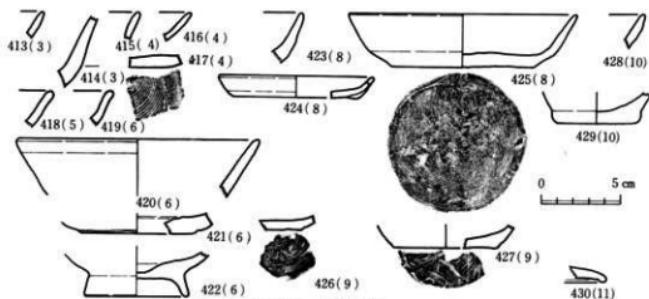
426・427は底部の切離しが糸切りとなる土師器の壺で、427の底部直径は6.5cmを測る。底部近くで段をもっている。

(10) 振立柱建物 10

15・16F区にある東西方向の柱間が1間、南北方向の柱間が3間の南北に長い建物である。東側の北から2番目の柱穴が不明である。北側の柱間は2.0m、南側の柱間も2.0mである。西側の柱間は北から2.2m、1.3m、1.4mで



第75図 振立柱建物10



第76図 振立柱建物の出土土器

総長 4.9m、東側の柱間は南端が 1.2m で総長 4.8m を測る。主軸方向は N 9 度 30 分 E を測る。それぞれの柱穴は直径 35cm～50cm の円形をしているが南東隅の柱穴は長径 85cm、短径 50cm のだ円形をしている。深さは 20cm～60cm を残しておらず、南へくだる傾斜面上につくられている。柱穴内には土師器の环・甕・鉢がある。

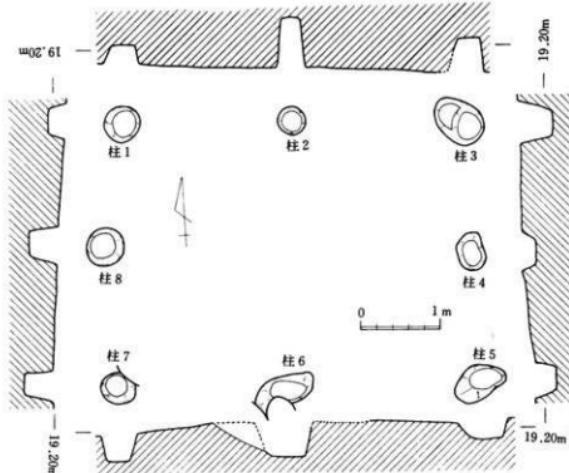
428 は土師器の环口縁部で、外へ開きながらまっすぐのびている。口縁端部近くは外面がややくぼみ、薄くなっている。429 は土師器の环で、底部直径 5.5cm を測る。端部付近でやや外へふくらんでおり、底部の切離しはヘラ切りである。いずれも精製した粘土を使っており、焼成はふつうである。

(1) 挖立柱建物11

15D・E 区にある柱間が 2 間 × 2 間の東西方向に長い建物である。北側の柱間は西から 2.1m と 2.2m で総長 4.3m、南側の柱間は西から 2.1m と 2.4m で総長 4.5m を測る。西側の柱間は北から 1.6m と 1.7m で総長 3.3m、東側の柱間は北から 1.6m と 1.6m で総長 3.2m を測る。主軸方向は N 3 度 30 分 E を測る。それぞれの柱穴は直径 35cm～50cm の円形をしているが、だ円形を呈するものもある。深さは 20cm～60cm を残している。柱穴からは土師器の环・甕、須恵器の环蓋などが出土している。

430 は須恵器の环蓋である。口縁端部が下へ折れ曲がっており、端部は丸くなっている。青灰色を呈し、黒色石粒など割にこまかい土を使っている。焼成は良好である。固化できなかつたが、底部の切離しが糸切りとなる。

土師器の环、内面ヘラケズりの土師器の甕なども出土している。



第77図 挖立柱建物11

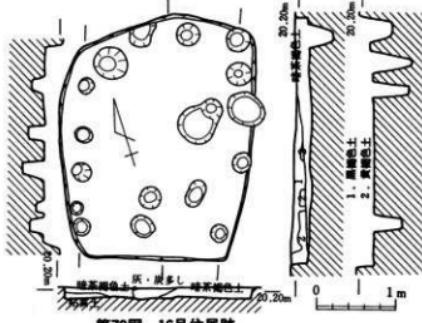
2. 穴住居跡

16基検出された古墳時代の穴住居跡の他に、やや小型の方形穴住居跡が3基あった。この中には遺物はほとんどはないが、土師器・青磁などが含まれているため平安時代末ないしは鎌倉時代のものと思われる。

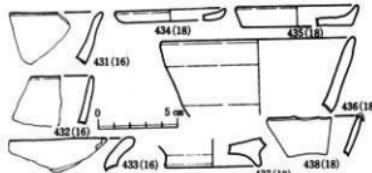
(1) 16号住居跡

18・19H・I区につくられた方形住居跡で、南北方向に3.0m、東西方向に2.4mを測る。深さ約20cmと他の2基に比べ浅い。壁に沿って13の円形ピットがあり、これらがこの住居の柱穴かと思われる。柱穴の規模は次のとおりである。西側が南から直径22cmで深さ（いずれも床面から）15cm、直径16cmで深さ10cm、直径25cmで深さ27cm、直径20cmで深さ20cm、直径20cmで深さ11cmを測る。北側が西から直径41cmで深さ39cm、直径38cmで深さ23cm、直径30cmで深さ29cmを測る。東側が北から直径30cmで深さ27cm、直径30cmで深さ48cm、直径24cmで深さ43cm、直径22cmで深さ41cmを測る。南側の1本は直径28cmで深さ47cmを測る。つまり柱穴の大きさは直径が16cm～41cmである。それぞれの柱間は西側が南から24cm（いずれも心心距離）、46cm、46cm、64cmで総距離180cmである。北側が西から60cm、60cm、60cmで、やや曲がっているために総距離170cmを測る。東側は北から44cm、106cm、96cmで総距離246cmを測る。南側は東から98cm、72cmで総距離170cmを測る。このように心心距離は24cmとくっついているものから長いものは100cmを越えるものまである。こうした柱穴の他に中央に4つのピットがあり、うち2つは前後関係にある。これらが同時期のものか否かははっきりしない。埋土は下から暗茶褐色粘質土、暗茶褐色土、黄褐色土、黒褐色土となっており、黒褐色土の上には炭化材らしきものが検出された。これは南北方向に長いものがあり、それに交叉するように、炭がまじわっていたが全体的に残っていなかった。全容をつかめなかつた。

埋土中に含まれる土器は少なく、破片も小さい。431と432は内面が横方向に研磨され黒くなった内黒土師器塊である。



第78図 16号住居跡



第79図 16号住居跡・18号住居跡出土の土器

432は外面も横方向のヘラミガキで仕上げており、431は横方向のヘラナデである。432は直立口縁であるが、431はやや外へ反っている。433は甕の口縁で強く外反している。外面・内面とも横方向のヘラナデで仕上げている。茶色粘土を多く含む砂質土を用いている。

(2) 17号住居跡

16H区につくられた隅丸方形の住居跡で、南北方向、東西方向ともに2.7mを測る。深さ45cm～55cmと深い。壁に沿って11の柱穴があり、東側と西側および南側の一部には幅20cm、深さ5～8cmの壁帶溝が巡っている。柱穴の規模は次のとおりである。西側が南から直径30cmで深さ25cm、直径30cmで深さ30cm、直径30cmで深さ35cm、北側が西から直径25cmで深さ40cm、直径20cmで深さ26cm、直径25cmで深さ40cm、東側が北から直径30cmで深さ30cm、直径20cmで深さ30cm、南側が東から直径20cmで深さ40cm、直径25cmで深さ45cm、直径30cmで深さ30cmを測る。柱間は西側

が南から

70cm、70

cmで総長

140cm、

北側が西

から35cm、

110cm、

25cmで総

長170cm、

東側が北

から80cm、

80cmで総

長160cm、

南側が東

より30cm、

50cm、60

cm、40cm

で総長180

cmである。

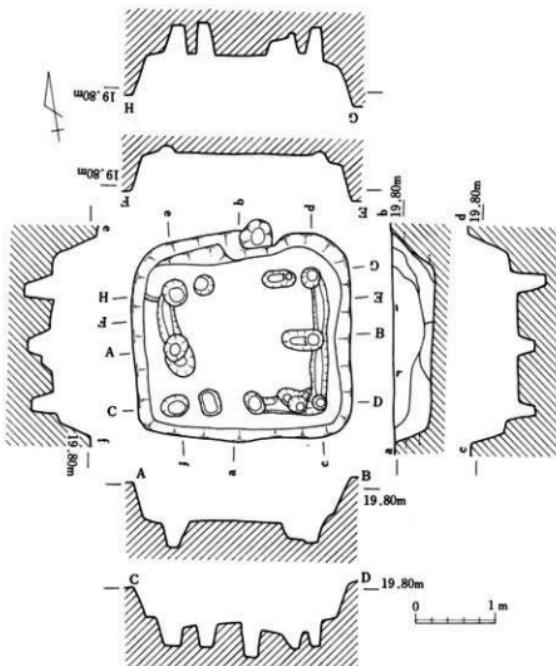
埋土よ

り少量の

土器が出

土してい

る。



第80図 17号住居跡

(3) 18号住居跡

15G・H区にある南北方向 2.4m、東西方向 3.2m を測る隅丸方形の住居跡で、深さ50cm～70cmと深い。壁に沿って幅20cm、深さ10cmの溝が巡っており、四隅には直径20～25cm、深さ35cm～45cmの柱穴がある。西側にはその間に直径17cm、深さ30cmの柱穴が2本ある。西側の柱間は南から45cm、50cm、75cmで総長 170cmを測る。中に炉跡など検出されなかったが、南東側の少し離れた所では地表面が赤く焼けており、火路と思われる。

埋土中にいくらかの土器が含まれていた。434・435は土師器の皿で、434が口縁直径 7 cm,

底部直径 5.5cm

深さ 0.7cm, 435

が口縁直径 7.5

cm, 底部直径 7

cm、深さ 1.2cm

を測る。ともに

底部の切離しは

糸切りである。

436と437は内

黒土師器の塊で

口縁直径12cm、

高台直径 6 cmを

測り、外へ開き

ながらまっすぐ

口縁部へ立ちあ

がる。外面のナ

デもていねいに

ヘラミガキに近

い。438は口縁

端部の釉をかき

取った白磁塊で

ある。縁がかっ

た灰色釉がかか

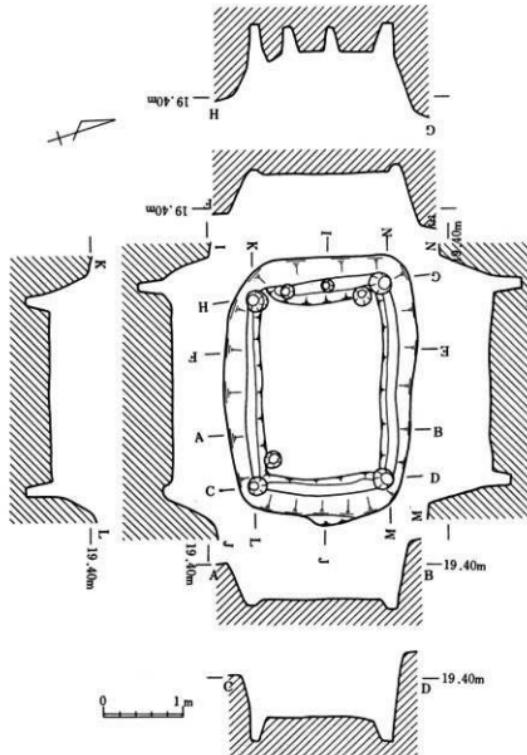
っており、灰白

色土を使用して

いる。内面に1

条の沈線が巡っ

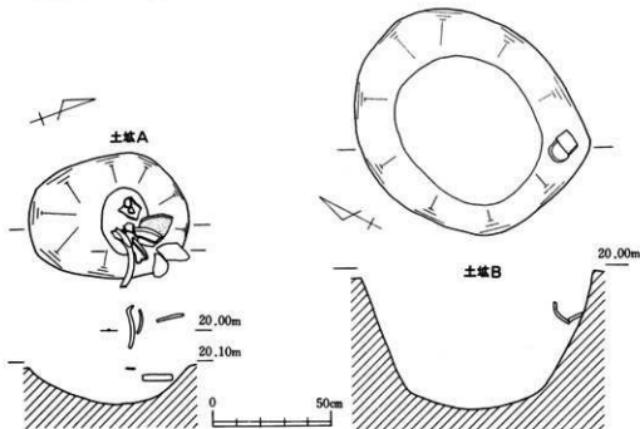
ている。



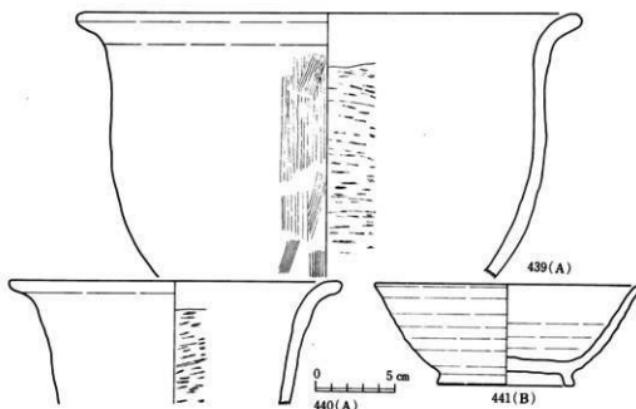
第81図 18号住居跡

3. 土 塚

土器が多く含んだり、深くしっかりした土塚をとりあげた。なお、土塚番号は整理番号と、



第82図 土塚Aと土塚B



第83図 土塚A・土塚B出土の土器

他に各地区の番号があるので、これを括弧書きで付け加えた。

(1) 土塙A (30F区土塙1)

30F区で検出された70cm×50cmのだ円形土塙である。ゆるやかな傾斜で底に達しており、深さ15cmと浅い。北側に石とともに甕が2個体分集積しており、口縁部破片1点は立位だった。

439は口縁直径32cm、高さ約20cmを測る丸底の甕である。口縁部は外反しており、丸みをもった器形を呈している。整形は、外面が縱あるいは左下がり方向のハケナデ、内面の頸部より上が横方向のヘラナデ、下が横方向のヘラケズリである。440は口縁直径21cmを測る小型の甕で、口縁部は外反しており、底部へはまっすぐ伸びている。整形は外面と内面の頸部より上が横方向のヘラナデ、内面の頸部より下が横方向のヘラケズリである。焼成はともに良好で、胎土は石英・黒雲母粒を多量に含む砂質土である。内面はともに頸部付近まで、こげ目が付いている。

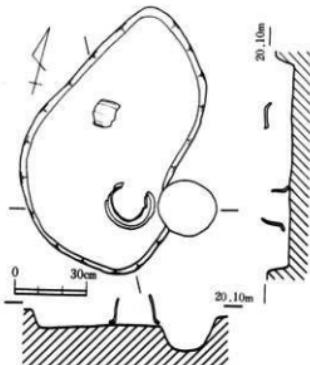
(2) 土塙B (30G区土塙1)

30G区で検出された100cm×90cmの略円形土塙で、深さ55cmと割合に深く残っている。南西隅付近の中位に土師器の塊があった。

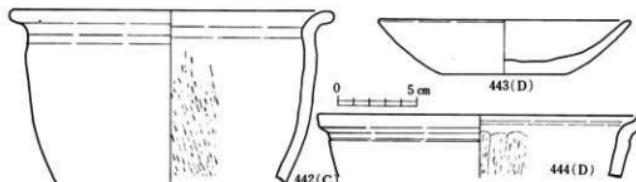
塊は体部の骨程を欠いているが、口縁部から高台まで捕った完形品である。口縁直径17cm、高台端径8.5cm、高さ6.4cmを測る。体部は丸みをもって立ちあがり、端部付近でやや外反する。高台断面はしっかりと矩形を呈している。环部底の切り離しはヘラ切りである。白色石粒・黒雲母粒・石英粒などの微石粒を多く含む砂質土を用い、焼成は良好である。淡茶褐色を呈しているが、外面は二次的に火を受けてやや赤く変色し、ススが付着している。

(3) 土塙C (28G区土塙1)

28G区で検出された110cm×70cmのだ円形土



第84図 土塙C



第85図 土塙C・土塙D出土の土器

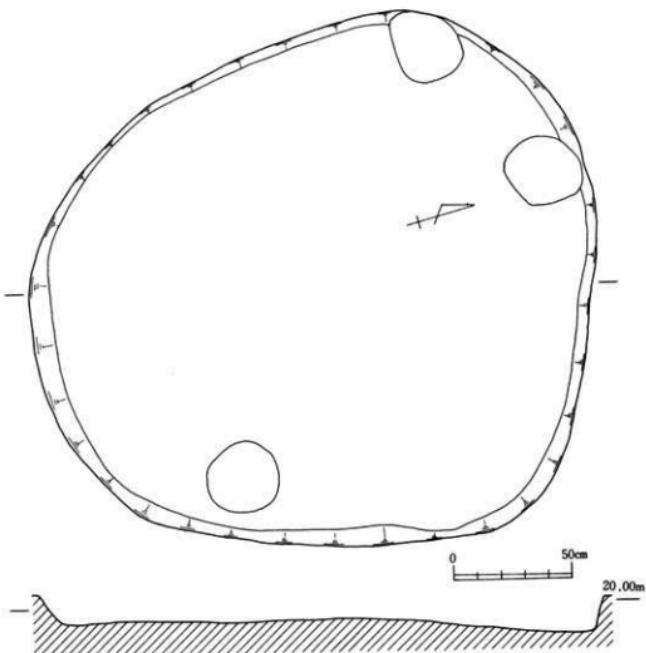
坡で、深さは10cm残っている。床面近くに甕が逆位で置かれているが、底部はない。他に須恵器の甕、土師器の壺などの小破片がある。

甕は口縁直径21cmと小型で、長胴形の器形をしている。口縁部は強く外反する。整形は外面と、内面の頸部より上が横方向のヘラナデ、内面の頸部以下が縱方向のヘラケズリである。胎土は石英などの石粒を多く含む砂質土で、焼成は良好である。茶褐色を呈しているが、外面は部分的に赤みをおびたり、紫がかったりしている。

(4) 土塙D (22K区土塙1)

22K区で検出された 250m × 220m の略円形土塙である。深さは10~20cmと浅い。土師器の壺と甕が出土している。

443は口縁直径16cm、底部直径8cm、高さ 3.4cmの壺である。底部から口縁部に向かっては



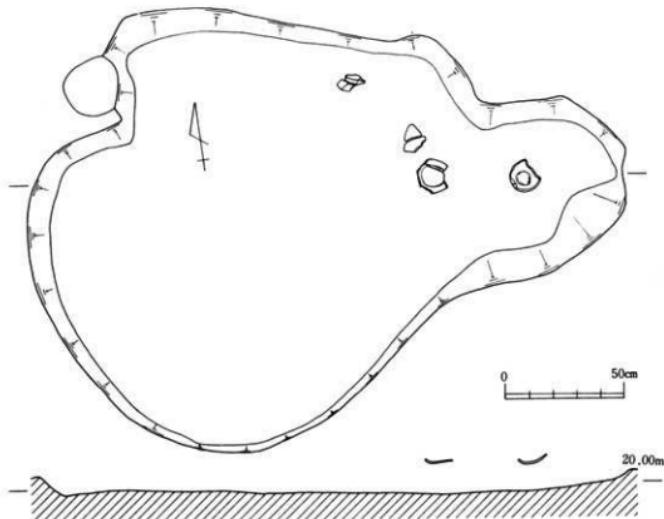
第86図 土塙D

直線的に広がり、底部の切離しはヘラ切りである。茶色の粘土など致密な土を用い、焼成は良好である。444は口縁直径21cmの小型甕で、端部が直立する二重口縁である。頭部には一条の凹線が巡っている。調整は外面と、内面の頸部から上が横方向のヘラナデ、内面の頸部から下が縦方向のヘラケズリである。茶色粘土や石英粒など割と細かい土を用いている。

(5) 土壙E (21J区土壙I)

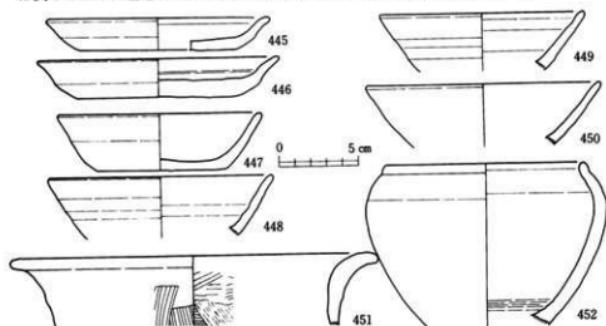
21I・J区で検出された 200cm×190cmの略円形土壙で、さらに東へ60cmほど突き出しがある。深さは約10cmと浅い。東側に土師器の皿と环、須恵器の壺がある。

445・446は土師器の皿で、445が口縁直径14cm、底部直径10cm、高さ2cm、446が口縁直径15cm、底部直径10cm、高さ2.5cmを測る。ともに底部切離しはヘラ切りである。口縁部が外反する。447～450は土師器の环で、口縁直径が13～14cm、底部直径8cm、高さ3.5cmを測る。体部は外へ開きながらまっすぐ伸びており、底部の切り離しはヘラ切りである。450は内外とも研磨された土師器の环で、口縁直径15cmを測る。451は土師器の甕で、口縁直径23cmを測る。外面の頸部より上が横方向のヘラナデ、下が縦方向のあらいハケナデ、内面の頸部より上が横方向のヘラナデとあらいハケナデ、下が縦方向のヘラケズリで仕上げる。皿・环が割合に細かな砂質土を用いているのに対し、甕は石英・長石などの石粒を多く含む粗砂質土を用いている。

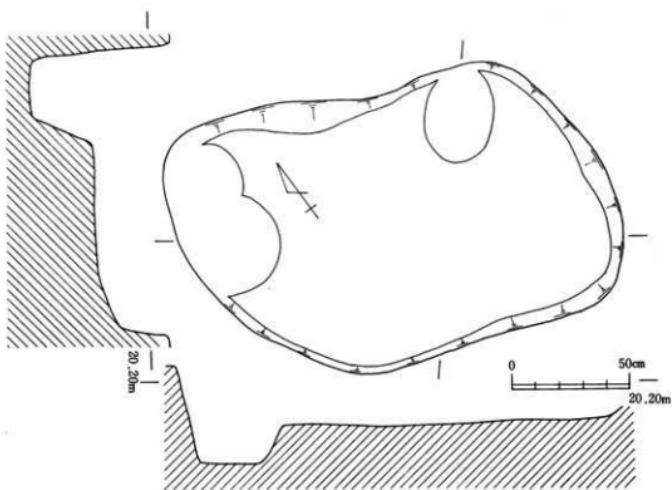


第87図 土壙E

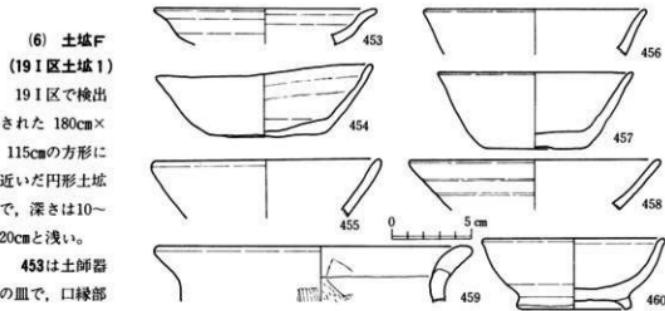
452は須恵器の有蓋壺で、口縁直径12.5cmを測り、肩部に最大直径がある。外面・内面ともにていねいなナデ仕上げであるが、外面の底部付近には輜方向のヘラケズリがみられる。器内面は黄みがかった色をしているが、表面は赤みがかった茶褐色を呈している。



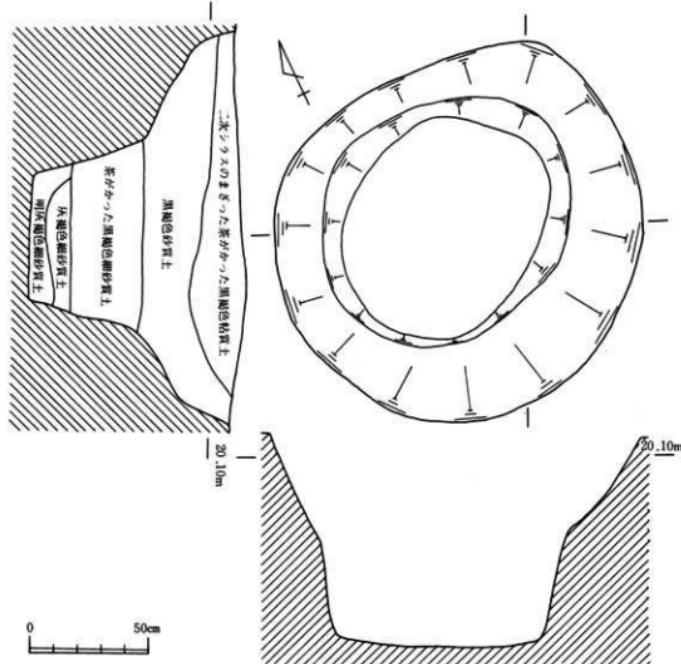
第88図 土塙E出土の土器



第89図 土塙F



第90図 土塚F 出土の土器



縁部直径は14cmである。454～458は土師器の环で、454は口縁直径12cm、底部直径6cm、高さ5cmと深い。他は口縁直径が14～16cm、底部直径8cm、高さ4cmを測る。底部切り離しはヘラ切りである。459は土師器の甕で、口縁直径19cmを測る。整形は口縁部付近が内外とも横方向のヘラナデ、頸部以下が外面は縱方向のハケナデ、内面は縱方向のヘラケズリである。口縁近くに積みあげの痕跡がみられる。460は内面をていねいに研磨した土師器の環である。口縁直径12.5cm、高台直径7cm、高さ4.5cmを測り、口縁部がやや外反する。

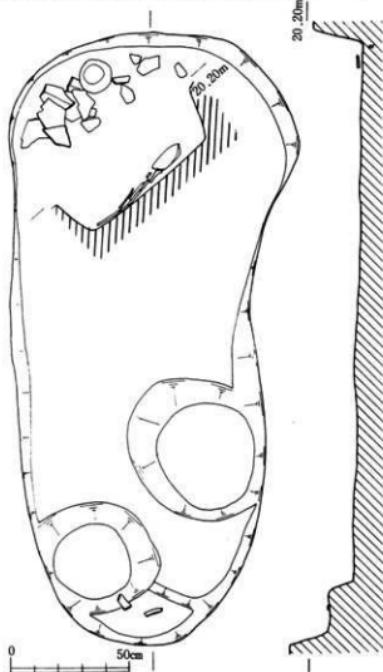
(7) 土塙G (19J区土塙1)

19J区で検出された直径155cmの円形土塙である。中ほどに段があり、下半部は直径100cmほどの小円となる。深さは1mあり、灰褐色あるいは黒褐色を基調とした5つの層に分かれる。溝状造構2が埋没後につくられたものである。底部の切り離しが糸切りとなる土師器の环や、土師器の甕などが少量出土したが、國化できるものはなかった。

(8) 土塙H (19K区土塙1)

18・19K区で検出された260cm×100cmの長だ円形土塙である。北西隅付近で段違いになっており、この付近は深さ20cmほどであるが、他はそれより10cmほど下がっている。東隅床面上に土師器の环と甕が集積している。

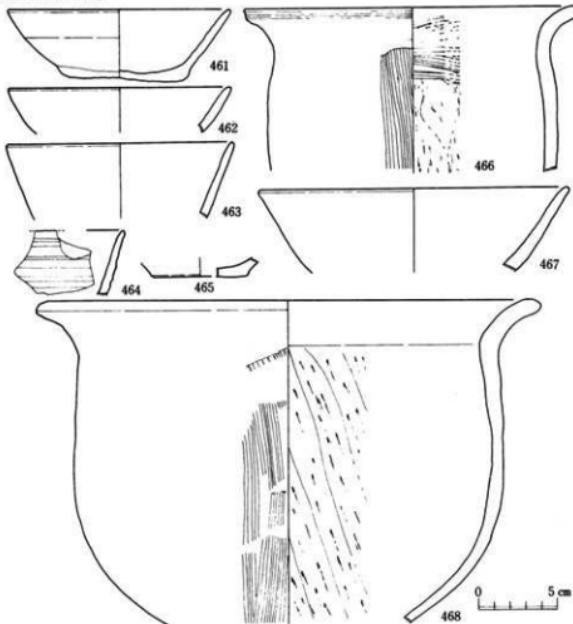
461～465は土師器の环である。口縁直径14cm前後、底部直径6～8cm、高さ4.5cmを測る。直線的に開きながら口縁部へ向かうが、底部付近ではやや外へ張り出している。462はやや丸みをもった器形をしており、461は内面の口縁付近が黒く変化している。底部の切離しはヘラ切りである。463が白っぽい色を呈している他は、黄色っぽい淡茶褐色を呈している。茶色粘土や石英粒を多く含む致密な砂質土を用いている。466と468は土師器の甕である。466は口縁直径21cmと小型である。口縁部は外反し、端部を一条の凹線が巡る。



第92図 土塙H

外面は頸部から上が横方向のヘラナデ、下が縦方向のあらいハケナデで仕上げる。内面は頸部より上が横方向のあらいハケナデであるが、口縁部周辺はその上をヘラでナデている。頸部より下はヘラケズリである。**468**は口縁直径32cm、高さ約22cmの大型甕である。口縁部は外反しており、やや安定した丸底である。調整は、頸部から上が内・外面とも横方向のヘラナデ、外面の頸部から下が縦方向のハケナデのあと、部分的に横方向のヘラナデ、内面の頸部から下が縦方向のヘラケズリである。内面の下半部には厚いこげつきがみられる。甕の焼成は両方とも良好で、**466**が黄色っぽい淡茶褐色を呈しているのに対し、**468**は茶褐色をしている。胎土には石英や黒雲母などの細石粒を多く含んでいる。**467**は内黒土師器の壺で、口縁直径19.5cmを測る。開きながらまっすぐ口縁部へ向かうが、端部付近でわずかに外反する。外面は横方向のていねいなナデ仕上げ、内面は横方向のヘラ研磨で仕上げ、光沢を呈している。

この他に、固化できなかったものとして、土師器の鉢、須恵器の壺、土師質のふいご羽口などが出土している。



第93図 土塚H出土の土器

(9) 土塙 I (18J区土塙 1)

18 J 区で検出された直径約80cmの円形土塙であるが、東側を溝状遺構2によって削られている。深さ30cmほどを残しており、埋土途中に土師器の甕や内黒土師器の壇などが出土している。

469は、口縁部へまっすぐ伸びる土師器の环である。470~472は内黒土師器の壇である。体部は底部より口縁部へ向かってまっすぐ伸びており、内面は黒く光沢を呈している。底部の切り離しはヘラ切りであり、高台端の内面は凹線が巡っている。口縁直径15cm、

高台直径 7.8cm、高さ

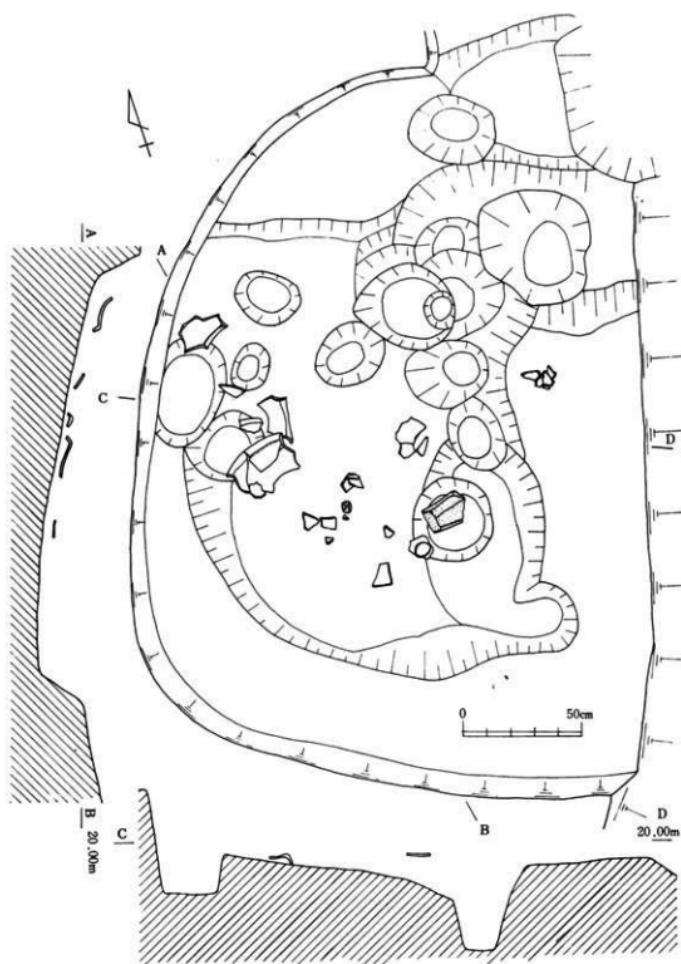
5.1cmを測る。外面は横方向のていねいなナデ、内面は横方向のヘラ研磨で仕上げている。

473は須恵器の甕で、外面が平行線文叩き、内面が同心円文叩きである。474と475は土師器の甕である。474は口縁直径28cmを測る。口縁部が厚くなり、端部は直に近く立ちあがる。頸部がくぼみ、丸みをもって胴部に至る。

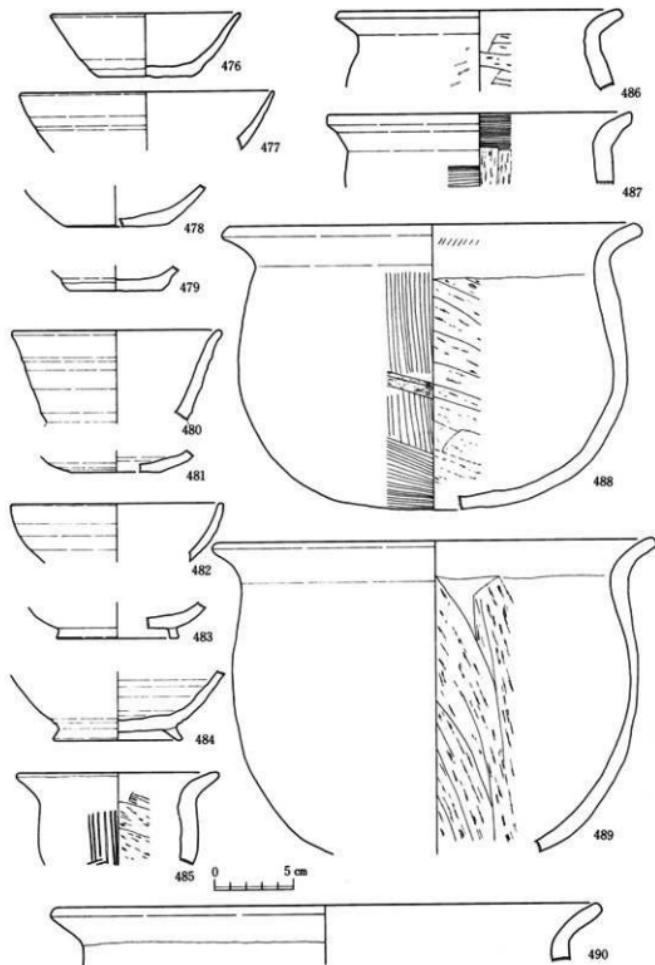
調整は外面の頸部より上が横方向のヘラナデ、下が横方向のハケナデで仕上げる。内面は頸部より上が横方向のあらいハケナデ、下が縦方向のヘラケズリで仕上げる。475は口縁直径30cmを測るもので、口縁部がくの字状に外反する。調整は頸部より上が内外ともヘラナデ、頸部より下が外面は縦方向のハケナデ、内面は右下がり方向のヘラケズリである。胎土には0.1~4mm大の石英粒や黒雲母粒など細石粒を多く含む砂質土である。茶褐色を呈する。

(10) 土塙 J (17J区土塙 1)

17・18 I・J 区で検出された円形土塙であるが、東半分を溝状遺構2によって削られている。



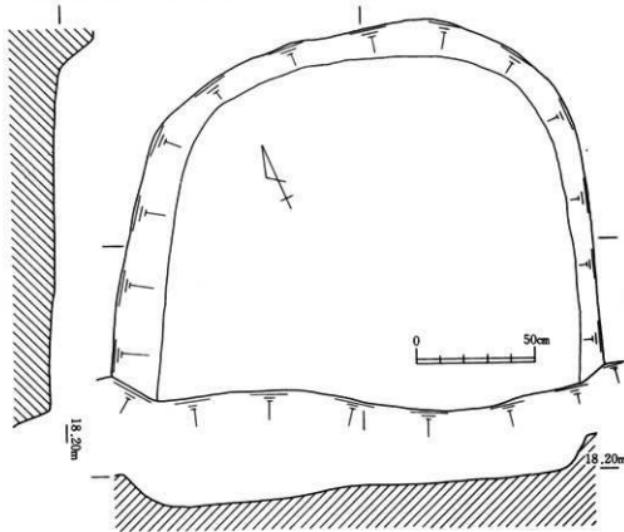
第96図 土塚J



第97図 土塙J出土の土器

現存で、南北に3.1m、東西に2.4mある。基部は凹凸が激しく、深さは10cm～50cmある。床面近くに土師器の壺・壇・壠などが散在していた。

476～479は土師器の壺である。開きながらまっすぐ伸び、底部の切り離しはヘラ切りである。口縁直径12cm、底部直径6cm、高さ4cmを測るものと、口縁直径16cmとやや大型のものとがある。底部へ移る手前でややくぼみ、まるみをもって底部へ移っている。他の3点が精製土を用い、明茶褐色を呈するのに対し、476は石英・長石など0.1～4mm大の細石粒を多く含む土を用い、茶褐色を呈している。480と484は土師器の壺で、口縁直径13cmを測る。立ちあがりの角度は強く、外側の凹凸が目立つ。底部近くでややくぼむのは壺と同じである。高台は外へ強く張り出し、端部直径8cmを測る。481～483は黒色土器の壺と壺で、他の2点が内面のみ黒いに対して、482は外側の口縁付近は黒くしている。内外ともヘラでていねいに研磨しており、黒みは光沢を呈している。壺は丸みをおびた器形をして、高台が付く。壺は外へまっすぐ伸びており、底部に比べて相当に広い口縁となるようである。485～490は土師器の壺で口縁直径が13cmのものから35cmのものまで各種ある。内面の頸部から下はすべて縱あるいは横または斜方向のヘラケズリで仕上げる。また、外側・内面とも頸部から上はヘラによる横方向のナデ整形がされるが、内面整形は485がヘラナデの前にあらいハケナデがされ、487は横方



第98図 土壺K

向のハケナデのみである。外面の頸部から下は 485 と 488 が縦方向、487 が横方向のハケナデ、486 はハケナデのあとヘラナデ、489 はヘラナデで仕上げている。488 は完形品で、口縁直径 26.5cm、高さ 18cm を測る丸底のものである。489 は底部を欠いているが、口縁直径 28cm、高さ約 20cm を測る。他にオリーブ色の釉がかった青磁壺がある。

(1) 土壙 K (12G 区土壙 1)

12G・H 区にある隅丸方形の土壙であるが、南半分は最近の農道によって削除されている。南北方向に長く、現存長は 1.6m、東西方向に 2.1m ある。深さは約 15cm しか残っていない。

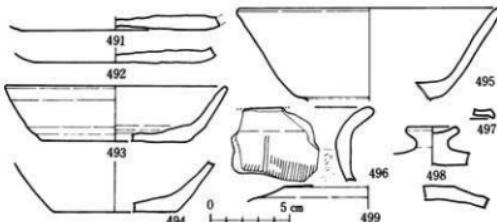
土師器の皿、環、壺、甕、蓋と須恵器の环蓋が出土している。皿（491・492）は底部のみで切り離しはヘラ切りである。直径 10~11cm を測る。493 と 494 は环で、これも底部切り離しはヘラ切りである。口縁直径 14cm、底部直径 8~9cm、深さ 3.5cm を測る。立ちあがりは直線的で外へ広がる。壺（495）も外へまっすぐ開いており、口縁直径 16.5cm、环部の深さ 4.7cm を測る。蓋（498・499）の天井部は平坦で、中央に天井のくぼんだ扁平つまみがある。天井部のみはヘラケズリのままだが、周辺はていねいにナデている。甕（496）はくの字状に外反しており、頸部よ

り上は内外ともへ
ラナデ、下は外面
が縦方向のハケナ
デ、内面が横方向
のヘラケズリで仕
上げる。他の器種
が石英や茶色粘土
など細かい土を使
っているのに対し、

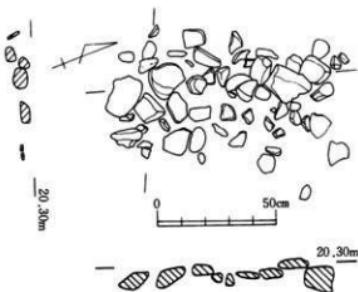
甕は土がやや粗い。焼成はどの器種も良好で、茶褐色あるいは淡茶褐色を呈している。497 は須恵器の环蓋で、端部が下に端折られている。白色石粒を多く含む細かい胎土で灰褐色を呈する。

4. 集石遺構

17J 区で 1m × 0.7m の範囲に集石した遺構が検出された。こぶし大から人頭大まで色々の大きさの石が 10cm ほどの厚さに堆積している。中には土師器壺、内黒土師器壺、須恵器甕なども含まれていた。



第99図 土壙K出土の土器



第100図 集石遺構

5. 溝状遺構

2本の溝状遺構を検出しているが、1本（溝状遺構1）の残存状況はよくない。

(1) 溝状遺構1

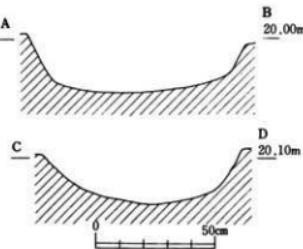
21C区から22E区に向かって、東西方向に流れる溝状遺構で、埋土は黒褐色土の單一層である。幅が約1m、深さ約20cmを測る。

出土遺物は少なく、図化できたのは土師器のみである。500は底部切り離しがヘラによる境で、底部に段をつけて高くしている。501～503は底部切り離しが糸による皿で、口縁直径10.5cm、底部直径6.5cm、高さ2cmを測る。

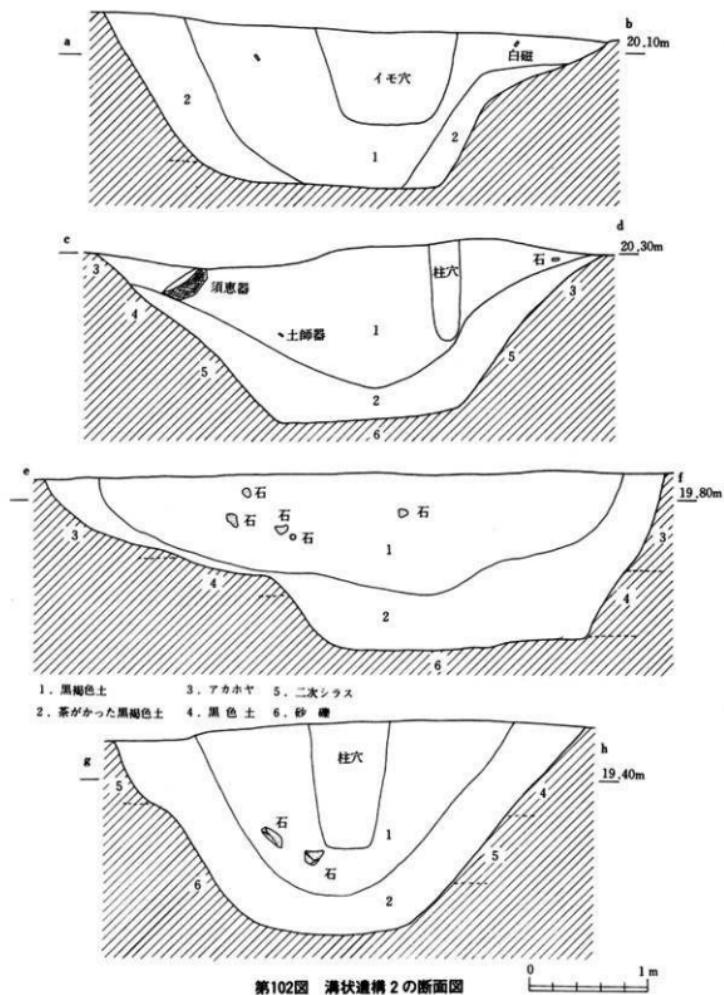
(2) 溝状遺構2

12J区からJ区をやや蛇行しながら、まっすぐ北上し、23J区から左へ曲がりながら25E区へ続いている。底面が平たい台形状の断面をしており、南側では2m近くの深さを残しているが、北側では江戸時代の溝などによって削平を受け、浅い。埋土は2層に分かれ、下部は茶がかかった黒褐色土、上部は黒褐色土である。溝の底は20区あたりが最高位で、両側に下がっており、南側では砂礫層を掘り込んでいる。北西側は未買収地へのびており、南側は段下げによって消失している。埋土中には多くの遺物（土師器・黒色土器・須恵器・磁器・ふいご口・石鍋など）が含まれている。

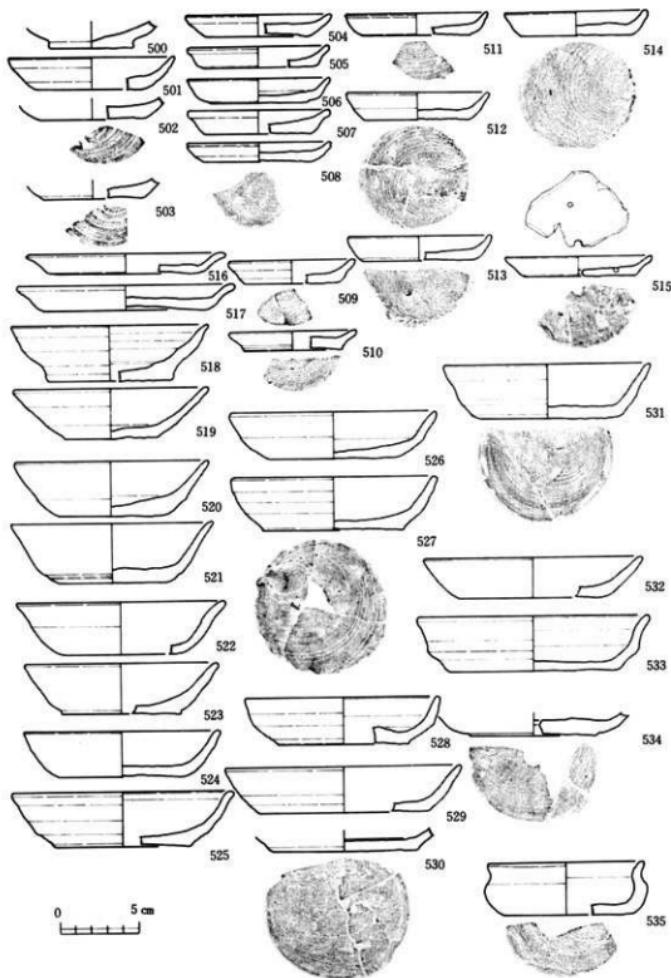
土師器には皿・壺・塊・瓶・鉢・壺・焼塙壺・甕がある。皿には小皿と大皿がある。小皿（504～515）は口縁直径が8cmのものと9cmのものとがあるが、底部切り離しはすべて糸切りである。底部直径は8cmのものが6cm、9cmのものが7cmで、高さは1.5cm前後を測る。口縁端部に沈線をもつものもある。515は底部に2個の小孔があり、1個は貫通しているが、1個は貫通していない。大皿（516・517）は口縁直径が12.5cm～13.5cm、高さ1.3cm～1.6cm、底部直径10cm前後を測る。底部切り離しはヘラ切りである。壺（518～535）の底部切り離しにはヘラ切りのものと、糸切りのものとがある。ヘラ切りのものは口縁直径12cm、高さ3cm～3.8cm、底部直径6～8cmを測り、器形は丸みをもつものと、開きながらまっすぐ伸びるものとがある。底部はまっすぐ移るものと、段をもつものとがある。糸切りのものは口縁直径15cm高さ2.9cm～3.5cm、底部直径10.5cmのものと、口縁直径12～14cm、高さ2.5～3.5cm、底部直径7.5cm～9cmのものに分けられる。器形は底からまっすぐのびているが、外に段をもつものとモルタルのものとがある。内底面はロクロ引きのあとハケナデをするものが多い。534は中央付近に2個の貫通孔がある。535は口縁直径10cm、高さ3.3cm、底部直径8cmを測るくの字状に外反する壺である。塊（536・547）はまっすぐ開く器形をしており、底部に穿孔のあるものもある。蓋（537）は須恵器と類似した器形をしており、端部は下へ折れている。こしき（538）は底が丸くあいている。鉢（539）は口縁がまっすぐ開いており、内面の下部はヘラ



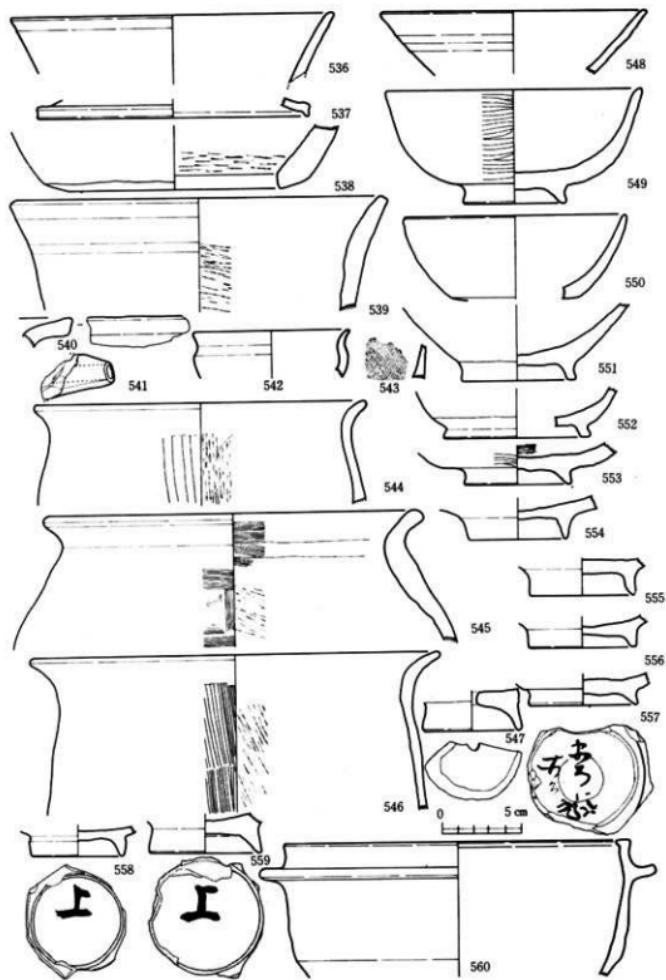
第101図 溝状遺構1の断面図



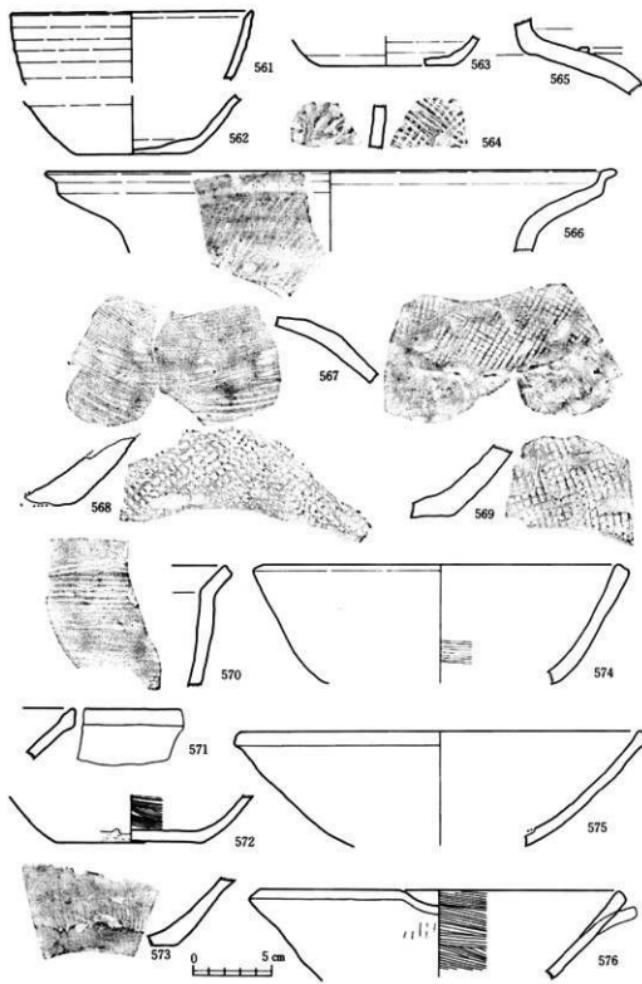
第102図 溝状遺構 2 の断面図



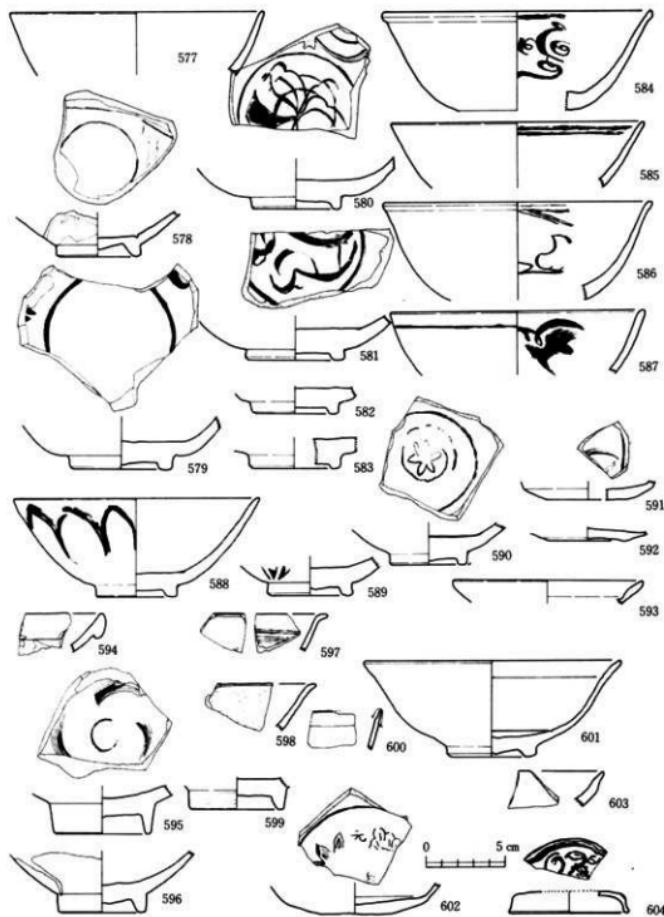
第103図 溝状造構1と溝状造構2出土の土器(1)(土師器)



第104図 溝状造構2出土の土器(2)(土師器・黒色土器)



第105図 溝状遺構2出土の土器(3)(須恵器)



第106図 溝状遺構 2 出土の土器 (4) (磁器)

ケズリで仕上げる。541は注口、543は内面に布目のついた焼塙壺である。542は口縁直径が10cmの小甕である。甕（540・544～546）は口縁直径が21cm～26cmと大小あり、内面はヘラケズリで仕上げる。

黒色土器には塊と鍋がある。塊（548～559）はすべて高台の付く内黒土師器である。底部から口縁部へまっすぐ立ちあがるもの（548・551）と、やや内弯するもの（549・550・552・553）とがある。549は口縁直径16cm、高さ7.2cm、高台直径6.5cmを測る完形品である。高台は外へ開くもの、まっすぐ立つもの、断面矩形のものなどがある。557～559は外底部に墨書きがみられる。557は5字以上の字が見れるが、意味不明である。558と559は「上」と同じような字体で書かれている。560は瓦器風の鍋で、断面矩形のつばが一周している。

須恵器は环身・壺・甕・鉢がある。环身（561～563）は茶褐色を呈する鉄分の多いもの、軟質で緋だき様のものがあるもの、砂質のものがある。壺（565）は肩部に断面矩形の突帶が付く。甕には堅い焼きのもの（564・566）と軟質のもの（567～569）とがある。566は直径36cmと大型の口縁であり、564の内面タタキは車輪文を残している。軟質のものは内面がハケナデ、外面が格子タタキで仕上げられる。鉢（570～576）は口縁がくの字状に曲がるものと、まっすぐ伸びるものがある。571と575は端部が玉縁状を呈し、暗灰青色である。576は片口である。ほとんどがヘラナデで仕上げるが、ハケナデのものやハケ目の残るものもある。

青磁は塊と皿がある。塊は越州窯系のもの（577）、同安窯系のもの（578）、竜泉窯系のものがあり、竜泉窯系のものは外面が無文のもの（579～587）と蓮花文のもの（588～590）がある。590は内底部に花のスタンプ文がある。皿も同安窯系のもの（591・592）と竜泉窯系のもの（593）がある。

白磁にも塊と皿がある。塊には玉縁口縁のもの（594）、端反り口縁のもの（595～599）、口はげ口縁のもの（600・601）とがある。595と597は内面に備書き文がみられる。602は皿で、内底部に花文と「元」というスタンプ文がみられる。

603は天目の小塊、604は天井部に草花文のある稜花蓋である。

605はふいご口、S22～24は石鍋である。23は窓部と円孔がみられる。

これらはいくらか9世紀頃のものも含まれているが、多くは12世紀のものと13世紀のものとに分けられる。溝状造構は、この2時期にわたって引き続き、使用されたものと思われる。

第107図 溝状造構2出土の土製品・石製品

第7表 溝状遺構1・2出土の遺物出土地区表

図番	種類	区	図番	種類	区	図番	種類	区	
500	土師器塊	22E	537	土師器蓋	27J	574	須恵器鉢	14J	
501	※ 盆	*	538	※ 蓋	21J	575	※	20J	
502	※	*	539	※ 鉢	22J	576	※	18J	
503	※	*	22E	540	※ 豆	17J	577	青磁塊	15J
504	※	*	13J	541	※ 注口	20J	578	※	23J
505	※	*	14J	542	※ 小甕	15J	579	※	15J
506	※	*	16J	543	※ 焼塙壺	21J	580	※	21J
507	※	*	14J	544	※ 豆	14J	581	※	15J
508	※	*	18J	545	※	17J	582	※	14J
509	※	*	15J	546	※	19J	583	※	※
510	※	*	17J	547	※ 塊	16J	584	※	15J
511	※	*	15J	548	内黒土師器塊	19J	585	※	※
512	※	*	14J	549	※	14J	586	※	※
513	※	*	*	550	※	10-13 -16J	587	※	21J
514	※	*	18J	551	※		588	※	14J
515	※	*	16J	552	※	17J	589	※	※
516	※	*	17J	553	※	21J	590	※	13J
517	※	*	23J	554	※	13J	591	※ 盆	23J
518	※	坏	19J	555	※	※	592	※	
519	※	*	18J	556	※	21J	593	※	21J
520	※	*	22J	557	※	15J	594	白磁塊	15J
521	※	*	23J	558	※	13J	595	※	23J
522	※	*	16I	559	※	15J	596	※	21J
523	※	*	13J	560	瓦器鍋	*	597	※	23J
524	※	*	*	561	須恵器坏	13J	598	※	13J
525	※	*	16J	562	※	19J	599	※	21J
526	※	*	15J	563	※	22J	600	※	16J
527	※	*	16J	564	※ 豆	16J	601	※	17J
528	※	*	17I	565	※ 壺	15J	602	※ 盆	23J
529	※	*	16I	566	※ 豆	18J	603	天目	*
530	※	*	13J	567	※	16- 19G	604	青白磁蓋	21J
531	※	*	16J	568	※	18J	605	ふいご口	18J
532	※	*	13J	569	※	15J	S22	石鍋	16J
533	※	*		570	※ 鉢	13J	S23	*	13J
534	※	*	13J	571	※	*	S24	*	18J
535	※	*		572	※	19J			
536	*	塊	19J	573	※	15J			

6. 柱穴出土の遺物

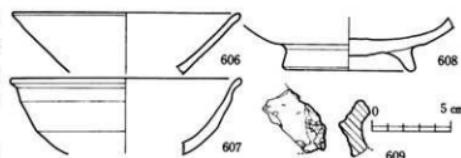
多くの柱穴が検出されたが、建物としてまとまらなかったものから多くの遺物が出土した。ここではそれらの中から主なものを紹介したい。

内黒土師器には環（606）と壺（607・608）がある。环は口縁直径12cmを測り、まっすぐ外へ開いている。壺は丸みのある器形をしており、口縁部は端部が外反する。

609はふいご口の端部で鉄が溶けている。

土師器は皿・环・壺・鉢・甕がある。皿には皿切り底の小皿と、ヘラ切り底の大皿（619）がある。皿にも直径が8cmのものの（610～612）、9cmのもの（613・614）、10cmのもの（615）がある。环はすべてヘラ切り底で、口縁直径10cmの小さいもの（616・617）から11cmのもの（618）、13cmのもの（620～622）、14～15cmのもの（623・624）まである。器形は開きながらまっすぐ伸びるもの、丸みをもつものとがある。壺にも色々ある。627は口縁直径11cmと小さいが、深さ5cmと深い。628は底部が高く切り出され、充実高台になっていて。629は口縁直径15.5cmと大きいが、深さは5cm位である。630は口縁直径14.5cm、底部直径7.5cm、高さ5.3cmを測る完品形で、口縁部へまっすぐ伸びている。鉢は内弯するマリ形のもの（631）、やや内弯ぎみに立ちあがるもの（632）、まっすぐ伸びるもの（633）がある。632は外面・内面とも調整が雑で、ヘラケズリあるいは粗いナデで仕上げている。633は外面の口縁部付近に一条の沈線が巡っている。甕は両者とも外へ強く反っている器形である。634は口縁直径29cmを測る長胴形のもので、内面の頸部から下はヘラケズリで仕上げている。635は口縁直径33cmとやや大形である。

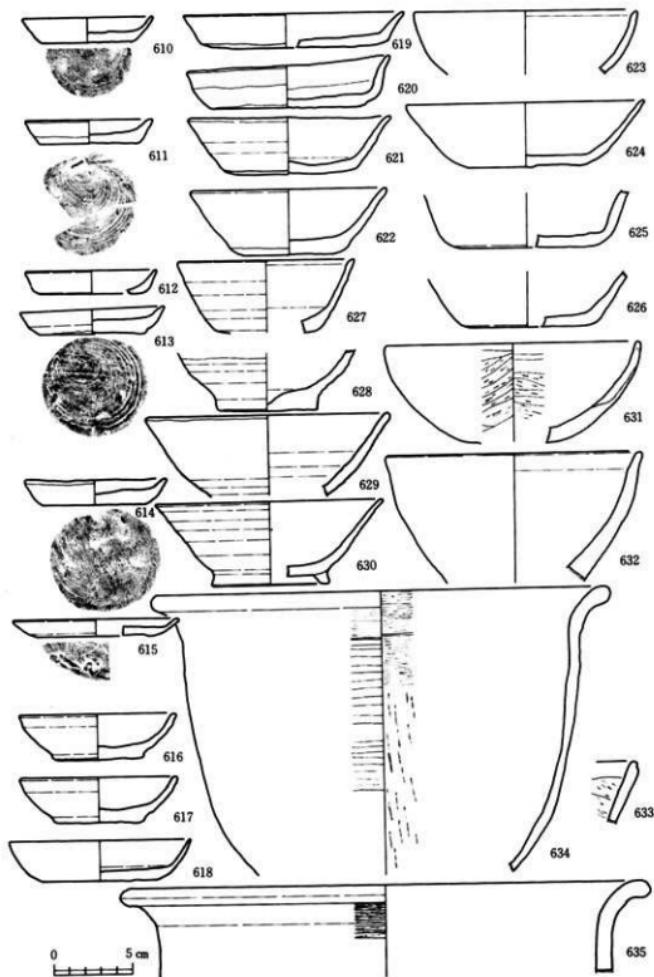
これらの遺物は器種ごとにいくつかの器形があり、数時期のものも含んでいるが、大ざっぱには平安時代～鎌倉時代のものといってよかろう。
したがって、建物もこの時期を中心としている。



第108図 柱穴出土の黒色土器・土製品

図番	区	柱番	613	29G	12	621	29G	11	629	28D	1
606	20 I	2	614	18F	1	622	20 J	4	630	22 I	1
607	22 H	1	615	18F	1	623	28 G	18	631	17 E	2
608	22 H	1	616	22 K	2	624	20 I	2	632	16 F	1
609	20 F	3	617	22 K	2	625	20 G	5	633	28 F	2
610	18 D	1	618	33 C	5	626	28 G	18	634	28 E	8
611	20 H	2	619	27 G	11	627	22 H	1	635	18 K	3
612	18 D	1	620	33 B	5	628	28 D	1			

第8表 柱穴出土の遺物一覧表



第109図 柱穴出土の土師器

7. 掘乱層出土の遺物

多量の遺物が出土しており、これらは大きく分けると土師器・黒色土器・須恵器・磁器・陶器・施釉土器・土製品・石製品・金属製品に分けられる。ここでは先に紹介した遺構出土のもの以外だけについて記する。

(1) 土師器

色々の器種がある。皿・壺・塗・蓋・鉢・臺・かめ・こしきの他に特殊なものもある。

①小皿（第110図、第111図、636～669）

色調は黃白色がおもで、灰褐色・淡褐色を呈すものもある。胎土に少量砂粒を含み、器面は内外面を横ナデ、内底はナデによって調整される。636・639・640がヘラ切り底、その他が糸切り底のものである。637・638は、拓本を図示できなかった。図版のミスでヘラ切り底のものに混入した。糸切り底の場合、口径によって、7cm前後（666～669）、8cm前後（638・650・652・654・657～661）、9cm前後（その他）と、それぞれグルーピングできる。9cm前後の小皿は器高の高いものと低いものがある。656は穿孔を施す。

②大皿（第111図 670～679）

淡褐色を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。器面は横ナデされており、底にはヘラ切り痕をもつ。口縁部が、わずかに外反するものがほとんどである。678は上げ底である。

③壺（第111図、第112図、第113図、680～709）

色調は黄灰色ないし淡赤褐色を呈し、胎土はよく精選され、わずかに砂粒を含む。内外面を横ナデ、内底はナデ調整される。680～702はヘラ切り底、703～709は糸切り底である。ヘラ切り底を有する壺は、全体に底部と体部の境が丸味をおびている。また、口径とくらべて、器高の高い一群（680～686・689～691）と、口縁部と体部がやや外方に傾き器高の低い一群（687・688・692～699）とに、大まかに分けられそうである。700は丸底壺で、ヘラケズリ痕が、体部下半まで残る。701は大壺、口径14.6cmで、702は特大壺、口径20.6cmに及ぶ。なお、底部に板目のあるものは見あらない。

④塗（第113図、第114図、710～736）

色調は、淡褐色ないし黄灰色を呈す。胎土に少量の砂粒を含み、石英砂粒を含むもの（712・716・722）もみられる。器面は、ほとんどが、内外面横ナデである。710・711は塗、712～717、724～728は高台付塗、718～723は塗部のみ残っているもの。729～736は底部を肥厚することで、高台状に見えるものである。

710・711は、底部にヘラ切り痕をもち、口縁部はやや外反して、内側端部に平坦面を形成している。712は、内面をヘラミガキをしており、外面はヘラナデにより調整されたのか、器面が荒れている。714は、内外面とも、ていねいにヘラミガキされている。715は、焼成が非常によく、堅致で、土師壺とは異質な感がする。718～721は内窓気味に立ちあがり、口縁部でわずかに外反する。722・723は口縁部まで内窓し、端部上面に平坦面をもつ。729～736はヘラ切り離し後、ナデでヘラ切り痕を消している。塗部は、719～720が、これにあたるかも

しれない。

⑤蓋 (第 114図, 737~746)

黄白色ないし淡赤褐色を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。740・741は石英砂粒を含んでいる。737~739はつまみで、737・738は宝珠様に、739は円柱状をなす。740~743では、口縁端部が、下方に垂直もしくは、外方にやや張り出して、つまみ出しを行い、体部から口縁部にかけて、屈曲し、内面に棱を有する。740の天井部は、ほぼ水平、742では、わずかに窪みをもつ。本遺跡出土須恵器蓋と、形式上同一である。

⑥甕 (114図, 第 115図, 第 116図, 第 117図, 747~777)

色調は淡褐色ないし黄灰色を呈す。胎土は、砂粒を多く含み、径5mm前後的小礫さえ含むものもある。長石・石英砂が目立ち、ほとんどが、これを含む。焼成は良好である。調整は、内面頸部下は、ほとんどへラケヅリ(下→上)され、口縁部は、内外面ヨコナデ。但し、一部内面に横方向の荒いハケ目を施すものがある。外面頸部から胴部にかけては、縦方向の荒いハケ目ないしは、ヨコナデである。おそらく長い胴部に、頭部が若干しまり、口縁部がやや肥厚して、短く外方へ大きく屈曲する器形であろう。口径が20cmを越えない小型甕 (753・764・767~775) がみられる。766は、焼成が硬質、致密で、水引き跡も明確で、異質の感がある。773・774・777は、口縁部が、さほど外反せずに立ち上がる。777は、沈線の文様らしいものが、うかがわれる。

⑦瓶 (117図, 778, 779)

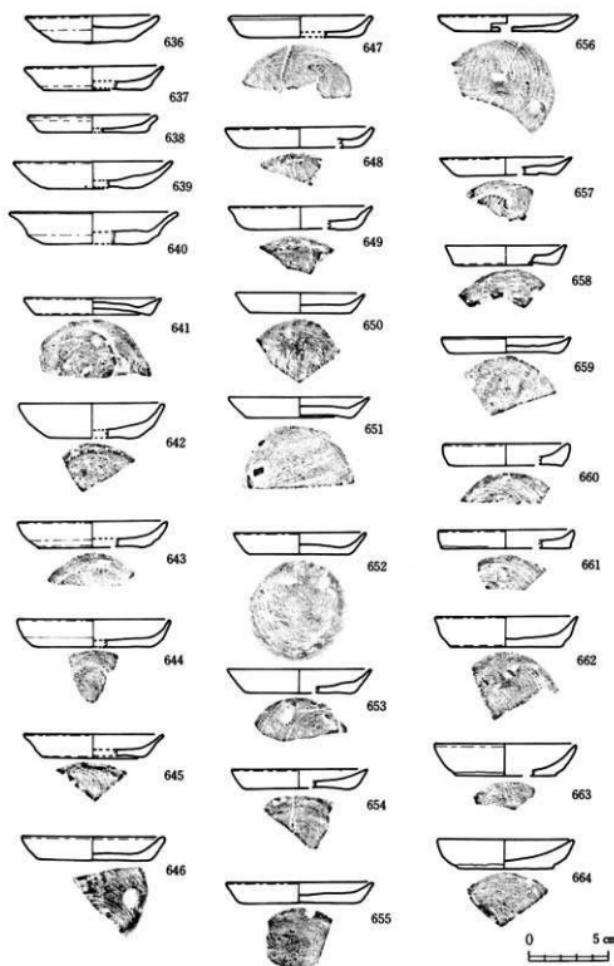
778・779は、中央に大きな穴のあく瓶である。黄灰色で、胎土に砂粒を含む。778には、底部と外側にヘラミガキがなされている。(図がさかきになっている)

⑧鉢 (118図, 783~786)

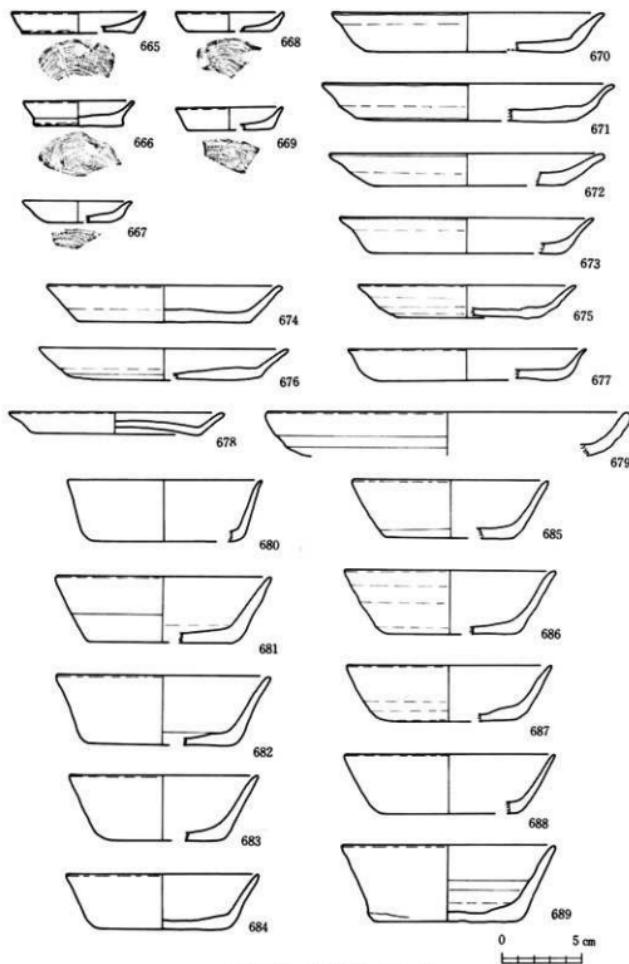
色調は淡褐色ないし黄灰色である。783は暗褐色を呈す。胎土は786を除いて、砂粒を含み石英砂粒が混じる。786は細砂を含む。小型・大型に2分される。

⑨その他 (117図, 780~782, 118図, 787~792)

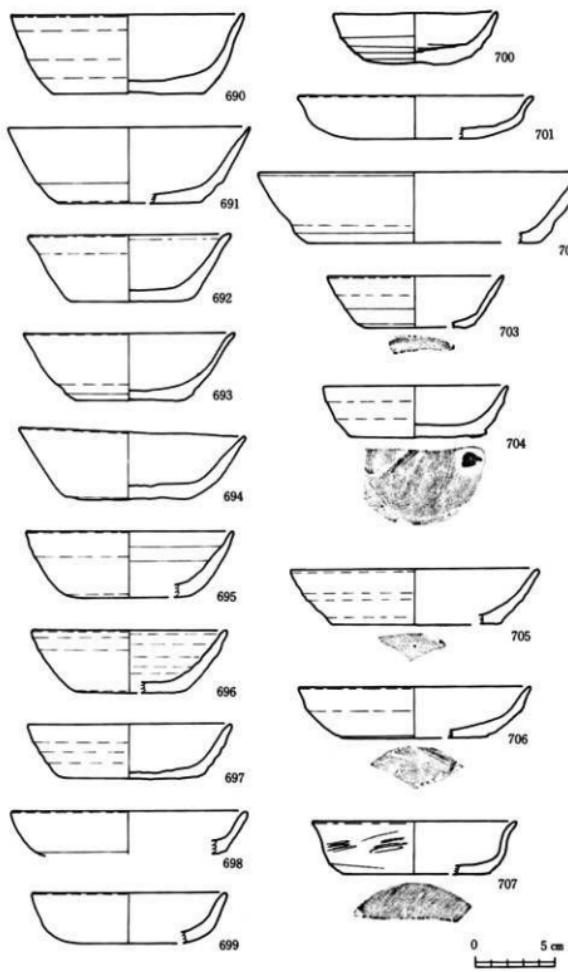
780~782は、器形不明の底部、787は淡褐色を呈し、胎土に石英砂粒。その他砂粒を含む。内側に布痕があり、俗に焼塗蓋と呼ばれている。788・789はすり鉢。788は黄白色で、内外面横ナデ、胎土に少量の砂粒を含む。9本単位の沈線を施す。789は、淡褐色を呈し、砂粒を多く含む。7本単位の沈線を施している。788・789ともに石英砂粒を含む。790は鍋形土器である。ひさし部分のみ残存す。淡黄褐色、内外面ヨコナデ、石英砂粒を少量含む。791は、内底に同心円状、内面に放射状に、深い沈線を施す。鉢形土器の底部であろう。色調は黄白色胎土に少量の砂粒を含む。792は耳坏、黄灰色で、胎土にわずかに砂粒を含む。中央部に穿孔している。793・794は把手、793は黒色で、ついでにヘラナデされる。794は、淡赤褐色で、ナデで調整される。双方ともわずかに砂粒を含む。795は、坏、あるいは塊の一部と思われるが、やや軟質の黄白色の土器片の、内外に漆を塗っている。漆は乾燥して、割れ口に浸透した部分を残して剥落している。修復の可能性もある。胎土はよく精選されている。



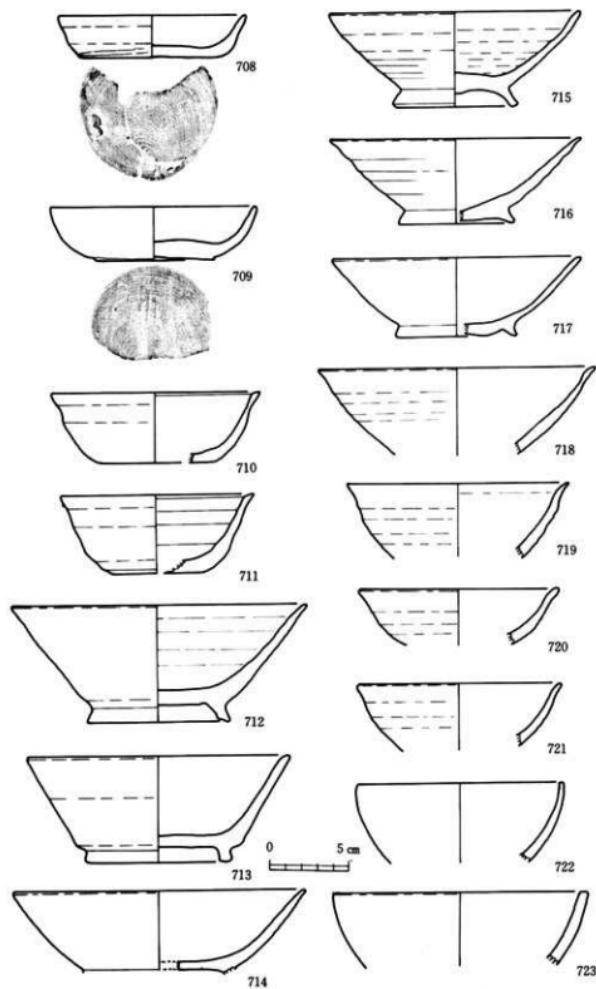
第110図 土師器(1) (III)



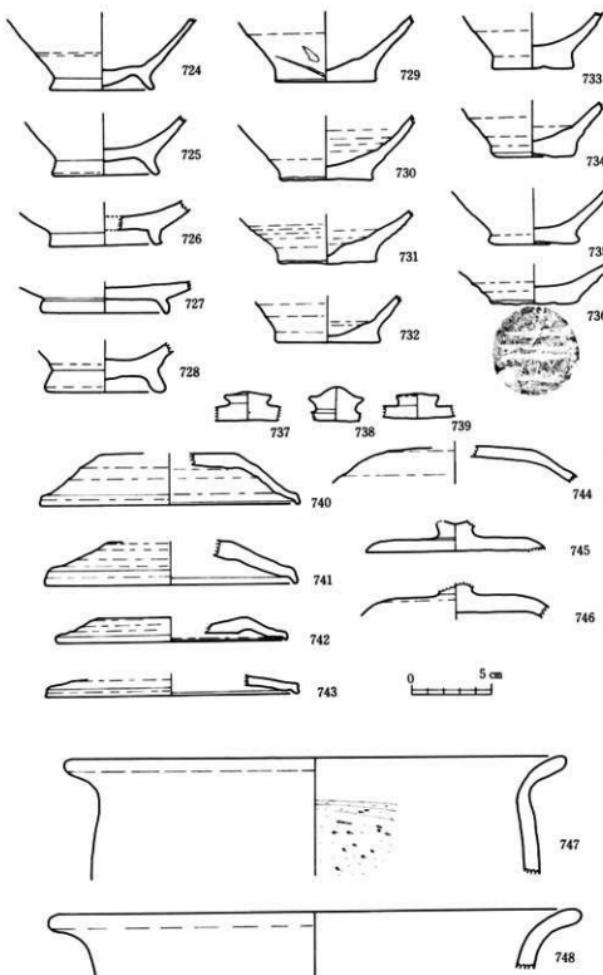
第111図 土師器2) (皿・杯)



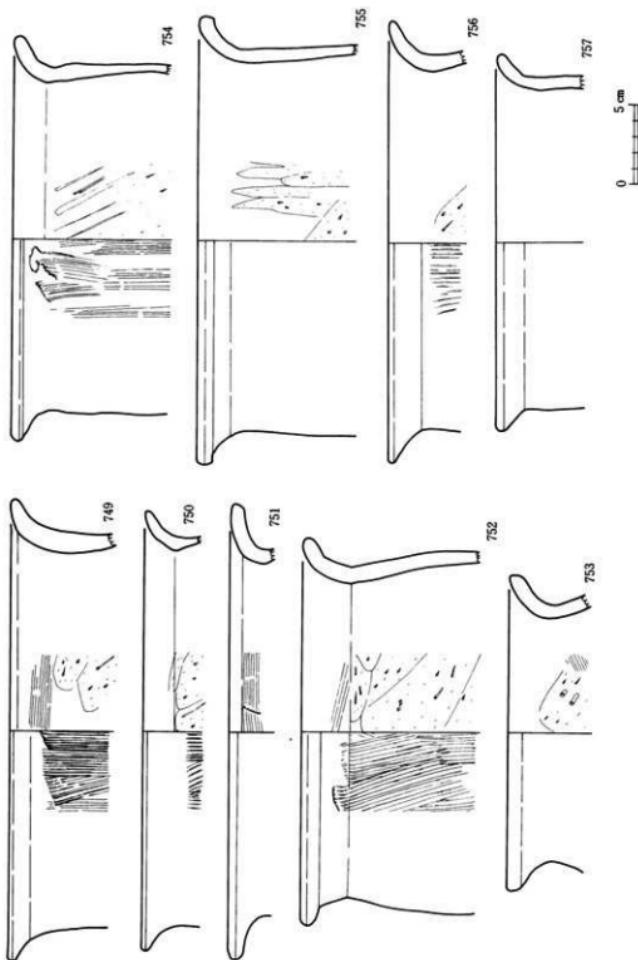
第112図 土師器(3) (3)



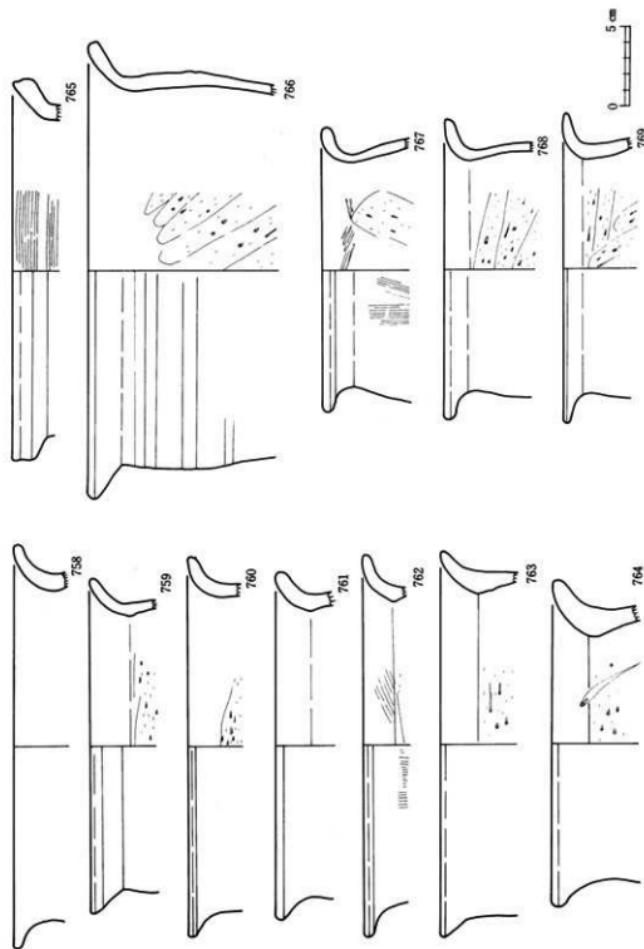
第113図 土器器(4) (环・塊)



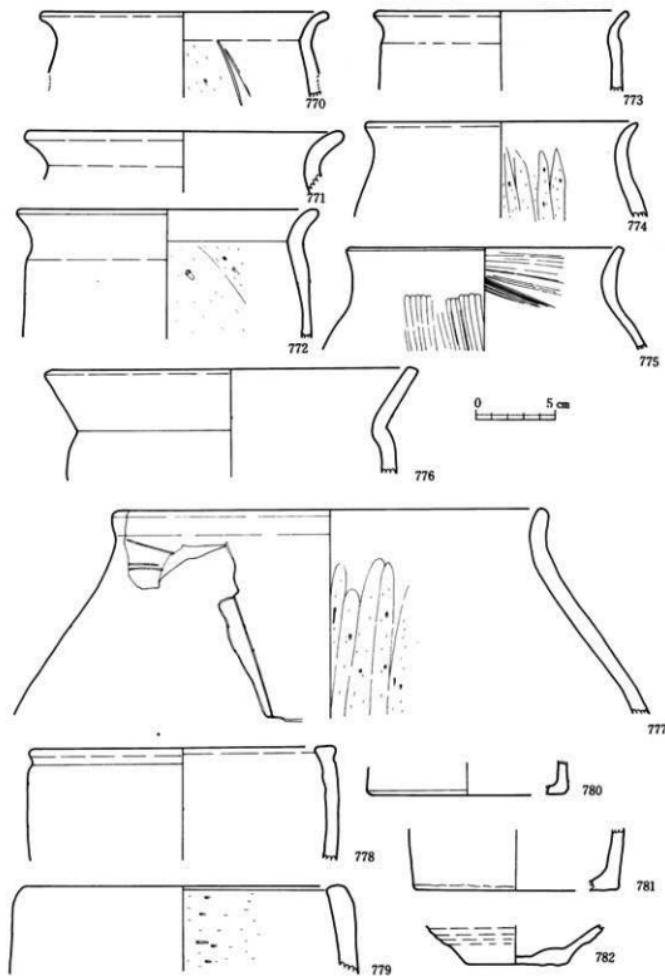
第114図 土師器(5) (壺・蓋・甕)



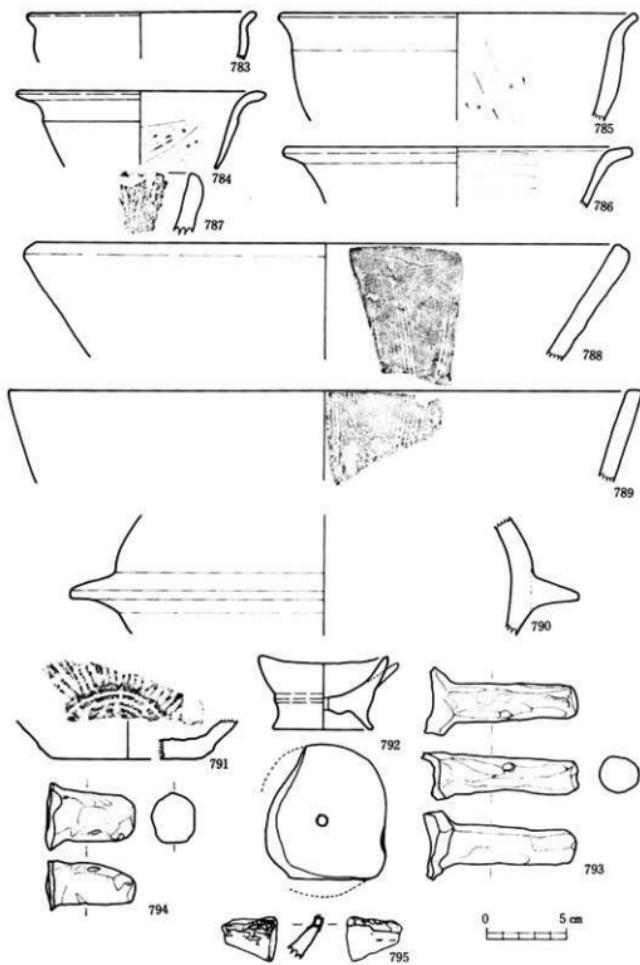
第115図 土師器6(窓)



第116図 土師標(7)(變)



第117図 土器(8) (甕・瓶)



第118図 土師器(9)

図番	器種	出土区・層	図番	器種	出土区・層	図番	器種	出土区・層
636	小皿	9・10J-1	669	小皿	17E-1	702	壺	24G-J-1
637	々	28-G	670	大皿	21J-1	703	々	36D-1
638	々	17F-1	671	々	21J-1	704	々	15G-1
639	々	37D-1	672	々	21J-1	705	々	32E-1
640	々	14H-1	673	々	29F-1	706	々	12G-1
641	々	12-15G	674	々	33I-1	707	々	12-15G-1
642	々	18F-1	675	々	12G-1	708	々	15F-1
643	々	18E-1	676	々	30I-1	709	々	25C
644	々	14I-1	677	々	29I-1	710	壺	29G
645	々	14H-1	678	々	18K-1	711	々	30G
646	々	17E-1	679	々	25I-1	712	高台付壺	20H 16.1
647	々	12I-1	680	壺	12G-1	713	々	13I-1
648	々	18C-1	681	々	12G-1	714	々	13D-1
649	々	15K-1	682	々	12G-1	715	々	20E-1
650	々	14J-1	683	々	12G-2	716	々	17J-2
651	々	18D-1	684	々	12G-1	717	々	22-23G-1
652	々	12-15G-1	685	々	21J-1	718	々	22H-1
653	々	13G-1	686	々	12G-1	719	々	23H-1
654	々	14I-2	687	々	12G-1	720	々	27G-K
655	々	15H-1	688	々	13G-1	721	々	19K-1
656	々	17E-1	689	々	12G-1	722	々	15I-2
657	々	13P	690	々	12G-1	723	々	19I-1
658	々	15H-1	691	々	12G-1	724	々	18K-2
659	々	15G-1	692	々	30E	725	々	24C-1
660	々	12G-1	693	々	H 7・16.7	726	々	15I-2
661	々	14H-1	694	々	20J-1	727	々	22B-1
662	々	18D	695	々	20J-1	728	々	27F
663	々	23C-1	696	々	23H-1	729	壺	19J-2
664	々	14F-1	697	々	13F	730	々	29D-1
665	々	19D-1	698	々	不明	731	々	29D-1
666	表採		699	々	13D-1	732	々	29G-1
667	々	18G-1	700	々	17K-1	733	々	25D-1
668	々	14H-1	701	々	12G-1	734	々	29G-1

第9表 土師器出土地区表(1)

図番	器種	出土区・層	図番	器種	出土区・層	図番	器種	出土区・層
735	塊	30F 16.2	756	甕	25E-1	777	大甕	28E-3
736	*	20D～L-1	757	*	23I-1	778	瓶	16K-2
737	つまみ	13I-2	758	*	12G-1	779	*	29G-1
738	*	20I-1	759	*	25E-1	780	不明	15I-1
739	*	15I-2	760	*	25C-1	781	*	25H-1
740	蓋	16I-2	761	*	25C-1	782	*	28E-2
741	*	28H-1	762	*	12G-1	783	鉢	29G-1
742	*	12G-1	763	*	19H-1	784	*	18J・アゼ
743	*	13D-1	764	*	18I-2	785	*	28E-2
744	*	13D-1	765	*	18H-1	786	*	22I
745	*	12I-1	766	*	30F	787	布痕	7・8H-1
746	*	13I	767	*	13G-1	788	すり鉢	36A-1
747	甕	24～25E-2	768	*	21J-1	789	*	33D-1
748	*	24～25E-2	769	*	24D-1	790	ナベ?	25I-1
749	*	13D-1	770	*	12G-1	791	すり鉢?	23A-1
750	*	13D-1	771	*	13I-1	792	耳坏	22J
751	*	A I-2	772	*	25J-1	793	把手	24C-1
752	*	A K-1	773	*	28G-1	794	把手	25G-1
753	*	20～23H-1	774	*	12G-1	795	不明	23A-1
754	*	18J-アゼ	775	*	15I-1			
755	*	19K-2	776	*	24, 25E-2			

第10表 土師器出土地区表(2)

(2) 黒色土器 (第119図、796~822)

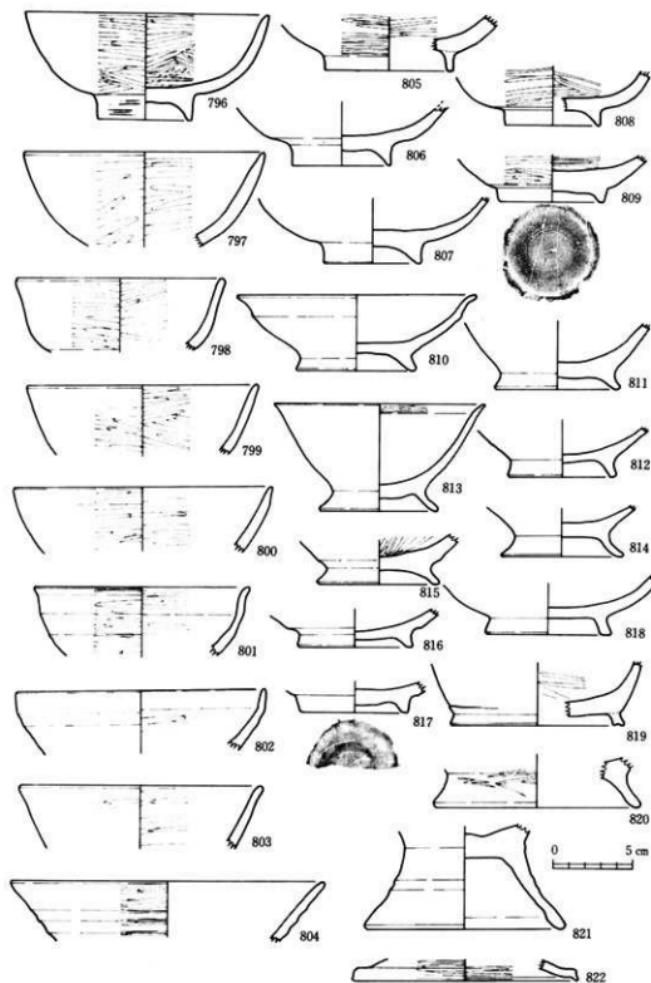
これには外側とも黒くなったもの、内側だけ黒くなったもの（内黒土師器）と、黒くはしていらないが両面ともヘラで研磨して光沢を呈しているものとがある。器種は壺が多く、他に壺、蓋、脚台がある。

ほとんど図示したものは、壺であり、内黒土師器である。一片、両面とも、黒色の高台部破片があったが、図示できなかった。

外側の色調は、淡褐色ないし淡赤褐色である。胎土はよく精選されている。内・外面にヘラミガキを施し、高台部は、内・外面とも横ナデされている。底部は一部にヘラ切り痕を残すものもあるが、ほとんどナデである。796は、直立した高台部から、体部が内弯して口縁部まで一気に立ち上がる。797の壺部も、これに類似する。805~809は、796と同様の高台部をなす。798~801は、内弯する体部が、口縁部でわずかに外反する。802は、逆に口縁部が内側に屈折して、直口となる。803・804は、壺であろう。809は、底部に窯印を有す。同じ窯印のものが、他に一点みうけられた。810は、内・外面ともナデ調整され、内弯する体部が、内側にわずかに屈曲し、外面に棱をつくり、口縁部で外反する。高台部は、外方へ聞く。812・813は、外方へ聞く高台部で、内面ヘラミガキ、外面横ナデである。813は、器高が高く、高台部も、長く薄くなり、大きく外方へ聞く。814・815の高台部も、それに似る。817は、底部に窯印をもつ。818の高台は、角張って、接地面に平坦面をつくる。819は高台付壺である。外面は、横ナデで調整され、接地面平坦面に凹線をもつ。820は、外反した、高い高台部で、外面の一部に、ヘラミガキがみられる。821は、脚台で、脚の内、外面は、横ナデ・色調は黄白色を呈す。822は、蓋である。体部が屈曲し、内側へ棱を有し、口縁部は、わずかに外へ張り出して、つまみ出される。

図番	器種	出土区・層	図番	器種	出土区・層	図番	器種	出土区・層
796	高台付壺	33I-2	805	高台付壺	13I-2	814	高台部	24G-1
797	壺・体部	13G-1	806	々	18I	815	々	23B-1
798	々	13I-1	807	々	24H	816	々	12I-1
799	々	16F-2	808	々	28B-J-1	817	々	21J-1
800	々	14H-1	809	々	14H-1	818	々	12E-1
801	々	27K-1	810	々	12G-1	819	高台付壺	18H-1
802	々	13I-2	811	々	19I-2	820	高台部	I-1
803	壺	30H-1	812	々	19I	821	脚台部	29F-1
804	々	23I-P2	813	々	13E	822	蓋	18I-1

第11表 土師器出土地区表(3)



第119図 黒色土器

(3) 須恵器

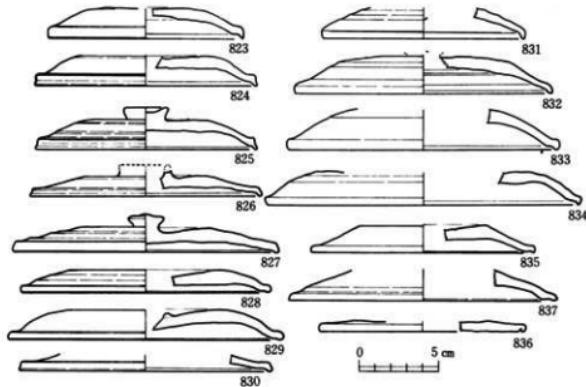
环（蓋と身）・皿・高环・臺・斐・鉢などがある。

(1) 环蓋（第120図823～837）

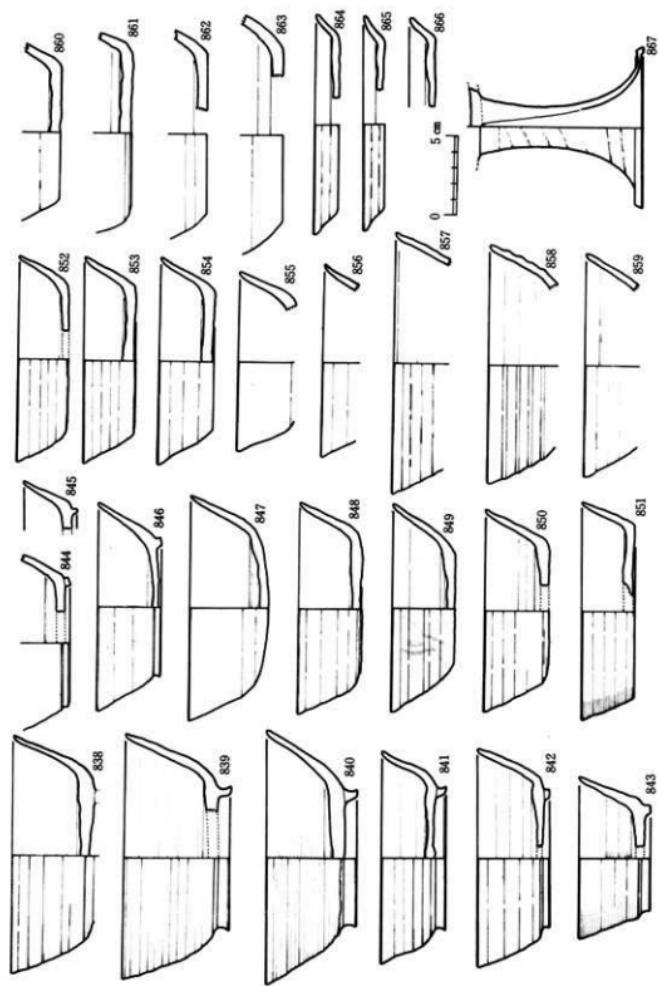
口径の大きさは13cm～19.7cmで、器高にもバラツキがみられる。天井部はほぼ水平あるいはわずかに窪みがみられる。口縁端部は下方へ屈曲させ段を有するが、内側にかえりの付くものはみられずわずかに稜が付く。口縁部先端は下方あるいは斜め下方につまみ出され口縁端部が三角を呈すもの（823～827・830）があり（824・825）は口縁部先端がさらに外反を呈す。また、口縁端部が丸味をおびる（828・829）。口縁端部が内側に屈曲する（831・836）、体部から口縁部へ直線的につまみ出される（837）がある。蓋の天井部外面は雑なハラ削り調整がみられる。（824～827・829）はつまみを有し、なかでも（825）はつまみの頂部が凹みを呈し、（827）は宝珠様のつまみを付す。特記事項として（826・828・829・832・833・835）があげられ、内側天井部は研磨された痕跡がみられ、いわゆる転用窓である。この中でも（832）は内側天井部に「朱」が付着し、朱墨用の窓として用いられたものがうかがわれる。

(2) 环身（第121図838～863）

环身の形態には高台を付す（838～846）と高台を伴わない（847～854）の二者がある。口径の大きさや高さには大小の差がみられる。高台付きの环身については、腰部ゆるやかに屈曲するものが大半であるが、（842～845）は屈曲の度合が著しい。口縁部はゆるやかに外反し、ハの字形の貼付高台を付す。高台の場所は底部端に付し、高台の接地面はほぼ水平あるいは外側縁部でわずかに浮いている。手法的には、マキアゲ・ミズビキ整形の後、高台を後補



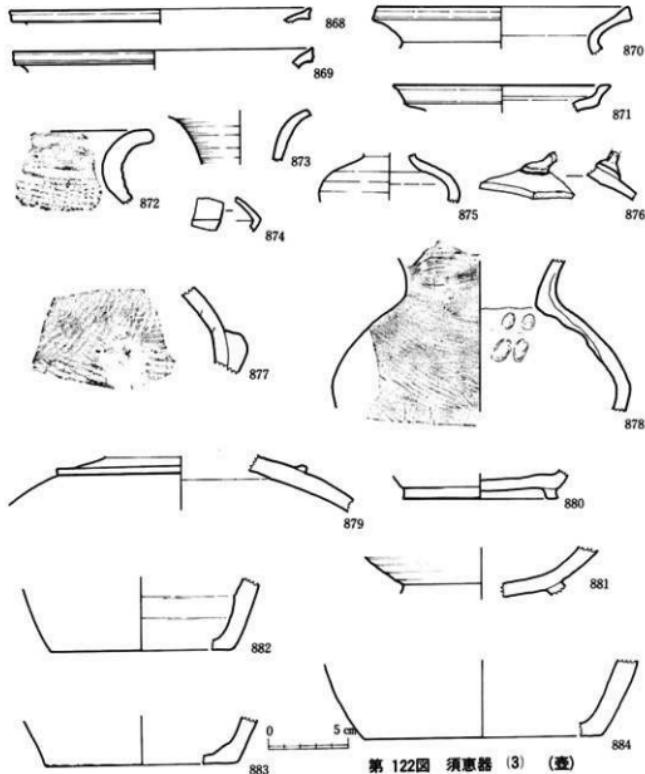
第120図 須恵器 (1) (环蓋)



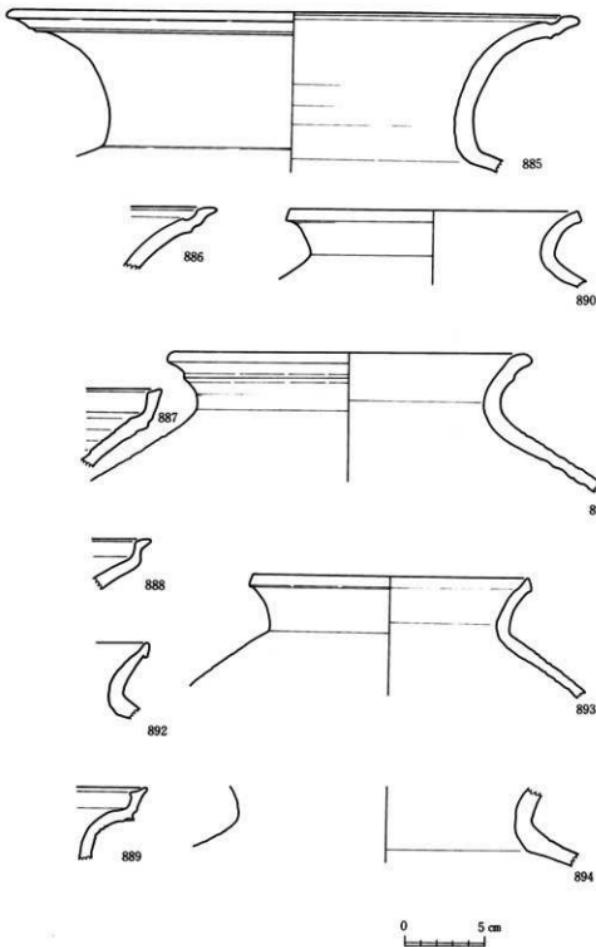
第121図 須恵器2) (坏身・皿・高坏)

するもので、高台は回転ヘラ削り調整がみられる。（840・846）を除いては器面に自然釉がかかっている。（838）は器面全体にまんべんなく灰色釉がかかり、さらに黒色斑が胡麻状にみられる。（840）は胎土・焼成・色調とも異質といえ、胎土には石英・長石・砂粒を多量に含み器面はザラザラした感触をうける。焼成はやや軟弱で、色調は暗灰色を呈す。さらに（841）の高台付根・口縁部・外底面は金色に輝き、留意すべき坯身である。（846）の体部には火揮らしき痕跡がみられる。

高台を伴わない坯身については、前者との著しい変化はみられないが、高さが低くなる傾向にある。底部は平底で、回転ヘラ切り未調整の痕跡が明瞭に残る。なお、（847）は丸底気



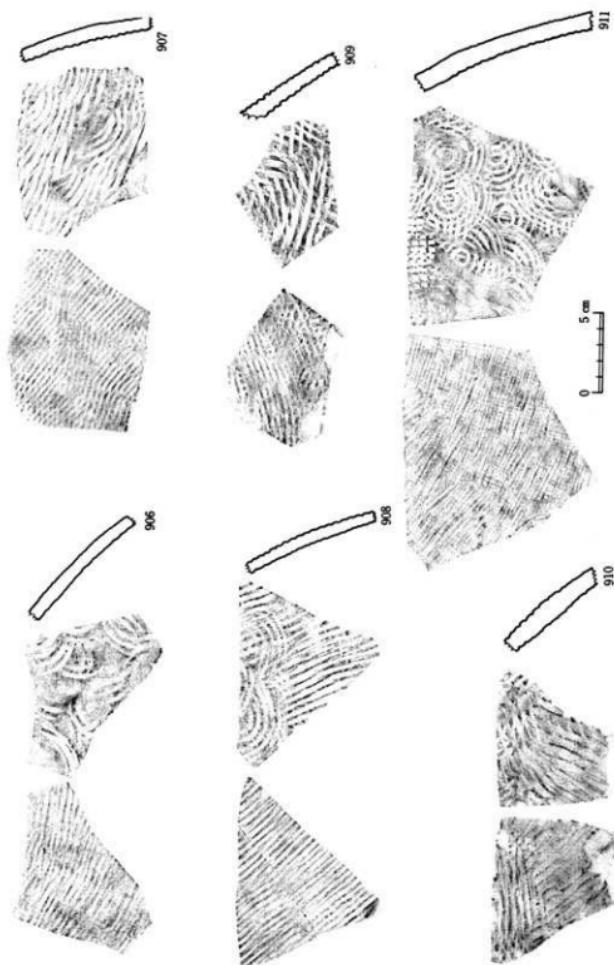
第 122 図 須恵器 (3) (壹)



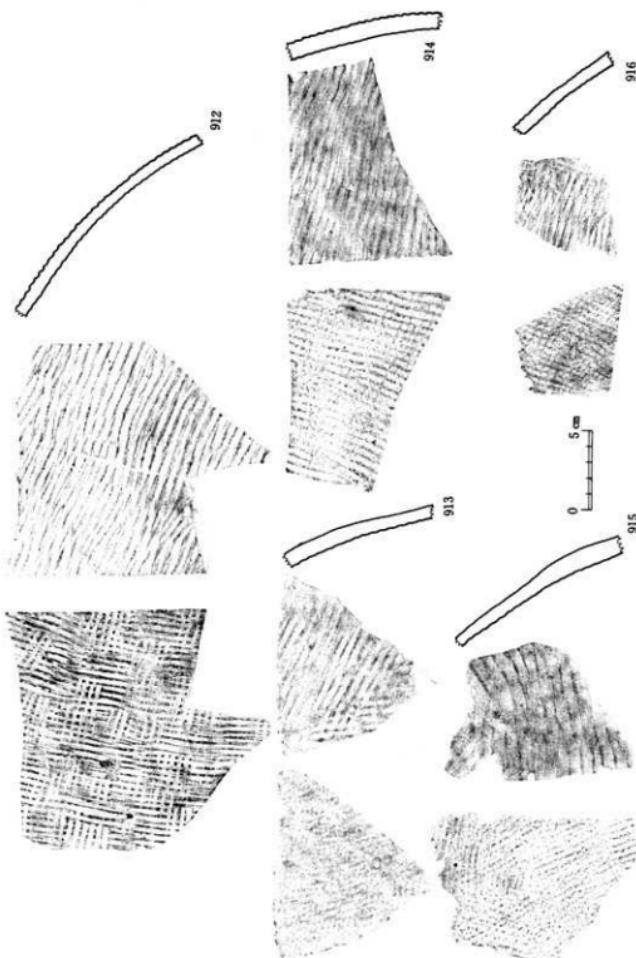
第123図 須恵器4) (かめ口縁)



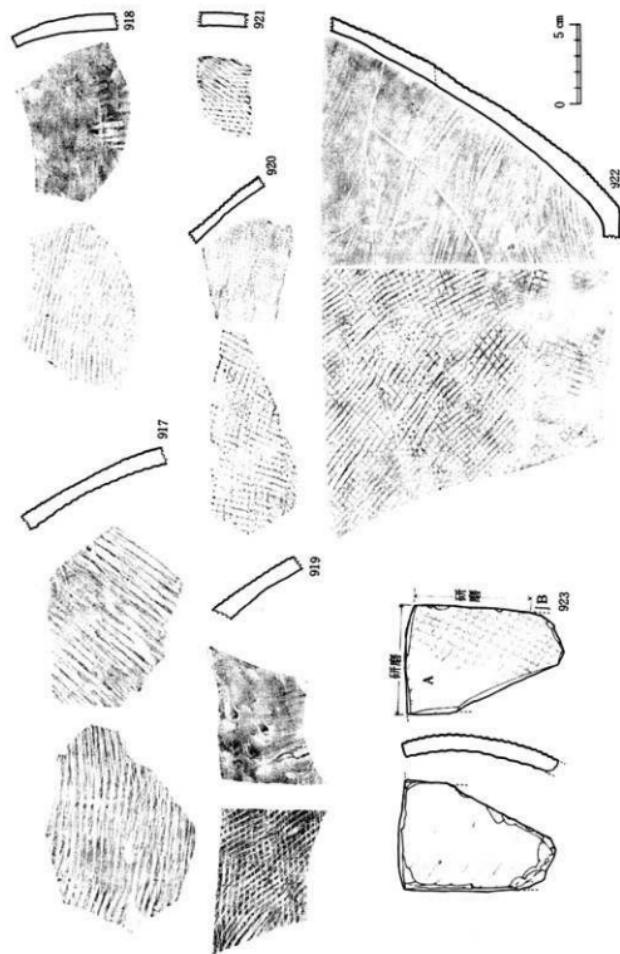
第124図 須恵器5) (かめ)



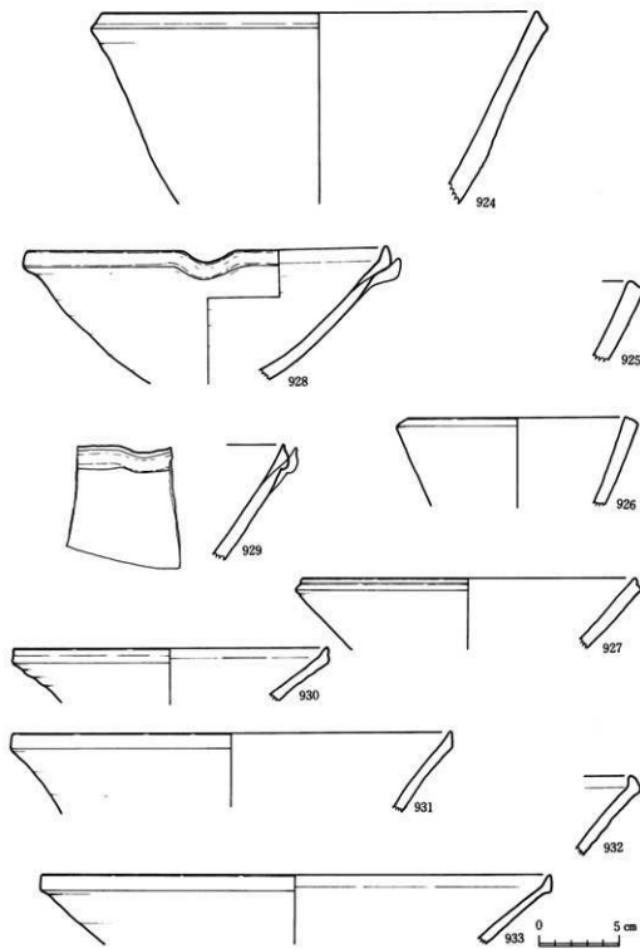
第125図 須恵器(6) (かめ)



第126図 須恵器7) (かめ)



第127図 須恵器(8) (かめ)



第128図 須恵器9) (鉢)

味である。(849) の体部には火薙らしい痕跡がみられる。(855～859) は环身口縁部片。

(860～863) は高台の付かない环身底部片である。

③皿(第121図 864～866)

皿の口径は环の大きさに比して大差はない。(864) は口径が14cm、(865) は13.7cmを測る。口縁部は外反する。底部は平底で、やや上げ感気味な(865) もみられる。

④高坏(第121図 867)

高坏の脚部で环部は欠落している。脚部はラッパ状に開き、端部でやや斜めにつまみ出しを行い内外ともに明瞭な綾を生す。脚部には整形時の指腹圧痕が明瞭に残る。

⑤壺(第122図 868～884)

小片の為、器形などは定かではないが、大型・小型に大別される。(868～870) は頭部から口縁にかけ大きく外反し、口縁端部は小さく内行し、さらに外反する。(871) は頭部から

表面番号	器種	出土区・層	口径cm	高さcm	底部径cm	備考	表面番号	器種	出土区・層	口径cm	高さcm	底部径cm	備考
823	蓋	12-F-1	12.3				845	环	12-H-1				
824	*	18-H-1	14.1			転用鏡	846	*	12-G-1	13.2	4	8.8	
825	*	12-I-1	14.1	2.2		転用鏡	847	*	12-G-1	4.2	5		
826	*	22-L-1	14.6			転用鏡?	848	*	18-E-1	13.4	4		
827	*	30-F-1	16.8	2.4			849	*	19-I-1	13.2	4		
828	*	19-I	15.7			土埴1転用鏡	850	*	15-F-1	12.8	4.1		
829	*	15-D-1	17.3			転用鏡	851	*	16-E-1	13.8	3.4		
830	*	10-I-1	16.1				852	*	13-D-1	13.1	3.2		
831	*	12-F-1	12.7				853	*	12-G-1	13.1	3.3		
832	*		16.2			転用鏡(朱墨)	854	*	12-G-1	13.1	3.5		
833	*	13-D-1	17.1			転用鏡	855	*	17-I-1	11.4			
834	*	16-D	19.8			Pit 1	856	*	28-G-1	12.3			
835	*	17-C-1	14.1			転用鏡	857	*	20-23G-H-1	16.7			
836	*	9-I	13			Pit 1	858	*	H-3北東	15.1			
837	*	9-10-C-D-1	17.1				859	*	28-F-1	14.2			
838	环	12-G-1	15.1				860	*	13-E-1		8.7		
839	*	21-I-1	16.1	6.7	9.3		861	*	13-H-1		9.5		
840	*	28-F-1	16.2	5.8	8.7	(矢1)?	862	*	13-G-1		10.2		
841	*		13.5	4.1	9.2	金粉	863	*	11-G-1		11		
842	*	14-E-1	13.8	4.6	8.7		864	皿	20-23G-H-1	14	1.5	11	
843	*	30-F-1	10.3	4.5	6.7		865	*	22-I	13.8	1.4	10.8	Pit 2
844	*	12-G-1			8.2		866	*	19-G-1		1.7		

第12表 須恵器一覧表(1)

図面番号	器種	出土区・層	口径	高さ	底部径 高さ	備考	図面番号	器種	出土区・層	口径 cm	高さ cm	底部径 高さ cm	備考
867	高环				10.2		901	甕	12-G-1				
868	壺	22-I	19.1			Pit 1	902	*	21-J-1				
869	*	28-E-1	19				903	*	28-G-1				
870	*	31-E-1	16				904	*	13-I-1				
871	*	22-J-1	13.7				905	*	19-G-1				
872	*	32-B-1					906	*	25-I-1				
873	*(小型)	14-G				Pit 2	907	*	19-K-1				
874	*	試掘1					908	*	30-G-1				
875	*	33-E-1					909	*	21-E-1				
876	壺	9-J-1					910	*	24-G-1				
877	*	26-G-1					911	*	22-F-1				
878	*	28-G				土塀	912	*	13-H-1				
879	*	12-G-1					913	*	13-D-1				
880	*	20-J-1		9.8			914	*	23-B-1				
881	*	25-E-1					915	*	23-B-1				
882	*	20-23G-H-1		11.5			916	*	14-B-1				
883	*	24-G-1		12.3			917	*	24-25-E-1				
884	*	12-H-1					918	*	25-I-1				
885	*	26-G-1	36				919	*	24-I-1				
886	*	13-D-1					920	*	25-I-1				
887	*	19-I-1					921	*	34-A-1				
888	*	18-J-あ ザ					922	*	12-J-1				土塀1 堆積
889	*	2-4D-1					923	*	24-D-1				
890	*	30-E-1	18.5				924	鋸	33-B-1	27.5			
891	甕	13-D-1	23				925	*	25-E-1				
892	*	30-F-1					926	*	13-L-1	13.2			
893	*	22-G-1	17.9				927	*		21.3			
894	*	24-B-1					928	*	15-H	23			土塀1
895	*	29-F-1					929	*	18-F-1				
896	*	28-F-1					930	*	12-15-G-1	20			
897	*	18-J-1				車輪印記	931	*	12-G-1	27.8			
898	*	13-H-2					932	*	36-C-1				
899	*	12-G-1					933	*	18-E	32			
900	*	22-J-1					934	*	17-E-1				Pit 3

第13表 須恵器一覽表(2)

大きく外反し垂直気味に屈曲し、さらに端部で大きく外反する。（873～875）は小型壺である。（876・877）の肩部・胸部には把手が付されている。底部は貼り付けヘラ削り高台の（880・881）と底平の（882～884）がある。

⑥壺（第123～127図）

長頸と短頸の広口壺がある。（885）は口径36cmの広口壺で（886）同様、頸部から垂直気味に大きく外反し、口縁部から口縁端部にかけ屈曲し、さらに外反する。口縁部に凹線が施されている。（887・889）は口縁部で外反し、口縁端部は垂直に屈曲している。さらに（889）は屈曲部に舌状の帯が廻らされている。（890～893）は短頸壺である。外面には格子目叩きと平行線状叩き（904～911・917, 918）の二種類がある。内面には同心円叩き（891～894・892・906）、同心円の中心部に○の印をみるいわゆる車輪文（897～901）、同心円と平行線状の組合せ（907～910）、同心円と平行線状・格子目の叩き（911）、平行線状叩き（912～922）がある。なお（885）は無文でミズビキによる調整痕がみられる。（920～922）の体部断面には継長に稜状の互層がみられ、留意すべき胎土といえる。

⑦観

転用硯（第120図 826・828・829・832・833・835）須恵器の蓋の項で述べたので省略する。

⑧鏡面観（第127図 923）

須恵器の甕の破片を利用したもので、外面は格子目、内面は平行線状の叩きがみられる。破片の為、原形をとどめていないが、図のA・Bにおいて丁寧に研磨がおこなわれている。なお内面は研磨痕がみられず、未使用の硯と想定される。

⑨鉢（第128図 924～933）

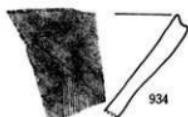
鉢は、スリ鉢・こね鉢に大別される。

スリ鉢（924・925）、（924）は焼成が弱く白色を呈し、（925）は灰色で堅固である。

こね鉢（926～933）、器形は体部から口縁部へかけて直線的に移行し、口縁端部が平坦となる（925～927）と、わずかに外反し、若干上位へつまみ出し三角形を呈す（928～933）がある。又、こね鉢には（928・929）の片口のあるものもある。（931～933）の口縁部には暗灰色を呈する帯状のしみこみの痕跡が廻らされ、他の鉢と異質のものと思われる。

⑩陶器（第129図 934）

スリ鉢の残片である。口縁部は直行し、平坦な口唇部に凹線が廻らされている。



第129図 陶器

(5) 磁器

磁器も多く出土しており、青磁と白磁に分かれる。分類は西ノ平遺跡とあわせて行なった。

①青磁

塊が4種類、皿が2種類出土している。その数は塊が210点、皿が34点みられた。なおここではI類からV類だけの数字である。

ここでの分類はI～X類に分けた。I類は越州窯系青磁、II類は同安窯系青磁、III類～X類までが竜泉窯系青磁である。成岡遺跡の塊と皿は下記のとおりに出土した。

類	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	計
塊の数	8	25	119	66	26	69	5	計	318点	
皿の数		24	10		16			計	50点	

I類

I類は越州窯系青磁で8点出土している。図に上げたのはそのうちの4点である(935～938)。全体として施釉が少なく淡緑色を呈している。磁胎は灰褐色である。高台は幅が広く浅い(937・938)。とくに937は高台部が上げ気味である。

II類

II類は同安窯系青磁である。塊は25点、皿は24点出土している。図に上げたのは939～946が塊で、984～994が皿である。この類は同安窯系青磁で内体面・外体面に櫛描文を有するものである。釉色は青褐色を呈し、磁胎は灰褐色・灰色である。塊は高台が高く露胎である。露胎部は外体部の下部までみられる(945・946)。内体部と内面見込みの界は沈線状のくびれがみられる。皿は上げ底気味で露胎である。釉色は青褐色を呈し、磁胎は灰褐色・灰色であり、櫛描文もみられる。

III類

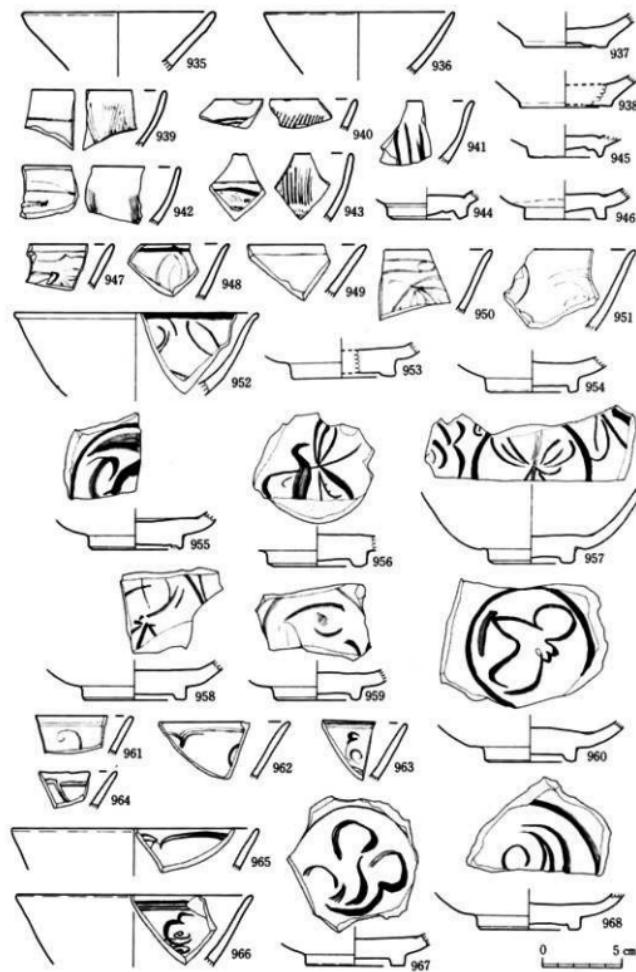
III類は竜泉窯系青磁の中で内面花文・内面雲文・無文と分けそれぞれa、b、cに分けた。

III類は塊が119点、皿が10点出土し、947～971が塊で、皿は995～999である。その中で内面花文は947～960(a類)、内面雲文があるものは961～968(b類)、無文は969～971(c類)を図に示した。

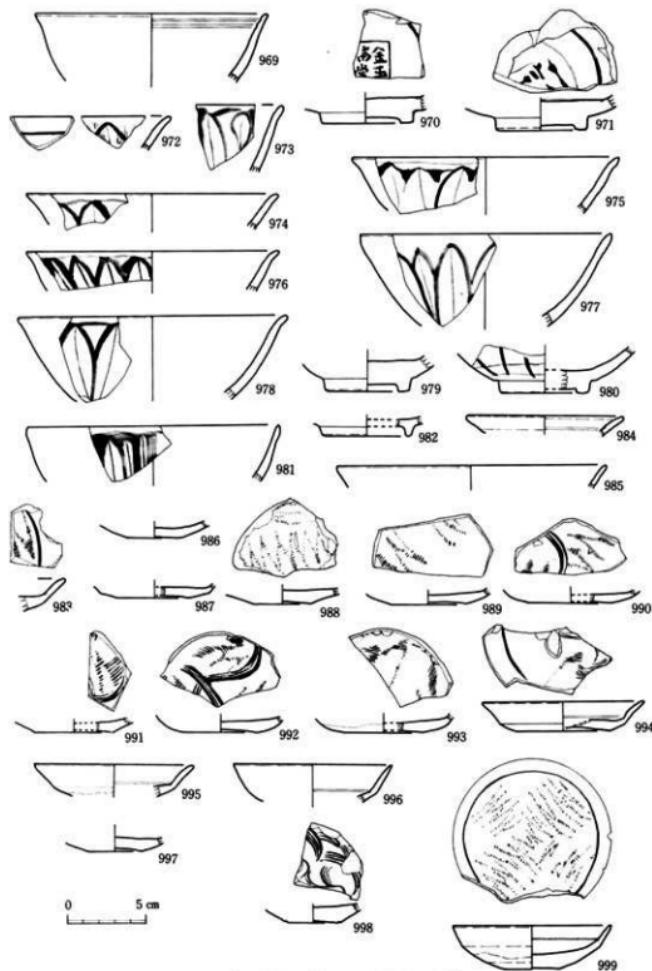
塊は釉色が緑褐色を呈し、磁胎は灰褐色・灰色である。高台は高く、施釉も高台までみられる。皿の磁胎・釉色は塊と同様であり、底は上げ底気味である。

V類

V類は竜泉窯系青磁の鍋蓮華文である。塊のみ66点出土し、972～980に一部を図に上げた。釉色は981が緑色、978・980が暗緑褐色、972・973が青褐色、他は緑褐色を呈している。高台は高く、外底見込みは露胎である。施釉は高台まであり、外体面は鍋蓮華文を施している。972は鍋蓮華文の他に櫛描文がみられる。972～978の鍋蓮華文は明確となっているが、981は鍋蓮華文がくずれて角が丸味をもっている。内面は見込み部と内体面の界は明確な折れ線がつく。



第130図 青 磁 I) (塊 1・2・3a・3b類)



第131図 青 磁(2) (塊3c・5 塵2・3類)

番号	出土区番	器種	類	番号	出土区番	器種	類	番号	出土区番	器種	類
935	13G-1	碗	1	983	18C-1	皿	2	961	20B-1	碗	3
936	35F-1	碗	1	985	33G-2	皿	2	962	13G-1	* 3a	14G-1
	15J-溝										* 3b
937	26G-1	碗	1	987	24G-P 1	皿	2	963	34A-1	* 3	15J-P 2
	18H-1										* 3
938	30I	碗	1	988	24J-1	皿	2	964	16-17D-1	* 3	15G-1
	20-23G-1										* 3b
	20K-1	碗	1	990	14J-2	皿	2	966	24G-1	* 3	15F-1
	23A-1										* 3a
	23J-1	碗	1	992	28J-1	皿	2	968	16C-F-1	* 3	15M-土1
	32I-1										* 3b
939	32I-1	碗	2	993	12G-1	皿	2	969	16D-1	* 3c	15I-1
940	29G-1	碗	2	994	13D-1	皿	2	970	20A-1	* 3c	15J-1
941	29F-1	碗	2	94	34C-1	皿	2	971	12F-1	* 3c	15D-1
942	24B-1	碗	2	94	34C-1	皿	2	972	9F-1	* 3a	16M-P 3
943	30F-1	碗	2	384-1	皿	2	12G-1		* 3a	16-26表探	* 3a
944	35F-1	碗	2	32E-1	皿	2	12H-1		* 3a	16-26表探	* 3a
945	26G-1	碗	2	12-15G-1	皿	2	12F~G-1		* 3b	17K-1	* 3a
946	16D-1	碗	2	12-15G-1	皿	2	12F~G-1		* 3b	17G-1	* 3a
	23A-1										* 3b
	38B-1	碗	2	13G-1	皿	2	12G-1		* 3a	18-19FG	* 3b
	25C-1	碗	2	986	33B-1	皿	2	12-15G-1		* 3a	18H-土3
	25C-1										* 3a
	31C-1	碗	2	947	13D-1	碗	3a	13F		* 3b	18E-1
	18D-1										* 3a
	18E-1	碗	2	948	14F-1	*	3a	13J-1		* 3a	18E-1
	18D-1										* 3a
	18E-1	碗	2	949	13G-1	*	3b	13D-1		* 3a	18-19FG
	30E-1										* 3a
	15F-1	碗	2	952	28E-P 5	*	3a	13K-1		* 3a	19D
	18-19FG										* 3a
	24G-1	碗	2	953	16D-1	*	3a	13G-1		* 3b	19J-2
											* 3a
	35G-1	碗	2	954	23J-1	*	3a	13K-1		* 3b	19C-F-1
											* 3
	12H-1	碗	2	955	24D-1	*	3a	13I-2		* 3b	19J-2
											* 3a
	14H-1	碗	2	956	20B-J-1	*	3a	13J-1		* 3b	19I-2
											* 3a
	17H-1	碗	2	957	24G-1	*	3b	14J-溝		* 3a	19J-2
											* 3a
	14K-1	碗	2	958	24J-1	*	3a	14I-1		* 3a	21-22I-1
											* 3b
	素抹	皿	2	959	14H-1	*	3a	14K-1		* 3	22D-1
											* 3a
984				960	25I-1	*	3a	14D-1		* 3a	24E-1
											* 3a

第14表 青磁出土地区表(1)

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
24C F-1	碗	3a		試-1	碗	3		13G	碗	5		27G-1	碗	5	
24B-1	*	3a		試-2	*	3a		9・10CD	*	*		30F-1	*	*	
25I-1	*	3a		表揮	*	3a		13G-1	*	*		31D-1	*	*	
25C-1	*	3		表揮	*	3		13H-1	*	*		31E-1	*	*	
27F-1	*	3a	995	29D-1	皿	3		13H-1	*	*		31E-1	*	*	
27I-1	*	3c	996	25I-1	*	*		13I-1	*	*		31H-1	*	*	
28E-P 8	*	3	997	24I-1	*	*		13L-1	*	*		33B-1	*	*	
28G-1	*	3a	998	18J-1	*	*		13L-1	*	*		35C-土	*	*	
28B-1	*	3	999	23F-1	*	*		12-15G	*	*		35C-土	*	*	
28F-1	*	3		13F-1	*	*		14E-1	*	*		35D-1	*	*	
29E-2	*	3b		14F-1	*	*		14F-土坡	*	*		35F-1	*	*	
29E-1	*	3a		17J-土1	*	*		14H-1	*	*		35G-1	*	*	
29G-1	*	3b		20E-1	*	*		14H-1	*	*		34A-1	*	*	
29E-1	*	3		35D-1	*	*		14H-2	*	*		36C-1	*	*	
30D-1	*	3a	972	32F-1	碗	5		14I-1	*	*		36D-1	*	*	
31G-1	*	3a	973	15G-1	*	*		14K-1	*	*		36D-1	*	*	
31G-1	*	3	974	13L-1	*	*		15EF-2	*	*		37A-1	*	*	
32C-P 9	*	3	975	15K-2	*	*		15F-1	*	*		37A-1	*	*	
32E-1	*	3a	976	13L-1	*	*		15G-1	*	*		38A-1	*	*	
32E-1	*	3a	977	12L-1	*	*		15H-土	*	*		38A-1	*	*	
32E-1	*	3a	978	24B-1	*	*		15I-1	*	*		38A-1	*	*	
32E-1	*	3a	979	20B-J	*	*		16D-土	*	*		38B P-1	*	*	
32B-1	*	3a	980	25H-1	*	*		17M-1	*	*	表揮		*	*	
33C-1	*	3b		9F-1	*	*		18F-1	*	*		*	*	*	
34C-1	*	3a		12F-1	*	*		18-19FG	*	*		*	*	*	
34F-1	*	3a		12G-1	*	*		18H-土	*	*	1130	19K-P 6	*	7a	
35D-1	*	3		12G-1	*	*		18H-土	*	*	1131	15I-1	*	7b	
36B-1	*	3a		13D-1	*	*		18H-1	*	*	1132	36B-1	*	7b	
36A-1	*	3b		13D-1	*	*		18I-1	*	*	1133	34G-1	*	7b	
36F-1	*	3		13D-1	*	*		19JK-1	*	*		12E-G-1	*	7	
37C-1	*	3a		13F-1	*	*		23C-1	*	*		12F-1	*	7a	
37C-1	*	3a		13F-1	*	*		23J-1	*	*		12I-1	*	7b	
38C-1	*	3c		13-14F	*	*		24-25E-2	*	*		13H-1	*	7b	

第15表 青磁出土地区表(2)

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
13F-1		碗	7b	36A-土塊	盤	7		29H-1	碗	9		25G-1	碗	9b	
14I-1	*	7b	1134	15H-1	碗	8a		31C-1	*	*		17G-1	*	9	
16G-1	*	7b	1135	35D-1	*	9a		15I-1	*	*		29D-P8	*	9	
18C	*	7a	1136	29F-1	*	*		18H-1	*	*		24I-1	*	9b	
18J-1	*	7b	1137		*	*		22B-1	*	*	1150	21-22I-1	*	10	
18~19FG	*	7b	1138	32F-1	*	*		17H-1	*	*	1151	32C-1	*	*	
19B-1	*	7b	1139	35D-1	*	*		25J-1	*	*	1152	36F-1	*	*	
19K-1	*	7b	1140	18C-1	*	*		24G-1	*	*	1153	17K-1	小碗		
20J-1	*	7b	1141	14J-1	*	9b		20A-1	*	*	1157		盤		
24G-J-1	*	7b	1142	18I-1	*	*		12F-1	*	*	1158	34A-1	*		
29E-1	*	7b	1143	19K-1	*	9a		23J-1	*	*	1159	18-19FG-1	*		
31E-1	*	7b	1144	26G-1	*	9b		20B-1	*	*	1160	14F-1	蓋		
33H-1	*	7	1145	24I-1	*	*		33B-1	*	9b		24H-1	*		
34B-1	*	7b	1146	36F-1	*	*		16D-1	*	*		9D-1	*		
37A-1	*	7b	1147	23A-1	*	*		36E-1	*	*		9-10C-D	*		
37A-1	*	7	1148	15H-1	*	*		17~19C-1	*	9b		23A-1	*		
38a-1	*	7b	1149	33B-1	*	*		19H-1	*	*		16D-1	*		
表採	*	7b		25I-1	*	9		24B-1	*	9		9F-1	*		
1154	盤	7		表採	*	9a		14I-1	*	9b		12~15G-1	*		
1155	31C-1	*	*	30F-1	*	9		24I-1	*	9		19J-2	*		
1156	26G-1	*	*	21G~P-1	*	9		19H-1	*	9b	1161	31E-1	香炉		
9F-1	*	*		17A-1	*	9		19C-1	*	9					
12G-1	*	*		22J-1	*	9		18F-1	*	9b					
13L-1	*	*		24J-1	*	9		14K-1	*	*					
14F-1	*	*		18I-2	*	9		17G-1	*	*					
14E-1	*	*		31G-1	*	9		22L-1	*	*					
22K-1	*	*		32E-1	*	9		33D-1	*	*					
26G-1	*	*		32F-1	*	9		16-26 表採	*	*					
28J-1	*	*		24J-1	*	9		12G-1	*	9					
29G-1	*	*		12~15G-1	*	9		22D-1	*	9b					
31E-1	*	*		34C-1	*	9		22G-1	*	9					
31D-1	*	*		36C-1	*	9		13L-1	*	9b					
35G-1	*	*		38d-1	*	9		19H-1	*	*					

第16表 青磁出土地図(3)

②白磁(第132図)

平安～鎌倉時代までの白磁は、碗と皿に分けられる。

碗 (1000~1018) 碗は6種類出土している。1b類1000は高台外面を直に、内面を斜に削り出されたものである。体部下半には施削りの痕を残す。内底見込みに段を有する。磁胎は灰白

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類			
1000	25C-1	碗	1b'	35C-1	碗	1e	1026	15I-1	皿	2	33E-1	碗	4	
1001	25C-1	*	le	35D-1	*	le	14H-1	碗	3b	36F-1	*	4		
1002	31D-1	*	le	36a-1	*	le	12L-1	*	3b	1030	15F-P ₁	皿	4	
1003	23A-1	*	le	36D-1	*	le	1027	24B-1	皿	3	1031	19J-1	*	4
1004	21J-1	*	le	37A-1	*	le	1028	15E F-1-2	*	3	1032	24C-1	*	4
1005	24H-1	*	le	38a-1	*	le	1029	16E-1	*	3b	1015	30F-1	碗	5
1006	25J-1	*	le	1019	22J-1	皿	1b'	13F-1	*	3	1016	35G-1	*	5
1007	18H-土4	*	le	1008	19a-1	碗	2	13G-1	*	3	1017	16-17D-1	*	5
	30C-1	*	3b'	1009	18J-P ₁	*	2	15D-1	*	3	14D-1	*	5	
	12I-1	*	le	1010	14E-1	*	2	15F-1	*	3	25J-1	*	5	
	13J-1	*	le	1011	23A-1	*	2	16A-1	*	3	26H-1	*	5	
	13F-1	*	le	1012	32F-1	*	2	12J-1	碗	4	29F-1	*	5	
	14F-1	*	le	1013	9-10C-D-1	*	2	12J-1	*	4	31J-1	*	5	
	14J-1	*	le	1014	14H-1	*	2	13G-1	*	4	32F-1	*	5	
	14H-1	*	le	13G-1	*	2	14F-1	*	4	1018	19C-1	*	6	
	15H-1	*	le	13G-1	*	2	14I-1	*	4	10-12D-1	*	6		
	16-18F-1	*	le	15H-土1	*	2	14J-1	*	4	12F-1	*	6		
	17G-1	*	le	15H-2	*	2	14H-1	*	4	12J-1	*	6		
	17H-1	*	le	18H-土1	*	2	14K-1	*	4	14F-土1	*	6		
	18C-1	*	le	21K-1	*	2	14-15F-1	*	4	15E-P ₁	*	6		
	19H-1	*	le	23A-1	*	2	15E-1	*	4	15F-1	*	6		
	19J-1	*	le	24D-1	*	2	15F-1	*	4	18H-土1	*	6		
	22B-1	*	le	30F-1	*	2	15I-1	*	4	21I-1	*	6		
	23F-1	*	le	31C-1	*	2	16F-1	*	4	24F-1	*	6		
	24B-1	*	le	32F-1	*	2	17H-1	*	4	32B-1	*	6		
	24I-1	*	le	36B-P ₁	*	2	17K-1	*	4	32E-1	*	6		
	28F-2	*	le	38B-1	*	2	21F-1	*	4	33C-1	*	6		
	29J-1	*	le	1020	29F-1	皿	2e	22C-1	*	4	33E-1	*	6	
	29F-1	*	le	1021	32H-1	*	2	23F-1	*	4	33G-1	*	6	
	32C-1	*	le	1022	32E-1	*	2	28G-1	*	4	36B-P ₁	*	6	
	33H-1	*	le	1023	14R-1	*	2	31E-1	*	4	36C-土1	*	6	
	34D-2	*	le	1024	35F-1	*	2	32E-1	*	4	36D-1	*	6	
	35A-1	*	le	1025	35F-1	*	2	32P-1	*	4	36F-1	*	6	

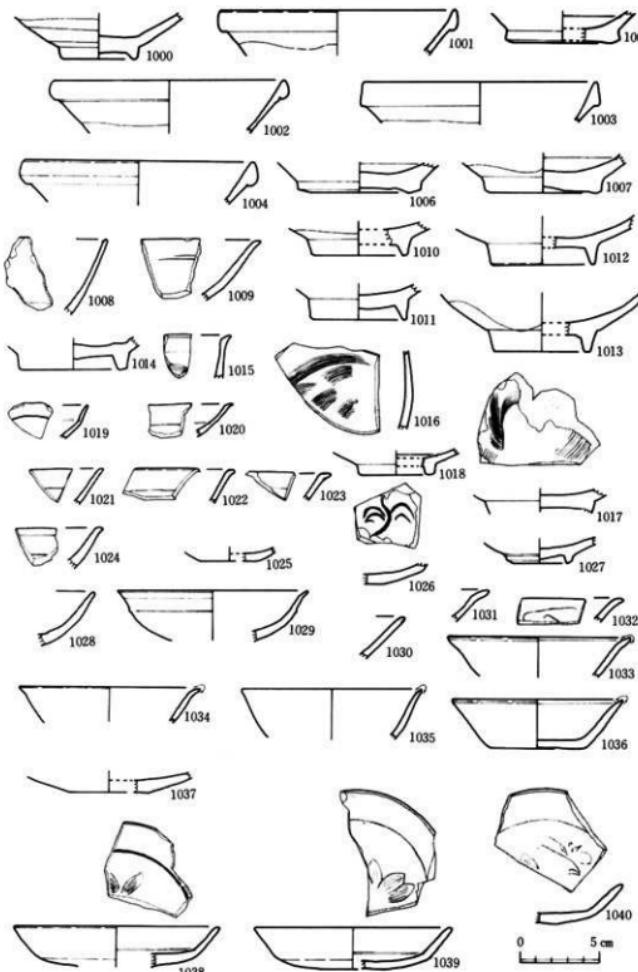
第17表 白磁出土地区表(1)

色で光沢のある黄色味を帯びた釉は、体部下半には施釉されず、貫入を見る。1c類1001～1007は口縁部・底部に分けられる。復元口径14.5cm内外である。口縁部は玉縁をもつものである。磁胎は灰白色で、黒粒を含む。いずれも光沢のある白色で体部外面下半には施釉されない。底部は、見込みに沈線状の段を有する。高台は幅広で浅く削り出している。磁胎・釉色は前者に類似し、1007は高台脇まで施釉する。2類1008～1013は口縁部と底部である。口縁部は、外開きのもの、外反させ先端を平らにするものである。底部高台は、高く削り出されている。磁胎は灰白色で青味を帯びたものや、灰白色釉を施す。1008・1010～1013は体部下半には施釉しない。1013は見込みに沈線を施す。1008・1012には貫入をみない。3b類1014は断面台形状を呈する。磁胎は灰白色で乳白色釉を施す。見込みの部分の釉を円形にかきとつてあり、内底見込みに段を有する。5類1015～1017は内面に櫛目による有文をもつものである。1015は口縁部を「く」字状に外反させている。磁胎は灰白色で黄緑色釉を施す。6類1018は高台が小さく器肉が薄い。磁胎は白色で黄灰色の総釉である。見込みに一条の沈線をもち、貫入を見る。

皿(1019～1040)皿は7種類出土している。1b類1019は胴部付近から口縁部に外傾する。見込みは胴部屈曲部付近から成る。薄い器肉をもち貫入が入る。磁胎・釉は1000に類似する。2類1020～1026は口縁部と底部片である。口縁部はいずれも「く」字状に外反し、全体的に器肉は薄い。1020・1024の見込みは1019に類似する。1024は内器面口縁部、1022・1023は内器面体部にそれぞれ沈線を施す。磁胎は灰白色、淡緑色釉を施す。1025・1026の磁胎は白色・灰白色を呈し、釉は青味を帯びたもの、くすんだ緑色を施す。1025の器形は1026に似る。見込みには花文様を施し、いずれも貫入をみ。平底を呈す。3a類1027は小さな高台をもつ。磁胎は灰白色で黒粒を含む。見込みでは釉を円形にかきとつてある。外面体部下半には施釉されない。3b類1028・1029の口縁部は外反し、磁胎は白色で、白色釉を施す。見込みは釉がかきとつてある。1029は外面体部に沈線をもつ。4類1030～1032は外反する口縁をもつ。磁胎は灰白色で、1032のみ白色である。前者は淡緑色釉、後者は白色釉が施され内面に沈線文様が描かれる。1031に貫入をみる。6類1033～1036は口縁部が口禿となり、平底へ続く。図面に矢印を施す。磁胎は灰白色で黒粒を含むものもある。1035は白色の磁胎に白色釉を施す。7類1037～1040は磁胎は灰白色で光沢のある淡緑色釉、灰褐色がかかり1037・1038は貫入をみる。体部中間で「く」字状に立ちあがり、見込みはその屈曲部から始まる。見込みには花文様を描き、貫入をもみる。

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
	表探	碗	6	18I-2	碗	7	1171	33H-1	碗	10	17L-土壤	碗	10		
1033	38A-P ₁	皿	6	1037	17A-1	皿	7	15I-1	*	10	29G-1	*	10		
1034	36B-P ₂	*	6	1038	18C-1	*	7	15I-1	*	10	31E-1	*	10		
1035	15H-P ₁	*	6	1039	14-15EF-1	*	7	15I-1	*	10	32E-1	*	10		
1036	15G-1	*	6	1040	15-14F-1	*	7	16-17D-1	*	10	32F-1	*	10		
	12H-1	碗	7	1170	16-17D-1	碗	9	17C-1	*	10	34C-1	*	10		

第18表 白磁出土地区表(2)



第132図 白磁

(6)古銭（第133図）

古銭は2点出土した。1つは「開元通寶」で無背、肉太である。径2.3cm、量目2.40gを計る。

1つは「熙寧元宝」で無背、径2.4cm、量目2.40gを計る。

(7)綠釉土器（第134図）

施釉土器は7点出土した。1041は薄手の軟質の壺で、外外面に綠釉を施すが剥落が著しい。微細貫入をみる。1042はやや硬質に焼き上ったもので内外に綠釉を施釉する。1043～1045までは還元気味に焼成されたもので、1045が濃い緑色を呈するほかは、薄い緑色を呈す。なお1045の見込み底には2条の沈線と曲線の沈線文がみえる。1046は軟質で見込みに3条の沈線が巡る。綠釉は底部以外にかかる。1047は見込みの沈線内にのみ綠釉が残存するが、他は剥落したものである。底部にはかからない。

(8)墨書き土器（第134図）

1048～1063までが墨書き土器である。墨書きされた土器の器形は壺、皿である。

墨書きは文字、記号、戲画と思われるものであるが、判読不明なものが多い。これらのうちで1051は壺の胴部に口縁部に向け「用」と墨書きする。1049、1054には「匱」、1058には「匱」印を墨書きする。1050、1060、1063は戯画か記号の類であろう。

他は細片や剥落のため判読不明である。

(9)土製品（第134図）

土製品には紡錘車、土鍤、ふいご口がある。1064は紡錘車で壺の底部の再利用に見られるが、孔の周縁に胎土が盛り上っていることから、焼成前に穿孔して焼成したもので、紡錘車として頭初より焼成したものであろう。1065～1071は中央部がふくらみ、両端がすぼまる形の土鍤で、長軸の中心部に孔を穿つ。長軸は3.5cm前後の細身のもの（1065～1067）と、長軸4.5cm前後のやや太身のものがある。1072、1074はふいご口残欠である。中央部に孔がある円筒状のもので表面に鉄滓が付着している。全体の形状は不明である。

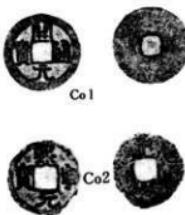
(10)石製品（第135図）

石製品には石鍋、滑石製品、砥石、軽石製品がある。

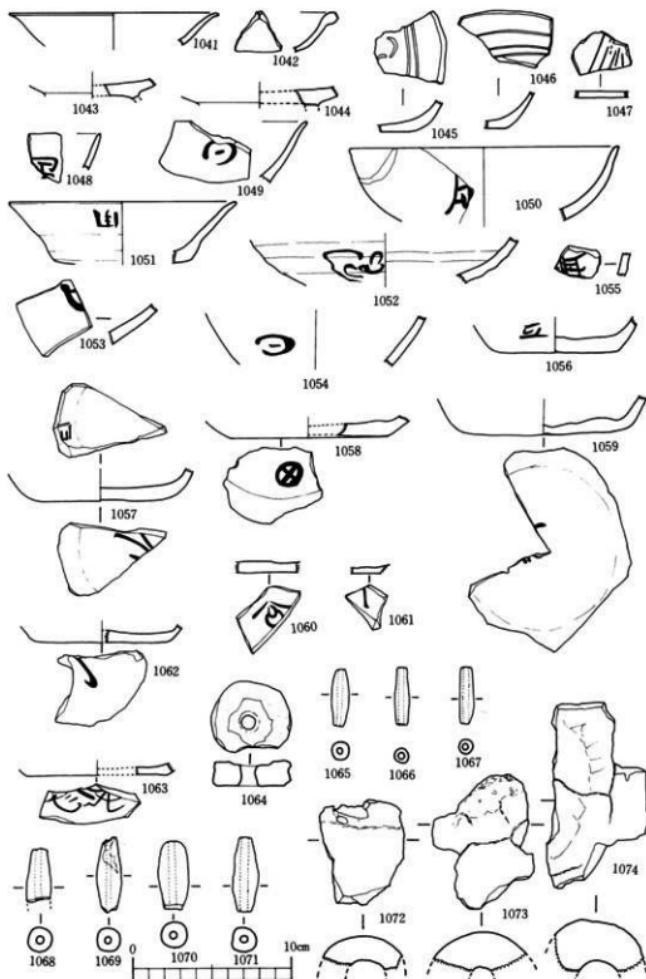
S25～S31が滑石製石鍋である。このうちS26は復元口径26cm、同器高7.5cm、同底径19cmを測り、肩部に鈎状突起をもつ平底の滑石製石鍋で、器面には縦位にノミ痕が観察されるとともに煤が付着している。

その他の石鍋の復元口径はS25（21.7cm）、S27（26cm）、S28（21.9cm）、S29（15.4cm）を測る。S30、S31は石鍋の残欠、S33～S36は滑石製石製品で、S35、S36には穿孔がある。S37～S40までは砥石でS37、S38は凝灰岩を利用したものである。S39は頁岩、S40はシルト岩である。

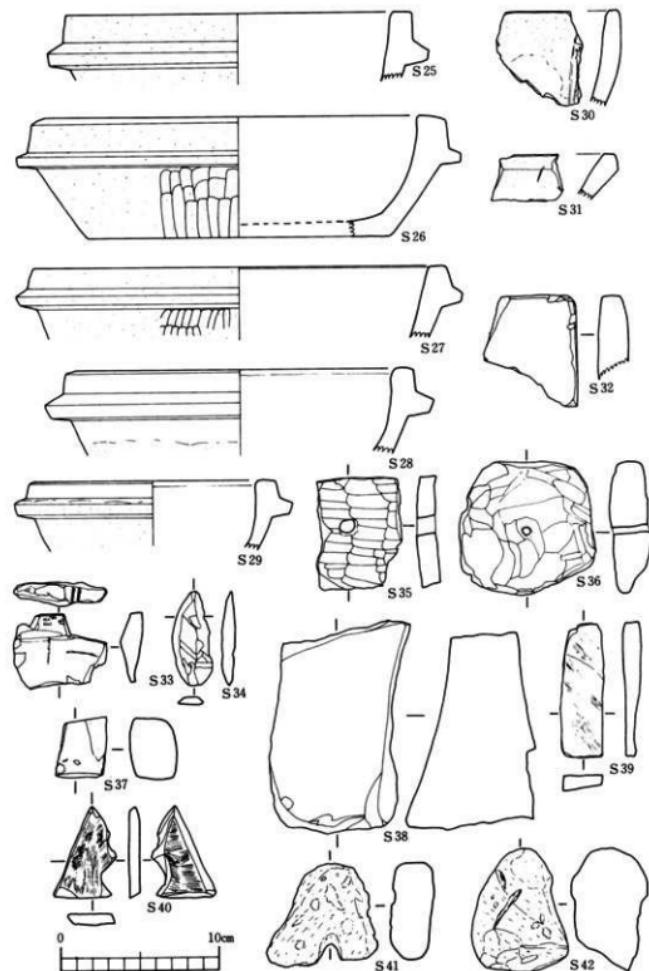
S41、S42は軽石を加工しているが、形状、用途とともに不明である。



第133図 古銭拓影



第134図 緑釉土器・墨書き土器・土製品



第135図 石製品

第6章 室町・安土桃山時代

この時代の遺構としては、墓塚9基と性格不明の土塙数基が検出された。

1. 中世墓

中世の墓塚としたものは、人骨は認められなかつたが副葬品と思われる古銭（洪武通宝）と数珠等を検出したもの1基と、副葬品は検出されなかつたが骨粉状のものが残つてゐた円形の土塙8基である。



第136図 室町時代以降の遺構配置図

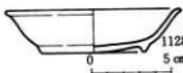
(1) 墓塚A

17K・L区に検出されたもので、上面で1.2m～1.3mを測る略円形を呈する。深さ約40cmで約20cm幅の平坦な段をもつた後、20cmの落ち込みをもつ。底は長径60cm、短径50cmの梢円形を呈する。中の埋土は黒褐色を呈し、墓塚の中位にはほぼ水平の状態に白磁の完形品が検出された。また、段上には人頭大の角釦1個が置かれていた。中央の落ち込みには古銭「洪武通宝」が4枚、環状の銅製品が3個、数珠が227個散乱していた。人骨は検出されなかったが、これらの出土遺物から中世の墓塚と判断した。

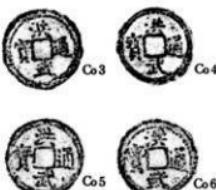
出土遺物で、1128は白磁の皿である。口径11cmを測り、磁胎は白色で、光沢のある白釉がかかる。盤付周辺は露胎で、外底には目砂が付着している。古銭4枚はすべて洪武通宝で、Co3は外径2.46cm、厚さ0.15cm、Co4は外径2.36cm、厚さ0.16cm、Co5は外径2.43cm、厚さ0.17cm、Co6は外径2.38cm、厚さ0.15cmを測る。Co5の背面上に「浙」の字がある。環状の銅製品のうち2個は1.2mmの銅線を径8.2mmの環状にしたものである。もう1個は2.5mm幅の板状銅板を環状にしてあるが、半分品である。数珠はガラス製で、総数227個のうち、緑色101個、紫色95個、白色28個、青色3個出土した。大部分の径は2～5mmであるが、白色1個は9mm、青色1個は9.8mmと大ものが2個あった。

(2) 墓塚B～I

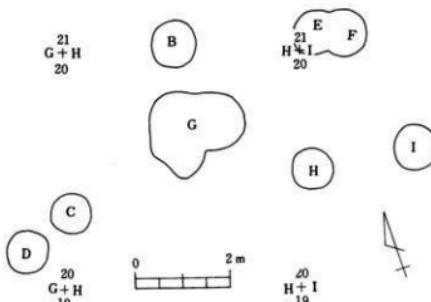
20H・I付近に検出された円形の土塚で、土塚内に骨粉らしきものが残っていることから墓塚とされた。墓塚B～F、H・Iは、径が90～100cmの円形を呈し、深さ25～60cmの浅い墓塚である。墓塚Gは、2基以上の墓塚が切り合っていると思われるが、深さが一定のため切り合いは不明である。いずれも遺物は検出されなかった。



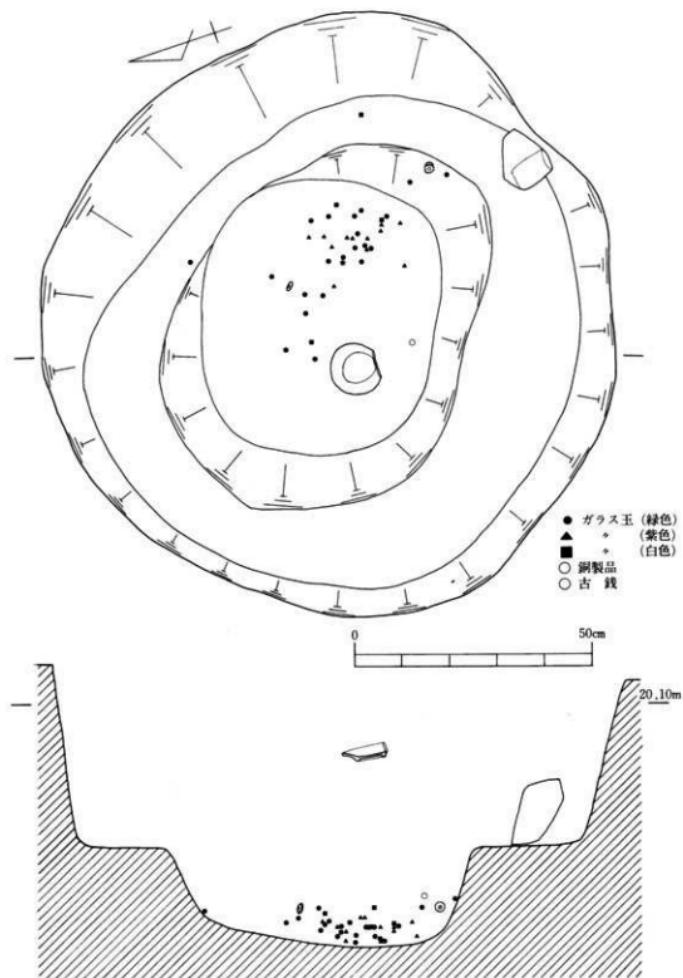
第137図 中世墓A出土の白磁



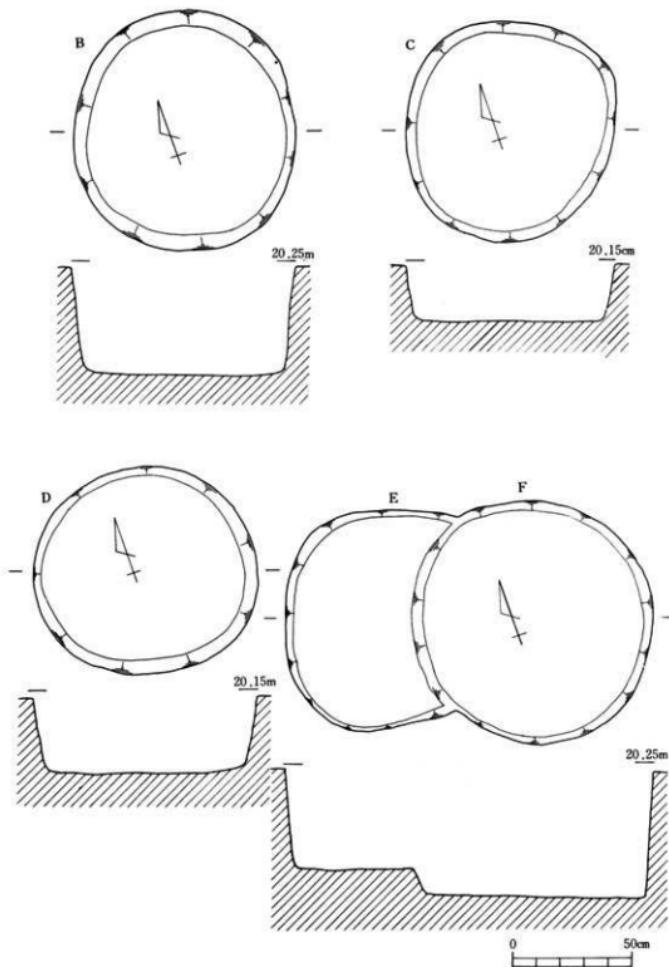
第138図 古銭拓影



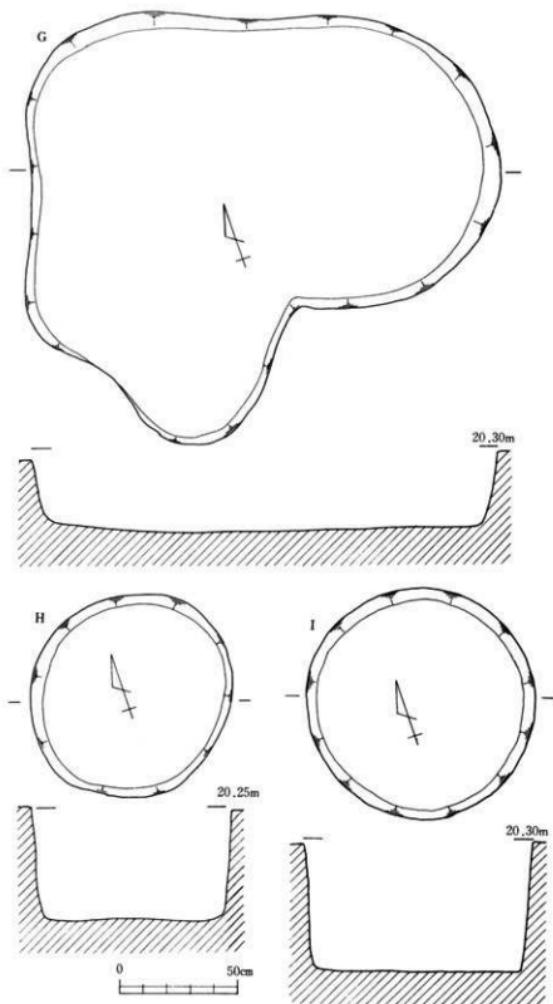
第139図 中世墓B～I配置図



第140図 中世墓A



第141図 中世墓B～F

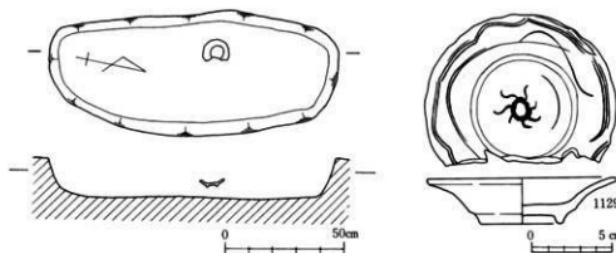


第142図 中世墓G～I

2 土塙

土塙L

36A・B区に検出されたもので、長径120cm、短径50cm、深さ15cmを測る長楕円形を呈する。埋土中に青磁が出土した他は何も検出されなかった。青磁(1129)は皿で、青緑色を呈し、全面に貫入がみられる。周縁を棱花様につくり、内側面に2~3条の沈線文をめぐらす。



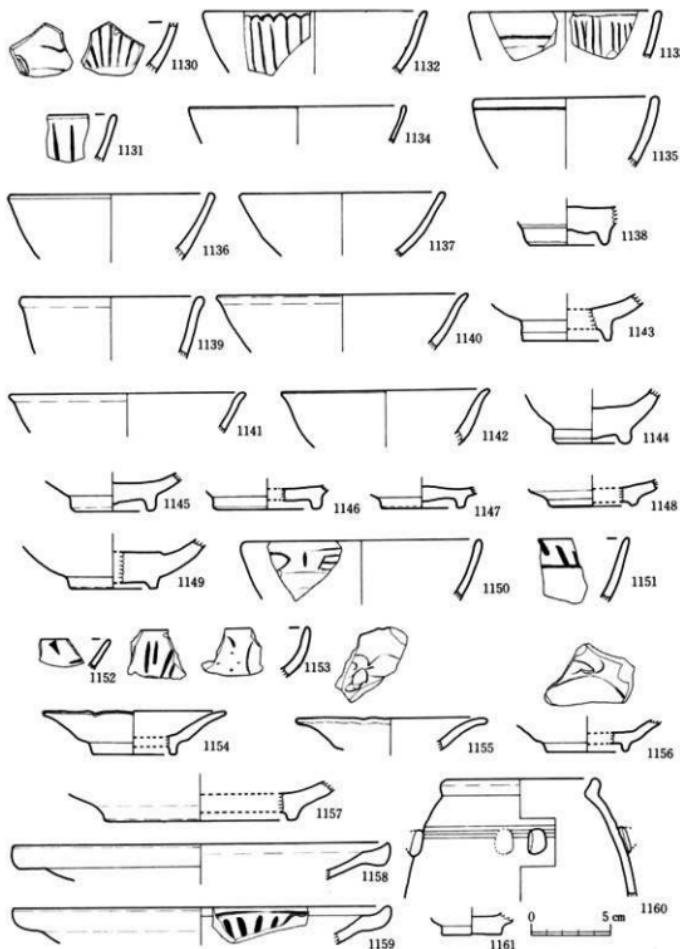
第143図 土塙Lとその出土遺物

3 損乱層出土の遺物 (第144図)

室町時代の青磁は、器形によって碗・小碗・皿・盤・壺・香炉に分けられる。

碗 (1130~1152) 碗は5種類出土している。7類は文様によって2つに分けられる。7a類1130は磁胎が灰白で灰色釉を施す。体部には蓮弁文を浮き出している。7b類1131~1133は復元口径12cm~14cmで外縁に口縁部をもつ。磁胎は灰白色で光沢のある緑色釉を施す。いずれも体部には蓮先による線描蓮弁文をもつ。また1133は内側面に2条の沈線をもつ。8類1134~1138は口縁部が直口する器形をもつ。1135は若干内湾氣味である。1134・1135は光沢のある緑色釉で、1134の器肉は薄く、磁胎は灰白色である。1135の口縁直下には回線が施される。1136・1137は灰色の磁胎をもち、前者は光沢のある灰色釉、後者は灰黄色釉となる。1134・1136に貫入をみる。1138は細くて高い高台をもち、器肉が厚い。磁胎は白黄色で光沢のない黄味を帶びた釉を施す。9類1139~1142は口縁部、1144~1149は底部である。口縁部はいずれも外反し、磁胎は灰白色で、1140は茶褐色を呈し、前者は緑色釉、後者は茶褐色釉となる。底部はいずれも断面四角の高台をもつもので、1143~1145・1149は腰部にかけて膨らみをもつ器形である。外底は露胎で、磁胎は致密で灰色を呈す。1143・1147は見込みに一条の沈線を施し、1149は回線状にかきとられ見込みと体部との境に段を有する。いずれも貫入が入る。10類1150~1152はいずれも内湾氣味の器形をもつ。磁胎は灰白色で光沢のある緑色釉を施す。口縁下に雷文帯を施し、1150・1151で貫入をみる。

小碗 (1153) 1153は口縁部が内湾し、口唇部は丸く仕上る。磁胎は白黄色、光沢のある黄



第144図 青 磁

緑色の施釉となる。内面には凹線文、外器面には沈線文を施す。

皿 (1154～1156) 復元口径11.5cm内外の小型皿である。1154は磁胎が灰黒色で、2次的に火を受けたらしく、にぶい光沢で黄味を帯びている。口唇部には波状文の陰刻を有す。1155は灰白色の磁胎で、青味を帯びた釉が厚めにかけられている。体部内器面には花文様を施すが判然としない。1154と同種の口唇部をもつ棱花皿である。1156は磁胎・釉・文様とともに1154に類似する。

盤 (1157～1159) 推定口径23.3cm前後である。1158・1159は口縁部を「く」字状に折りまげ、先端ではさらに立ち上る器形である。1159の内面体部には蓮弁文が描かれる。磁胎はともに灰白色で、貫入のある緑色釉となる。1157は磁胎・釉ともに前者に似る。総釉で外器面体部に蓮弁文を施す。

壺 (1160) 推定口径10cmである。肩部に2本の沈線が入れられ、四耳がつけられるものである。胎土は灰黄色で、内面には黄味を帯びたもの、外面には暗緑色の釉がかかる。

香炉 (1161) 磁胎は灰白色で、高台は光沢のある灰色釉を施した上げ底気味の底部である。

(2)白磁 (第145図)

胎土は白色を呈し、釉は薄く光沢のある灰白色・黄白色釉を施す。文様・高台・器形等により3つに分けられる。8種 (1162～1164) は口縁部が直行する小碗1163、外反する1162は碗である。釉は総釉のもので、1164は見込みに一条の界線を施し界線中に草花文をもつ。外器面体部下半は露胎である。9種は小さな高台をもつ小碗である。高台が部分的に抉り取られた1167～1170がある。うち1170は8角形の棱をもつ器である。また抉りをもたない1166もある。総釉のものと体部下半が露胎のものがある。10種は口縁部が外反し、総釉で、背付は露胎である。1174はやや大形の合子蓋である。縁辺に菊瓣をめぐらし、甲は素文である。胎土・釉とともに純白で光沢をもち、福建省德化窯製品とみられる。

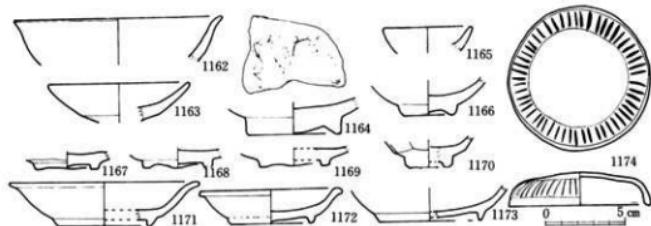
(3)染付・天目 (第146図)

染付1175～1178は、皿である。1175は端反り口縁である。磁胎は白く、淡青色の釉で貫入をみる。口縁部外側に一条の界線を描く。1176の磁胎は白色、内器面から外底にいたるまで淡青色の釉が施され、貫入をみ高台においては釉をかき取ってある。見込みの二重円圈文中に文様を描き高台脇にも二重の界線が施される。1177・1178は甚筋底皿である。光沢のある淡青色の施釉をみると、底部付近の一部には施釉されない所もある。1177・1178は見込み界線を有し前者はその界線中に草文を、外面胴部付近に、界線を巡らし、後者は界線中に「寿」の文字を描く。1179は天目碗である。胎土はきめ細かで、若干上げ底風の底部である。見込みに光沢のある黒色厚手の釉が施される。釉は外器面底部付近には施釉されない。

(4)陶器 (第147図)

甕1180、摺鉢1181・1182等が数点出土している。甕は茶褐色・灰黒色を呈し致密で砂粒を含む胎土で、硬く焼きしめられている。中には黄緑色の自然灰釉を生じた常滑焼もある。1181は口縁部に断面三角形の突帯をもつ片口の鉢片である。内器面に数条のかき目を施し、黒灰色の

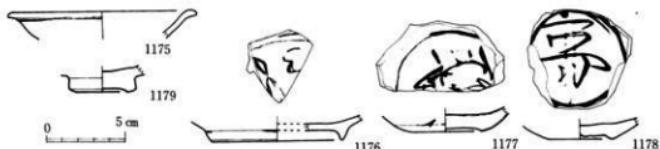
自然灰釉がかかる。1182は胎土に小礫を含み硬く焼きあげられた備前焼である。口縁部は直立し、内面に数条の櫛目のかき上げを施す。器面には黄味がかった茶褐色の胡麻を生じている。



第145図 白磁

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
1162	26 I - 1	碗	8	1167	18C - 盛	小碗	9	15 I - 1	皿	10	
1163	20D - 2	小碗	*	1168	13H - 1	*	*	31E - 1	*	*	
1164	16D - 1	碗	*	1169	37d - 1	*	*	17C - 1	*	*	
	17G - 1	*	*	1170	16・17D - 1	*	*	16・17D - 1	*	*	
	30C - 1	*	*		29G - 1	*	*	29G - 1	*	*	
	26H - 1	*	*		表 採	*	*	15 I - 1	*	*	
	30F - 1	*	*	1171	33H - 1	皿	10	34C - 1	*	*	
	24A - 1	*	*	1172	32E - 1	*	*	1174		合子蓋	
	24C ~ F - 1	*	*	1173	16・17D - 1	*	*				
1165	25D - 1	小碗	9		32F - 1	*	*				
1166	21J - 1	*	*		15 I - 1	*	*				

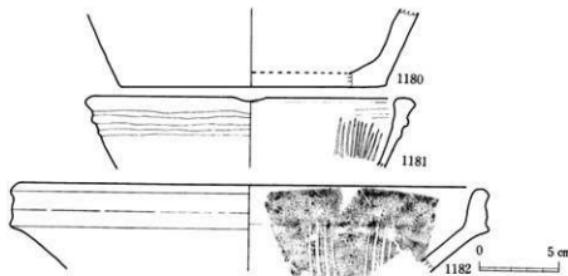
第19表 白磁出土地区表



第146図 染付・天目

番号	出土区	器種	備考	番号	出土区	器種	備考	番号	出土区	器種	備考	番号	出土区	器種	備考
1179	16K-2	碗	天目	1176	31E-1	皿	染付	24C-1		染付		38D-1		染付	
	34F-1	*	*	1177	16-17D-1	*	*	30E-1		*					
	32F-1	*	*	1178	25G-1	*	*	31C-1		*					
	21E-1	*	*		13H~J		*	33C-1		*					
1175	22E・土塀	皿	染付		16E-1		*	37A-1		*					

第20表 染付・天目出土地区表



第147図 陶器(甕・擂鉢)

番号	出土区	器種	備考	番号	出土区	器種	備考	番号	出土区	器種	備考	番号	出土区	器種	備考
1180	35A-1	甕	備前		37d-1	甕	常滑	30F-1	甕			21D-1	擂鉢	備前	
	33E-1	*		33B-1	*	*		23F	*			23C~D-1			
	24J-1	*		24A-1	*			29G-1	*						
	33C-1	*		22B-1	*			18I-2	*						
	19E-1	*		32G-1	*			22B-1	*						
	34F-1	*		25G-1	*			12G-1	*						
	13D-1	*		22F-1	*			1181	18I-1	擂鉢					
	33E-1	*		16J-2	*			1182	16F-1	*	備前				
	33B-1	*	常滑	16-17D-1	*			31C-1	*	備前					

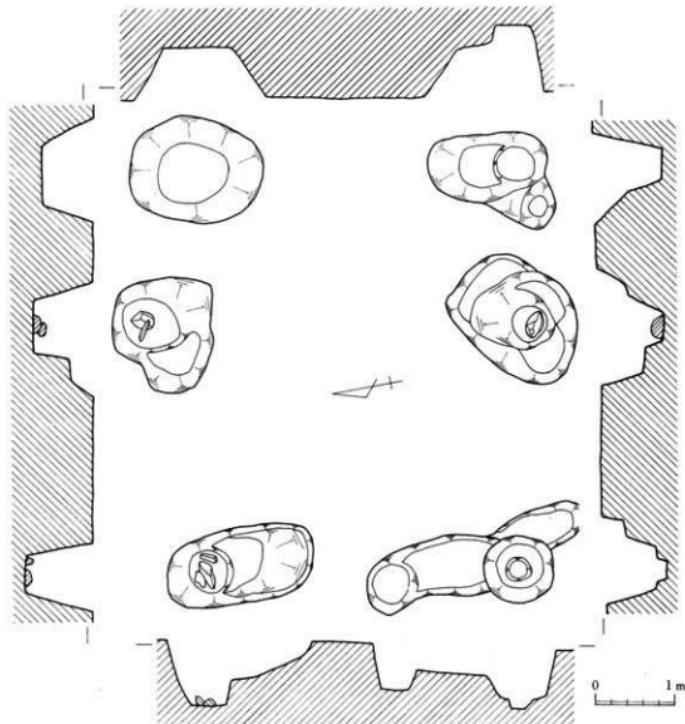
第21表 陶器出土地区表

第7章 江戸時代

江戸時代の遺構は、掘立柱建物1基、溝状遺構2条、墓28基が検出され、擾乱層には全体にわたって近世遺物が出土した。

1 掘立柱建物12

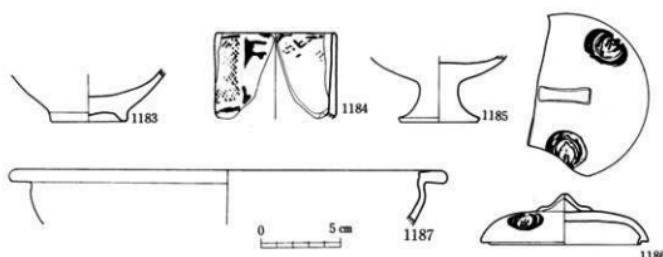
16・17E・F区に検出されたもので、南北方向に1間(4m)、東西方向に2間(5m)の掘立柱建物である。柱穴の直径は80~120cm、深さは60~90cmを測る。柱穴のうち3基には、根石がある。



第148図 掘立柱建物12

柱穴内には、柱穴の埋土中に磁器、陶器片が出土した。1183は黒褐釉を施す薩摩焼、1184は磁器染付の筒形碗で、胸部には窓絵、見込み口縁部には松皮文を呂須で画く。1185は薩摩焼の高环で褐釉がかかる。1186は磁器蓋で、紐を中心にもん線と3対の文様を画く。

1187は薩摩焼の甕で内外とも褐釉がかかるが、焼成は良くない。



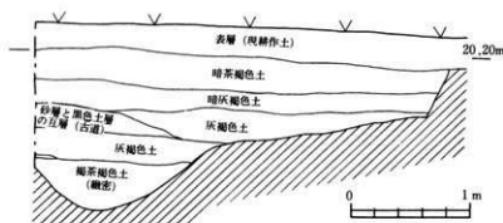
2. 溝状遺構

(1)溝状遺構 3

22C区から24J区へ東西方向に続いている近世の遺構である。22C区から22D区にかけてはゆるやかな傾斜をもって下降するが、22E区から西侧はやや平坦となって、用地外へ延びている。上幅は0.5m～2.5m、底幅0.3m～1.5mを測り、深さ約0.7mを残すU字溝である。埋土は暗茶褐色を呈し、近世の遺物が多く包含する。

(2)溝状遺構 4

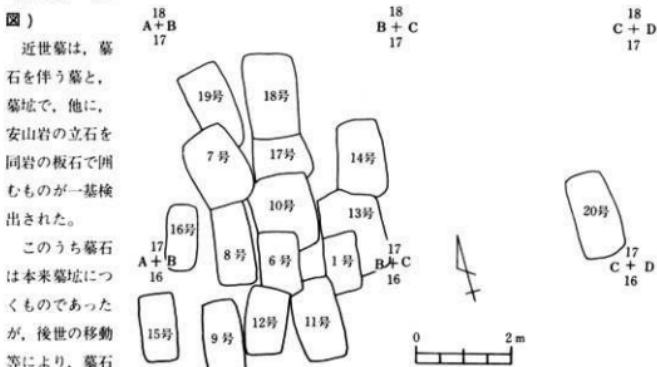
進跡を2分する農道の下に検出された溝状遺構で、23A区から23J区にかけて延びている。両端は用地外に延びる。25I区付近では、上幅約3m、下幅1mの幅広い形状を呈す。底のレベルにはほとんど変化がない。溝は段になっており、段と同じ面の溝上には砂層と黒色土層の互層があり、その表面は酸化鉄によって固くなっている。これは近世の古道と思われるが、東側にある現在の掘り切りへの登り口に続いている。底の埋土は致密な褐茶褐色土である。埋土中には近世以前の遺物が数多く含まれている。



第150図 溝状遺構4断面図

3 近世墓

(第 151~153)



第 151図 近世墓 1群配置図

ただし、墓塙 1群と第 153図の墓石は同一地域であり、本来は一体のものとみてよいであろう

また墓塙 2群 (19, 20-B区) の墓石は失なわれていた。

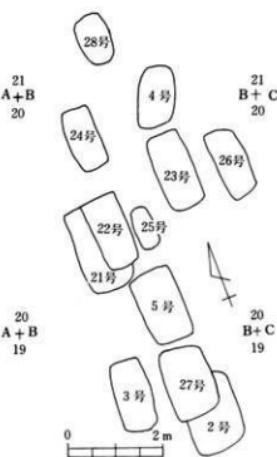
これ等のことから、近世墓は19, 20-B区の1群と、17, 18-B区の1群とに分けられる。

(1) 墓石 (第153図)

墓石は凝灰岩を使用したもので、発掘時点ではすでに倒壊し、現位置を示すものが確定は困難であった。

このことは墓石を除き、その下を発掘しても墓塙の重なり合いや、墓石の移動により埋葬部の墓塙と一致しなかったことからも是認されよう。

従って本項では墓石に刻まれた年代を記述していくが、ただ、近世墓標以外に他の墓石がないことから、埋葬部の墓塙とはほぼ一致する時代とみてよいであろう。



第 152図 近世墓 2群配置図

台座は40~45cm前後の凝灰岩を使用し、中心部には径8cm前後の柄穴を穿つ。墓標は凝灰岩を同様に使用し、正面あるいは裏面に戒名、俗名や死亡年月日を刻む。

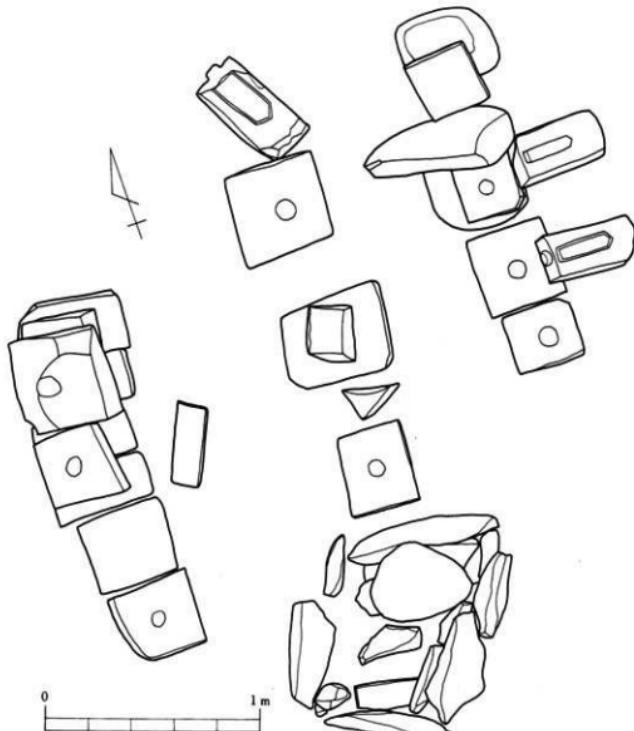
1つには正面中央部に「良積得定門」、右に「正徳二年」、左側に「三月七日」。

1つは「玄秋口門」、右に「文化七年」、左に「七月八日」と刻み、墨を入れてある。

1つは「江口定門」、右に「寛政八年」、左に「八月廿六日」、裏面には「小屋敷元、仲右エ門」と刻む。

その他に「寛政九年 秋山 信女 八月口三日」、裏面に「小屋敷 金兵衛母」。

「文化九年 口翁 定門 正月十九日」、裏面に「小屋敷元 父 金兵衛」



第153図 近世墓2群の墓石平面図

「安永三年 藤松信士 □□十六日」と刻むものがある。

ちなみに正徳2年は西暦1712年であり、文化9年は1812年であることから、少なくとも1700年代までは測ることができる。

また俗名とともに「小屋敷元」と居住地を刻んでいるが、本遺跡を含む地域を、土地の人々は「コヤシキモト」と呼んでいることから、当地に葬られた人々の居住地が知れる。

墓石のほか、B-17、18区には長軸105cm、短軸90cmの平面形が矩形になった安山岩の板石で囲まれた1隅に安山岩質の一枚石を立石するものが検出された。

この石囲いの下には何らの遺構も検出されなかったが、墓石に代る1つの墓かとも考えられる。

(2) 墓域

1. 1号墓域（第154図）

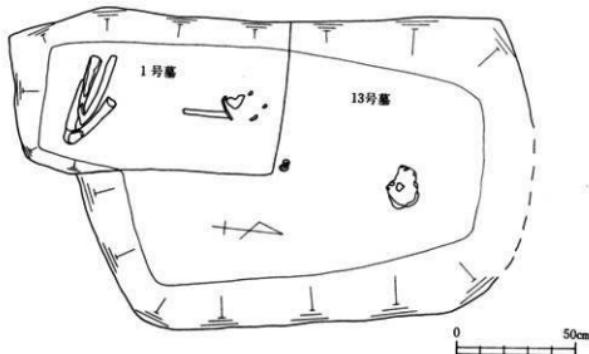
17-B、16-B区に検出されたもので、11号墓域、13号墓域と切合う。

長軸113cm、短軸65cm、深さ120cmを測る平面形、長方形を呈し、長軸はN-13°Eにとる。人骨は頭蓋、四肢骨、大腿骨等であるが遺存度はあまりよくない。頭位は北である。

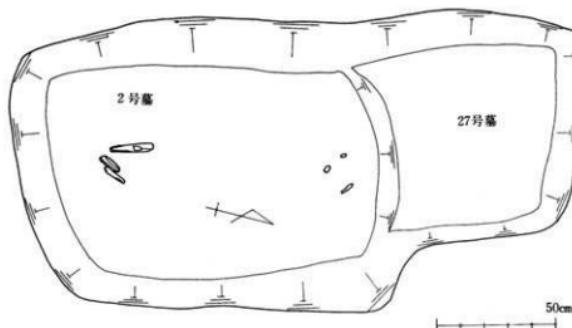
副葬品は検出されなかった。

2. 2号墓域（第155図）

19-B区に検出されたもので、27号墓域と重複す。切合の観察では、27号墓域後と考えられる。長軸159cm、短軸121cm、深さ118cmを測る平面形、隅丸方形で、長軸はN-1°Wにとる。埋葬人骨の遺存度は極めて悪く、一部の骨が検出されたにすぎない。



第154図 1・13号墓



第 155図 2・27号墓

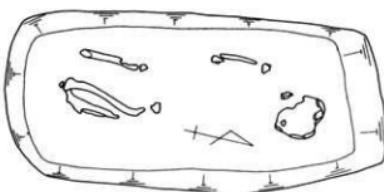
3. 3号墓塚 (第 156図)

19-B区に検出されたもの
である。

長軸 159cm, 短軸75cm, 深
さ86cmを測る。平面形は長方
形を呈す。長軸はN-3°-E
にとる。

頭位は北であり、頭蓋、大
腿骨等が遺存していた。

副葬品は検出されなかつた



3号墓

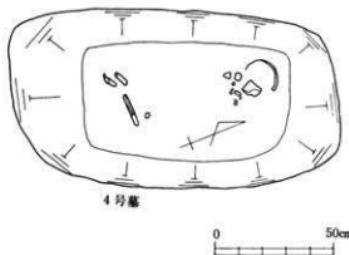
4. 4号墓塚 (第 156図)

20-B区に検出された。

長軸 136cm, 短軸 75 cm,
深さ44cmを測る。平面形は隅丸
方形を呈し、長軸はN-20°-
Eにとる。

頭位は北にとる。

副葬品は「寛永通宝」7枚
であった。



4号墓

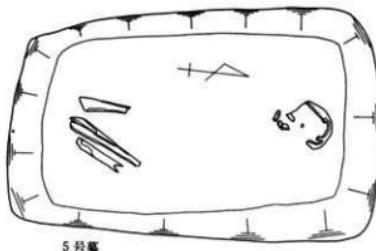
第 156図 3・4号墓

5. 5号墓址（第157図）

19, 20-B区に検出されたもので、長軸 156cm、短軸 96cm、深さ 92cm を測る。平面形は長方形を呈し、長軸は N-3°-W にとる。

頭位は北にあり、頭蓋、四肢骨等が検出されたが、遺存度はあまり良くない。

副葬品は出土しなかった。

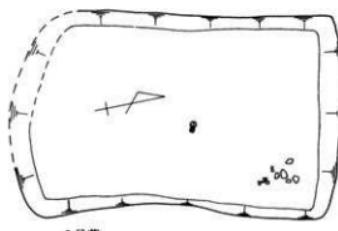


6. 6号墓址（第157図）

16, 17-B区に検出されたもので、長軸 139cm、短軸 80cm、深さ 32cm を測り、浅い墓址である。

長軸は N-4°-E にとる
遺存状態は著しく悪く、
頭蓋と歯が検出されたのみ
である。頭位は北である。

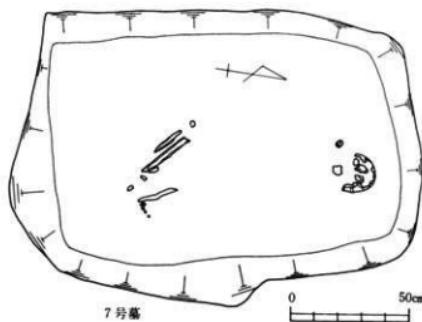
「寛永通宝」7枚と、扇
子が副葬されていた。



7. 7号墓址（第157図）

17-B区に検出されたもので、長軸 173cm、短軸 124cm、深さ 132cm を測る。

平面形は長方形を呈する。
長軸は N-6°-W にとる。
頭位は北にとり、「寛永
通宝」7枚を副葬し、他に
木棺片・釘が認められた。

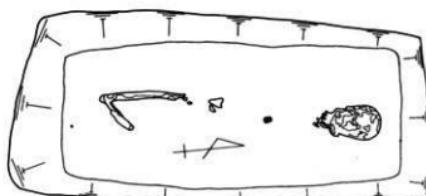


第157図 5・6・7号墓

8. 8号墓塚（第 158図）

16, 17-B区に検出されたもので、長軸 175cm, 短軸 80cm, 深さ 145cmを測る。平面形は長方形を呈する。長軸はN-13°-Eにとる。遺体は頭位を北にとり、大部分が遺存するが、変形やひずみが著しい。

「寛永通宝」7枚を副葬する。



8号墓

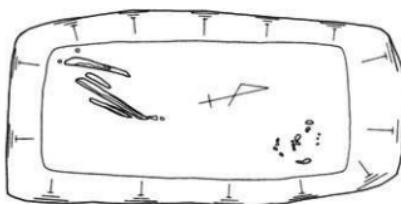
9. 9号墓塚（第 158図）

16-B区に検出されたもので、東側に12号墓塚が隣接する。

長軸 167cm, 短軸 81cm, 深さ 132cmを測る。平面形は長方形を呈し、主軸はN-12°-Eにとる。

頭位は北にとる。

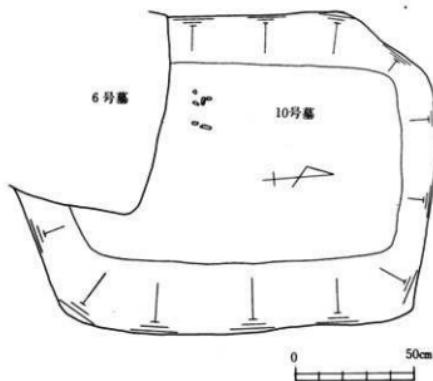
副葬品は認められなかつた。



9号墓

10. 10号墓塚（第 158図）

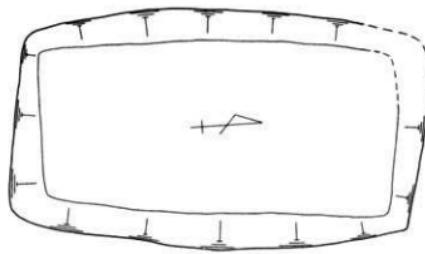
16-B区に検出されたもので、6号, 17号墓塚と重複す。6号が10号を切っていることがわかる。長軸は不明、短軸 134cm, 深さ 14cmを測る。長方形を呈する。長軸はN-4°-Eにとり、「寛永通宝」7枚を副葬し、頭位は北にとる。



第 158図 8・9・10号墓

11. 11号墓（第 159図）

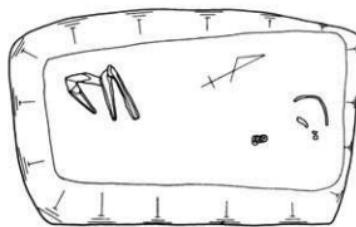
17-B区に検出されたもので、12、6、1号墓塚が西と北に隣接する。長軸172cm、短軸101cm、深さ70cmを測り、平面形は長方形を呈し主軸はN-7°-Eにとる。骨は検出されなかつた。「寛永通宝」2枚を副葬する。



11号墓

12. 12号墓（第 159図）

16-B区に検出された。東、西、北に11、9、6号が隣接し、6号と重複する。長軸143cm、短軸91cm、深さ126cmを測る長方形を呈する。主軸はN-26°-Eにとる。頭位は北であるが遺存度は良くない。「寛永通宝」7枚を副葬する。

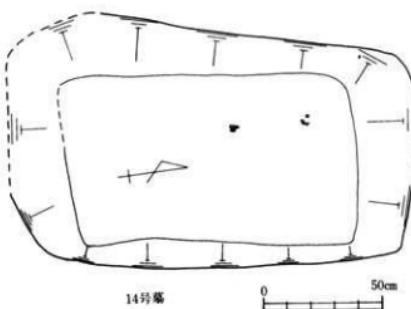


12号墓

13. 13号墓（第 154図）

16、17-B区に検出された。1、14号と重複する。長軸は推定191cm、短軸126cm、深さ126cmを測り平面形、長方形を呈する。長軸はN-8°-Eにとる。頭蓋のみが遺存し、頭位は北である。

「寛永通宝」7枚を副葬する。



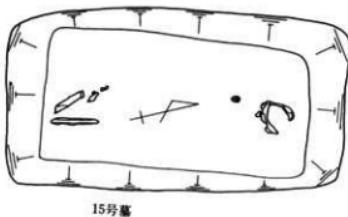
13号墓

0 50cm

第 159図 11・12・14号墓

14. 14号墓塚（第 159図）

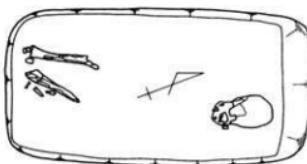
17-B区に検出したもので、南縁で13号墓塚と重複する。長軸は推定171cm、短軸100cm、深さ105cmを測る。平面形、長方形で長軸はN-12°-Eにとる。人骨3個を検出した。歯の位置から頭位は北。「寛永通宝」7枚と、青銅製キセルを副葬する。



15号墓

15. 15号墓塚（第 160図）

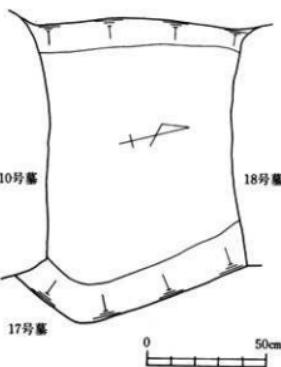
16-B区に検出した。長軸142cm、短軸77cm、深さ118cmを測る。平面形は長方形で長軸はN-12°-Eにとる。頭位は北、副葬品に「寛永通宝」7枚があった。



16号墓

16. 16号墓塚（第 160図）

16, 17-B区に検出した。長軸128cm、短軸67cm、深さ142cmを測る。平面形、長方形の墓塚である。主軸はN-22°-Eにとり、頭位は北である。副葬品は出土しなかった。



18号墓

17. 17号墓塚（第 160図）

17-B区に検出されたもので、南北に10, 18号墓塚と重複する。短軸127cm、深さは15cmと浅いものである。長軸はN-13°-Eにとる。人骨は検出されなかった。

副葬品は「寛永通宝」2枚である。

18. 18号墓塚（第 161図）

17-B区に検出されたもので南縁は17号墓塚と重複する。

第 160図 15・16・17号墓

長軸 178cm、短軸 112cm、深さ 1
58cmを測り平面形、
長方形を呈す。

長軸はN-1°-
Eにとる。

人骨は頭骨がわ
ずかに遺存する。

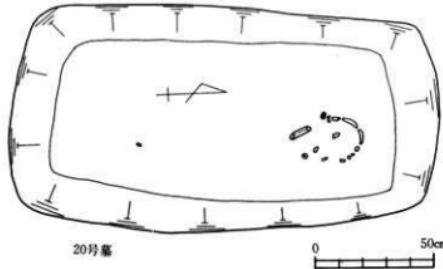
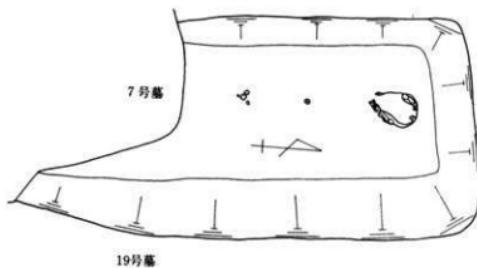
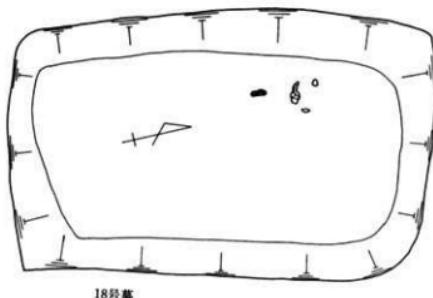
頭位は北で、「
寛永通宝」5枚を
副葬する。

19、19号墓塚(第161図)

17-B区に検出
されたもので、南
縁は7号墓塚と重
複する。長軸推定
125cm、短軸94cm
深さ78cmを測り平
面形、長方形を呈
す。長軸はN-4°
-Wにとる。頭位
は北で、「寛永通
宝」6枚を副葬す
る。

20、20号墓塚(第161図)

17-C区に検出
されたもので、他
の墓塚群とは東に
離れている。長軸
180cm、短軸95cm
深さ79cmを測り、
平面形は長方形である。



第161図 18・19・20号墓

長軸はN-1°-Wにとり、頭位は北で、「寛永通宝」6枚を副葬する。

21. 21号墓塚（第162図）

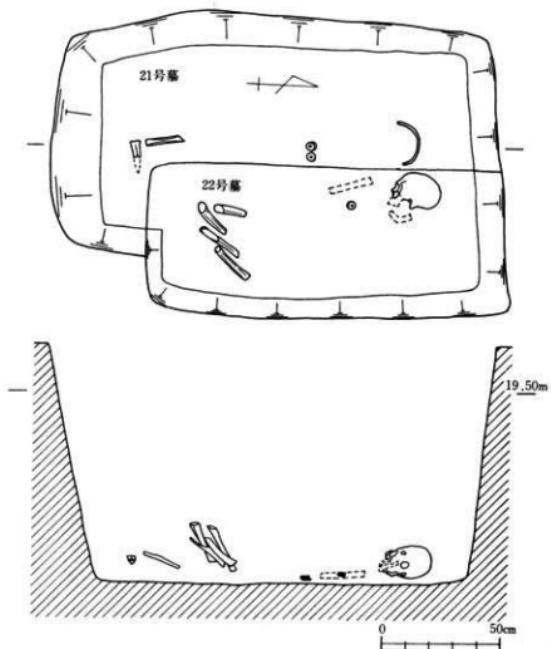
20-B区に検出されたもので、東側約半分は22号墓塚と重複する。長軸 188cm、短軸99cm、深さ 100cmを測る。平面形は長方形を呈し、長軸はN-2°-Wにとる。

頭位は北で、「寛永通宝」6枚を副葬していた。

22. 22号墓塚（第162図）

20-B区に検出されたもので、21号墓塚と重複する。切合い関係から22号墓塚が21号墓塚を切っていることが観察される。長軸 156cm、短軸68cm、深さ 100cmを測る。平面形は長方形で長軸はN-4°-Eにとる。

頭位は北で、「寛永通宝」7枚が副葬されていた。



第162図 21・22号墓

23. 23号墓塚（第163図）

23-B区検出で
長軸 168cm、短軸
84cm、深さ 122cm
で平面形、長方形
を呈し、長軸はN
-3°-Wにとる。

頭位は北で、「
寛永通宝」6枚を
副葬していた。

24. 24号墓塚（
第163図）

20-B区に検出
されたもので長軸
133cm、短軸64cm
深さ87cmを測る。

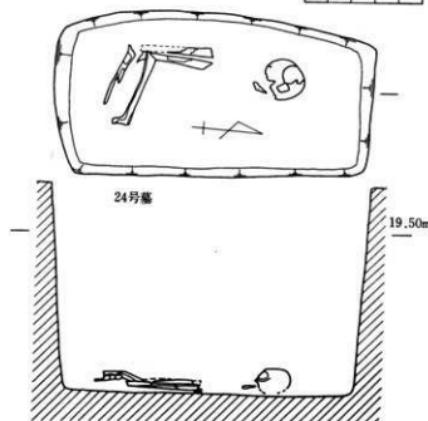
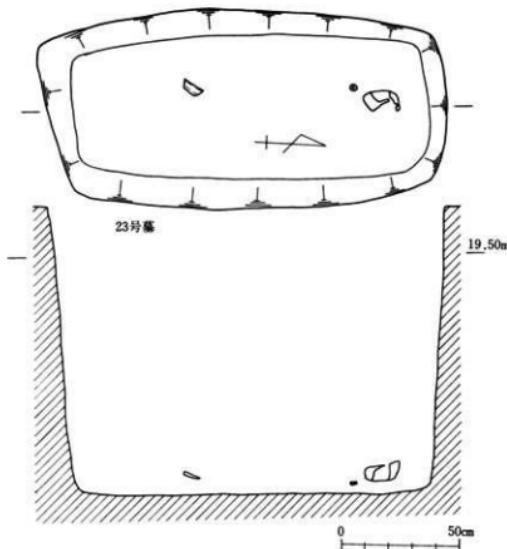
平面形は長方形
を呈し、長軸はN
-3°-Wにとる。

頭位は北で、副
葬品は「寛永通宝
」7枚であった。

25. 25号墓塚（
第164図）

20-B区に検出
したもので、長軸
90cm、短軸45cm、
深さ45cmと小形の
墓塚で、人骨は検
出されなかった。

「寛永通宝」7
枚を副葬する。



第163図 23・24号墓

26. 26号墓塚（第1
64図）

20-B区に検出された。長軸 155cm、短軸 68cm、深さ95cmを測る平面形、隅丸方形の墓塚で、長軸はN-5°-Wにとる。

頭位は北で、「寛永通宝」4枚が副葬されていた。

27. 27号墓塚（第1
55図）

19-B区に検出されたもので、2号墓塚と重複する。2号墓塚で切られている。

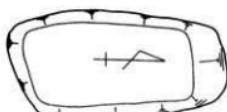
長軸76cm、短軸98cm、深さ36cmを測り、平面形、方形を呈す。長軸はN-1°-Wにとる。

人骨、副葬品とも検出されなかった。

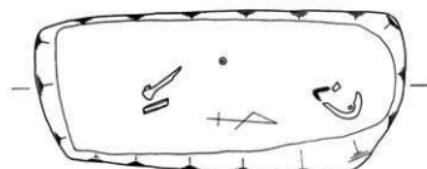
28. 28号墓塚（第1
64図）

21-B区に検出されたもので長軸 109cm、短軸68cm、深さ55cmを測り、平面形は隅丸方形を呈す。長軸はN-4°-Wにとる。

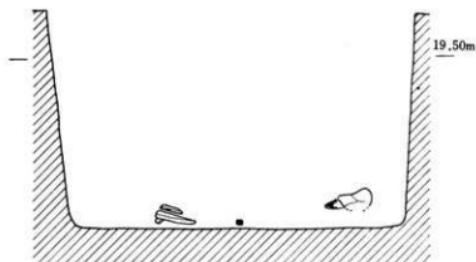
人骨、副葬品とも検出されなかった。



25号墓



26号墓



28号墓

0 50cm

第164図 25・26・28号墓

(3)副葬品

①古銭(第165・166図、第22表・第23表)

墓塚内より副葬品として古銭 119枚と、古銭に付着した数珠 2個が出土した。

このうち第165図にみるように古銭の表面に布が付着したものと数珠が付着したものが認められた。この布はおそらく埋葬時に副葬した古銭を入れる袋ではなかろうか。

古銭はすべて「寛永通宝」で径は表示する通り2.18cm~2.54cmで、背に「文」、「元」のもものもある。

なおこの古銭は1つの墓塚に2~7枚を、ほぼ胸元に副葬していた。枚数は2, 4, 5, 6, 7枚とあるが、主体は7枚である。



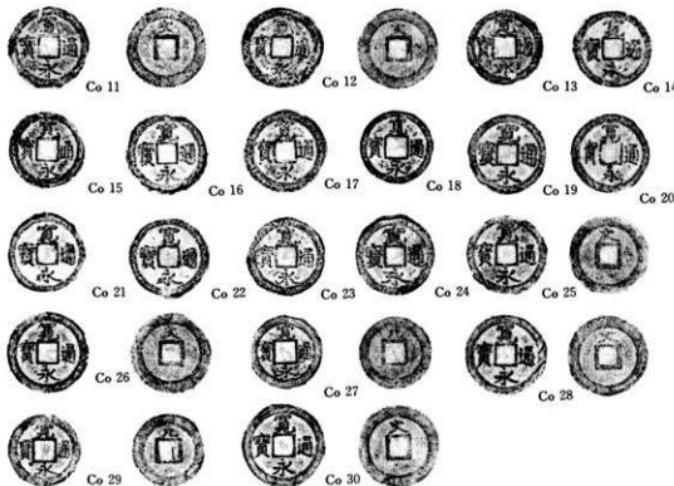
第165図 古銭実測図

番号	図番	墓址	外径(cm)	外縁厚さ(cm)	備考	番号	図番	墓址	外径(cm)	外縁厚さ(cm)	備考
1		4	2.43	0.13		21		7	2.35	0.16	腐食が進む
2		4	2.50	0.12		22		8	2.41	0.16	
3		4	2.31	0.12		23		8	2.38	0.14	
4		4	2.30	0.11		24	Co8	8			布目あり
5		4	2.18	0.12		25		8	2.34	0.16	腐食が進む
6		4	2.18	0.11		26		8	2.53	0.17	腐食が進む
7		4	2.28	0.11		27		8			腐食が進む
8	Co25	6	2.52	0.14	背上に「文」	28		10	2.38	0.12	
9		6	2.43	0.13		29		10	2.54	0.17	
10		6	2.50	0.15		30		10	2.46	0.14	
11		6	2.34	0.14		31		10	2.36	0.13	
12		6	2.45	0.12		32		10	2.48	0.1	腐食が進む
13		6	2.54	0.12		33		10	2.14	0.12	腐食が進む
14		6	2.40	0.13		34		10	2.20	0.18	
15		7	2.41	0.14		35		11	2.43	0.14	
16		7	2.35	0.14		36		11	2.44	0.15	
17		7	2.48	0.14		37	Co26	12	2.55	0.14	背上に「文」
18		7	2.42	0.10		38		12	2.31	0.12	
19		7	2.45	0.14		39		12	2.49	0.16	
20		7	2.34	0.14		40		12	2.34	0.12	

第22表 墓塚出土古銭一覧表(その1)

番号	国番	墓地	外径 (cm)	内径 (cm)	備考	番号	国番	墓地	外径 (cm)	内径 (m)	備考
41		12	2.45	0.16		81		20	2.56	0.14	
42		12	2.32	0.14		82		20	2.32	0.12	
43		12	2.38	0.12		83		20	2.35	0.14	
44	Co11	13	2.4	0.13	背土に「文」	84		21	2.31	0.14	
45	Co12	13	2.54	0.14		85		21	2.31	0.14	
46	Co13	13	2.35	0.11		86		21	2.46	0.14	
47	Co14	13	2.42	0.16		87		21	2.54	0.14	
48	Co15	13	2.54	0.14		88	Co10	21	2.18	0.12	布目残る
49	Co16	13	2.48	0.14		89		21			腐食が進む
50	Co17	13	2.47	0.12		90		22	2.43	0.13	
51	Co27	14	2.38	0.12	背土に「元」	91		22	2.44	0.12	
52		14	2.40	0.14		92		22	2.33	0.11	
53		14	2.46	0.12		93		22	2.43	0.14	
54		14	2.56	0.13		94		22	2.30	0.12	
55		14	2.33	0.12		95		22	2.46	0.14	手欠
56		14	2.42	0.12		96		22	2.30	0.12	手欠
57	Co7	14	2.30	0.10	ヒモ付着	97		23	2.48	0.13	
58		15	2.36	0.11		98		23	2.30	0.13	布目あり
59		15	2.44	0.12		99		23	2.45	0.14	*
60		15	2.43	0.14		100		23	2.61	0.23	布目あり、腐食が進む
61		15	2.30	0.11		101		23	2.33	0.18	*
62		15	2.48	0.13		102		23	2.50	0.34	*
63		15	2.46	0.16		103	Co18	24	2.29	0.11	
64		15	2.31	0.14	摩滅している	104	Co19	24	2.50	0.13	
65		17	2.32	0.13	背土に「文」	105	Co20	24	2.46	0.13	
66		17	2.43	0.14		106	Co21	24	2.50	0.12	
67	Co29	18	2.26	0.12	背土に「元」	107	Co22	24	2.45	0.13	
68		18	2.36	0.15		108	Co23	24	2.50	0.14	
69		18	2.31	0.11	手欠	109	Co24	24	2.34	0.13	
70		18	2.48	0.15	腐食が進む	110		25	2.52	0.15	
71		18		0.15	腐食が進む	111		25	2.45	0.11	
72	Co28	19	2.55	0.14	背土に「文」	112		25	2.51	0.14	
73		19	2.28	0.12	背土に「元」	113		25	2.46	0.14	
74		19	2.54	0.16		114		25	2.30	0.12	
75		19	2.43	0.14		115		25	2.35	0.12	
76		19	2.29	0.12		116		25	2.30	0.10	
77		19	2.38	0.15		117		26	2.33	0.12	
78	Co30	19	2.54	0.14	背土に「文」	118		26	2.38	0.14	
79		20	2.55	0.14		119		26	2.34	0.15	
80		20	2.51	0.15		120	Co9	26	2.52	0.14	数珠が付着

第23表 墓塚出土古銭一覧表（その2）



第 166図 古銭拓影 (2/3)

②キセル (第 167図)

青銅製のもので全長6.6CMを測る雁首である。

③扇子 (第 167図)

竹製、ウルシ塗りのもので要部のみである

④鉄釘 (第 168図)

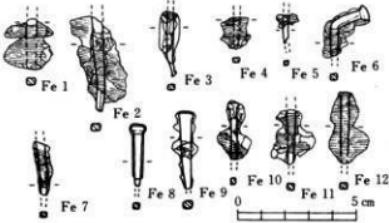
棺に使用した鉄製の和釘である。



第 167図 キセル・扇子実測図

番号	墓址	種類	備考
1	7号	釘	木片付着
2	10号	々	木片付着
3	16号	々	
4	16号	々	木片付着
5	16号	々	木片付着
6	22号	々	木片付着
7	22号	々	木片付着
8	23号	々	
9	23号	々	
10	23号	々	木片付着
11	23号	々	木片付着
12	24号	々	木片付着

第24表 鉄釘一覧表



第 168図 鉄釘実測図

4 掘乱層出土の遺物

遺物は近世の溝3及び溝4の周辺とA～G-16～20区を中心にI層を中心に出土し、器種は碗・皿・鉢・高杯・摺鉢・茶家・茶家蓋・壺・壺等である。これ等は染付磁器を中心とした伊万里焼系と、いわゆる黒薩摩焼と呼ばれる薩摩焼に大別される。

(1) 碗類 (第169, 170図)

碗類のうち1198, 1199, 1204が陶器、1205の土師器を除けば他はすべて磁器である。器形は碗形、端反、筒形に分類できる。以下文様を主に記述したことわりのないものは全て染付である。

1188は2条の團線で囲んだ中に唐草文を画く。口縁は口はげ手である。1189は唐草文、草花文、團線の組合せである。1190は3条の團線内に海浜を図案化する。1191, 1192は五弁花、葛のこんにゃく判、1193, 1194は一重、二重の欄目文、1195は松葉文で内外とも粗い貫入がはいる。1196は格子状文、1197は見込みに海浜を鉄輪で画く。内外面とも微細貫入がはいる。

1198, 1199は刷毛目碗である。1200, 1201は唐草文と團線の組合せである。1202は胴部に松葉見込みには唐草文と五弁花文のくずれた文様を画く。1203は継位に区画された中に草花文、見込みに洲浜状の文様を画く。1204は白薩摩焼、1205は土師器である。1206～1209は筒形碗で、1206, 1207は雪持桜文、1208は唐草文、1208は見込み五弁花を画く陶器で内外とも貫入がはいる。1197, 1204は薩摩焼(白物)で1209は還元焼成、1204は二次的に火を受けたものと思われる。

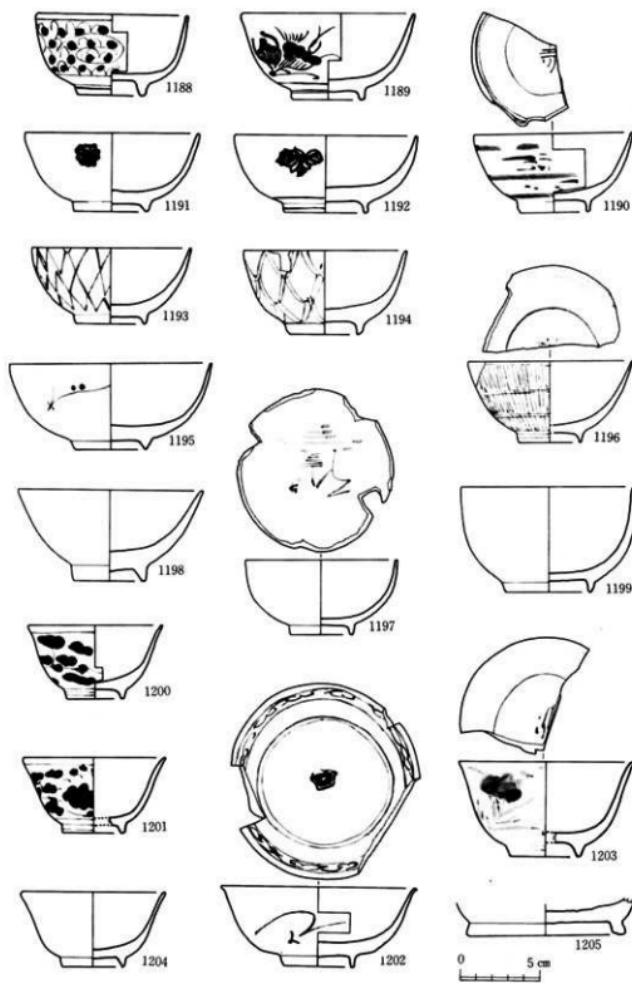
(2) 皿類 (第170図)

皿はすべて磁器皿である。1210は見込み口縁部に梅花文を濃い鼻須で画く。1211は見込み底に草花文を画く。底部は筋筒底状を呈し、置付部に砂粒が付着する。1212は胴部に太目の團線と唐草文を画くが発色が悪い。1213は見込み底に海浜を画くものの1212同様発色が悪い。1214は見込み底に細線で縁取りした鹿と楓を達者に画く。1215, 1216は見込み口縁部に唐草文、見込み底にたすき文と、松竹文の團文、胴部に唐草文を画く棱花皿である。1217は1214と同一文様の皿、1218は口縁部に鉄輪を施し、内外とも貫入のはいる棱花皿である。

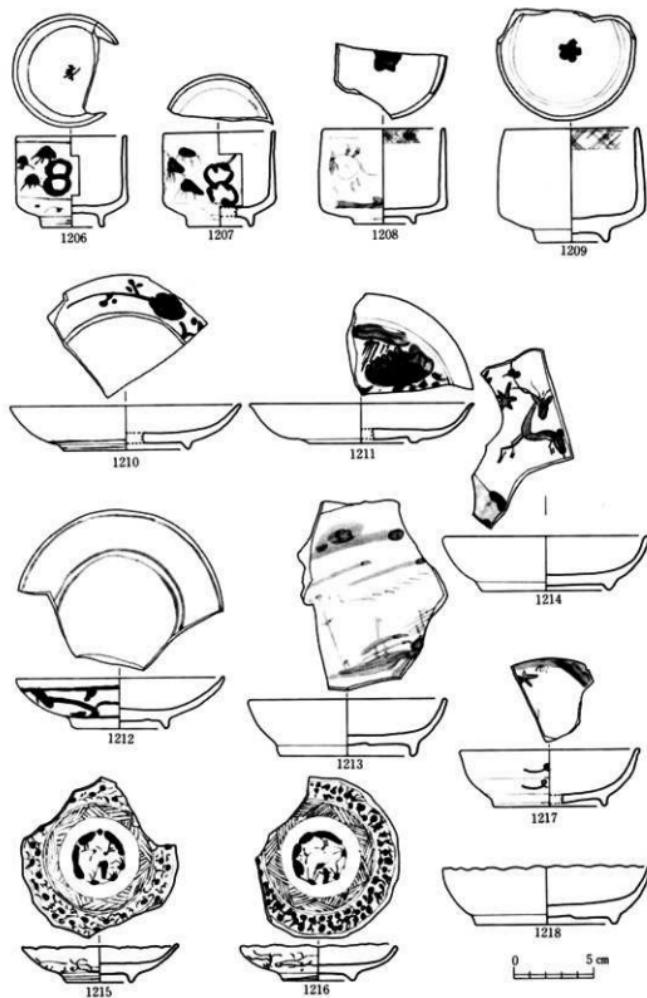
番号	口径	器高	底径	器種	出土区	層	番号	口径	器高	底径	器種	出土区	層	番号	口径	器高	底径	器種	出土区	層
1188	9.6	5.1	4.3	碗	26-G	I	1198	11.6	5.8	4.6	碗	13-D	I	1208	7.7	6.0	4.9	碗	13-E	I
1189	11.0	5.5	4.6	*	24-J	*	1199	11.1	6.6	5.6	*	16-E	*	1209	8.4	7.1	4.6	*	17-A	*
1190	10.0	5.0	4.5	*	26-G	*	1200	8.4	4.6	3.6	*	25-H	*	1210	14.5	2.8	8.0	皿	12-E	*
1191	11.0	5.0	4.6	*	8-H	*	1201	9.0	4.8	4.0	*	25-E	*	1211	14.1	2.5	6.8	*	25-H	*
1192	11.5	4.9	5.3	*	15-D	*	1202	12.7	5.0	4.6	*	15-D	*	1212	13.1	3.2	6.1	*	16-L, P	*
1193	10.0	4.8	4.6	*	15-D	*	1203	11.0	6.0	4.5	*	25-E	*	1213	12.5	3.6	8.5	*	25-D	*
1194	10.2	5.3	4.8	*	12F-G	*	1204	9.1	4.7	4.6	*	16-F	*	1214	13.0	3.4	8.2	*	12-F	*
1195	12.8	5.4	4.6	*	15-D	*	1205		10.0	*	12-G	*	1215	9.9	2.3	4.2	*			
1196	10.3	5.1	4.6	*	15-D	*	1206	7.0	5.7	4.0	*	15-D	*	1216	9.9	2.2	4.5	*	18-A	I
1197	9.6	4.6	4.0	*	13-D	*	1207	7.0	6.0	4.2	*	20-A	*	1217	11.4	3.6	7.2	*	表	幕

第25表 碗類・皿計測表

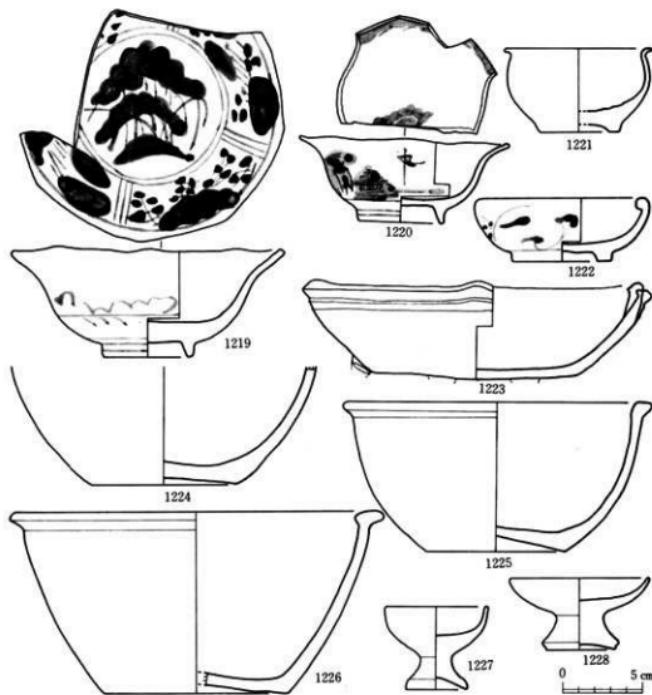
(単位 cm)



第169図 碗類①



第170図 碗類(2)・皿



第 171 図 鉢・高坏

(3)鉢・高坏 (第 171図)

鉢は染付磁器と陶磁に類別される。1219は八角の口縁をもち外反する器形である。

胴部及び高台には各々 2 条の圈線が呉須で巡る。胴部の圈線の上下には綠釉で簡略化された唐草文を描く。見込みは縱位に 3 本の綠釉で区画し、4 面を作り、磯浜文と草木様文を対に書き、見込中央部には雪持笹を 2 条の圈線内に画く。文様のうち枝、笹部は綠釉、他は呉須を濃く塗り描いている。高台疊付に釉はかからない。

1220はやや小ぶりの角鉢で、胴下位、高台際、高台に 1 条の圈線を巡らし、胴部には磯浜を画く。見込み中央部には雲文、口唇部には雲文様のものを画く、濁りの濃い呉須を用いる。

高台際には釉はかからない。

1221, 1222は小鉢で、1221は口縁部が外反し薄手である。軸は口縁部のみに褐釉がかかる。見込みには重ね焼の痕がみられる。1222は口縁部が丸く内側に捻返されたもので、高台際の他は還元焼成のため灰色に近い。胴部には1条の團線と唐草文を呉須で画く。内外とも粗い貫入がみられる。1223~1226までは薩摩焼の鉢である。1225は3脚付で口縁部は4ヶ所内側につまみ出しがある。1223は無軸、1224~1226は褐釉が内外面とも施されている。

1227, 1228は高杯で、1227は脚部を除き白釉がかかる。1228は陶器で白濁釉がかかる。

番号	口径 (cm)	底高 (cm)	底径 (cm)	基種	出土区	年	番号	口径 (cm)	底高 (cm)	底径 (cm)	基種	出土区	年	番号	口径 (cm)	底高 (cm)	底径 (cm)	基種	出土区	年
1218	13.0	3.6	8.8	皿	14-D	1	1221	9.3	5.2	5.0	鉢	20-F	1	1224	—	—	9.0	鉢	17-A	1
1219	17.2	6.8	5.7	鉢	12-I	*	1222	11.0	4.0	6.3	*	9.10-E, F	*	1225	19.4	9.4	8.7	*	25-C	*
1220	13.2	5.3	5.4	*	20-F	*	1223	22.0	6.1	12.8	*			1226	23.5	11.4	11.5	*	8-D	*

第26表 四、鉢計測表

(単位 cm)

(4) 鉢 (第 172図)

指鉢は1235の瓦器質を除き他はすべて薩摩焼である。1229~1234は薩摩焼の指鉢で内面には下位から上位にかけて4~6条前後のかき目が施されている。1230は片口、1232には口縁部に注口が付けられる。1233は口径12cmを測る小型の指鉢である。1235は見込み底及び見込み胴部に6条単位のかき目が施されたものである。

(5) 茶家・茶家蓋 (第 172図)

茶家は器形から小形、大形に分類できる。小形の茶家は略球形を呈し、3足が付き、1足は注口部直下をややずれた位置に付けて、こぼれが伝い落ちるのを防いだという。

1239, 1240は大形のもので、甘酒注と俗称するものである。蔓取付部は注口内にあることを特徴とする。いずれも褐釉が施されている。1241~1245が茶家蓋1246~1248が山茶家蓋である

(6) 壺 (第 173図)

1249は復元口径28.2cmを測り、口縁部は外反し水平となる。肩部につまみ出しによって造られた2条の突帯が巡る。1250は復元口径16.9cmを測る瓦器質の壺で、丸くすぼまる口縁部をもち、肩部に1条の稜が巡る。1251は復元口径36.4cmを測る。反外する口縁部は水平になり、口縁部下に幅1cmの段を造り出している。

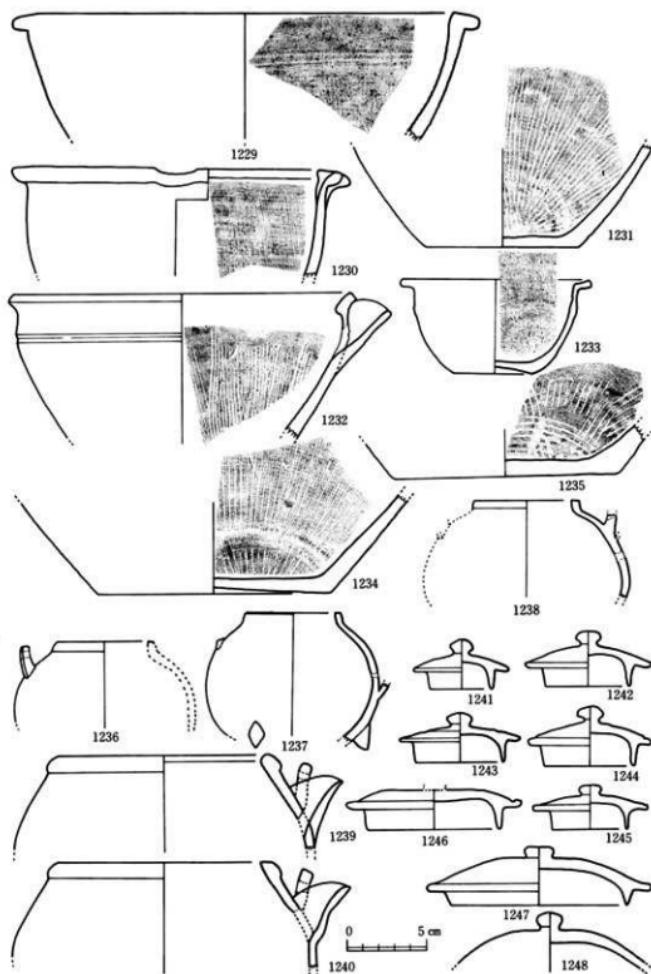
1252~1254までは底部である。1250の瓦器質を除き他は薩摩焼の壺である。

(7) 徳利・壺 (第 173図)

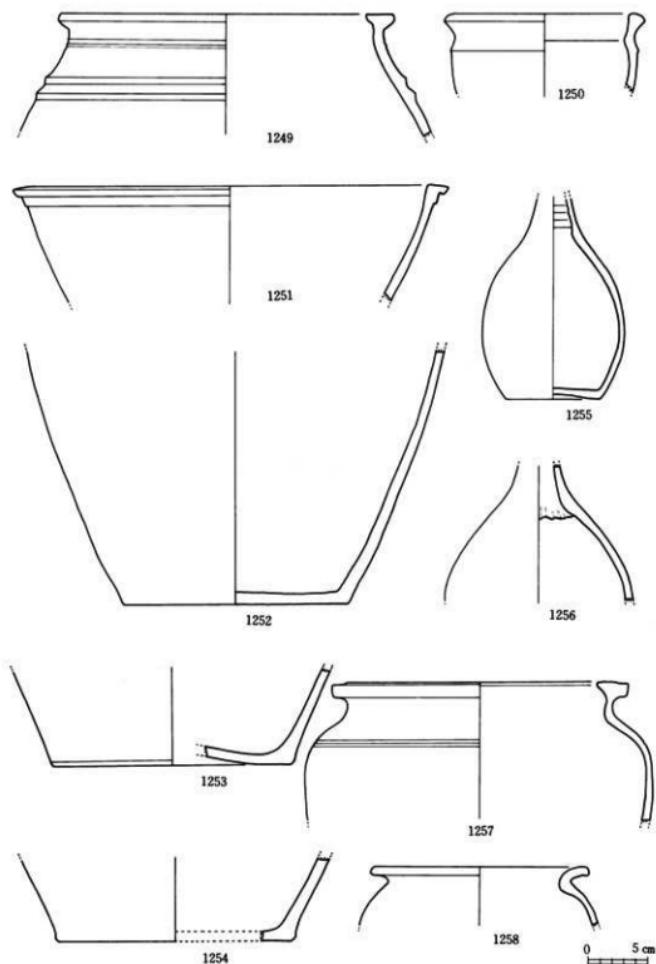
1255, 1256は薩摩焼の徳利であるが、口縁部、あるいは底部を欠くため全体の形状、法量は不明である。軸は褐釉が全体に施されてはいるものの、ピンホールや灰かぶりがみられ、製品としては良くない。

1257は薩摩焼の壺である。復元口縁直径25cmを測る。反外する口縁部は水平で、肩部がやや張る器形である。平坦な口縁部には貝目痕が観察される。

1258は瓦器質の壺で復元口径18.1cmを測る。



第172図 摺鉢・茶家・茶家蓋

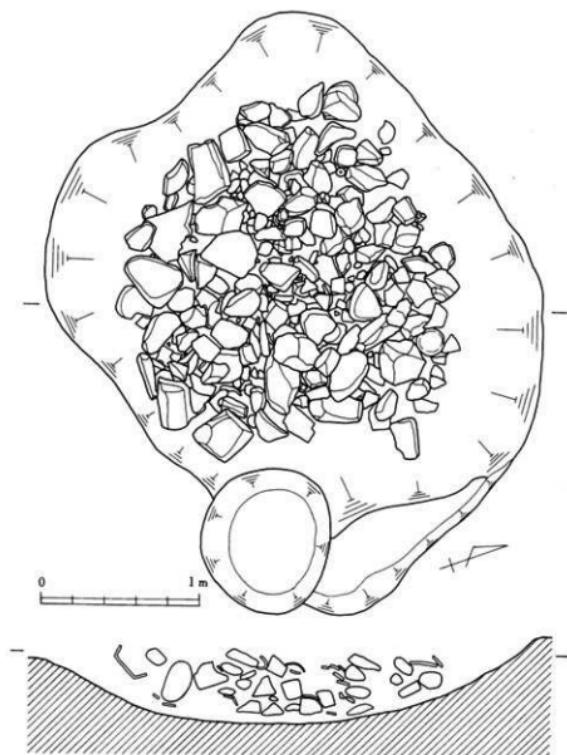


第173図 麋・徳利・壺

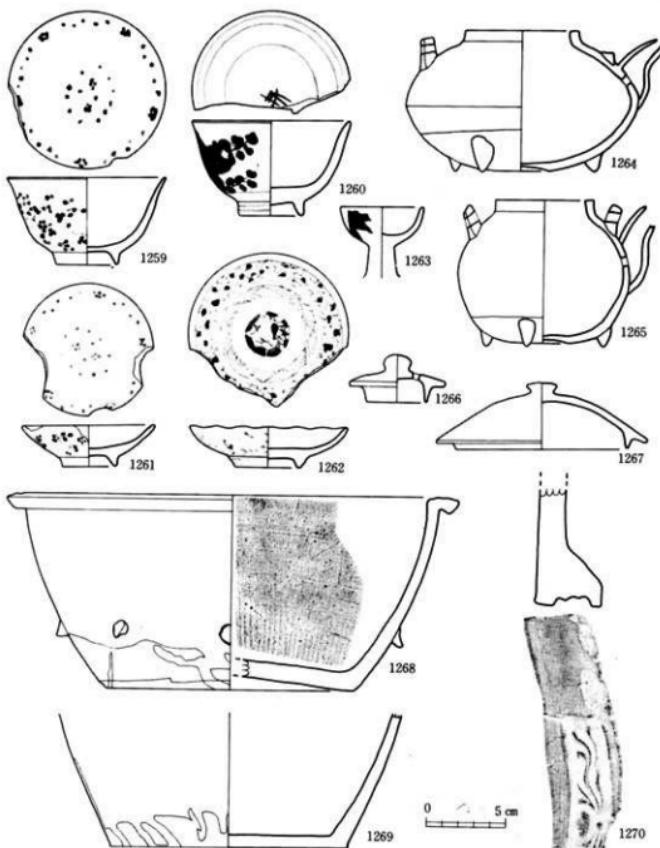
第8章 明治・大正時代

1 チリ溜め

21E区に検出された長径 3.6m、短径 3.1m、深さ40cmの土塹である。土塹内には多量の石をはじめ、近世～近代の染付、斐・スリ鉢・茶家等の陶器、土師器の破片、ガラス製品、瓦、腐食した鉄製品等が出土した。



第174図 チリ溜め



第175図 チリ油出土遺物

2 製糸工場跡

17・18A区付近に検出された土塙は、南北に8mで、西側は用地外にのびるものである。この塙内周辺からは焼け粘土が検出され、多量の瓦・金クソなどが出土した。出土した遺物から遺構の性格は決めかねるが、地元の方からこの位置に大正時代の頃まで製糸工場のあったことを知らされた。

第9章 まとめ

年表でみるように、成岡遺跡では旧石器時代から明治・大正時代まで長期にわたって生活が営まれていた。以下、時代を追ってまとめてみよう。

1. 旧石器時代

ナイフ形石器文化（剥片尖頭器・台形石器）と細石器文化（細石核・細石刃）の二文化の石器が出土している。細石核には加治屋園タイプのもの、舟野タイプのもの、小さな礫を用いたものの3種がある。この3タイプのものがどのようなつながりをみせるのかは、今回の本調査に待ちたい。今回は概要のみで、詳細な報告は省略した。

2. 繩文時代

早期から晩期までの遺物が出土したが、出土数は少ない。

早期は手向山式土器・石坂式土器・前平式土器・円筒系土器が出土している。後期は市来式土器・鐘ヶ崎式土器・御領系の土器が出土している。晩期はⅡ式（黒川式）土器・Ⅲ式（夜白式）土器が出土しており、

他時期のものが少量であるに対し、多く出土しており、特に晩期Ⅲ式の出土は多い。ほぼ全面に出土しているが、特に34C区・36D区周辺には集中して出土している。

石器は石匙1、局部磨製石斧2、磨製石斧1、凹み石5、敲石2がある。

3. 弥生時代

弥生式土器は磨耗したものが1点だけある。逆L字状口縁となる中期のものである。

4. 古墳時代

竪穴住居跡16基、土塙1が検出され、多くの土器が出土している。

竪穴住居跡はほとんどが方形プランをしており、中央付近が堅くなっている。そして、その

時代	生活時期	生活跡	主な出土遺物
旧石器			細石刃・細石核
繩文	早期 前々 中 後 晩		
弥生	前期 中 後		
古墳	前期 後	竪穴住居	土師器・須恵器 砾石・鐵器
飛鳥			
奈良			
平安		土塙・掘立柱 建物・溝	墨書き土器・転用硯 綠釉土器
鎌倉		竪穴住居	
室町		墓	磁器・數珠
安土・桃山			
江戸		建物・溝 道路・墓	陶磁器・寛永通宝
明治			
大正			
昭和		製糸工場	

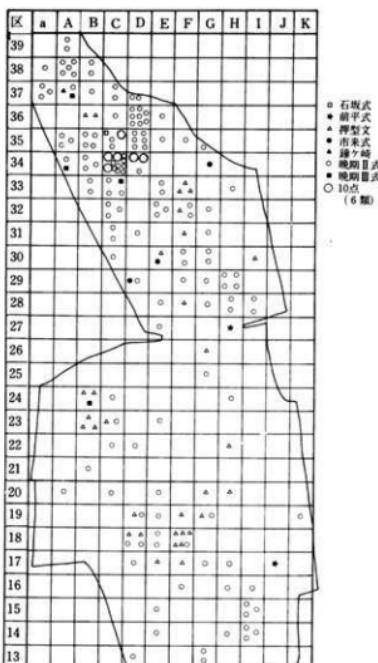
第27表 年表

中央部には灰・炭が堆積しており、ここに焼土があるものもあることから、中央炉の存在が予想できる。どの住居跡も主柱穴が確認できなかったことから、掘り込みがないか、あるいは浅い柱穴の存在を考えねばならない。床面に完形品などがあり、住居廃棄時のものと思われるが、4号住居跡は多量の土器が投げこまれており、住居埋没までの土器廃棄場として使われたことが予想される。

土師器には彫形土器・壺形土器・壺形土器・鉢形土器・高壺形土器・蓋形土器・手づくね土器がある。彫形土器はほとんどがくの字状口縁をもつもので、直立のものは少ない。壺形土器は丸底である。壺形土器は平底で、丹が塗られる。鉢形土器には多くの種類がある。高壺形土器は壺形の下部と、筒部と裾部の境がはっきりしない脚部とから成り、丹塗りである。蓋形土器は大型のもの1点のみである。手づくね土器は壺形と鉢形がある。

須恵器はすべて古式のもので、壺身・壺蓋・壺・壺・手付壺・壺などがある。

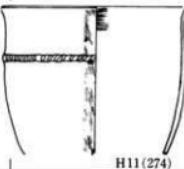
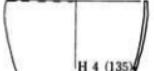
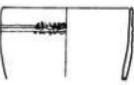
他に砥石・ふいごの羽口などが出土している。



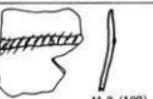
第176図 縄文式土器出土区図

器種	類	実測図	器形	整形
かめ形土器	Ia ₁ 類		やや外反ぎみの口縁で、低い脚台がつく	外面・内面ともななめあるいは縦方向のハケナデ

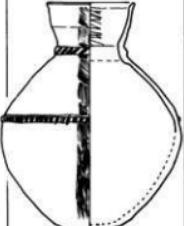
第177図 古墳時代の土師器分類図(1)

器種	類	実測図	器形	整形
か め 形 土 器	I a ₂ 類	 34B区(352)	くの字状に外反する口縁をもち長胴形を呈す。口縁直径17cm、高さ17.5cmと小型で、低い脚台がつく。	ヘラケズリを主体とする粗い整形で、表面の凹凸が目立つ。口縁付近はヘラナデ、底部付近もヘラナデで仕上げる。
	I b 類	 H11(274)	くの字状に外反する口縁部をもち、頸部付近に板押圧のある貼り付け突帯を有す。	外面はななめ方向のハケナデ。内面は頸部より上が横方向のハケナデ、下がヘラナデ。
	I c 類	 H13(311)	内弯ぎみの器形で、端部付近は外反する。	外面はななめ方向あるいは縦方向のハケナデ。内面はななめ方向あるいは横方向のハケナデ。
	I d 類	 H15(344)	外反しているが、端部付近は直立する。	外面はハケナデを主とするが、一部ヘラナデ。内面はハケナデ。
	II a 類	 H 4 (135)	内弯する口縁部。	外面はななめ方向のハケナデ。内面は縦方向のこまかいハケナデ。
	II b 類	 23C区(355)	内弯する口縁部をもち、口縁下部にヘラ引き、あるいはヘラ押しで突帯様のもようをつける。	外面・内面ともていねいなヘラナデ。

第 178図 古墳時代の土師器分類図2

器種	類	実測図	器形	整形
かめ形土器	II c 類	 H 3 (102)	内湾する口縁部をもち、口縁下部にヘラキザミのある突帯が貼り付けられる。	外面・内面ともヘラナデ
	III 類	 H 12 (283)	くの字状に外反する口縁部で、丸みをもつ長胴形を呈する。	外面・内面ともななめ方向のハケナデで仕上げ、器壁がうすい。
	脚 I		浅い脚である。	
	脚 II 類	 H 12 (285)	深い脚である。	外面はハケナデ、内面はヘラナデである。
	I a 類	 H 6 (203)	外へまっすぐ開く口縁部をもち、胴部にななめ方向の板押圧のみられる突帯が貼り付けられる。底部は丸底である。	外面はななめ方向、あるいは縦方向のハケナデ。内面はヘラナデであるが一部ハケ目が残る。
壺形土器	I b 類	 H 4 (140)	外へまっすぐ開く口縁部をもち、頭部に矢形の板押圧がみられる突帯を貼りつける。底部は丸底である。	外面はななめ方向あるいは縦方向のハケナデ。内面は頭部から上が横方向のハケナデ、下が横方向のヘラナデ。

第179図 古墳時代の土師器分類図3)

器種	類	実測図	器形	整形
壺形土器	I b ₂ 類	 H 5 (186)	外へ開く口縁部をもち、頸部に左下がりの板押圧のある突帯が貼り付けられる。やや安定した丸底である。	外面は上半が横方向あるいはななめ方向のハケナデ。下半がヘラナデ。内面はヘラナデ。
	I c 類	 H 7 (220)	やや外へ開く口縁部をもち頸部に左下がりの板押圧のある突帯が貼り付けられる。丸みをもつている。	口縁付近は内外ともヘラ横ナデ。胴部は内外とも粗いハケナデで薄く仕上げている。
	I d 類	 17 I (366)	外へ開くがやや内湾ぎみの口縁で、頸部に格子状のきざみのある突帯がつく。穿孔あり。	外面はハケナデの上をヘラナデ。内面はていねいなヘラナデ。
	II 類	 H 12 (292)	やや外へ開くが直立ぎみの口縁で、肩は張らず、なで肩となる。	内面・外面ともていねいなヘラナデ。
	III 類	 H 6 (211)	端部が外反するが、やや内湾ぎみにまっすぐ立ちあがる口縁で、頸部および胴部に板押圧のある突帯が貼り付けられる。高さ39cmと大型である。	外面は底部付近がヘラナデの他はハケナデ。内面はヘラナデ。

第180図 古墳時代の土師器分類図4

器種	類	実測図	器形	整形
壺形土器	IV類		頸部から外へまっすぐ開き、口縁端が強く外反する。頭部にヘラ押し突帯	外面・内面とも横方向のていねいなヘラナデ。
	底I		丸底。	
	底II類		安定した丸底。胴部になめ方向の板押圧のある貼り付け突帯。	外面はこまかいハケナデ 内面はヘラナデ。
	底III類		丸底であるが、底部の広さが広い。	外面はハケナデ。 内面はヘラナデ。
蓋形土器			台付鉢を逆にした形態をしており、口縁直径25cmと大型である。	外面・内面ともハケナデ。
壇形土器	I類		外反する長い口縁部をもつ小型丸底壺。	横方向のヘラナデ。
	IIa類		開きながらまっすぐのびる口縁部。上半部に最大径をもつ丸みのある胴部であげ底ぎみの平底。	外面はヘラ研磨のあと丹塗り。内面はヘラナデとハケナデ。
	IIb類		aよりやや高い胴部で安定した平底。	外面はヘラ研磨のあと丹塗り。内面はヘラナデ。 口縁部と胴部を接合。
	IIIa類		やや内反ぎみに端部へ向かう口縁。	外面は横ナデのあと丹塗り。内面はていねいなヘラナデ。

第181図 古墳時代の土師器分類図5)

器種	類	実測図	器形	整形
埴形土器	III b 類	 18D(E(374))	最大径がやや高い胴部と、頸部からまっすぐ立ち、やや内反ぎみに立ちあがる口縁から成る。肩部に孔がある。	外面は横方向のヘラミガキのあと丹塗り。内面はていねいなヘラナデで、口縁部のみ丹塗り。
	III c 類	 H 9 (254)	aよりやや小型。	内外とも丹塗り。
	III d 類	 36 A P - 2 (373)	最大径が中央付近にあり、どっしりした器形。	内外ともヘラナデ。
	IV 類	 H 9 (255)	やや内反ぎみに縦部へ向かう口縁。肩部がややくぼみ胴上半と下半の間に棱をもつ。ややあげ底。	外はヘラ研磨のあと丹塗り口縁、胴上半、胴下半の3部分を接合。
	V a 類	 H 9 (251)	内寄ぎみで外へ開き、端部が外反する。	ヘラミガキのあと内外とも丹塗り。
	V b 類	 H 12 (296)	強く外へ反っている口縁。	外面はヘラミガキのあと丹塗り。内面はていねいなヘラナデ。
高埴形土器	V c 類	 30 H P 1 (369)	安定した平底で、頸部から直立し、口縁は強く外へ折れる。	外面はヘラミガキのあと丹塗り。内面はていねいなヘラナデ。
	VI 類	 H 7 (223)	外へ短かく反る口縁で肩部に最大径がある。底はややあげ底。	外面は横方向のヘラナデのあと丹塗り。内面もヘラナデ。
	I 類	 H 13 (317)	ボール状の环部のたちあがりと底との間は段をもつ。	外面はヘラミガキのあと丹塗り。内面はていねいなヘラナデ。
II a 類		 H 2 (93)	浅い环部のたちあがりと底部境にはくぼみ。 すその広がる脚部。	环部の立ちあがりと底部、脚部の3つを接合。外面はヘラミガキのあと丹塗り。内面はヘラナデ。

第182図 古墳時代の土師器分類図6

器種	類	実測図	器形	整形
高 环 形 土	II b 類	 H 8 (243)	aよりやや深く脚部に裾部と筒部がある。	环部の立ちあがりと底部、脚部の3つを接合、外面はこまかいヘラナデのあと丹塗り。内面の一部にハケ目。
	II c 類	 H 15 (347)	広くて深い环部。	外面はヘラミガキのあと丹塗り。内面はヘラナデ。
	III 類	 H 9 (268)	环部は平坦な底部と強く外反する口縁部からなる。脚部は広がる裾部。	外面はヘラミガキのあと丹塗り。内面はヘラナデと、裾部がハケナデ。
	IV 類	 H 5 (192)	环部はゆるやかに外反して広がる。	外面はヘラミガキのあと丹塗り。内面は口縁付近がハケナデ、他はヘラナデ。
	脚 I 類	 20A区 (397)	脚部の筒部と裾部の境に4個の穿孔がある。	外面は縱方向のヘラナデ。つくりが粗い。
	脚 II 類	 H 6 (214)	裾が広がる脚部で小型。	外面はヘラミガキで丹塗り。内面は裾部がハケナデ、他はヘラナデ。
鉢 形 土	I a 類	 H 3 (113)	外へまっすぐ開きながらのびるもので丸底である。	内外ともヘラ横ナデ。
	I b 類	 H 9 (260)	外へまっすぐ開きながらのびるもので、やや深い。丸底である。	外はヘラたてナデ、内はていねいなヘラ横ナデ。
	I c 類	 H 7 (225)	外へまっすぐ開きながらのびるもので、底部近くでやや屈折する。丸底である。	外はヘラナデ、内はハケ横ナデ。

第183図 古墳時代の土師器分類図7

器種	類	実測図	器 形	整 形
鉢 形 土 ^器 _器	II a 類		内反ぎみの形で不安定な平底	外面は横方向のヘラナデのあと丹塗り。内面は横方向のヘラナデ。
	II b 類		内反ぎみの形で不安定な平底 aに比べてやや深い。	外面はあらいハケナデ。内面は上がハケナデ、下がヘラナデ。
	III a 類		内反ぎみの形で安定した平底	外面はハケナデのあとヘラミガキ。内面はヘラナデ。
	III b ₁ 類		内反ぎみに外へ開く形で、平底。	外面・内面ともていねいなナデ。
	III b ₂ 類		内反ぎみに外へ開く形で、平底。b ₁ 類に比べて深い。	外面・内面ともていねいなナデ。
	III c 類		口縁部はヘラびきで内へ反る平底。	手づくねづくり。あらいナデ。
	IV a 類		外へ開きながらまっすぐのびる。平底。	内外面ともヘラミガキのあと丹塗り
	IV b 類		外へ開きながらまっすぐのびる。平底。	内外ともハケナデ。
	IV c 類		安定した平底で、外へ開きながらまっすぐのびる。	外面はこまかいハケナデ。内面はヘラナデ。底に纖維状圧痕
	V a ₁ 類		内反ぎみの器形で、ややあげ底。	外面は上がハケナデ、下がヘラナデ。内面は指ナデ。
	V a ₂ 類		内反ぎみの器形で、あげ底。 a ₁ より深い。	外面はていねいな縦方向ハケナデ。内面は横方向ヘラナデ。

第184図 古墳時代の土師器分類図8)

器種	類	実測図	器形	整形
鉢形土器	Vb類		外へ開きながらまっすぐ伸び低い脚台がつく。	外面は横方向のヘラナデのあと丹塗り。内面は横方向のヘラナデ。
	VI類		まっすぐ立ちあがる口縁である。	外面・内面ともヘラナデ。
	VII類		外へまっすぐのび、端部が外反する。	外面はハケナデのあとヘラナデ。内面はヘラナデ。
	VIII類		裾の広がる台のつくグラス状鉢。	外面と鉢部内面はていねいなヘラナデ。脚部内面はハケナデ。鉢部と脚部は貼りつけ。丹塗り。

第185図 古墳時代の土器器分類図9

豊穴住居跡とそれぞれの遺物出土は下表のとおりである。

住居	形	主軸方向	規 模	出 土 遺 物						
				甕	壺	甌	高 环	鉢	その他	
1	正方形	N 9度W	3.6m × 3.6m	I a			IV	II	IVa	須恵器
2	長方形	N 7度E	3.9m × 4.2m	I a	I b II		II	II a	II a Va VI	
3	正方形	N 9度E	5.0m × 5.0m		II c		III a	II	I a II b IV b	紙石
4	長方形	N 5度E	4.4m × 4.3(+α)m	I a I b II a	I b,	II IV	I II III	I ~ IV	蓋	
5	*	N 7度W	4.3m × 4.7m	I b	I b I d II	II	II IV			須恵器
6	*	N 24度W	3.3m × 3.6m	I	I a · III	II	II	○		紙石
7	方形	N 10度W	4.0m × 5.4m	I a	I c	II b VI	II	I c III a V b		
8	正方形	N 19度E	4.5m × 4.7m	I a I b	I		II b	VI VII		
9	*	N 56度E	5.3m × 5.3m	○	I d	III IV V	II III	I III IV	匙・鉄器	
10	台形	(2.3m + 5.3m) × 4 m		I b						須恵器
11	正方形	N 7度E	4.3m × 4.3m	I b	I b,		II	II b V a z		
12	長方形	N 71度E	5.0m × 5.8m	I a I b III	II	II IV V	II	IV a VII	須恵器・紙石	
13	*	N 26度E	2.5(+α)m × 2.8(+α)m	I a I c III		III c	I II			
14	*		4.8(+α)m × 6(+α)m	I a I b	II IV	II b IV	○	III b IV c	ふいご	
15	*	N 4度W	3.5m × 4.0m	I a I d			II c			須恵器
19	N 6度E			I a				○		

第28表 豊穴住居跡一覧表

5.奈良～安土桃山時代

ほぼ全域にこの時代の遺物が出土し、柱穴をはじめ竪穴住居、土塙、溝状遺構などが検出された。出土遺物からすると、その中心は平安時代後半から鎌倉時代前半と思われ、遺構もその時代を主体としているようである。

掘立柱建物は11棟をまとめたが、この他にも多くの建物があつたらしいことは、柱穴の検出

	形	主軸方向	規 模	出 土 遺 物
掘立1		N10度W	2間×3間	
2		N19度W	2間×2間	
3		N10度W	2間×5間	土師器(环・塊・甕)
4		N14度W	3間×3間	土師器(皿・环・蓋・甕)
5		N38度W	3間×?	土師器(环・甕)内黒土師器塊・須恵器甕
6		N26度W	2間×3間	土師器(环・塊・甕)
7		N25度W	2間×2間	
8		N1度E	2間×2間	土師器(环・甕)
9		N30度E	2間×2間	土師器(环・甕)
10		N9度E	1間×3間	土師器(环・鉢・甕)
11		N3度E	2間×2間	土師器(环・甕)須恵器(环蓋)
竪穴16	方形		2.4m×3.0m	土師器(环・塊・甕)内黒土師器(塊)
17	隅丸方形		2.7m×2.7m	土師器(环・甕)
18	隅丸方形		2.4m×3.2m	土師器(皿・环)内黒土師器(塊)白磁
土塙A	だ円形		0.5m×0.7m	土師器(甕)
B	略円形		0.9m×1.0m	土師器(环・塊)
C	だ円形		0.7m×1.1m	土師器(环・甕)須恵器(甕)
D	略円形		2.2m×2.5m	土師器(环・甕)
E	略円形		1.9m×2.0m	土師器(皿・环・甕)須恵器(蓋)
F	だ円形		1.1m×1.8m	土師器(皿・环・塊・甕)
G	円形		直径 1.5m	土師器(环・甕)
H	長だ円形		1.0m×2.6m	土師器(环・鉢・甕)内黒塊・須恵蓋など
I	円形		直径 0.8m	土師器(环・甕)内黒土師器(塊)
J	円形		直径 3.1m以上	土師器(环・塊・甕)青磁(蓋)
K	隅丸方形		2.1m×?	土師器(皿・环・塊・甕・蓋)須恵器環蓋
L	だ円形		0.5m×1.2m	青磁(皿)
墓塙A	円形		直径 1.2m	白磁(皿)洪武通宝4, ガラス玉
溝2				土師器・黒色土器・須恵器・磁器・石鍋

第29表 主な遺構とその出土遺物

数からみて十分考えられることである。11棟の建物のうち10棟はその規模がわかっている。1間×3間が1棟、2間×2間が5棟、2間×3間が2棟、3間×3間が1棟、2間×5間が1棟である。建物の向きは一定しておらず、磁北に対し西に傾くものが大半であるが、その角度は10度から59度と差が大きい。東に傾くものは3棟あるが、これは南側に集中し、その傾き度は似ている。出土遺物は少なく、土師器が主体である。底部切り離しがヘラ切りのものと糸切りのものとある。ヘラ切りのものは3・5・6・10のものに出土、糸切りのものは4・8・9・11のものに出土している。これらの建物は遺物からみれば平安時代後半～鎌倉時代前半のものと思われる。

竪穴住居跡は南側で3基検出され、いずれも3m前後しかない小型の方形あるいは隅丸方形住居である。壁際に多くの柱穴が巡ったり、溝が巡ったり、四隅に柱穴があったりすべて同じ様式ではないが、ほぼ類似した様相をしており、深いというのも共通している。中には炉跡など検出されなかったが、18号住居跡の近くでは周囲に焼土があり、屋外炉の可能性がある。埋土中の遺物からこの3基は鎌倉時代のものと思われるが、この時期の竪穴住居跡は栗野町山崎B遺跡でも検出されており、形態・規模など似ている。

土塙は多く検出されており、その時期は平安時代前期から室町時代まで長期間にわたっている。室町時代のものは1基で青磁の皿が出ているが共伴資料はない。土塙AからKまではほとんどが平安時代のものと思われ、床面上に土師器の皿・壺・碗・甕などが多く出土している。須恵器や青磁などと共伴するものもあり、今後の分類、編年上の好資料となろう。

溝状遺構が2本あり、2号は弧状に巡るものである。溝状遺構は本県でも弥生時代中期以降各地でみつかっているが、平安時代までくだるのは初めての検出例である。西ノ平遺跡でもみつかっており、平安時代後半～鎌倉時代前半における集落構成をみると好資料といえよう。今後、遺物の検討により個々の遺構から全体の構成へと考えを進めていかねばならない。

室町時代頃の墓塙も9基検出され、大半は出土遺物がなかったが、墓塙Aには洪武通宝4枚ガラス玉220個以上が床面近くにあり、埋土中に白磁皿もあった。白磁皿の年代より16世紀頃のものと思われるが、このように多数のガラス玉が出土したのは県内でも初めてであり、この墓塙に埋葬された人の職業等が検討されねばならない。

遺物の中には縁釉土器・転用窯・墨書土器・輸入器など庶民のものとは考えられないようなものもはいっている。また九州では樺万丈窯しか検出されていない中世須恵器窯であるが、ここでは甕・鉢などの出土が目立つ。甕の中には龜山焼（岡山県）に似たものが、鉢の中には魚住焼（兵庫県）に似たものがある。今後、胎土分析などによって生産地を確かめることも課題のひとつであろう。

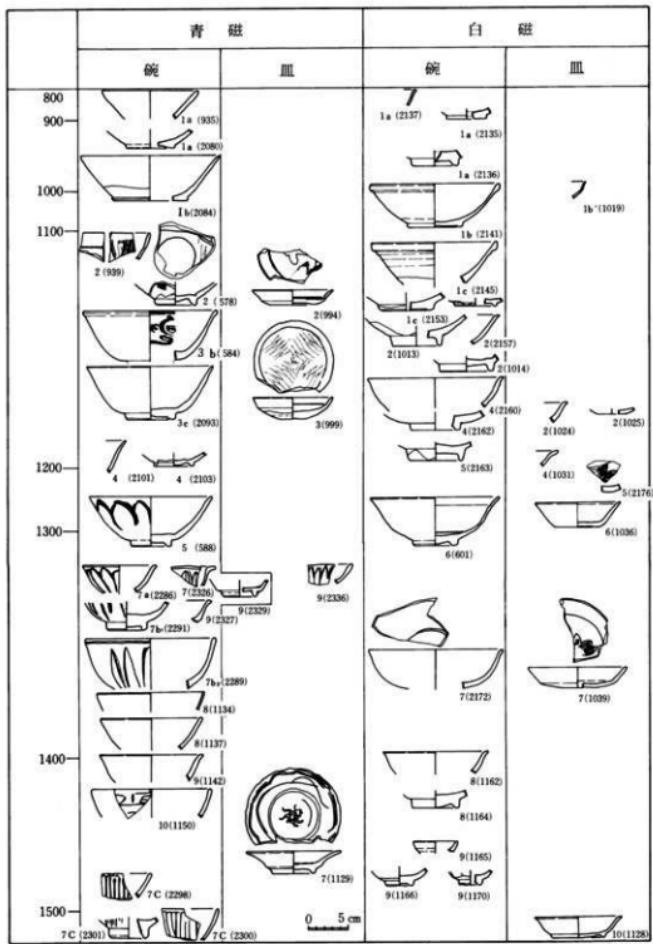
6. 江戸時代

23A区あたりから24・25K区付近にかけて掘り切りの道路があり、その南側に溝・建物・墓などがある。溝は23B区あたりから24K区にかけて続いており、V字状を呈している。西端は浅くなってしまっており、東側は台地端へ延びている。建物は掘立柱建物が1棟まとまつた

けであったが、多くの遺物が出土したことから他にも建物のあったことを予想できる。農道下に巨石のあったことなどから礎石建物の存在が予想され、建物および遺物の年代は墓石から考え、江戸時代中頃のものを主体としているといえよう。多くの墓塚が検出された。ここでは表を参照してほしい。

番号	区	墓 坂					人骨	副葬品	板材	釘
		形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	主 軸				
1	16・17B	長 方 形	113	65	120	N13° E	女性	熟年		
2	19B	隅丸方形	159	121	118	N 1° W	不明	不明		
3	19B	長 方 形	159	75	86	N 3° E	男性	壯年		
4	20B	隅丸方形	136	75	44	N20° E	—	小兒	7	
5	19・20B	長 方 形	156	96	92	N 3° W	男性	熟年		
6	16・17B	*	(139)	80	32	N 4° E	男性	壯年	7 扇子	
7	17B	*	173	124	132	N 6° W	不明	熟年	7 ○ ○	
8	16・17B	*	175	80	145	N13° E	不明	熟年	6	
9	16B	*	167	81	132	N12° E	男性	熟年		
10	17B	*	(117)	134	114	N 4° E	不明	不明	7 ○	
11	16B	*	172	101	70	N 7° E			2	
12	16B	*	143	91	126	N26° E	男性	熟年	7	
13	16・17B	*	(191)	126	126	N 8° E	男性	熟年	7	
14	17B	*	(171)	100	105	N12° E	不明	壯年	7 キセル	
15	16B	*	142	77	118	N12° E	不明	熟年	7	
16	16・17B	*	128	67	142	N22° E	女性	壯年		○
17	17B	不 明	(77)	127	15	N13° E			2	
18	17B	長 方 形	178	112	158	N 1° E	不明	不明	5	
19	17B	*	(125)	94	78	N 4° E	男性	壯年	6	
20	17C	*	180	95	79	N 1° E	不明	熟年	6	
21	20B	*	188	99	100	N 2° E	不明	熟年	6	
22	20B	*	156	68	100	N 4° E	女性	熟年	7 ○ ○	
23	20B	*	168	84	122	N 3° W	男性	熟年	6 ○	
24	20B	*	133	64	87	N 3° W	女性	熟年	7 ○ ○	
25	20B	椭 円	90	45	25	N 5° W			7	
26	20B	隅丸方形	155	68	95	N 5° W	—	小兒	4	
27	19B	長 方 形	76	98	36	N 1° W				
28	21B	隅丸方形	109	68	55	N 4° W				

第30表 墓址一覧表



第186図 磁器分類図

IV 西ノ平遺跡の調査

- 第1章 概要
- 第2章 旧石器時代
- 第3章 繩文時代
- 第4章 古墳時代
- 第5章 奈良～鎌倉時代
- 第6章 室町・安土桃山時代
- 第7章 江戸時代
- 第8章 まとめ

第1章 概 要

成岡遺跡との間には幅80mほどの狭く、そして短かい谷水田があり、バイパスの路線は、この谷尻に近い所を通っている。この谷水田から約10mあがった所には矢武者神社という小さな神社がある。この神社と遺跡との間には幅約5m、深さ約3m位の落ち込みがあり、現況は山林であるが、古くは道路であったらしい。一方、字西ノ平と字上ノ原は道路を境界として分かれているが、元々はひと続きの傾斜した台地であり、いつの時代にか削平および盛土をほどこして、現在のような段をつくるようである。現在、上ノ原が安定した平坦地をなしているのに対して、この遺跡はいくつかの段をもっている。今回の調査面積は約5,200m²だった。

西ノ平遺跡の標高は約22m～27mで、この高さの段はバイパス用地の約40m西を基部として東へ長く延びている。遺跡は現在高でそれぞれ1m～2.5mほどの違いをもつ3つの段があるが、元来はゆるやかな傾斜地であったらしく、それぞれの段違いの場所では上の層が欠けている。つまり、アカホヤ層堆積後の削除があつたらしい。

遺跡は旧石器時代から江戸時代まで長期にわたって使用されているが、特に平安時代から室町時代頃にかけては繰り返し使用されている。

旧石器時代の遺物は少量のみであるが、この中には南九州独得の細石刃剥離技法をもつ細石核が含まれている。

縄文時代の遺物は早期から晩期まで多時期にまたがるが、それぞれの時期では出土量が少なく、わずかに1・2片という時期も多い。晩期にはいくらか増えているが、遺構などは検出されていない。土器のほかに石鏡・石匙・石斧・叩き石などの石器や軽石製岩偶もある。

弥生時代の遺物は全くない。古墳時代の遺物は散在しているが、住居跡などの遺構は検出されなかった。

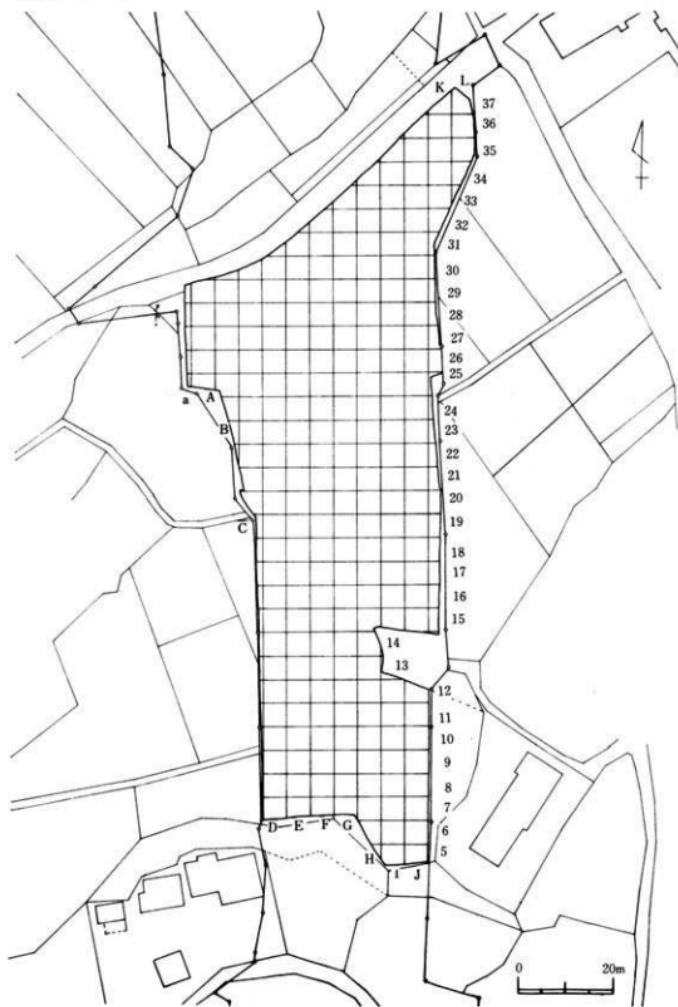
奈良時代末から平安時代にかけては、遺跡の北半を中心とする柱立柱建物などがあり、墨書き土器を含む多くの土師器、須恵器などとともに硯・焼塙壺・綠釉土器・青磁・白磁・帶金具などの当時の出土品としては貴重なものが多く出土している。

鎌倉時代には南端近くで規模の大きい、そして整然とした建物や、土塹、溝などが作られている。この集落には土師器・黒色土器の他に青磁・白磁・青白磁なども多く含まれており、付近に土師器・古錢などが積み重なった地鎮の跡もある。

室町・安土桃山時代の遺物も青磁・白磁・染付などが出土しており、火葬跡や墓跡からは洪武通宝も出土している。

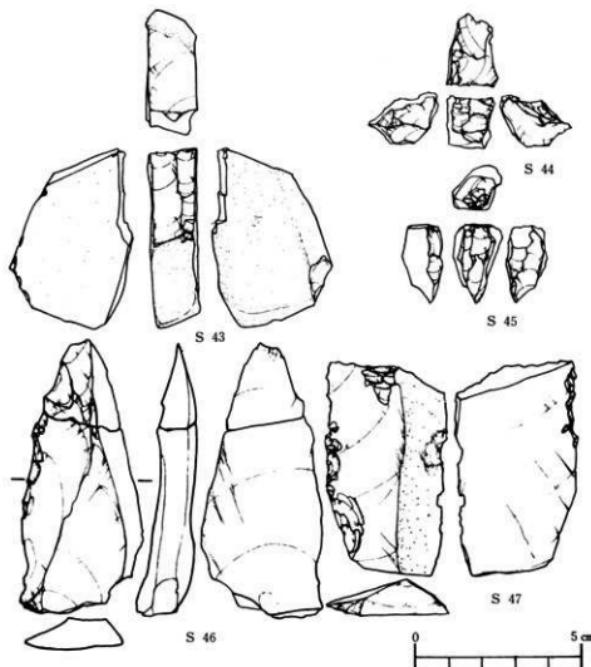
江戸時代には中央付近(17～23区あたり)で建物、墓などが作られている。建物は礎石を使ったものもあったらしいが、ほとんどは柱立柱建物で、柱穴の中に礎板状の石を敷いたものもある。墓跡は6基あって、墓石から中頃のものと思われ、ほとんどに人骨が残っている。周辺からは多くの陶磁器が出土した。

これ以降、この地は生活跡として使われることはなく、現在まで畠になっていた。



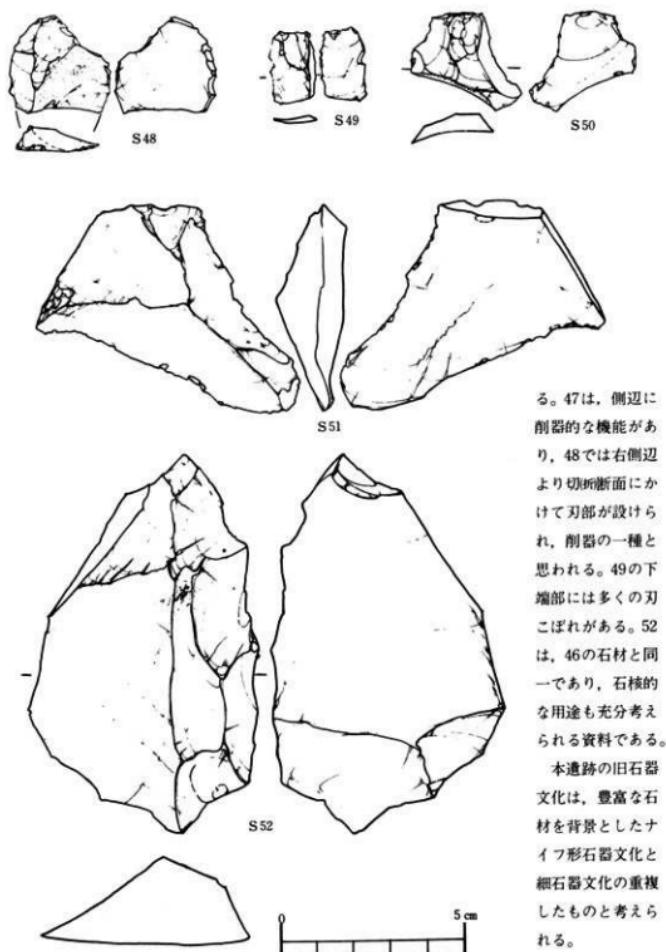
第187図 西ノ平遺跡グリッド配置図

第2章 旧石器時代



第188図 旧石器時代の石器(1)

43は凝灰岩質頁岩の扁平礫を利用し、石核調整は打面形成に一回の加撃がなされ、その他の面では、背面の下端部の一部に行われるだけで他の部分は礫面をそのまま残す「加治屋園型細石刃核」である。44・45は、黒曜石を用い、45はローリング作用を受けたと思われ磨耗が激しい。44の石核調整剝離は、数回の粗い剝離で側面形成の後に打面形成が行われた様相がある。素材には扁平な角礫を用いたと思われ一部に礫面を残している。46は軟質の安山岩を利用したナイフ形石器で剝片の端部と右側刃を目的部としている。背面の調整は主として主要剝離方向より行っている。この種の石器は、指宿市小牧3A遺跡で出土している。47は硬質安山岩、49は黒曜石、48はメノウ、50は頁岩、51はチャートをそれぞれ利用し、石材が豊富であったことがうかがえ



る。47は、側刃に削器的な機能があり、48では右側刃より切削断面にかけて刃部が設けられ、削器の一種と思われる。49の下端部には多くの刃こぼれがある。52は、46の石材と同一であり、石核的な用途も充分考えられる資料である。

本遺跡の旧石器文化は、豊富な石材を背景としたナイフ形石器文化と細石器文化の重複したものと考えられる。

第189図 旧石器時代の石器2)

第3章 繩文時代

(1) 土器

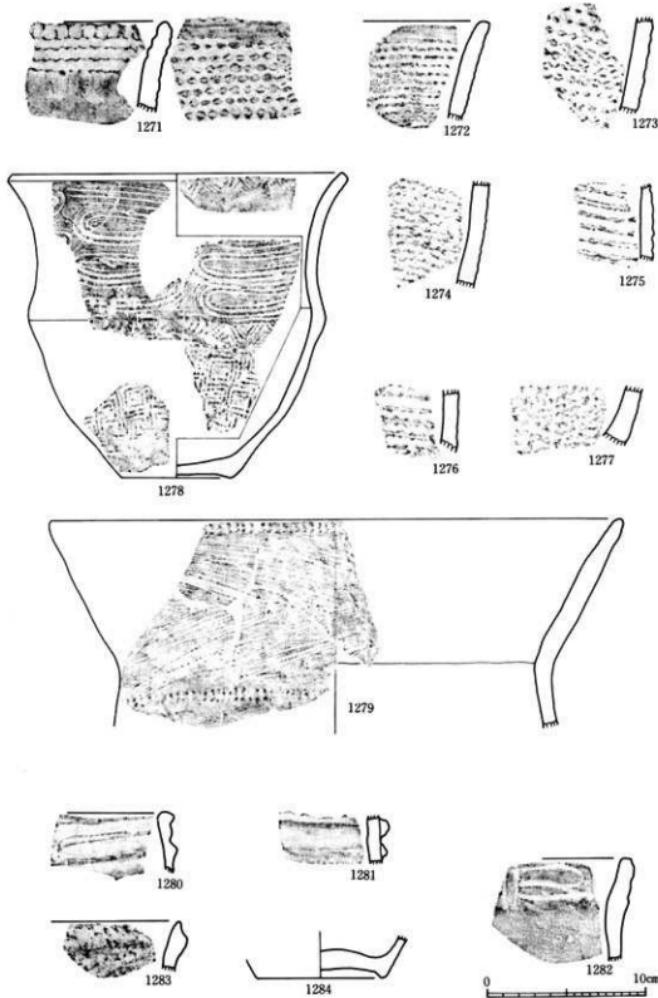
土器は押型文土器（手向山式も含む）・塞ノ神B式・南福寺式・出水式・北久根山式類似・晩期II式が出土した。出土状況は晩期II式が北と南に分かれ、23, 24-F区と8, 9-D区に集中している。押型文土器（手向山式も含む）は12・13-D・E・Hに集中している。手向山式は1個体だけで完形である。早期の土器は他に塞ノ神B式が出土している。中期の土器は、南福寺が出土している。後期の土器は出水式や北久根山式類似（市来式にも類似しているが胎土で考えた）が出土している。晩期の土器は晩期II式の深堀タイプ（1298～1300）と黒川タイプ（1310～1315）の変形土器が出土している。

番号	出土区	層	特徴	型式
1271	6 J	3	押型文土器である。口縁部で外反する。押型は横円文を外面に山形文を内面上面に施している。また、内側の口縁部には削目を施している。胎土は長石、石英等を含み、焼成もよい。色調は茶褐色を呈す。	
1272	5 J	2	押型文土器である。外面だけ押型を施している。押型は横円で小さい。陶面調整が悪く部分的には欠けている。胎土は長石、石英等を含み、焼成もよい。色調は茶褐色を呈す。早期。	
1273	7 J	3	押型文土器である。胴部は横円押型の陶文である。中身部は山形文の重なりでみられる。焼成は良い。胎土は長石を含んでいる。色調は茶褐色を呈す。早期。	
1274	13 H	3	押型文土器である。横円押型の陶文である。胎土は小窓が盛入し、焼成も良い。色調は暗茶褐色を呈す。早期。	
1275	9 R		押型文土器である。胎土は石英、長石を含み、焼成は良い。陶面調整も良い。色調は茶褐色を呈す。早期。	
1276	6 J	3	押型文土器である。横円押型の陶文である。胎土は小窓が盛入し、焼成も良い。色調は茶褐色を呈す。早期。	
1277	13 H	3	押型文土器の底部分近くである。陶文は横円押型で、焼成が悪い。胎土は良く、色調は茶褐色を呈す。早期。	
1278	13-E 12-D 12-E	3	押型文土器である。胎部は口縁部が外反し、肩部では「く」字状に折れ、底部は上げ底である。口縁部、口縁内側は山形押型文を施し、口縁部から肩部にかけて4条の横筋が施され、肩部から胴部にかけて横筋が施されている。胎土は長石混入して、焼成が悪い。内面は陶面調整がみられる。胎土は石英、長石を含み、焼成は良い。色調は茶褐色を呈す。中身は茶褐色である。胎部は横円押型文である。胎土は小窓が盛入し、焼成も良い。色調は茶褐色を呈す。早期の土器である。	手向山
1279	7 F	古通	具足文土器である。胎部は口縁部で外反し、口縁部には口縁押型による横筋が施文される。口縁部は、長石を含んでおり、胎土は口縁押型による削目を施す。胎部は丸窓の文がみられる。胎土は小窓混入で、長石、石英を含む。焼成は良い。内面は陶面調整がみられる。早期の土器である。	塞ノ神B
1280	25 F	2	深堀の土器である。深堀II式で、深堀と突堤の組合せ陶文である。胎面調整は悪い。胎土、焼成共に良い。色調は茶褐色を呈す。中身。	南福寺
1281	8 G	1	深堀の土器である。2本の突堤をもたらす。胎土は良い。地盤も良い。胎面調整は悪い。茶褐色を呈す。中期の土器と思われる。	
1282	32 J	P1	深堀の土器である。口縁部は外反し、若干厚味をもつ。又様は直線文を施す。口縁部にはS字型の沈縫を施す。胎面調整は悪い。茶褐色を呈す。胎土、焼成共に良い。後期の土器である。	出水
1283	12 F	3	深堀の土器である。胎厚のある胎面・角形の横筋である。口縁部にはS字型の削目を施している。胎面調整は悪い。胎土は長石、石英等を含み、茶褐色の色調である。後期の土器である。	北久根山？
1284	26 E	P4	深堀の底部分である。上げ底以上は胎面を削り、良い。胎面調整は口縁押型の影響が残っているか悪い調整である。内面は胎面を呈す。外側は茶褐色である。後期。	
1285	21 D	2	深堀の口縁部である。輪郭土器で、内面が黒釉で、外側に灰茶褐色を呈する。口縁部は肥厚し、外反する土器である。胎土は細砂で、焼成は良い。燒成阶段である。	晩期II式
1286	13-H-1	1	深堀の口縁部である。輪郭土器で、黑色を呈する。口縁部は肥厚し、外反する土器である。胎土は細砂で、焼成は良い。燒成阶段である。	〃
1287	25-26-G	2	深堀の口縁部である。口縁部は肥厚し、胎面から外反する。黑色輪郭土器であるが、精製された表面は部分的に削げている。黑色を呈し、胎土も同じである。地盤も良い。燒成。	〃
1288	22 I	1	深堀の胎面・輪郭である。胎面・輪郭とともに「く」字状に削れ曲がっている。黑色輪郭土器であり、胎土も良い。色調は茶褐色を呈す。地盤も良い。燒成である。	〃
1289	22 F	1	深堀の胎面・輪郭である。胎面と「く」字状に削れ曲がっている。黑色輪郭土器である。胎土も地盤も茶褐色で焼成も良い。	〃
1290	18 G	1	深堀の胎面・輪郭である。胎面は「く」字状に折れ曲がる。黑色輪郭土器である。胎面は茶褐色を呈す。胎土は茶褐色を呈する。地盤である。	〃
1291	12 E	1	深堀の胎面・輪郭である。胎面は「く」字状に折れ曲がる。黑色輪郭土器である。胎面は茶褐色を呈す。胎土は茶褐色を呈する。地盤である。	〃

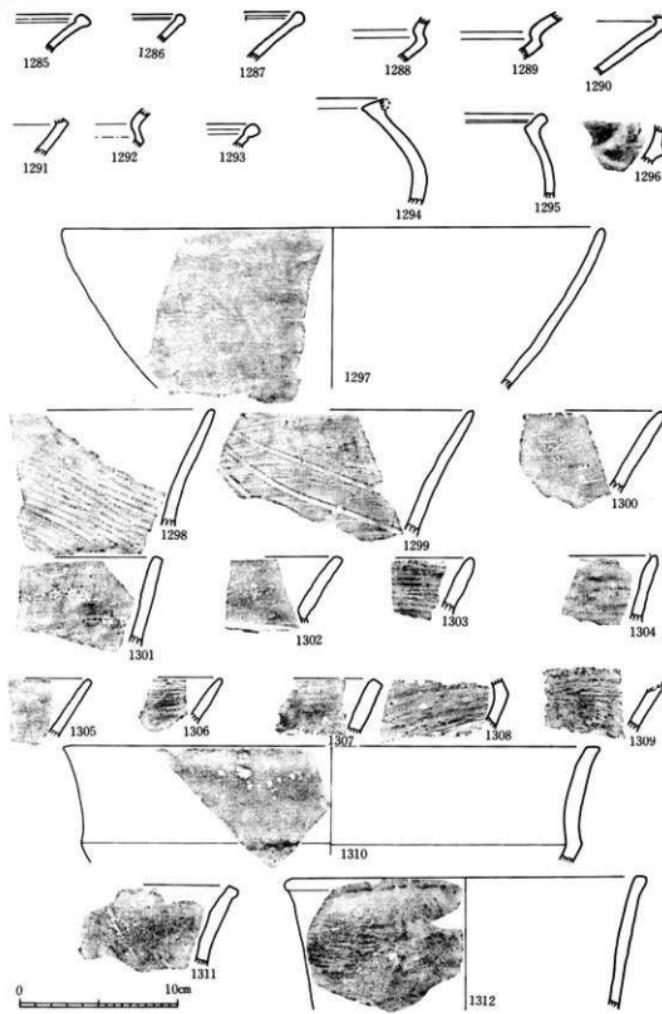
第3表 繩文式土器一覧表 (1)

番号	出土区	層	特徴	型式
1292	9 D	P3	浅鉢の縁・脚部である。黒色の船土であるが、表面調整が悪く、茶褐色も茶褐色を呈する。船土は良い。脚部は茶褐色で「く」字状に割れしている。	晚期II式
1293	17 F	1	浅鉢の口縁部である。黒色研磨上器で瓶底から口縁部までは同じ。口縁部は肥厚して外反する。船土は黑色である。	タ
1294	8 F	2	浅鉢の口縁一部にかけてである。脚部は欠けており、口縁部は不規則である。底部は「く」字状に割れ、脚部は「弓」字形である。	タ
1295	25 E	2	浅鉢の口縁一部にかけてである。口縁部は肥厚し、縁部は「く」字状に割れ、脚部は弯曲である。口縁部は短かい。黑色研磨上器の船土をもっているか。船土は茶褐色で脚部から入る。小標記入。晚期。	タ
1296	表探		浅鉢の制底部である。黒色研磨上器で突堤付いている。黑色を呈し、船土は良い。焼成も良い。晚期。	タ
1297	23 F	2	浅鉢である。内側は黒色研磨されている。外側は磨目状面がみられる。船土・焼成ともに良い。これと並んでいるのは、焼成品の加熱焼成跡に付している。晚期。	タ
1298	24 F	2	焼形土器の口縁部である。外側は茶褐色研磨上器で斜状に削り取っている。若手外反する器形である。船土は茶褐色を呈し、焼成もよい。晚期。	タ
1299	23 F	2	焼形土器の口縁部である。外反する口縁で洗浄の文様を施している。表面調整は磨目状の条痕がつく。茶褐色を呈し、焼成も良い。焼石器の様式をもつ。晚期。	タ
1300	26 E	2	焼形土器の口縁部である。外反する器形で表面調整は磨目状調整である。茶褐色の色調を呈する。	タ
1301	23 F	2	研磨土器である。直立するもので黑色の船土である。焼形土器と思われる。	タ
1302	14 F	1	焼形土器の口縁部である。底部で「く」字状に割れる。船土は焼形土器のものであり、黑色である。焼成も良い。	タ
1303	8 D	2 b	研磨土器であるが研磨調整はよくない。外反する口縁部である。茶褐色を呈し、焼成は良い。焼形土器と思われる。	タ
1304	8 D	2 b	焼形土器の口縁部である。外反する口縁で、表面は貝殻表面の調整がみられる。幼茶褐色を呈している。焼成は良い。小標記入。晚期。	タ
1305	8 G	1	研磨土器である。外反する口縁部で、船土は黑色と茶褐色が混じる焼形土器である。焼成は良い。跡形土器と思われる。	タ
1306	23 F	2	焼形土器の口縁部である。外反するもので、表面調整は外側が磨目状調整で、内側が研磨されている。船土は石英・長石を含み、焼成は良い。色調は暗茶褐色である。	タ
1307	23 F	P3	焼形土器の口縁部である。磨目状調整が器底にあり、茶褐色を呈する。船土も黒褐色である。	タ
1308	11 I	土竈	焼形土器の底部である。「く」字状に削る器形で、茶褐色を呈す。船土は黑色で、石英が混入されている。	タ
1309	9 F	3	焼形土器の底部である。「く」字状に削る。表面調整は磨目状痕がみられる。船土・焼成は良い。晚期。	タ
1310	10 D	2	焼形土器の口縁一部である。若干外反する器形で、底部では「く」字状に削れる。表面調整は丸すず調整である。茶褐色を呈し、船土・焼成は良い。晚期。	タ
1311	9 E	2	焼形土器の口縁部である。若干外反する器形で、底ナテ調整である。船土は石英・長石を含み、焼成は良い。晚期。	タ
1312	24 C	1	焼形土器の口縁部である。若干外反する器形である。内側の表面調整は磨目状で外側は丸い。口縁部は肥厚する。茶褐色を呈し、焼成・船土は良い。晚期。	タ
1313	21 G	2	焼形土器の口縁部である。直立する器形で斜状にリボン付き。口縁部は肥厚する。表面調整は丸で行っており、内側の表面調整が良い。内側は茶褐色を呈す。船土・焼成は良い。晚期。	タ
1314	24 F	1	焼形土器の口縁部である。直立する器形で、表面調整は口縁部に丸い「く」字状の削り跡で、外側は丸い。船土・焼成は良い。色調は茶褐色で茶葉模様である。外側が茶葉模様を呈す。晚期。	タ
1315	27 H	2	焼形土器のリボン部である。外側が茶葉模様で、内側が茶葉模様を呈し、表面調整である。船土・焼成は良い。晚期。	タ
1316	9 I	2	焼形土器の底部である。表面調整は底ナテ調整である。船土は茶褐色を呈し、焼成が混入している厚手の土器である。晚期。	タ
1317	22 C	2	焼形土器の底部である。「く」字状に削る器形である。船土は小標記入され、焼成は良い。茶褐色を呈す。	タ
1318	表探		研磨土器である。直立する器形で脚部が若干削る。表面調整は丸すず調整である。船土・焼成は良い。茶褐色を呈す。	タ
1319	23 F	2	焼形土器の底部である。底の中央部は薄い茶褐色を呈し、小標記入する船土である。底部の作り方は、船土帶を這らして中央を埋め込む形である。晚期。	タ
1320	23 E	2	焼形土器の底部であり半球である。茶褐色を呈し、小標記入の船土である。焼成も良い。船土帶を這らして中央を埋め込む作り方である。晚期。	タ
1321	24 E	2	焼形土器の底部である。円盤貼り付け状の底部で高い。茶褐色を呈し、船土は小標記入されていい。焼成は良い。晚期。	タ
1322	25 J	2	焼形土器の底部である。茶褐色を呈し、小標記入の船土である。焼成は良くない。作り方は船土帯を這らして中央を埋め込む形である。晚期。	タ
1323	17 F	2	焼形土器の底部である。茶褐色を呈し、小標記入の船土である。焼成は良い。円盤貼り付け状の底の作り方である。晚期。	タ
1324	9 E	3	平底の底部である。茶褐色を呈している。焼成は良くない。内側の調整は良くない。船土は石英・石英を含む。	タ

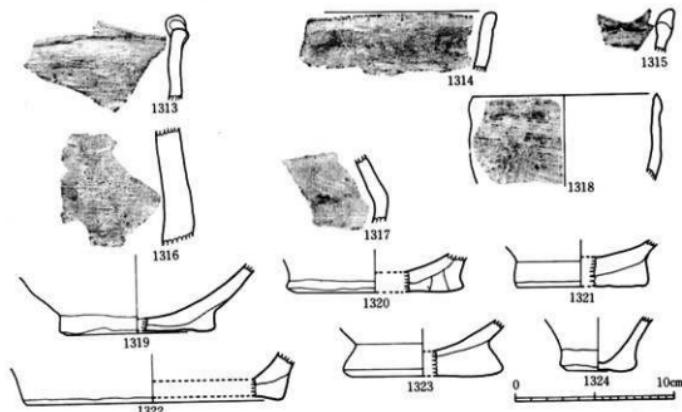
第32表 楠文式土器一覧表 (2)



第190図 繩文式土器(1)



第191図 繩文式土器(2)



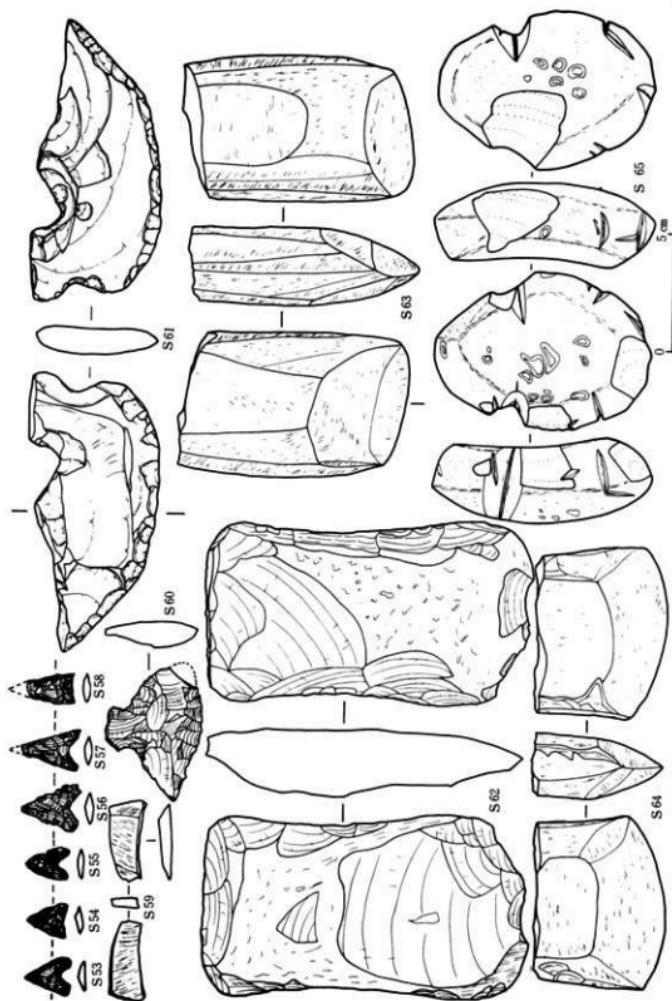
第192図 楯文式土器 (3)

(2) 石器

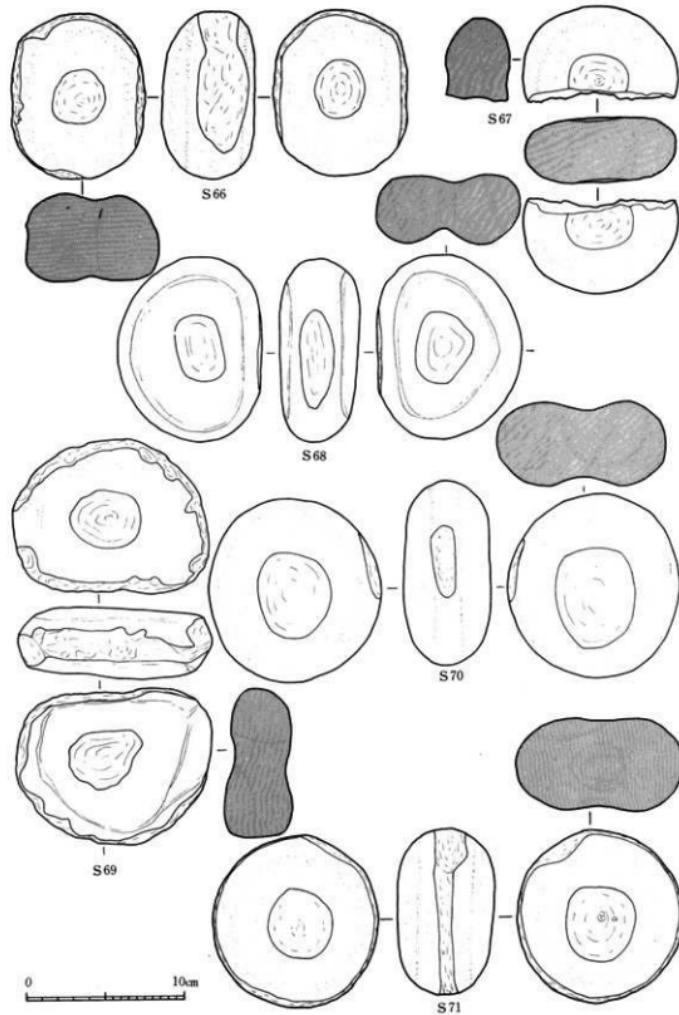
石器は石鎚、石匙、局部磨製石斧、凹石、敲石や、磨研石器、軽石加工品が出土した。磨研石器は片刃状のものである。軽石加工品は5~6ヶ所に切り込みを入れた状態で2,3面のすり面もみられる。一見岩偶状であるが確実な要素はない。

番号	出土区	層	石 材	特 微	番号	出土区	層	石 材	特 微
S53	9 D		黒曜石	凹基式剥片石鎚	S66	22 P	1	砂 岩	凹 石
S54	11 D	3	玄武岩	凹 基 式 石 鎚	S67	30 J	2	安 山 岩	凹 石
S55	29 D	3	黒曜石	凹 基 式 石 鎚	S68	15 J	1	凝灰岩	凹 石
S56	29 K	1	黒曜石	凹 基 式 石 鎚	S69	21 D	1	安 山 岩	凹 石
S57	10 D		石 英	凹 基 式 石 鎚	S70	32 I	1	安 山 岩	凹 石
S58	表採		チャート	平 基 式 石 鎚	S71	26 I	3	溶結凝灰岩	凹 石
S59	9 D	1	玄武岩	磨 製 石 器	S72	11 F	2	・	凹 石
S60	11 F	3	黒曜石	石 匙	S73	29 H	2	安 山 岩	敲 石
S61	9 E	3	玄武岩	石 匙	S74	24 D	1	安 山 岩	敲 石
S62	表採		凝灰岩	局部磨製石斧	S75	21 R	2	玄武岩	敲 石
S63	25 F	D-8	砂 岩	磨 製 石 斧	S76	22 E	2	安 山 岩	敲 石
S64	23 J	3	安 山 岩	磨 製 石 斧	S77	1HD 23 C	2	安 山 岩	敲 石
S65			軽 石	軽石加工品(岩偶?)	S78	26 E	2	安 山 岩	敲 石

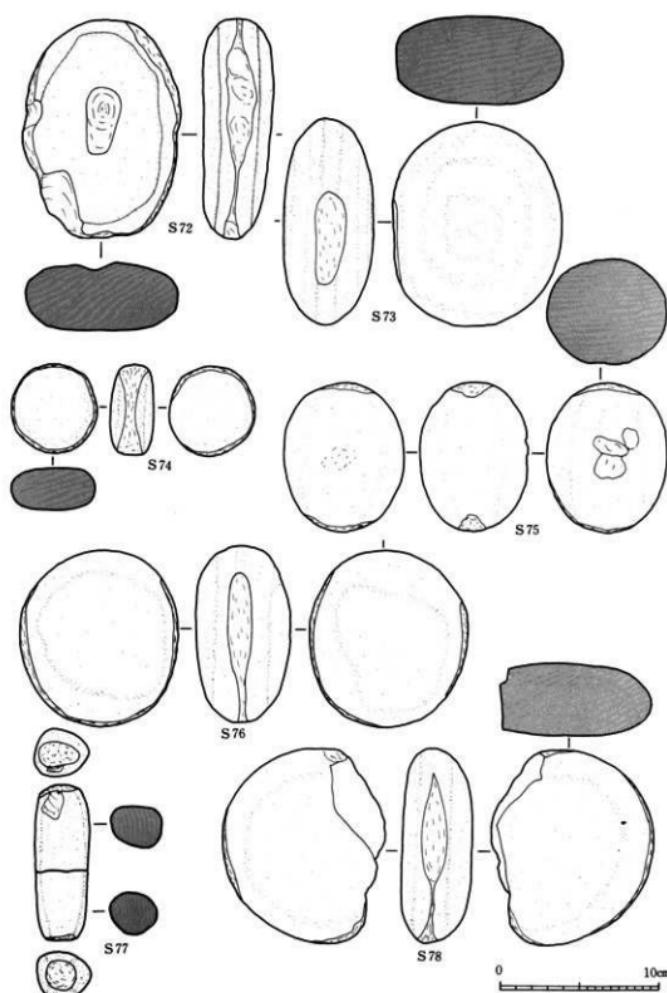
第33表 石器一覧表



第193図 石器(1)



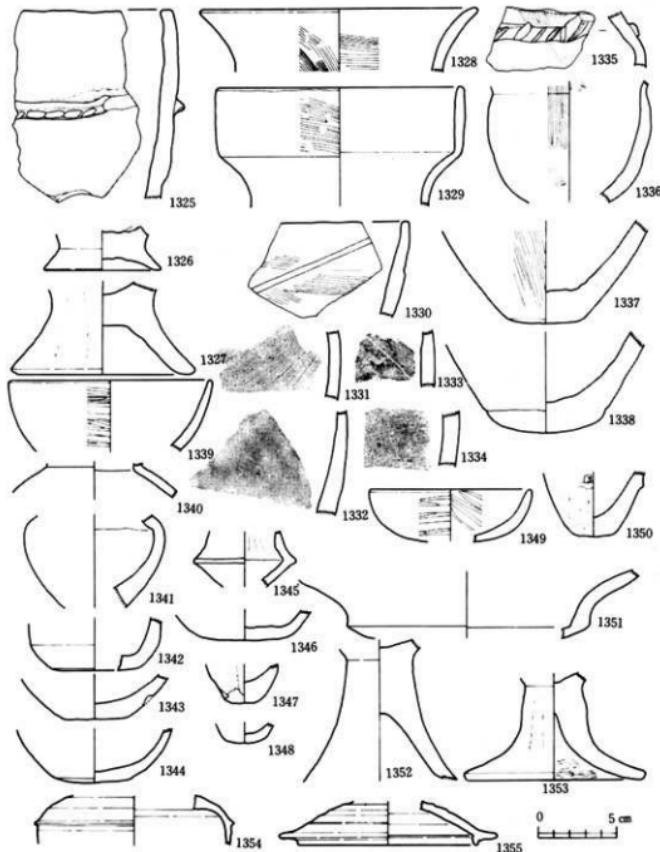
第194図 石器(2)



第195図 石器(3)

第4章 古墳時代

古墳時代の土師器・須恵器がほぼ全域に散在しているが、その出土数は少なく、遺構もなかった。土師器には壺形土器・壺形土器・壺形土器・手づくね土器・鉢形土器・高環形土器が、



第196図 古墳時代の土師器・須恵器

須恵器には壺蓋がある。

變形土器（1325～1327）はまっすぐのびる口縁で、口縁下部には三角突帯が貼り付けられる。整形は外面・内面とも粗いヘラナデで凹凸が目立つ。底には低い脚台が貼り付けられる。

壺形土器（1328～1338）も小破片のみが出土している。1328は口縁直径が17cmと広く、外反する口縁である。内外ともハケナデで仕上げる。1329は複合口縁で、頸部から外へ反って、口縁はまっすぐ立ちあがる。外面はななめ方向のハケナデ、内面はていねいなヘラナデで仕上げている。1330は壺の胴部と思われるが、一条の凹線が巡っている。外面はハケナデ、内面はハケナデのあとヘラナデで仕上げる。1331～1334も壺の胴部と思われるが、それぞれにヘラ様のもので線刻画が描かれる。1331は1本の曲線がある。1332は縱横各2本の直線がかかっている。1333は内面にX印がある。1334は曲線や直線が複雑に描かれている。1335は肩部に板押圧のある突帯が貼り付けられる。1336は口縁が外反する小壺で、丸底である。底部は小さな平底のもと、丸底がある。ハケナデとヘラナデがある。

壺形土器（1339～1344）は内寄ぎみの口縁で、胴部は丸みをもつ。底は安定した平底で、現在剥脱が目立つが丹塗りの土器である。

1345～1348は手づくね土器である。1345はソロバン玉状の器形をしている。1346～1348は丸底で広いものと狭いものとがある。

鉢形土器は外面ともていねいにヘラナデした浅く広いもの（1349）と、小型の深鉢状のもので口縁付近にヘラ押しのあるものがある。

高壺形土器（1351～1353）は立ちあがりが強く外反する浅い壺部のものと、丹塗りで筒部と壺部の境がはっきりしない脚部とがある。

須恵器の壺部は天井部が平たく、天井部と口縁部の境が明瞭なもの（1354）と、天井部につまみがつき、口縁部が下にのびるもの（1355）とがある。I式とVI式である。

これらは4世紀から7世紀までのものを含んでいる。

図番	種類	出土区	層	1335	壺形土器	32 I	1	1346	手づくね土器	32 J	2
1325	變形土器	30 J	P-11	1336	タ	31 I	2	1347	タ	31 K	2
1326	+	27 H	2	1337	タ	30 I	P-4	1348	タ	25 G	2
1327	+	32 I	2	1338	タ	23 C	1	1349	鉢形土器	32 J	
1328	壺形土器	24 F	2	1339	増形土器	表探		1350	タ	11 D	ミゾ
1329	+	30 G	P-6	1340	タ	9 H	1	1351	高壺形土器	28 H	2
1330	+	15 E	2	1341	タ	表探		1352	タ	15 E	1
1331	+	12 G	2	1342	タ	33 I	1	1353	タ	26 H	2
1332	+	24 E	2	1343	タ	8 D	20	1354	須恵器壺蓋	16 I	1
1333	+	26H-4 d	2	1344	タ	23 F	2	1355	タ	9 F	2
1334	+	28 H	2	1345	手づくね土器	28 G	P-17				

第34表 古墳時代の土師器・須恵器出土地区表

第5章 奈良～鎌倉時代

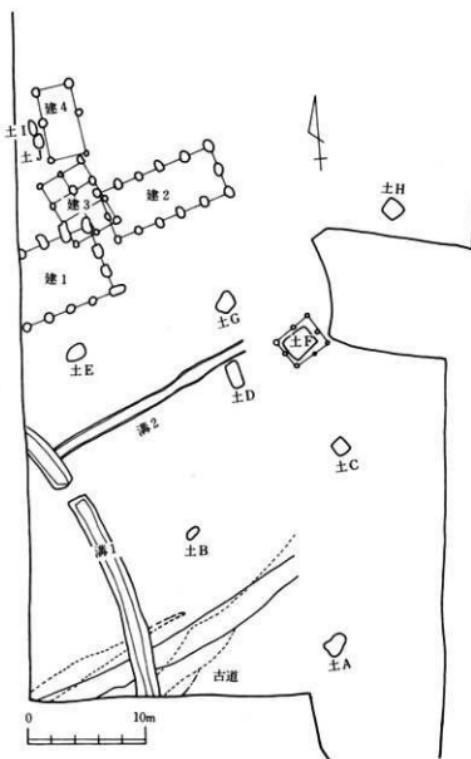
本遺跡の主体をなす時期で、ほぼ全体に遺構が広がり、遺物の散布もみられる。遺構は主として北半に平安時代、南半に鎌倉時代のものがある。

1. 掘立柱建物

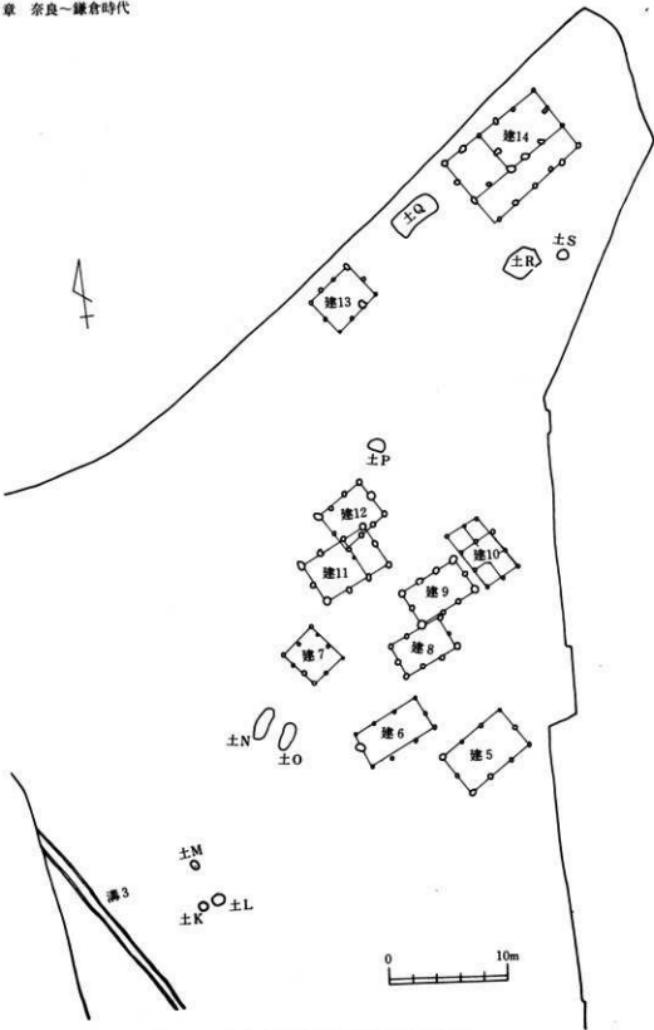
(1) 掘立柱建物 1

13～15C～E区にあるが、西側が用地外に延びている。南北方向に柱間3間、東西方向に柱間5間以上ある東西に長い建物で、主軸方向はN4度Wである。それぞれに直径20cm～30cmを測る柱痕跡があり、その柱間隔はすべて2mである。掘り方は0.8m～0.9mの円形であるが、いくつかはだ円形である。掘り方は下から数層に地固めがしてあり、柱も周囲を固めている。柱の下にはすべて礎板状の石が置かれているが、100kgを越える石や、逆に小さい石を数個並べたものもある。掘立柱建物3より新しく、柱のなかには重複したものもある。遺物は少ない。

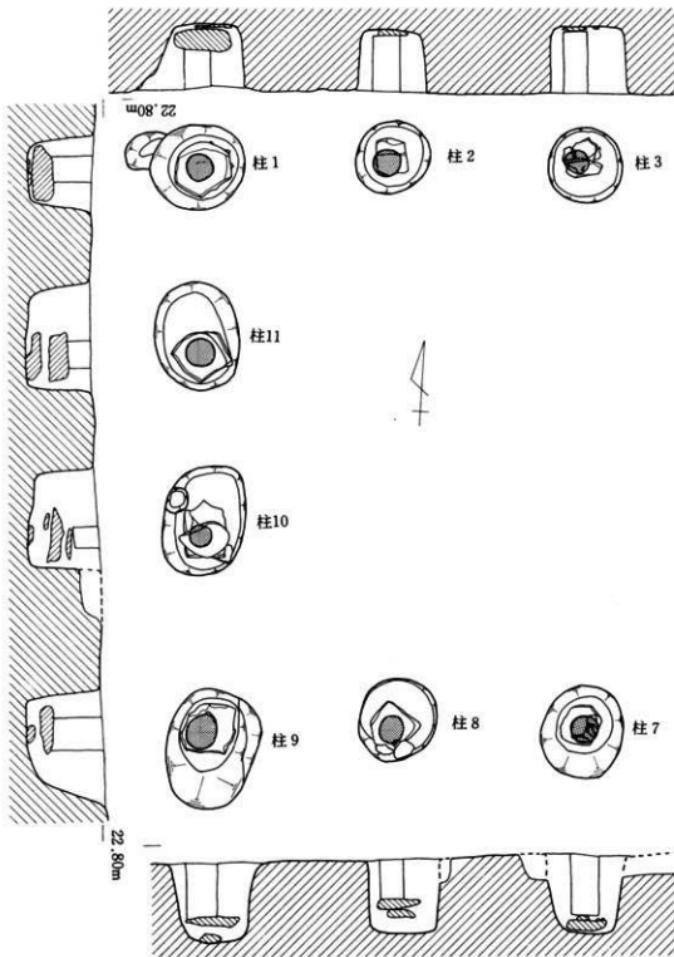
土師器の环は底切り離しが糸切りで、口縁直径6.5cm、高さ2.4cmを測る。



第197図 奈良～鎌倉時代の遺構配置図（南半）



第198図 奈良～鎌倉時代の造構配置図（北半）



第199図 挿立柱建物 1

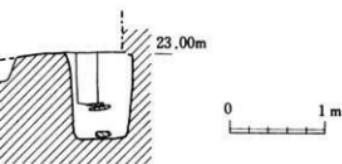


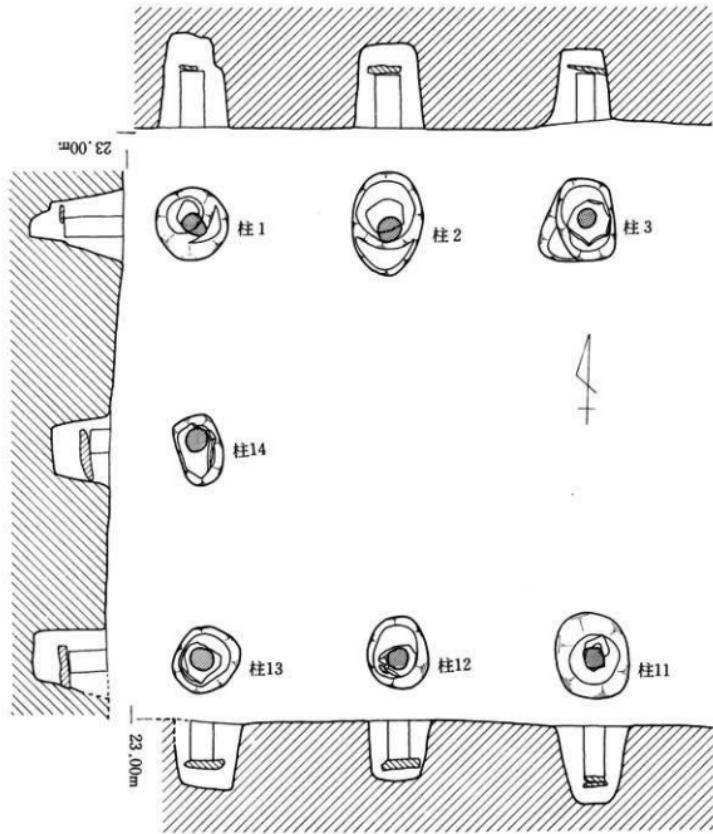
柱 5

柱 4

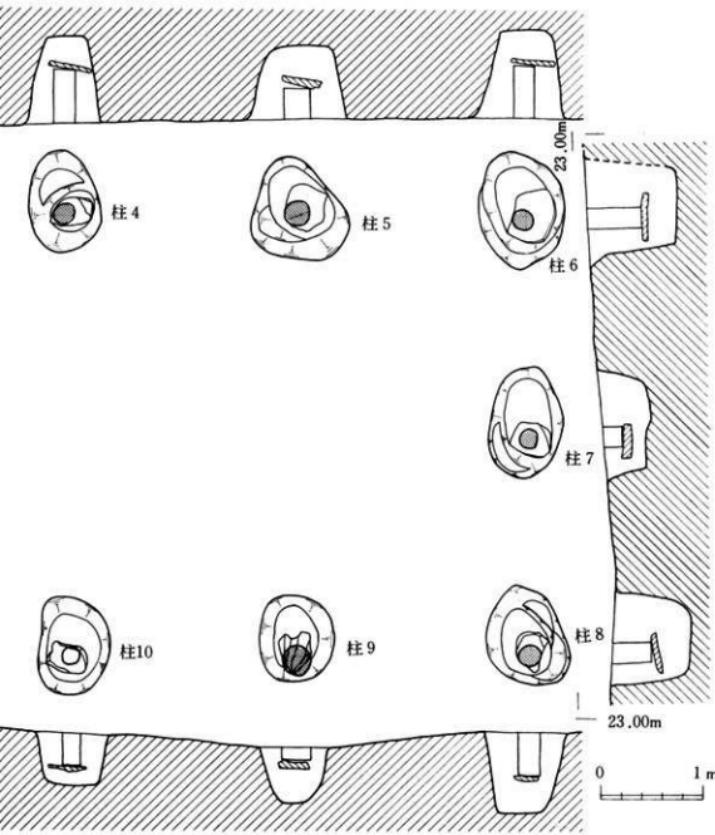


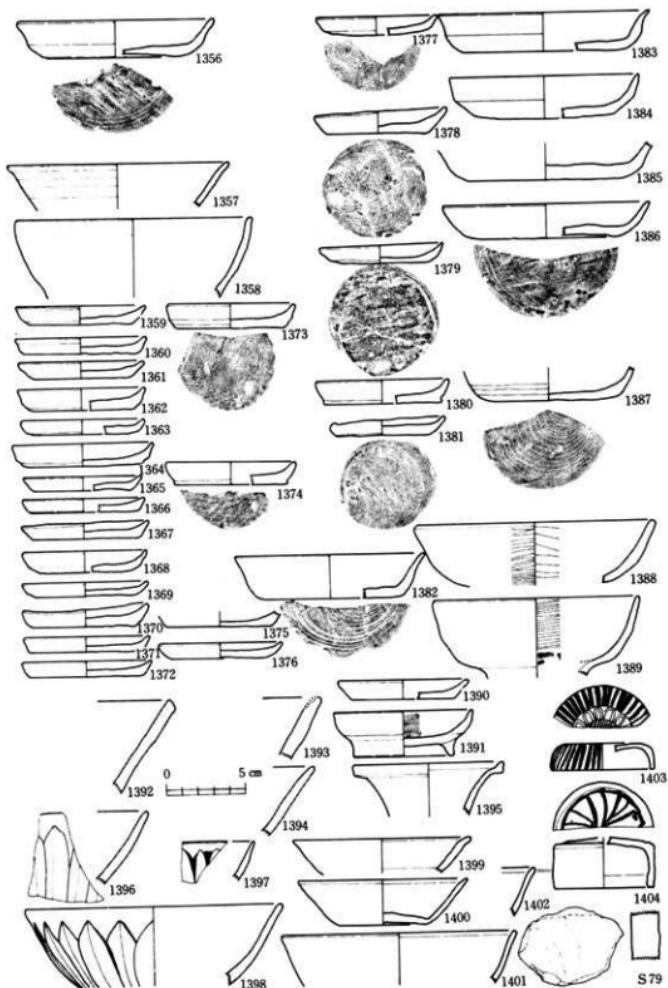
柱 6





第200図 振立柱建物 2

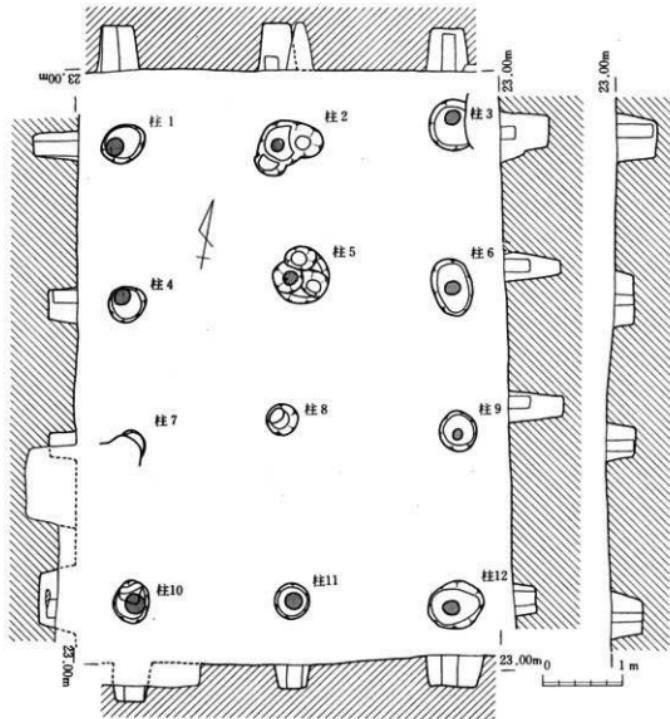




第201図 振立柱建物 I (1356~1358) と II (1359~1404) の出土土器

(2)掘立柱建物 2

15・16 E～G区にある柱間が南北方向に2間、東西方向に5間の建物で、主軸方向はN 2度Eである。それぞれに直径15cm～25cmを測る柱痕跡があり、その間隔は2.0m～2.2mある。つまり、南北方向が4.4m、東西方向が10.4mである。掘り方は直径が0.6m～1.0mある円形で、数層の叩き締めをしている。柱の下にはすべて礎板状の石が置かれており、大きな石を使ったものや、小さな石を数個並べたものがある。ほとんどの柱穴の中には多くの土器がはいつており、完形品のものも多い。また地表面にも土師器皿、黒色土器皿、青磁塊、白磁皿などが多い量に包含されていた。



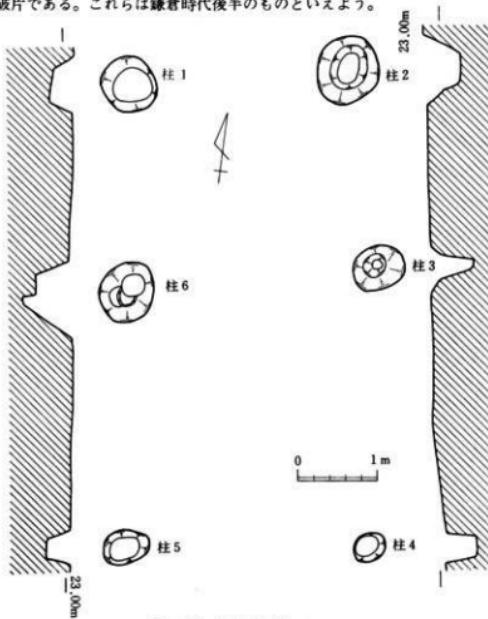
第202図 掘立柱建物 3

遺物の多くは土師器小皿（1359～1381）で、口縁直径が8 cm前後、高さが1.5 cm前後を測るものが多い。底部切り離しは糸切りである。1381は側面をつまんで、耳皿風に仕上げている。土師器壺（1382～1387）も底部切り離しは糸切りで、口縁直径10 cm、高さ3 cmの小さいものと、口縁直径12～13 cm、高さ2.5 cmのやや大きいものがある。口縁は外反する。1382は黒色のスス痕が多く付着しておりが明用の器として使われている。黒色土器（1388～1391）には内面のみ黒い内黒の壺と、内外黒い皿がある。壺は口縁直径13 cm、深さ4 cmと深いものである。皿は口縁直径8 cm、高さ1.2 cmのものと、口縁直径9 cm、高さ2.7 cmの台付のものとがある。須恵器（1392～1395）には口縁断面が矩形となるこね鉢。まっすぐ外へ開く壺、口縁直径9.5 cmを測る複合風口縁の壺がある。こね鉢は内面がハケナデ、外表面がヘラナデ仕上げをしており、軟質である。青磁（1396～1398）は外面にしのぎ蓮弁のある壺と小壺がある。白磁（1399～1402）は口縁部の釉がかきとられる口はげ口縁のもので、皿と壺がある。1403は青白磁の合子蓋である。天井部から口縁にかけて蓮花纹が描かれる。1404も天井部に蓮花纹のある青白磁の壺蓋である。S79は石鍋の破片である。これらは鎌倉時代後半のものといえよう。

(3) 捩立柱建物3

15・16 D・E区に
ある南北の柱間3間。
東西の柱間2間の総
柱建物で、主軸方向
はN12度Wである。
それぞれに直径15 cm
～20 cmの柱痕跡があ
り、その間隔はほぼ
2 mずつである。つ
まり南北方向が6 m、
東西方向が4 mある。
柱穴内には遺物は少
ないが、柱3に古銭
2（字不明）、柱12
に皇宋通宝2枚が、そ
れぞれ柱の根元にあ
った。

土師器皿（1405）
の底部切り離しは糸
切りで、図化した3
点の他に外面にしの



第203図 捩立柱建物4

ぎ蓮弁のある青磁碗が出土している。掘立柱建物1より古いが、鎌倉時代のものであろう。

(4)掘立柱建物4

16・17 D区にある南北方向の柱間2間、東西方向の柱間1間の建物で、主軸方向はN11度Wである。柱間隔は南北方向に2.4m + 3.6mで6m、東西方向に3mある。それぞれの柱穴は直径40cm~70cmと大きく、深さ30cm~50cmを測る。遺物の出土は少ない。

1408は須恵器鉢の底で、安定した平底である。外は横方向のヘラナデ、内面は横方向のハケナデで仕上げられる。こまかい土を使っているため軟質であるが、焼成良好である。黒灰色を呈している。鎌倉時代のものである。

(2)掘立柱

建物5

24・25 I・

J区にある南北方向の柱間

2間、東西方向の柱間3間

の建物で、主軸方向はN34

度Wである。

柱間隔は1.8

m~2.0mで、

南北方向が3.6

m、東西方向

が6mある。

それぞれの柱

穴は直径が30

cm~40cm、深

さが30cm~70

cmある。10本

の柱穴中、7

本の柱穴に遺

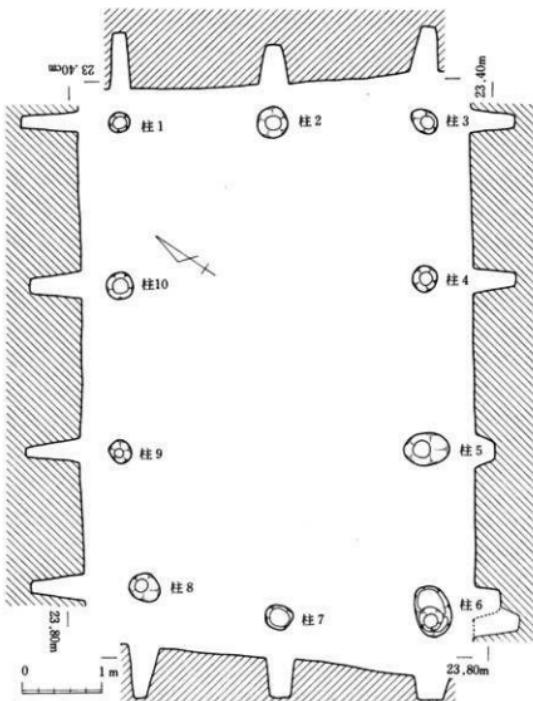
物がはいって

いるが、すべ

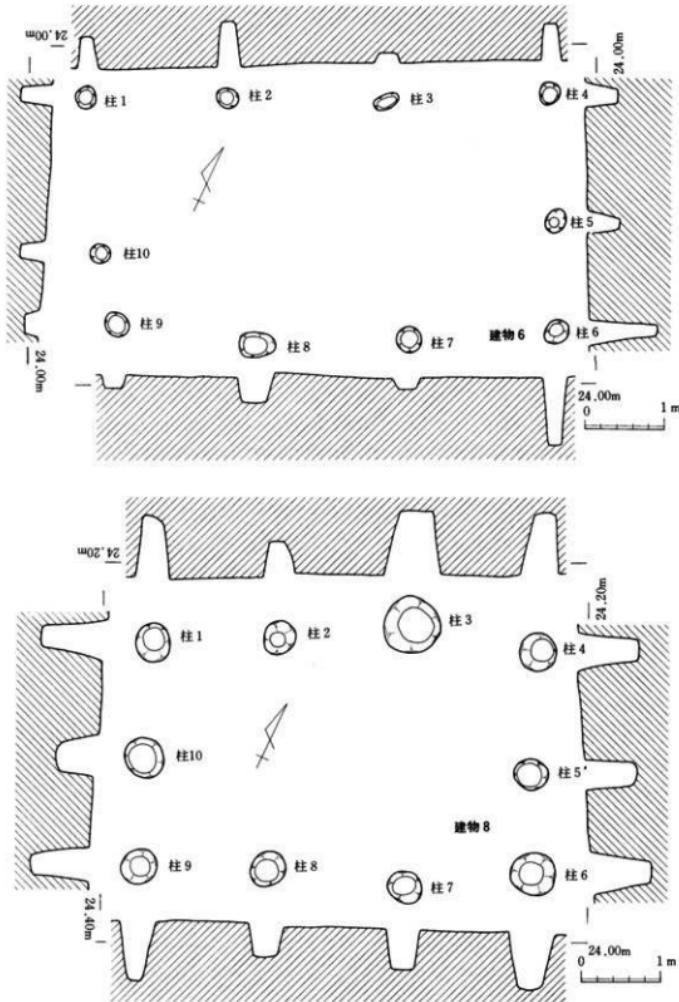
て小破片であ

り、図化でき

るものは少な



第204図 掘立柱建物5



第205図 振立柱建物 6 と 振立柱建物 8

い。

1409は土師器皿、1410は内黒土師器塊である。図化しなかった中に糸切り底の土師器壊、字は不明だが墨書のある内黒土師器塊がある。

(6)掘立柱建物6

25・26 H・I区にある南北方向の柱間2間、東西方向の柱間3間の建物で、主軸方向はN25度Wにある。柱間隔は北側が $1.7\text{m} + 2.1\text{m} + 2.0\text{m}$ で 5.8m 、南側が $1.8\text{m} + 1.9\text{m} + 1.9\text{m}$ で 5.6m ある。西側は $2.0\text{m} + 0.9\text{m}$ で 2.9m 、東側は $1.6\text{m} + 1.4\text{m}$ で 3.0m ある。それぞれの柱穴は直径が $25\text{cm} \sim 30\text{cm}$ あり、深さが $10\text{cm} \sim 80\text{cm}$ ある。柱穴内には遺物がほとんどなく、わずかに4つの柱穴に細片があるのみであった。

(7)掘立柱建物7

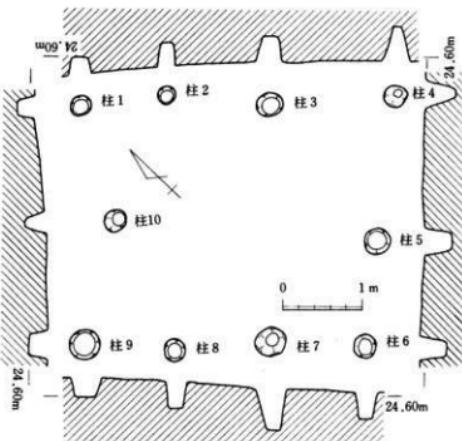
26・27 F・G区にある南北方向の柱間2間、東西方向の柱間3間の建物で、主軸方向はN44度Wにある。柱間隔は北側が $1.1\text{m} + 1.3\text{m} + 1.6\text{m}$ で 4.0m 、南側が 1.2m 等間隔の 3.6m である。西側は 1.5m 等間隔で 3.0m 、東側は $1.8\text{m} + 1.4\text{m}$ で 3.2m である。西側の中央柱が内側へはいり込んでいる。それぞれの柱穴は直径が $20\text{cm} \sim 35\text{cm}$ あり、深さは $20\text{cm} \sim 50\text{cm}$ ある。柱穴内には遺物がほとんどなく、わずかに3つの柱穴に細片があるのみであったが、柱6の中には銅製帶金具があった。

1411と1412は土師器壊である。底部の切離しはヘラ切りである。この建物は平安時代のものであろう。

(8)掘立柱建物8

26・27 H・I区にある南北方向の柱間2間、東西方向の柱間3間の建物で、主軸方向はN25度Wである。柱間隔は東西方向が 1.6m 等間隔の 4.8m 、南北方向が 1.5m 等間隔の 3.0m である。それぞれの柱穴は直径が $40\text{cm} \sim 70\text{cm}$ 、深さが $40\text{cm} \sim 80\text{cm}$ ある。すべての柱穴に土器がはいっており、完形品もある。

1413は土師器皿である。1414～1418は底部

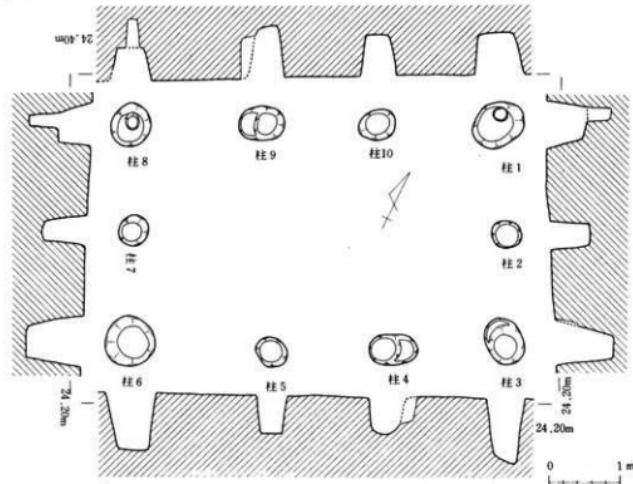


第206図 掘立柱建物7

切り離しがヘラ切りの土師器壺である。1414は口縁直径16.5m, 底部直径7.5cm, 高さ5cmの深い壺である。口縁部は外へ開きながらまっすぐ伸びている。1415は丸みをもっている。1419は口縁部がくの字状に強く屈折する土師器甕で、内外ともに粗い整形がしてある。小型である。1420は口縁直径が23cmもある鉢に近い大型の土師器甕である。土師器の胎土は白色石粒を多く含む砂質の胎土で黒雲母・石英なども多く含まれている。特に甕の胎土は粗い。1421と1422は内面をていねいにミガいた研磨土器で、内面は赤くしていることから朱の塗られた可能性もある。1421は口縁直径13.5cmを測る台付皿である。壺の深さ1.4cm, 高さ2.2cmを測る。1422は壺か甕で、高台が付いている。1423は内外とも黒色をした土師質の甕で、口縁端部が内側へ反っている。外面の仕上げは横方向のヘラケズリである。1424・1425は外へまっすぐ開く口縁をもつ内黒土師器甕である。1426は内面に朱を塗った甕である。1427～1430は須恵器甕の破片である。内面のタキは円心円文あるいは円弧であるが、1430は同心円が3つ整然としている。1428は円弧にまぎって車輪文のタキがみられる。外面のタキは1427と1429が小さい格子叩き、1428が平行線、1430が正格子である。焼成良好で堅致である。この他に柱1からは字が不明だが墨書きのかれた土師器壺が出土している。

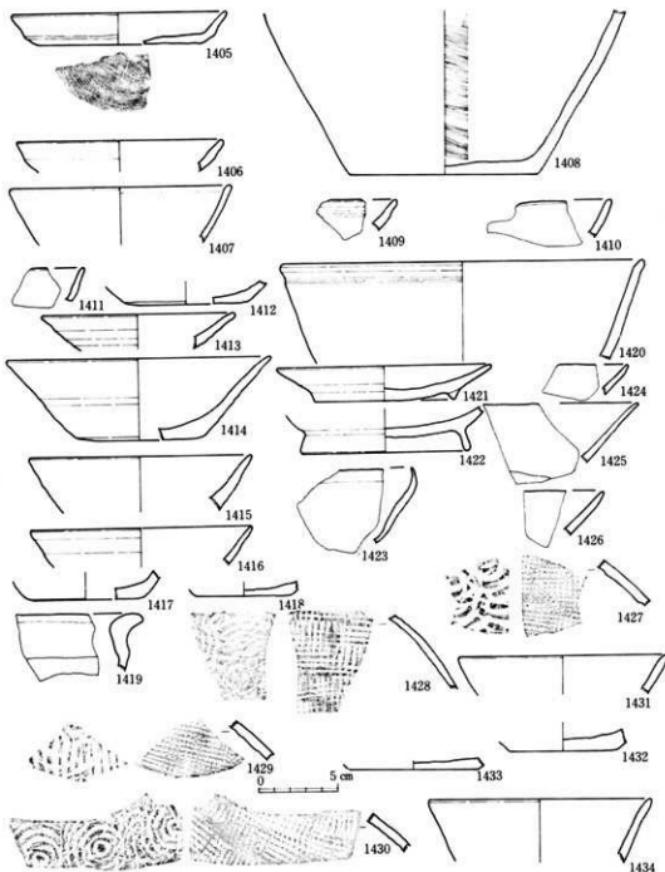
(9)掘立柱建物9

27・28H～J区にある南北の柱間2間、東西の柱間3間の建物で、主軸方向はN28度Wである。柱間隔は南北方向が1.6m等間隔で3.2m、東西方向が1.8m等間隔で5.4mである。



第207図 掘立柱建物9

1431・1432は土師器環で、底部切り離しはヘラ切りである。1433は須恵器の高台のない环身。
1434は土師器壇である。この他に柱1より字は不明であるが、墨書のある土師器壇が、柱6から
らは薄い鉄片が出ている。これらは平安時代前半のものであろう。



第208図 挖立柱建物3～掘立柱建物9の出土土器

(10) 捩立柱建物10

28・29I・J区にある南北方向の柱間3間、東西方向の柱間2間の総柱建物で、主軸方向はN 31度Wである。柱間隔は東西方向が北から 1.7m + 1.1m で 2.8m, 1.4m + 1.7m で 3.1m, 1.4m + 1.7m で 3.1m, 1.5m + 1.6m で 3.1m ある。南北方向は西から 1.7m + 2.0m + 1.7m で 5.4m, 1.7m + 1.9m + 1.9m で 5.5m, 1.7m + 1.9m + 1.7m で 5.3m ある。それぞれの柱穴は直径が30cm前後、深さが20cm~50cmある。柱穴のなかには3本を除いて遺物がはいっているが、細片が多い。

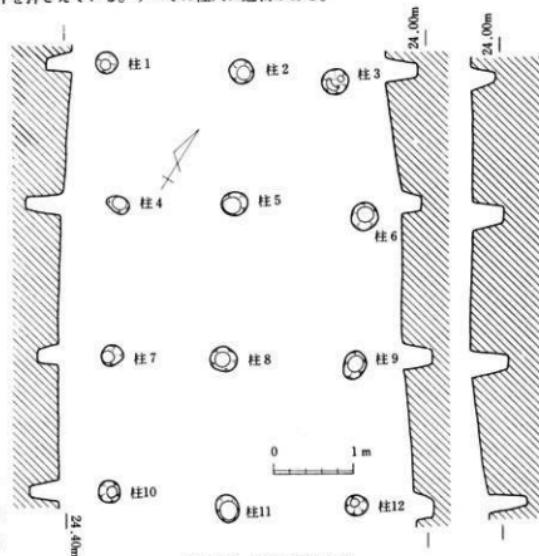
1435が土師器皿、1436・1437が土師器環で、底部の切り離しは糸切りである。1438は内黒土師器の环で、内面・外面ともヘラミガキがされている。

(11) 捩立柱建物11

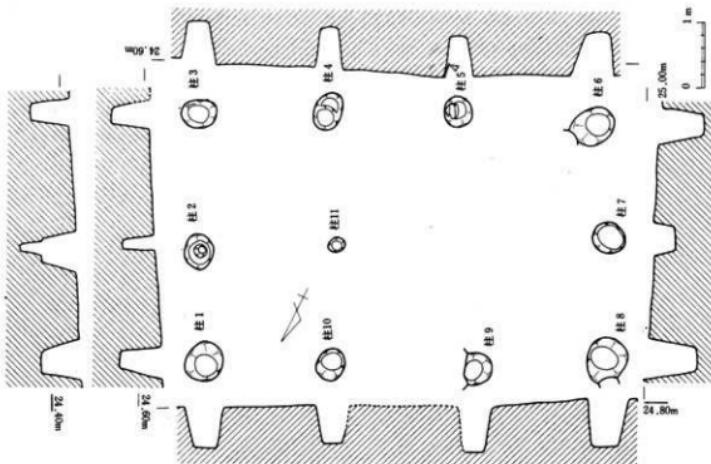
27~29G・H区にある南北方向の柱間2間、東西方向の柱間3間の建物で、東から2列目には中央に柱がある。主軸方向はN 62度Wを測る。柱間隔は南北方向が 1.8m 等間隔の 3.6m、東西方向が北側は 1.8m + 2.2m + 2.0m で 6.0m、南側は 1.9m + 2.1m + 2.0m で 6.0m ある。それぞれの柱穴は直径が20cm~60cm、深さが30cm~80cmある。柱5は途中に疊があり、須恵器甕の大破片を押さえている。すべての柱穴に遺物がある。

1439は土師器環で、底部はヘラによる切り離しのあと、板でていねいにナデしている。1440~1442は土師器甕で、口縁部がやや外反するものと、まっすぐ伸びるものとがある。口縁直径が14cm、高さ5cm~5.5cmある。

1443・1444は内面へラケズリのある土師器甕である。1445・1446は内黒土師器甕である。須恵器



第209図 捩立柱建物10



第210図 挖立柱建物11

(1447～1449) は壇身・壇蓋・甕がある。甕は大きな破片で、外面・内面とも条痕タタキである。外面は赤茶褐色を呈している。この他に柱9で「作」の墨書がある土師器甕が出土している。これらの遺物は平安時代前期のものと思われる。

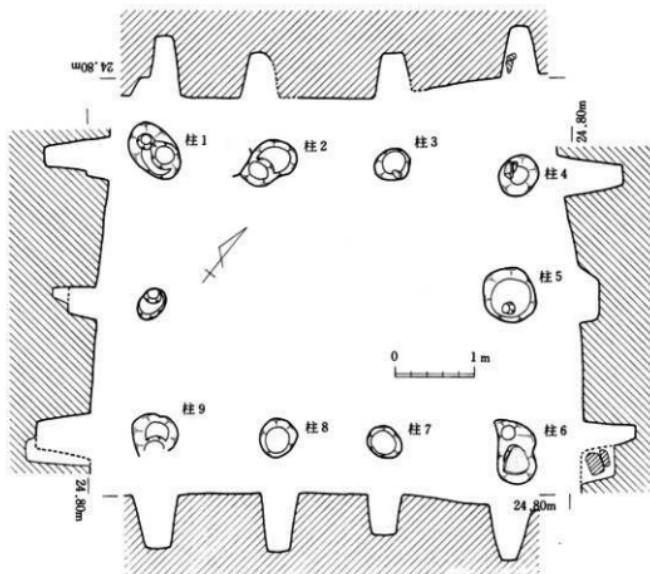
⑫掘立柱建物12

28・29G・H区にある南北方向の柱間2間、東西方向の柱間3間の建物で、主軸方向はN39度Wにある。柱間隔は東西方向が1.4m + 1.4m + 1.6mで4.4m、南北方向が1.6m等間隔の3.2mである。それぞれの柱穴は直径が40cm～70cm、深さが40cm～70cmある。柱4は埋土途中に礎が2個重なっている。柱穴の中には3本を除いて土器がはいっている。

土師器甕(1450～1453)の底部切り離しはヘラ切りで、そのあとを板状のもので、ていねいにナデている。土師器壇(1454)はやや小型である。土師器甕(1455～1457)は強く外反する口縁部をもち、内面の頸部以下はヘラケズリで仕上げている。1457の外面は粗いハケナデで仕上げている。須恵器(1458～1461)は壇蓋と壇身がある。壇蓋は口縁端部が短く下へ折れている。壇身は口縁がまっすぐ外へ開いており、底部に高台は付かない。内面・外面ともひだすき様の痕跡がみられる。

⑬掘立柱建物13

32・33G・H区にある南北方向の柱間2間、東西方向の柱間3間の建物で、主軸方向はN39度



第211図 捩立柱建物12

である。柱間隔は南北方向の西側が $1.9\text{m} + 1.5\text{m}$ で 3.4m 、東側が $1.8\text{m} + 1.5\text{m}$ で 3.3m である。東西方向は $1.4\text{m} + 1.4\text{m} + 1.6\text{m}$ で 4.4m である。それぞれの柱穴は直径が $30\text{cm} \sim 40\text{cm}$ 、深さが $20\text{cm} \sim 80\text{cm}$ ある。柱穴内には2つの柱穴だけ遺物がはいっている。

1462は土師器環で、底部の切り離しは糸切りである。

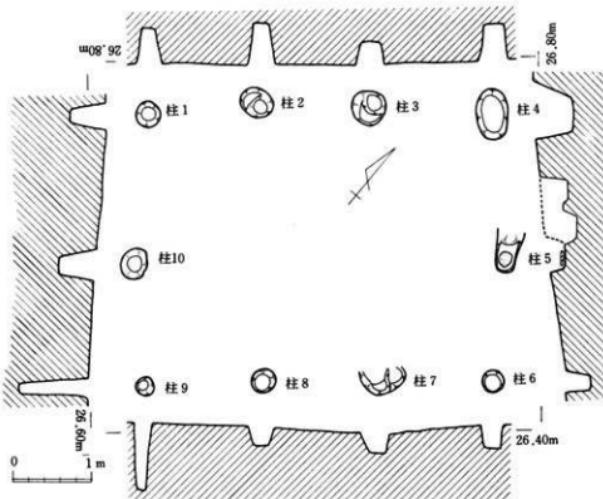
(14) 捩立柱建物14

34~36H~K区にある南北方向の柱間2間、東西方向の柱間5間の建物で、南側にひさしが1間延びる。西から3本目の柱列には中央に柱があり、間仕切りと思われる。ひさしの部分は下屋にあたる部分であろう。柱間隔は東西方向が $1.7\text{m} \sim 2.2\text{m}$ で総長 9.8m 、南北方向が 2m 等間隔で 4m ある。ひさし部分は約 2.0m 張り出しており、上屋の柱列とは並びが一致しない。それぞれの柱穴は直径が $18\text{cm} \sim 24\text{cm}$ 、深さが $15\text{cm} \sim 30\text{cm}$ ある。約半数の柱穴に遺物がはいっているが、破片は小さい。

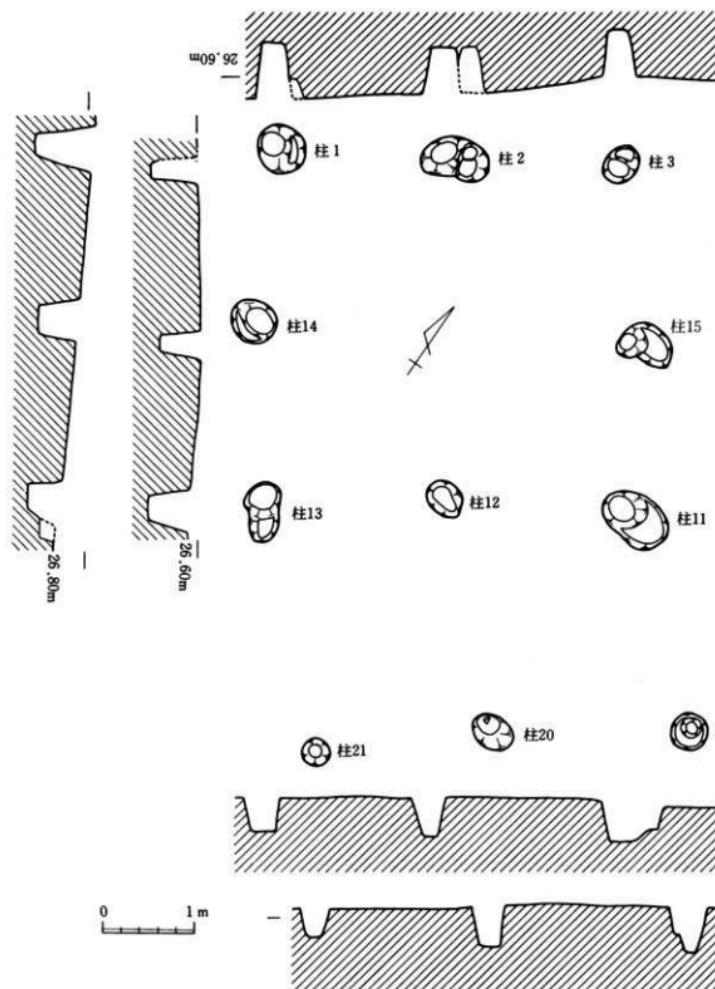
1463~1466は土師器皿で、口縁直径が $8\text{cm} \sim 9\text{cm}$ 、高さが $1.1\text{cm} \sim 1.5\text{cm}$ ある。底部の切り離しは糸切りである。1467は土師器甕で、内面の頸部から下はヘラケズリである。1468と1469

は土師器塊で、口縁部は端部が外反している。底部は高台でなく、高くしている。1470は青白磁の小型壺である。口縁端には軸がかからず、外面に凹線文がある。これらの遺物は平安時代後半のものと思われる。

14棟の掘立柱建物は大きく3時期に分けられる。Ⅰ期は6～9、11・12で主軸方向が一定しない。平安時代前期である。Ⅱ期は5・10・13・14で主軸方向が西へ30度～40度ぶれるものである。土師器皿・环の底部切り離しが糸切りとなる平安時代後期のものである。Ⅲ期は鎌倉時代のもので、1～4が該当する。主軸方向は磁北周辺にある。

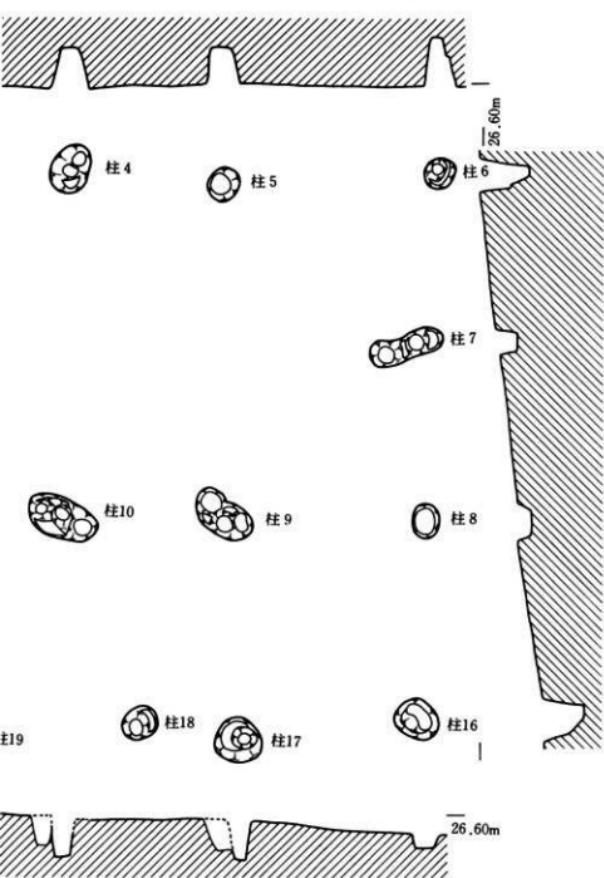


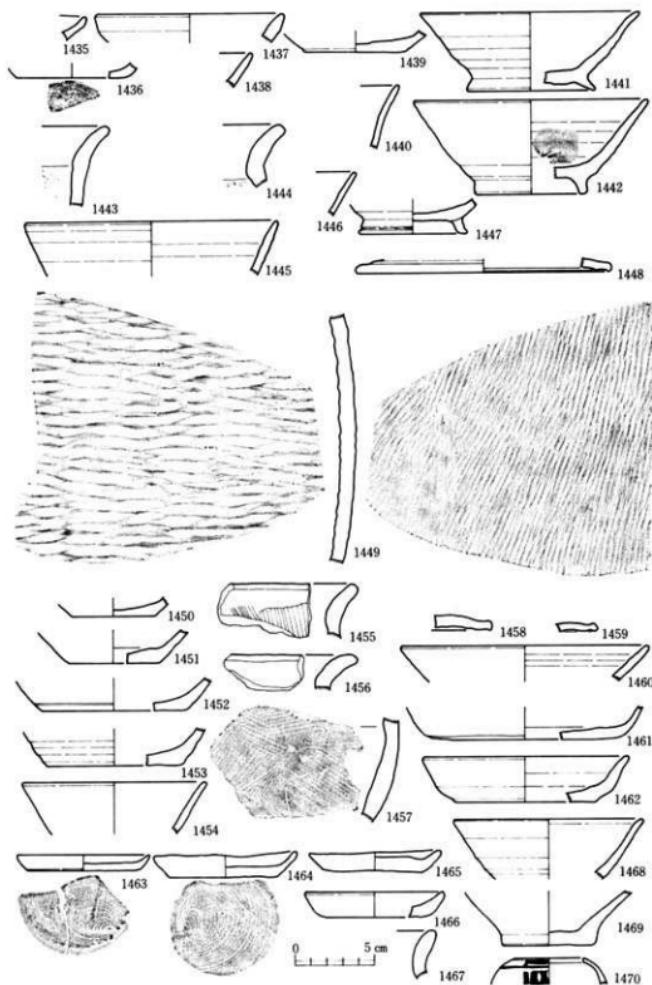
第212図 掘立柱建物13



第213図 据立柱建物14

IV 西ノ平遺跡の調査





第214図 据立柱建物10～据立柱建物14の出土土器

2. 土 坡

全域に円形、方形、だ円形をした多くの土坡があり、土器を含むものもある。10G・H区付近では複数の土坡が切りあつてある。ここではそれらの中で深いものや、土器を多く含むものを取りあげ土坡A～土坡Sと整理番号をうったが、括弧がで土坡番号もつけていく。

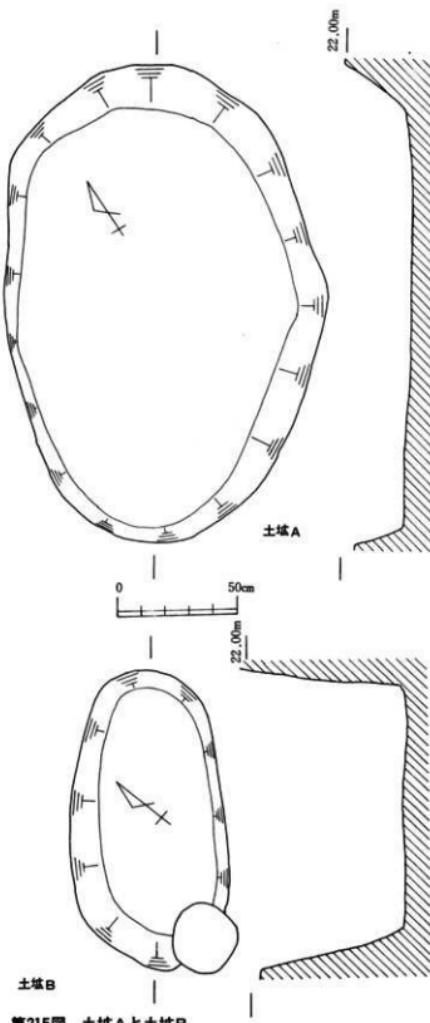
(1) 土坡A (8 I 区土坡1)

8 H・I区にあるだ円形の土坡で、長径200cm、短径140cmを測り、深さ25cmを残している。

土器はなかったが、床面近くに開元通寶と紹聖元寶が1枚づつ近くにあった(第237図参照)。

(2) 土坡B (10F 区土坡1)

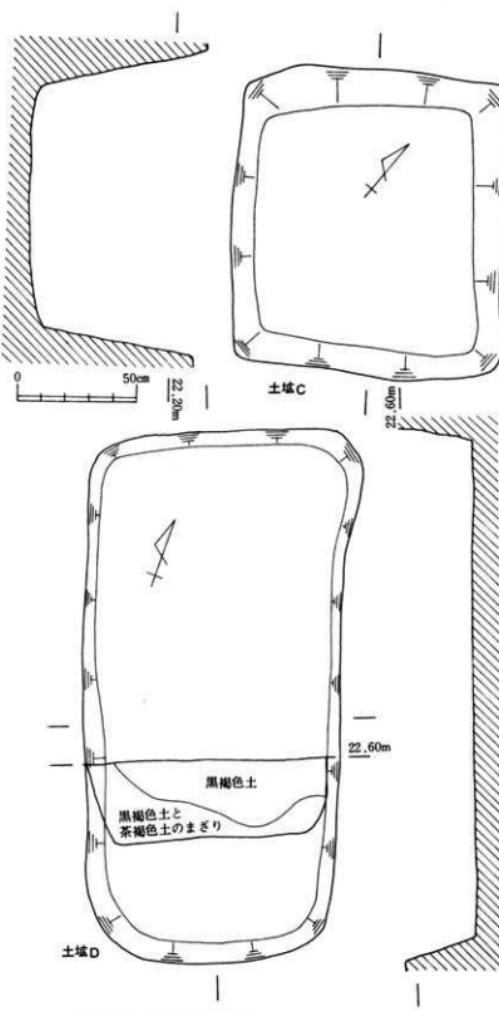
10F区にある長径125cm、短径65cmを測るだ円形の土坡で、深さ65cmを残している。土器器皿(1471・1472)・壺・甕・黒色土器皿(1473)・壇(1474・1475)・須恵器甕(1476)などが出土している。甕・壺の底部はハラ切りである。



第215図 土坡Aと土坡B

(3)土塙C (11 I 区土塙1)
 11 I 区にある
 $115\text{cm} \times 130\text{cm}$
 の方形土塙で、
 深さ70cmを残して
 いる。土師器
 壊・甕 (1477)
 ・黒色土器壇・
 須恵器の壺蓋 (1478) が出土して
 いる。甕の底
 部切り離しはへ
 ラ切りで、壺蓋
 の口縁端はわず
 かに下へ折れ曲
 がっている。

(4)土塙D (12 G 区土塙1)
 12・13 G 区に
 ある $110\text{cm} \times$
 225cm の隅丸方
 形土塙で、深さ
 30cmを残してい
 る。埋土は上に
 黒褐色土、下に
 黑褐色土と茶褐
 色土のまぎり土
 がある。土師器
 壊・甕 (1479)
 ・甕 (1480・
 1481)、青磁壇、
 滑石などがあり、
 甕の底部は糸切
 りである。

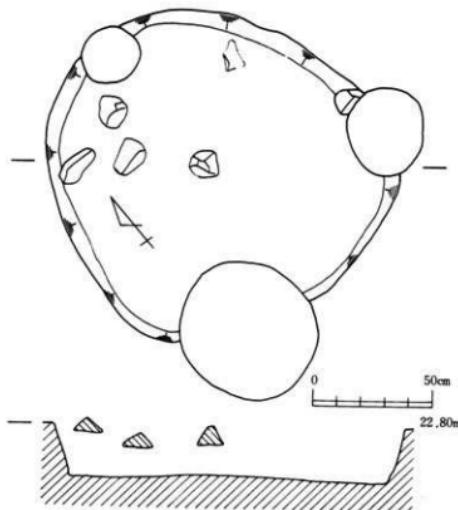


第216図 土塙Cと土塙D

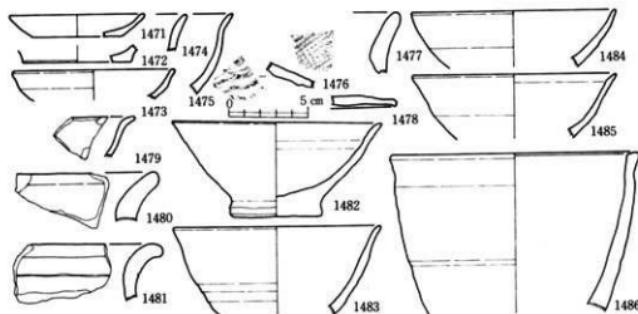
(5) 土塙E (13D区土塙
1)

12・13D区にある直径が140cmの略円形土塙で、深さ20cmを残している。埋土上部に6個の礎がある。

土師器壺(1484)・壷(1482・1485)・甕、内黒土師器壺(1483)、須恵器鉢が出土している。1482は口縁直径13cm、高さ6cm、底部直径6cmを測り、充実高台である。内面・外面とも整形はていねいである。須恵器鉢は灰がかった淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。外へ開きながら、まっすぐ伸び、口縁部近くがくぼんでいる。



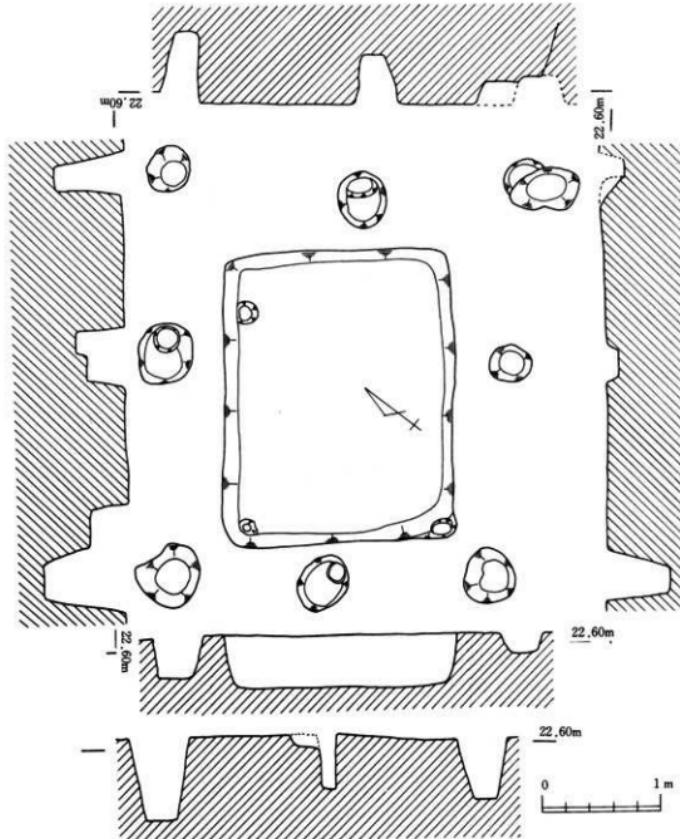
第217図 土塙E



第218図 土塙B・C・D・Eの出土土器

(6)土塙F (13H区土塙1)

13H区にある190cm×250cmの方形土塙で、深さ40cmを残している。土師器環 (1487・1488), 須恵器甕 (1489), 青磁碗, 白磁皿 (1490・1491) が出土している。青磁はしのぎ蓮弁の焼, 白磁は口はげ皿である。この土塙の隅には小さい穴が3個ある。また土塙を囲むようにして柱



第219図 土塙F (縮尺:1/40)

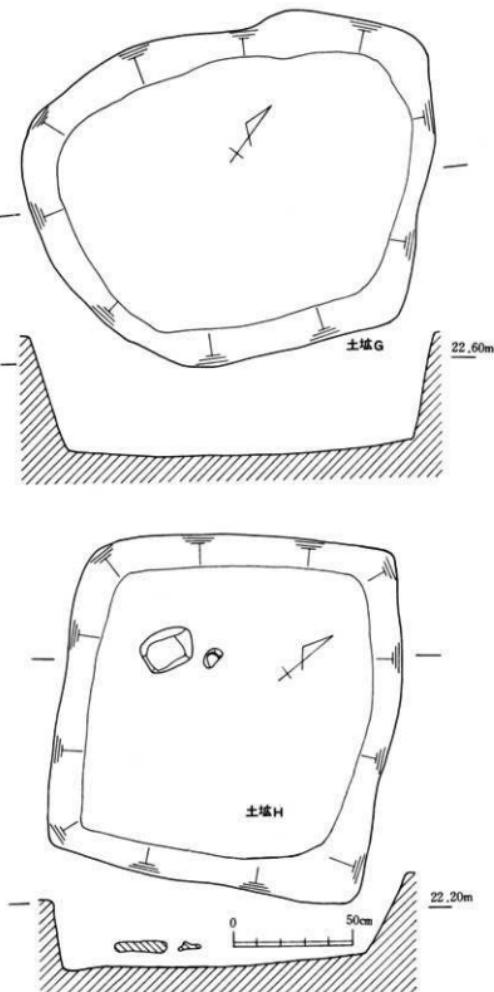
間が2間×2間の掘立柱建物がある。柱間隔は140cm～160cmあり、2.8m×3.4mである。

(7)土塙G (14G区
土塙1)

13・14G区にある140cm×170cmのだ円形土塙で、深さ45cmを残している。土師器の壺(1492・1493)・甕・須恵器壺(1494・1495)が出土している。壺の底部切り離しはヘラ切りで、1493の底には墨書きがみられる。1494は外面が大きい正格子タタキ。内面が円弧タタキである。

(8)土塙H (15J区
土塙1)

15J区にある1辺が145cmの正方形土塙で、深さ30cmを残している。西隅に大きな扁平石と土師器壺があった。土師器壺(1496)・甕・須恵器壺(1497)が出土している。壺は高台のつくもので、口縁直径16cm、高さ7.5cm、壺も直径10.5cmの高台が付くものである。



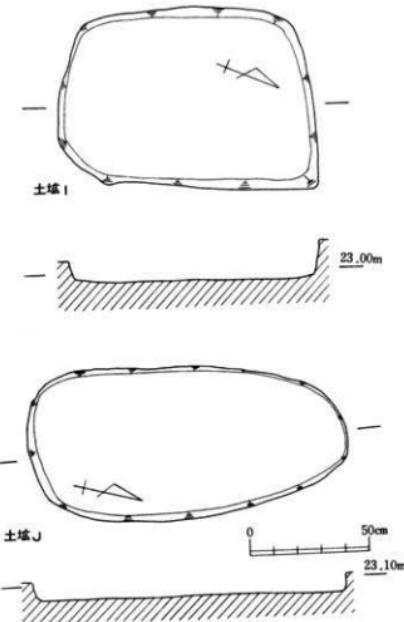
第220図 土塙Gと土塙H

(9) 土塙 I (16D区土塙 1)

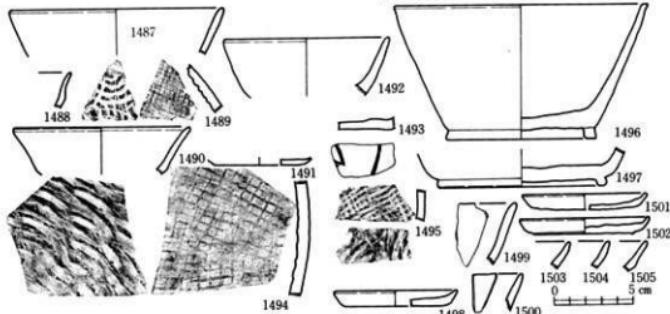
16D区にある75cm×105cmの隅丸方形土塙で、深さ15cmを残している。遺物は少なく小破片が多い。土師器皿・环(1500), 内黒土師器塊(1499)が出土している。塊は内面・外面ともいねいにヘラミガキをしている。

(10) 土塙 J (17D区P 2)

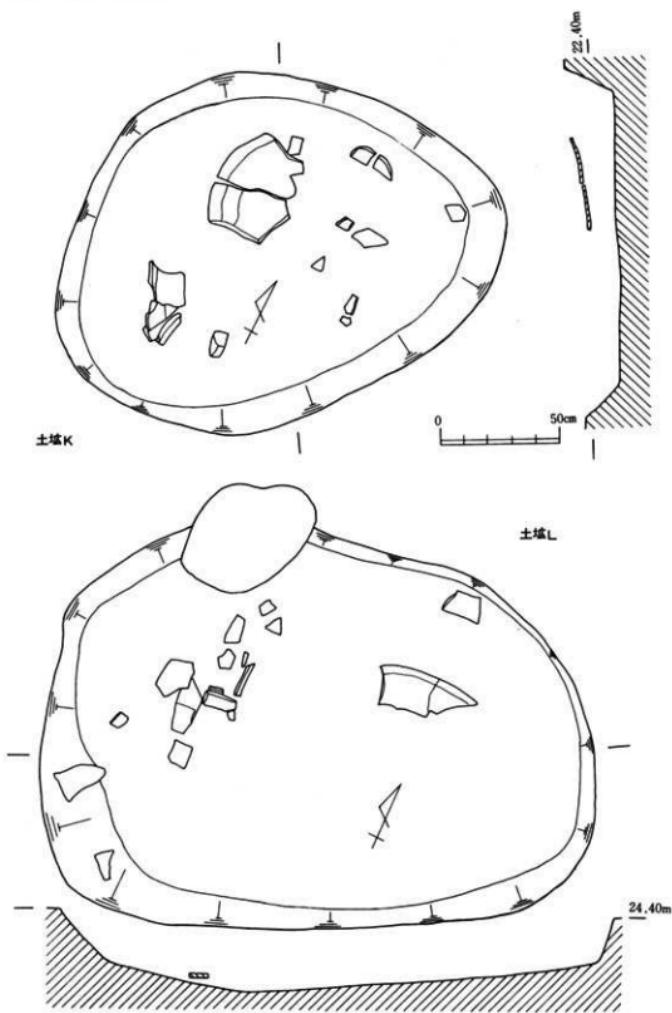
16・17D区にある長径135cm, 短径65cmのだ円形土塙で、深さ10cmを残している。土師器皿(1501・1502)・环(1503-1505)が出土している。皿は口縁直径が8cm, 高さ1cm, 底部直径が6cmある。底部切り離しはヘラ切りで、1501はその上を板状のものでナデている。内面は繊維状のものでナデしている。环も低いもので、1505は外に屈曲部がある。1503は外面に墨書きしきものがあるが、はつきりしない。



第221図 土塙 I と 土塙 J



第222図 土塙 F・G・H・I・J の出土土器



第223図 土塚Kと土塚L

(II) 土塙K (22E区P-1)

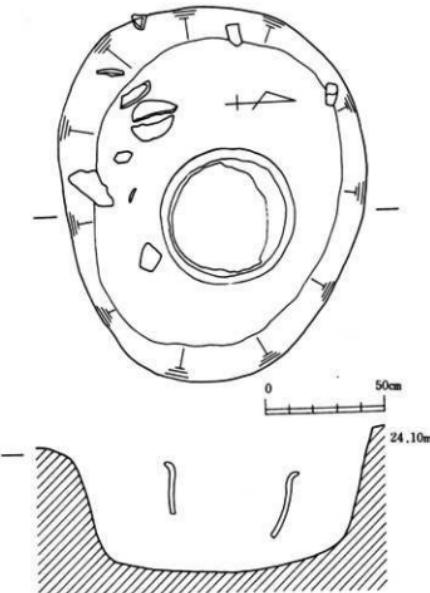
22E区にある長径 190cm、短径 150cm の円形土塙で深さ15cmを残している。中には土師器鉢・甕・壺などがあった。

甕 (1506) はゆるやかに外反する口縁部をもつ。鉢 (1507) は口縁直徑21cm、高さ10.5cmと大型で、安定した丸底を呈している。外面は横方向のヘラナデ、内面は頸部から上が横方向のヘラナデ、下が縦方向のヘラケズリで仕上げる。茶色粘土など小石を多く含んでおり、乳白色を呈している。やや軟質に焼ける。外面にはススが、内面にはこげ目がついている。甕 (1508) はくの字状に外反する口縁部をもち、長胴形の器形をしている。口縁直徑20.5cmと小型である。外面は上が横方向のヘラナデ、下が縦方向のヘラナデである。内面は口縁部が横方向のヘラナデ、胴部が縦方向のヘラケズリである。胎土・色・焼成度などは鉢と同じである。外面にはススが付着し、内面には頸部までこげつきがみられる。

(II) 土塙L (23E区P-3)

22・23E区にある長径 230cm、短径 170cm の円形土塙で、深さ30cmを残している。床面には甕などの大きな破片がある。

土師器壺 (1509) は頸部で屈曲して、口縁部がやや外へ反るものである。土師器甕 (1510) の高台は頸部が丸みをおびており、安定している。直径 9cm を測る。土師器甕 (1512・1513) は口縁部がくの字状に外反するものである。1512は口縁直徑26.5cmと大型で、外面は口縁近くが横方向のヘラナデ、頸部が縦方向のハケナデで仕上げている。内面は口縁部が横方向のハケナデ、頸部が縦方向のヘラケズリで仕上げる。1513は口縁直徑29.5cmと大型で、外面は横方向のヘラナデ、内面は口縴部が横方向のヘラナデ、下半



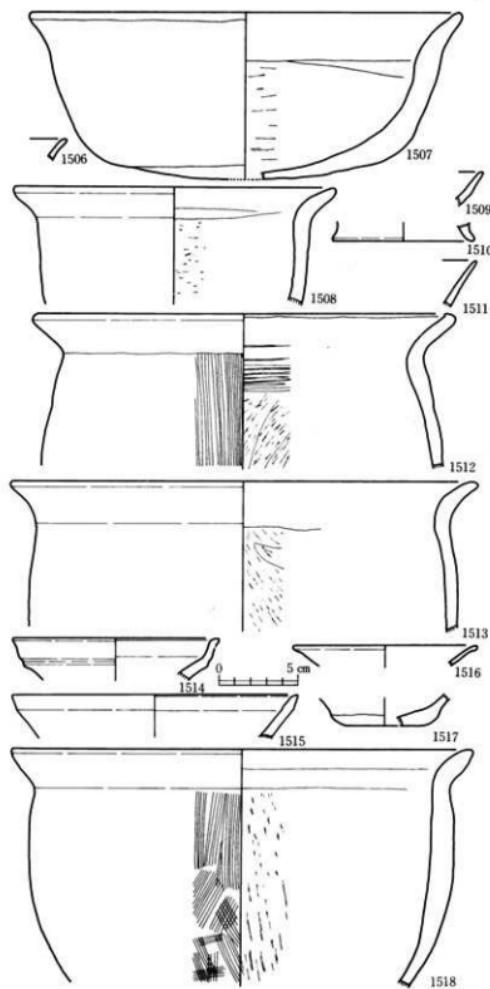
第224図 土塙M

部が輻方向のヘラケズりで仕上げる。須恵器環(1511)は外へ開きながらまっすぐ伸びる口縁である。須恵器壺(1514)の口縁部は直径13cmを測るもので、頸部から外へ反って、端部が上方へ伸びる。この屈曲部には凹線が巡っている。内面には青や緑の自然灰釉が付着している。

(13)土塙M (23E区P-1)

23E区にある長径が155cm、短径が130cmのだ円形土塙で、深さ60cmを残している。ほぼ中央付近に底の欠けた甕が、口縁部を上にして座っており、周囲には炭や灰が多く堆積している。こうした状態は先の土塙Kや土塙Lにも共通している。他の土器も周辺にあるが、この甕に接合できる破片はなく、最初から底の抜けた状態で置かれたらしい。

土師器環(1515～1517)は口縁部が途中で屈曲して、まっすぐ伸びるものと、外反す



第225図 土塙K・L・Mの出土土器

るものとがある。屈曲するものは内側も口縁部でわずかに外へ折れている。1515は内面をヘラでていねいにミがいでいる。底部近くでやや外へふくらみ、丸みをもった底をしている。底部の切り離しはヘラ切りである。土師器甕(1518)は底部を欠いているものの、上半部は完全な破片である。口縁直徑が29cmで丸みをもった器形をしており、口縁部も丸みをもっている。外面の口縁付近は横方向のヘラナデ、胴部は縱あるいはななめ方向のハケナデで仕上げている。内面は口縁付近が横方向のヘラナデ、胴部が割合にていねいなヘラケズリで仕上げる。外面は頸部あたりまでススが付着しており、内面も頸部付近にこげつきがまわっている。小石粒を多く含む砂質の胎土を用い、焼成は良好である。明るい茶褐色を呈している。

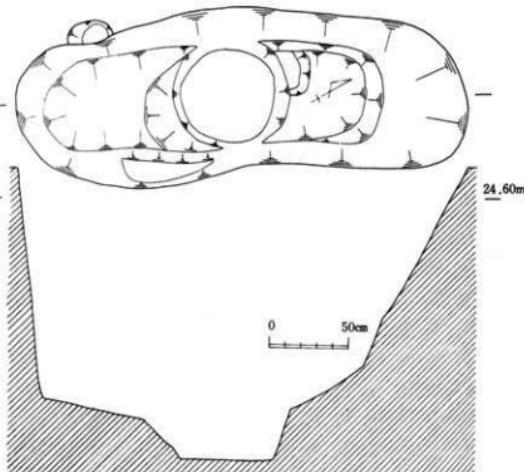
14 土塙N

25・26F区にある長径 285cm、短径 100cmの長だ円形土塙で、もっとも深い所は 185cmを残している。北側はゆるやかに落ちて、途中で段をもっているが、65cm位の所までいく。ここからゆるやかに下降する段がある。この範囲は50cm四方であり、西側で深くくぼむ所がある。ここから急傾斜で落ちておらず、ほぼ中央に直径70cmほどのもつとも深い面がある。一方、南側は急傾斜で落ちて、深さ 150cmほどの所に60cm四方の平坦に近いテラスをつくる。ここからゆるやかに最下面へと落ちている。東側と西側も急傾斜で下面に達しているが、東側には60cmほど下に棚状の段がある。主軸方向はN31度Eで土塙Oとはほぼ並行している。土塙内にはほとんど土器が含まれていない。

15 土塙O

25F・G区に

ある長径 225cm、
短径 90cmの長
だ円形土塙で、
もっとも深い所
は 150cmを残し
ている。主軸方
向はN12度Eと
土塙Nとはほぼ並
行している。北
側は10cmほどの
所までは急に落
ちており、そこ
からゆるやかに
おちている。最
下面是長径85cm
短径70cmのだ円



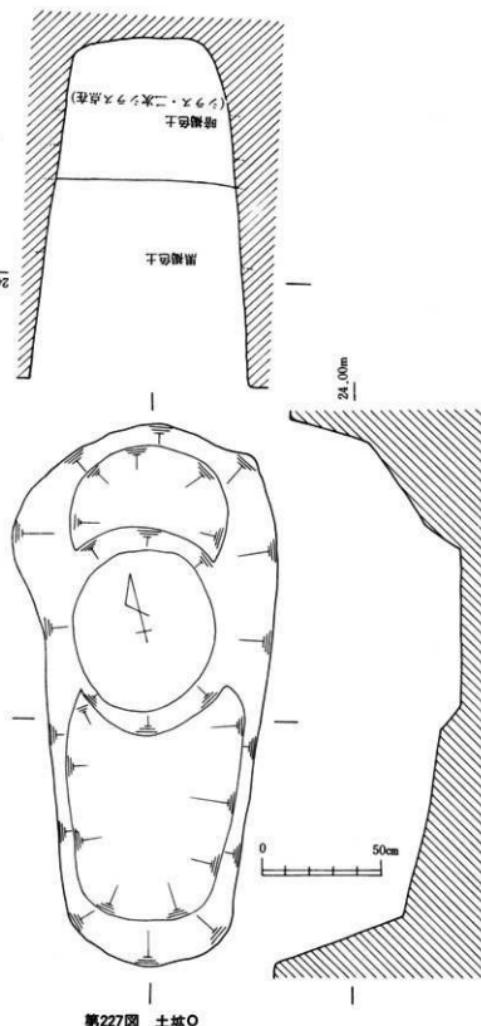
第226図 土塙N (縮尺: 1 / 60)

形の落ち込みとな
っている。南側は
20cmの所まで急傾
斜で落ち、そこに
65cm×75cmの方形
テラスをつくる。
そこから急傾斜で
最下面に落ちてい
る。埋土は2層に
分かれ、上半部が
黒褐色土、下半部
がシラスや二次シ
ラスのまざった暗
褐色土である。土
塙内には遺物がほ
とんどないが、綠
釉土器の細片が上
部から出土してい
る。

(16) 土塙P (30
H区 土塙1)

30 H区にある長
径 130cm、短径95
cm のだ円形土塙で、
深さ50cmを残して
いる。西端には深
き 110cm の円形ビ
ットがあるが、土
塙との関係は不明
である。

土師器甕 (1519
) は口縁直径29.5
cmを測り、やや内
反ぎみに立ちあが
り、端部がやや肥



第227図 土塙O

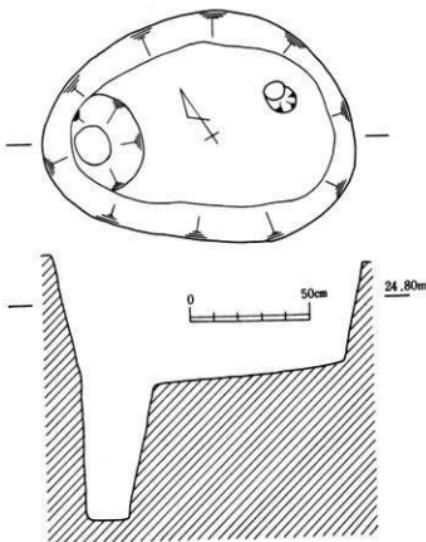
厚している。内面も口縁付近がややくぼんでいる。外面は横方向のヘラナデで仕上げ、内面は口縁付近がヘラナデで、下のほうは横方向のヘラケズリである。土師器壺(1520・1521)の底部切り離しはヘラ切りと糸切りがある。1522は土師器壺の高台で、外へ踏んばっている。直径は7.5cmある。この他に外面・内面とも条痕タキのある須恵器甕も出土している。

(17)土塙Q (34 I 区土塙1)

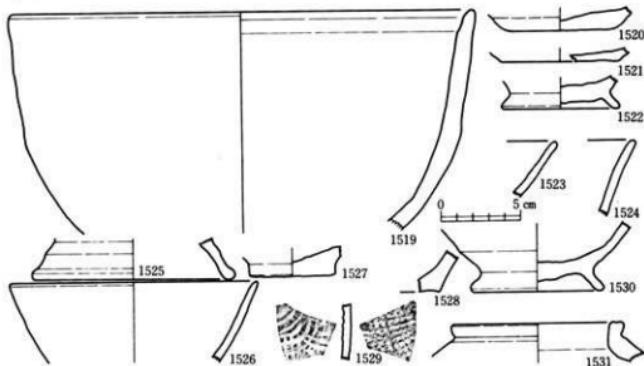
34 I 区にある 1.8m × 4.0m の長方形土塙で、深さ 5 cm ほどと浅い。埋土中には土器がほとんどはない。

(18)土塙R (33K 区土塙1)

33 J・K 区にある 520cm × 410 cm の方形土塙で、深さ 35cm を残している。複雑なつくりになっており、西側と南側・北側の三方は一



第228図 土塙P

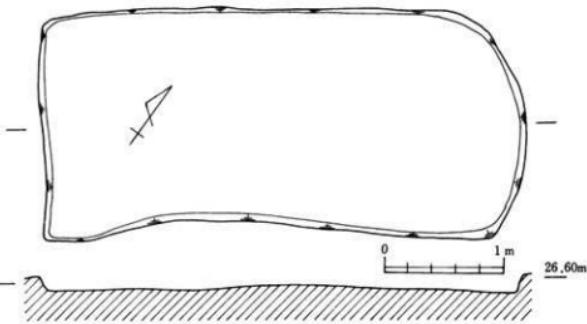


第229図 土塙P・R・Sの出土土器

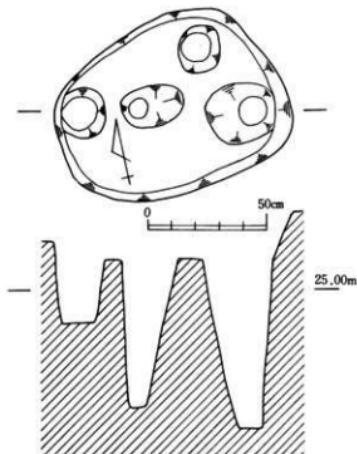
段ベッド
状に高く
なってお
り、北東
隅はさら
に高くな
っている。
土壇内に
は5本の
柱穴があ
るが間隔
は不明で
ある。埋

土は3つに分かれており、上からにごった黄みがかった茶褐色土、黒褐色土、暗褐色土である。
下の2層には炭が多量に含まれている。埋土中に土師器壺・塊・鉢・壺、須恵器甕が含まれて
いる。

土師器壺（1524・1526）はまっすぐ外へ開くものと、丸みをもつものとがある。両方とも口
縁内面は端部付近が黒くなっている。灯
明皿の代わりに使われたか、焼成時のもの
かと思われる。土師器塊（1525・1527
・1530）は底部が高くなった充実高台の
ものと、高台付きのものとがある。充実
高台は直径5.5cmで高さは1cmほどしか
ない低いものである。高台は直径が8cm
で、高さ1.5cmのものと、直径が13cmで、
高さ2.5cmの大型のものとがある。土師
器の鉢（1528）の底部は安定した平底で、
内面・外面ともていねいなナデ整形であ
る。内黒土師器塊（1523）は内面がきれ
いにヘラミガキされ、光沢を呈している。
須恵器甕（1529）は外側が格子の、内面が
同心円文のタタキである。



第230図 土壇Q

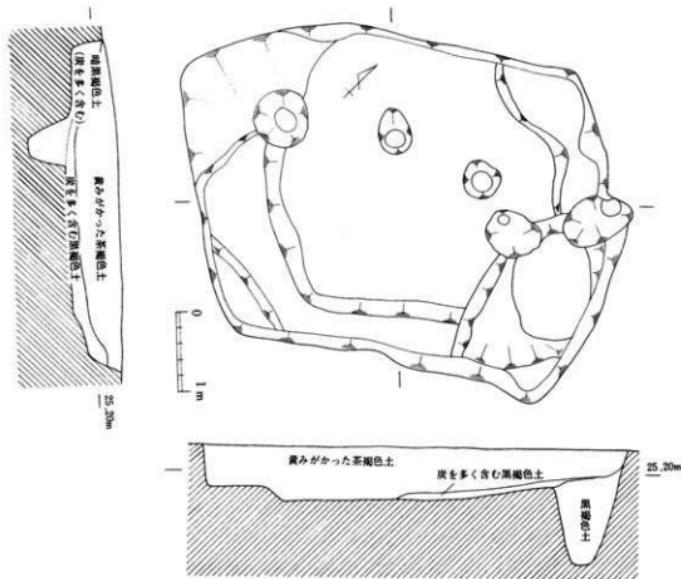


第231図 土壇S

09土塙S (33K区土塙2)

33K区にある長径100cm、短径70cmのだ円形土塙で深さ15cmを残している。土塙中に4つの深い柱穴があるが、関連性は不明である。遺物は少ない。

土師器壺・甕、須恵器壺(1531)が出土している。須恵器壺は直口壺で立ち上がりは0.8cmと短かい。口縁端は平たいが、中央がやくぼんでいる。頸部から肩部へは外へ開いている。黒雲母などの微石を多量に含んでおり、割に細かい胎土である。黒っぽい茶褐色を呈しており、焼成は良好である。



第232図 土塙R (縮尺:1/60)

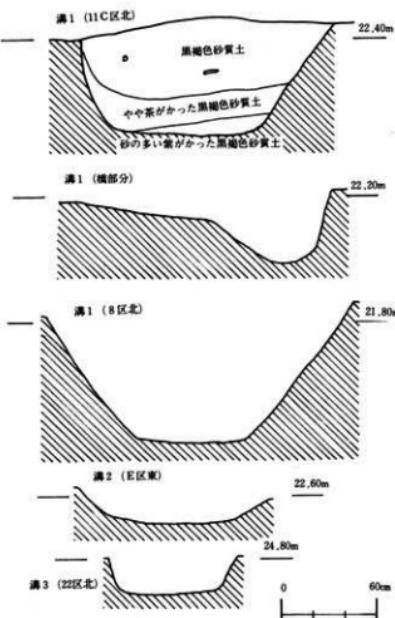
3 溝状造構

南北方向に流れる溝が2本、東西方向に流れる溝が1本ある。

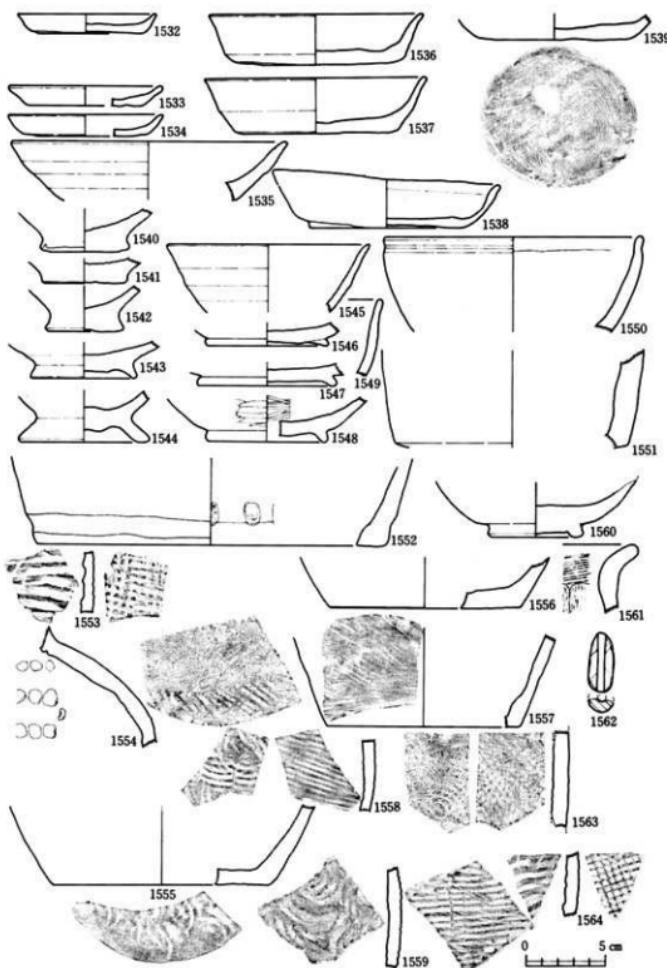
(1) 溝状造構 1

7E・F区から、8E区、9E区、10D・E区、11D区と北上し、12・13C区で用地外へ抜ける幅1.8mの溝状造構である。深さは80cm～100cmを残しているが、10D区と11D区の境付近で、急に50cmほど浅くなり、陸橋の様相を呈している。この部分が長さ120cmほどある。完全に上がるのではなく、東側は60cmほどの幅で50cm位の深さがあり、オーバーフローした水を流すようなくふうをしている。溝の底は二次シラス層あるいは砂礫層にまで達しており、埋土も3～4層に分かれる。最下層は砂も多く含んでおり、流水もあったようである。遺物も多く出土している。

土器には皿(1532～1534)・壺(1555～1559)・塊(1540～1544)・鉢(1550)・壺(1551)・こしき(1552)・甕(1561)がある。皿は口縁直徑が9cm～10cmで底部切り離しは糸切りである。壺も底部切り離しは糸切りで、口縁直徑は14cm、高さ3.5cmを測る。塊は高くした充実高台と、高台付のものがある。鉢は口縁端部付近にくぼみがあり、鉄鉢形を呈する。壺とこしきは類似した器形をしている。甕はくの字状に外反する。内黒土器(1545～1549)は塊のみである。口縁部はまっすぐ伸びるものと、端部がやや外反するものとがある。高台はごく浅いものと、普通のものがある。内面はヘラミガキで仕上げるが、外面もきれいで光沢を呈するものもある。須恵器には壺(1554～1557)・甕(1553・1558・1559・1563・1564)がある。壺の肩部は自然灰釉がかかり、胴部に格子タタキがみられる。底部は安定しており、やや外開きで立ち上がる。1555は底部に同心円タタキがある。青磁碗(1560)は内面に花文のある竜泉窯系のものである。1562は紡錘状の土鍤である。



第233図 溝状造構1・2・3の断面図



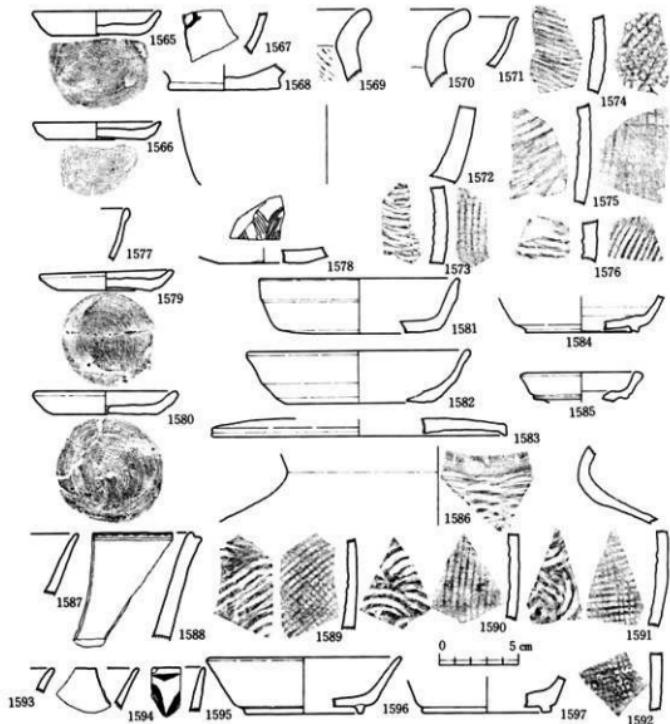
第234図 溝状遺構I出土の土器

(2)溝状造構2 (第235図 1565～1578)

11D区で溝状造構1と交わっており、ここから11・12E区、12F区、12・13G区とだんだん浅くなり東端は不明である。11D区でも深さ10cmと浅く、幅は約1mである。土師器皿(1565・1566)・环(1567・1568)・妻(1569・1570)、内黒土師器壇(1571)、須恵器壺(1572)、須恵器壺(1573～1576)、白磁壺(1577)・皿(1578)が出土している。1567は墨書きがある。

(3)溝状造構3 (第235図 1579～1586)

南端は不明であるが、21D区から22C・D区、23C区と北上し、24B区で用地外へ抜ける。幅約80cm、深さ約20cmを測る。土師器皿、环、須恵器环、壺、蓋、壺などが出土地してい。



第235図 溝状造構2・3および古道出土の土器

4.古道

南側に東西方向の道路跡がある。数層に堅土面があり、少なくとも3時期に分かれる。7D区あたりから9I区付近に向かっているが、東側は検出不能であった。ほぼ並行しているが、時期によりやや方向を異にしている。

古道上からいくらかの遺物が出ているが具体的に時期を決めるものはない。ただ溝状遺構1に切られていることから、鎌倉時代以前のものであることは確かである。

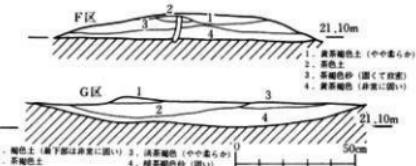
5.土器集積構

(1)土器集積構1号(1598~1607)

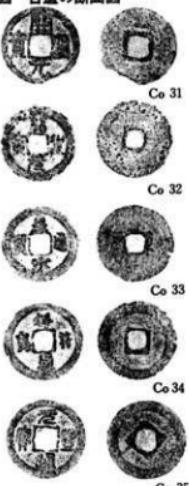
7・8F区にあって、土師器皿が5枚、土師器壺5枚がほど250cm四方の間に重なりあっており、最上部の皿1枚と壺1枚は蓋をしている。壺の中に皇宋通寶と祥符通寶が各1枚あり、付近に元豊通寶が1枚あった。底部は糸切り離しである。

(2)土器集積構2号(1608~1616)

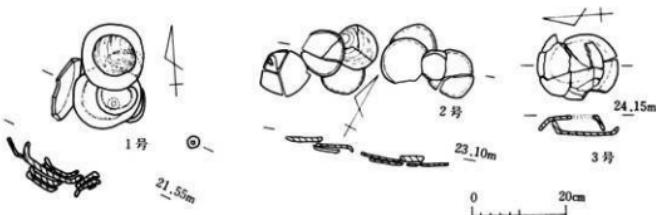
19G区に土師器皿7枚と、壺の底1枚が45cmの間に並んで置かれており、正位のものが6枚、逆位のものが1枚ある。底部の切り離しはすべて糸切りである。



第236図 古道の断面図



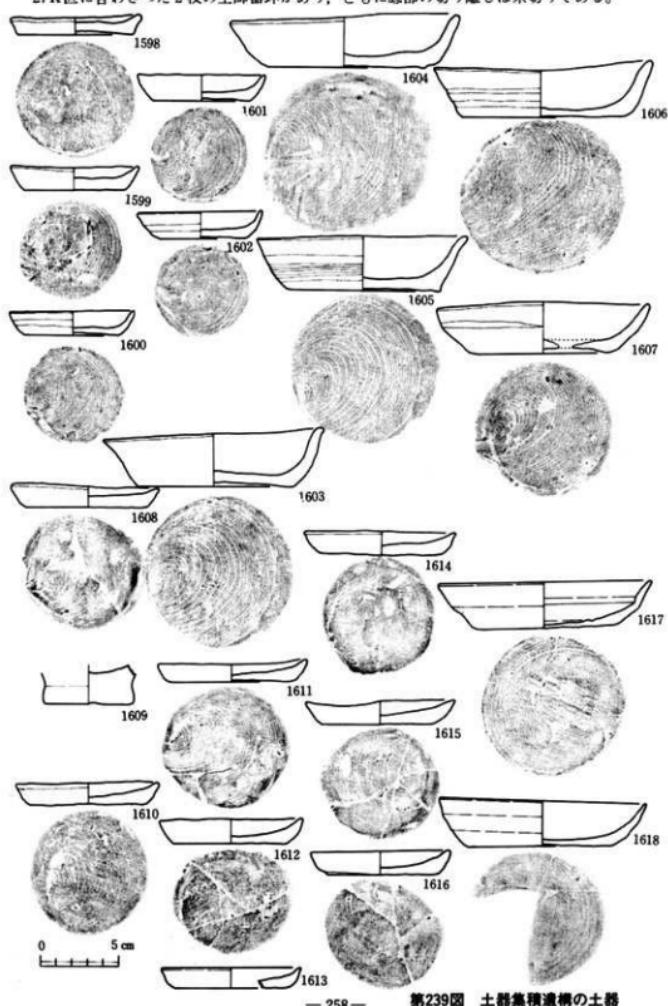
第237図 土塙Aと土器集積構1の古銭



第238図 土器集積構

(3)土器集積構造3号(1617・1618)

27K区に合わせた2枚の土師器环があり、ともに底部の切り離しは糸切りである。



第239図 土器集積構造の土器

6. 柱穴出土の遺物

建物としてまとまった柱穴以外にも、柱穴から多くの遺物が出土した。ここではその一部を図化した。

土師器には皿（1619～1621）、壺（1622～1624）、蓋（1625）、塊（1626～1628）、小甕（1630）、甕（1631・1632）などがある。皿は3点とも糸切り底である。壺はすべてヘラ切り底で、1624の底には墨書きがある。蓋は須恵器の模倣である。塊は大形のものと、小形のものがあり1626の高台は高い。1629は外面に線刻がある。甕はまっすぐ伸びるものと外反するものがある。内面はヘラケズリである。

内里土師器塊（1633～1636）は丸みをもっており、高台が付く。1636は底部にヘラ描きがある。1637は内外ともきれいにヘラミガキをしており、底部切り離しは糸である。

須恵器には蓋（1638～1641）、壺（1642～1644）、鉢（1645）、壺（1646）、甕（1647・1648）がある。1639は硯に転用しており裏に朱が付いている。1648の内側には格子タタキがある。1649は常滑焼の甕である。

青磁（1650）は外面にしのぎ蓮弁のある竜泉窯系のものである。

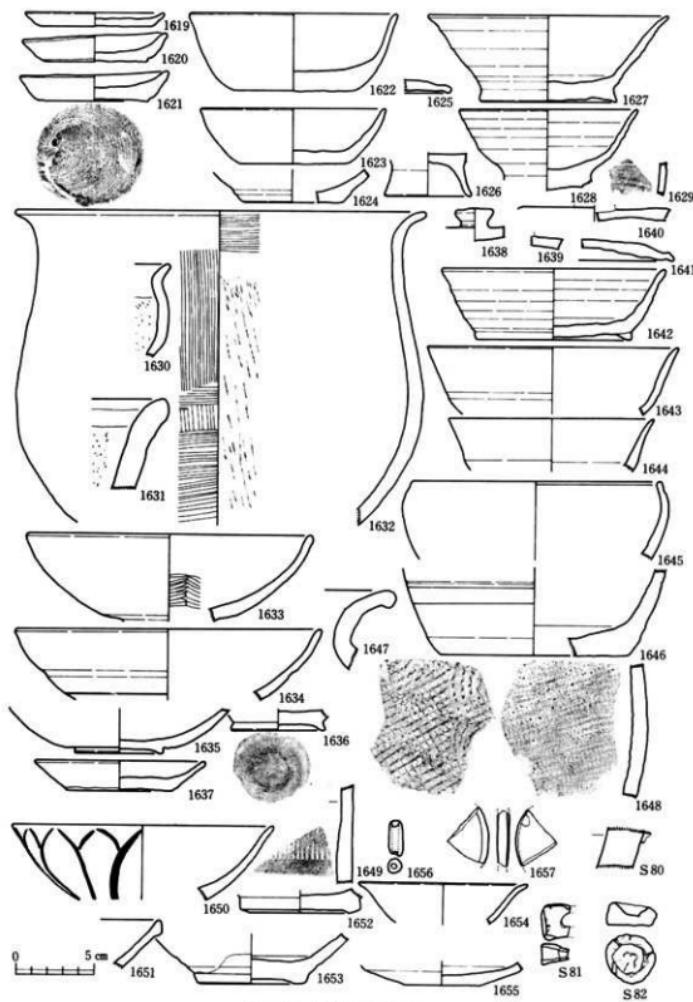
白磁は口縁が玉縁となる塊（1651～1653）、口はげの皿（1654）、底部の釉をかきとった皿（1655）がある。玉縁口縁の底は低い高台で釉がかからない。

土製品には土鍤（1656）と円板状土製品（1657）がある。

石製品には石鍋（S80）と滑石製品（S81・S82）がある。石鍋は直徑が約20cmで縦方向の突起がついている。S81は穿孔のある小型品で、S82は容器形をしたものである。

図番	種類	出土区	柱番	図番	種類	出土区	柱番	図番	種類	出土区	柱番	
1619	土師器	皿	15E	5	1633	内里土師器	塊	29I	7	1647	須恵器	甕
1620	・	・	33G	3	1634	・	・	23E	15	1648	・	・
1621	・	・	35K	1	1635	・	・	24F	9	1649	常滑焼	・
1622	・	壺	12I	2	1636	・	・	23E	7	1650	青磁	碗
1623	・	・	32K	3	1637	研磨土器	皿	29I	12	1651	白磁	・
1624	・	・	31H	2	1638	須恵器	壺蓋	14GB	1	1652	・	・
1625	・	蓋	29H	5	1639	・	・	30J	1	1653	・	・
1626	・	塊	24F	4	1640	・	・	23D	1	1654	・	皿
1627	・	・	29H	5	1641	・	・	24B	1	1655	・	・
1628	・	・	23F	5	1642	・	壺身	27C	2	1656	土鍤	30J
1629	・	線刻	27H	3	1643	・	・	22G	15	1657	円板状土製品	28G
1630	・	小甕	28G-D	6	1644	・	・	29I	8	S80	石鍋	7I
1631	・	甕	27C	1	1645	・	鉢	29H	8	S81	滑石製品	26I
1632	・	・	29H	5	1646	・	壺	25F	1	S82	・	28H

第35表 柱穴出土の遺物出土地区表



第240図 柱穴出土の遺物

7. 掘乱層出土の遺物

遺構に伴う遺物の他に表層および包含層から多くの遺物が出土した。土器には土師器・黒色土器・須恵器・陶器・磁器・綠釉土器が、石製品に石鍋・滑石製品・砥石が、土製品にふいご口・るつぼ・有孔円板・土鍬などがあり、他に古鏡・青銅製品もある。

(1) 土師器

① 小皿 (第 241図, 第 242図, 第 243図, 1658~1713)

淡褐色ないし黄灰色の色調を呈し、胎土に、わずかに砂粒を含む。器面、内外は横ナデ、内底はナデによって調整される。1658・1659は、ヘラ切り底、1660~1712は、糸切り底、1713は高台付小皿である。糸切り底では、底面に糸切り痕とともに、大部分、板目を残している。口径9cm前後の小皿 (1660~1668, 1702, 1703, 1711, 1712) と、口径8cm前後の小皿 (1669~1700, 1704~1710) がある。

② 大皿 (第 243図, 1714~1722)

色調は淡褐色ないし黄灰色を呈し、胎土は、少量の砂粒を含む。内・外面は横ナデ、内底はナデで調整される。1714~1717は、底面にヘラ切り痕をもつが、ナデにより、その痕跡が消され、また、1714は、内面、内底面、底面と、ヘラミガキされている。1718は、底面が磨滅し、ヘラ切り底か、糸切り底かは不明、1719~1722は、底面に、糸切り痕と板目を残している。ヘラ切り底のものは、器高が高く、口縁部が外反する。

③ 坯 (第 244図, 第 245図, 第 246図, 第 247図, 1723~1770)

黄灰色ないし、淡赤褐色の色調を呈す。胎土は、よく精選されているが、わずかに砂粒を含む。内・外面は横ナデ、内底はナデにより調整される。1723~1732はヘラ切り底、1733~1763は、底面に、糸切り痕と板目をもつもの、1764~1770は高台付坯である。ヘラ切り底の坯は、全体に器高が高く、口径が大きい割に底径が小さく、ゆえに、口縁部と体部が直線的に大きく外反する。糸切り底の坯では、1733, 1736, 1744のように、口径が大きく (14cm前後) 器高の低いものと、1739~1742のように、口径が大きく (14cm前後) 器高の高い (3.3cm~3.5cm) もの、1745~1751のように、口径が小さく (12cm前後) 器高の低いもの、1758, 1761のように口径小さく (11cm~12cm) 器高の高いものと、それぞれを中心として、4つにグルーピングできよう。1764は、まっすぐ立ち上がった体部が、口縁部でわずかに外反する。1765, 1766は高台付坯の高台部。1767, 1768は、坯部が、やや外寄気味に、大きく開き、低い高台を貼り付けている。1769, 1770は、その口縁部破片であろう。

④ 境 (第 247図, 第 248図, 1771~1799)

黄灰色ないし淡赤褐色の色調を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。器面、内・外面を横ナデ、内底面がナデによって、調整される。1771~1783においては、底面はすべて、ヘラ切り痕を残し、その大部分は、ヘラ切り離しの後、軽くナデられている。1789~1799の高台部分は、大部分、横ナデのみで調整される。

1772は、ヘラ切り離しのためか、底部と体部の境が丸味をおび、内寄気味に立ち上がった体部

が、中位で、かるく外反して、口縁部に至る。1771・1773は、体部下位が肥厚し、底部から、若干、立ち上ったのちに、内寄する体部を形成する。1774～1783では、さらに明確に高台状に、底部が肥厚している。1778は、体部が、中位で、屈曲し、外弯して立ち上がり口縁部に至る。1798・1799は、器壁の薄い、高い高台である。

⑤蓋 (第249図 1800～1806)

色調は淡赤褐色で、胎土にわずかに砂粒を含む。器面、内・外面を横ナデ。1802～1806では天井部内面をナデ。天井部外面はヘラケズリされている。1803・1804では、ヘラケズリの後ナデによって調整される。1803は、外方にやや開いて、1804は直立気味に、つまみ出しされている。1805は内寄して、1806は外反して、口縁部を形成する。

⑥甕 (第249図、第250図、第251図、1807～1823)

色調は、黄灰色ないし淡褐色、淡赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。調整は、口縁部外面は、例外なく横ナデ、口縁部内面は、横ナデのものが大部分だが、横方向に粗いハケ目を施すものもある。頸部下、胴部外面は、横ナデないし縱方向への粗いハケ目、内面は、一般にヘラケズリされる。底部は不明。なお、石英、長石を含むものが多い。

1807は大型甕で頸部にしまりがなく、厚手である。1808は頸部が肥厚し、内側に棱をつくって外反する。1810は、水平に近いぐらに口縁部が外折し、頸部下内面に横方向に荒いハケ目を有する。1811は、頸部がしまり、頸部外側に段をもつ。1811だけが、胴部外面、横方向にハケ目を施す。1812は、かるく外反した口縁部に、肩の張らない胴部をもつが、外面を縱方向に内面も頸部付近より、胴上半部にかけて、ヘラミガキされている。1813は、外面が頸部下より縱方向に、規則正しく、ヘラナデされる。1816は、頸部から口縁部にかけて肥厚して、外反する。肩の張らない器形で、1819と共通する器形である。1820は、内面、頸部下に、一部ヘラミガキがみられる。1821は口縁部内面を、1822は、頸部下より胴部内面を、それぞれ、ヘラナデされる。1823は、頸部下外面に、格子目の叩き痕をもち、内面はヘラミガキされている。

⑦鉢 (第251図 1824～1830)

黄灰色ないし淡褐色の色調を呈し、胎土に砂粒を含む。石英、長石をよく含む。

1824は、内寄する胴部が、口縁下で、棱をつくって外寄し、やや肥厚した口縁部をつくる。口縁部は横ナデ、胴部外面は、縱方向ハケ目、内面はヘラケズリされる。1825は、口縁部がかるく外折する。胴部外面、口縁部内面と横方向に粗いハケ目を施す。1826は、胴部外面を、縱方向のハケ目の後に、横方向にヘラミガキしている。1827～1830は、小型鉢である。1827は外面に煤が付着し、1828は、取手の痕跡を残す。1829は、表裏とも横ナデ、外面は、黒変している。

⑧その他 (第251図、第252図、1831～1851)

1831は、外面に、縱方向の平行線状に、内面に重弧状に、叩き痕を残す。淡赤褐色で、金雲母微細片を含む細砂土から成り、焼成良好の無頸壺である。1832・1833は、短頸壺で、1832は黄灰色、1833は淡赤褐色を呈し、器面は、ナデ調整、胎土は砂粒を含んでいる。1834は、小型の

頸部がしまり、長い口縁部が外反する壺で、淡赤褐色で、胎土にわずかに砂粒を含み、内・外面横ナデしている。1835は、小壺の胸部。淡赤褐色を呈し、器面横ナデ、胎土は、わずかに砂粒を含む。1836は、直口する口縁部で、色調は黄灰色、器面は内・外とともに横ナデされているが、内面にヘラケズリの痕跡をのこす。胎土に砂粒を多く含み、瓶と思われる。1837～1840は叩き痕をもつ胸部破片である。1837・1838は、格子目の叩き痕をもつ、1837は淡赤褐色、1838は暗黄灰色を呈し、内面は双方ともヘラケズリされ、胎土には砂粒を多く含んでいる。1839は平行叩きを施し、淡赤褐色で胎土に砂粒を含んでいる。1840は、平行叩きを縱位に施した口縁部で1831の無頭壺に類似する。1841～1846は底部破片である。1841は淡褐色で、内面と外面の胸部下位に、ヘラケズリがみられる。砂粒を多く含む。1842は、淡褐色で、胎土に石英砂とともに砂粒を多く含む。内面は放射状にヘラミガキしており、外面は、下半でヘラケズリ、上半で横ナデされる。1844～1843の胸部は丸味をもって立ち上がる一方、1844・1845は胸部が直立する底部である。1844は黄灰色を呈し、胸部の立ちあがりにヘラケズリを施している。胎土は砂粒を多く含み、胸部器壁に比べると薄手の底になる。1845は、淡褐色、胎土に砂粒を含む。1846は、円盤状の底部で、外端面を削って、大きく刻目を施している。色調は黄褐色で、胎土は、石英砂をおもに、砂粒を多く含む。1847・1848は、把手である。1847は黄灰色で、胎土に石英、長石など砂粒を多く含む。1848は、黄白色で、やや軟質、胎土は、細砂土で、石英砂が若干入る。1849～1851は、内面に布目圧痕をもつ土器片である。色調は淡赤褐色で、胎土に少量の砂粒を含む。1849は、外面、ヘラケズリされ、1850は、ナデ調整される。

図番	器種	出土区層	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	図番	器種	出土区層	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)
1658	小皿	8A-3b	7.2	5.2	1.5	1691	小皿	17D-2	8	6.6	0.9
1659	*	25E-2	8	6	1.4	1692	*	16E-2	8	7	1
1660	*	27J-2	8	6.1	0.9	1693	*	16E-1	ナシ		
1661	*	25J-2	9.2	(6.4)	1.5	1694	*	16E-2	8.2	(7)	1
1662	*	35J-2	8.9	7.3	1.6	1695	*	15F-2	7.8	6.4	0.9
1663	*	27J-2	8.9	(6.6)	1.8	1696	*	16F-2	8.2	7	1
1664	*	16F-2	8.9	(6.7)	1.5	1697	*	16F-2	8	7.2	0.9
1665	*	25J-2	9.3	(7.3)	1.6	1698	*	16F-2	8	7	1
1666	*	21H-I-2	8.7	(7.6)	1.4	1699	*	16F-2	7.4	7	0.9
1667	*	16E-2	8.6	6.4	1.1	1700	*	16F-2	8.2	7	1
1668	*	15E-2	8.7	7.6	0.9	1701	*	11F-1	6.4	6	1.3
1669	*	23F-2	7.8	5.7	1.5	1702	*	11F-2	8.2	6.4	1.6
1670	*	21D-2	8	5.8	1.4	1703	*	16F-1.2	8.2	7.4	1.7
1671	*	表採	7.9	6.3	1.2	1704	*	17E-2	7.8	6.4	1.1
1672	*	16F-2	7.4	6.3	1.2	1705	*	16D-2	7.9	6.6	1.1
1673	*	表採	7.5	(6.8)	1.2	1706	*	16D-2	8.2	7.2	1.1
1674	*	15E-2	8.2	6.1	1	1707	*	16F-2	8	6.6	1
1675	*	17D-2	8.2	6.3	0.9	1708	*	16F-2	7.8	6.6	1
1676	*	16E-2	9	7.5	1.6	1709	*	16F-2	7.8	6.2	1
1677	*	16E-2	7.9	5.9	1	1710	*	16F-2	8	7	1
1678	*	16G-2	7.8	6.4	1	1711	*	16F-2	8.4	7.2	1
1679	*	16F-2	8.3	7.3	0.9	1712	*	16F-2	8.6	7.5	1
1680	*	16F-2	7.8	6.4	1	1713	*	17D,D14	9.4	7	3.4
1681	*	15E-2	8	6.6	0.9	1714	大皿	31I-2	12.6	9.4	2.4
1682	*	16E-2	8	6.4	1.1	1715	*	23E-2	14	(10)	2.7
1683	*	15E-2	7.9	6.4	1.1	1716	*	表採	15.3	(11.2)	2.5
1684	*	16E-1	7.8	(6.8)	1.1	1717	*	26K-2	13	(9)	1.6
1685	*	16F-2	8.2	7	1.1	1718	*	16E-2	(11.8)	(9.2)	2.0
1686	*	16F-2	8	6.6	1.2	1719	*	17E-2	(11.8)	(9.2)	2.0
1687	*	17E-2	7.8	(6.2)	0.9	1720	*	17D-2	12.5	9.2	2.0
1688	*	15E-2	8.4	7	0.7	1721	*	15E-2	(12.0)	(9.0)	2.1
1689	*	11G-2c	7.8	7	1	1722	*	19G-2	(13.0)	(10.0)	2.1
1690	*	7D-2 b	6.4	6	1.1	1723	坏	15H-1	(13.6)	(7.2)	(4.6)

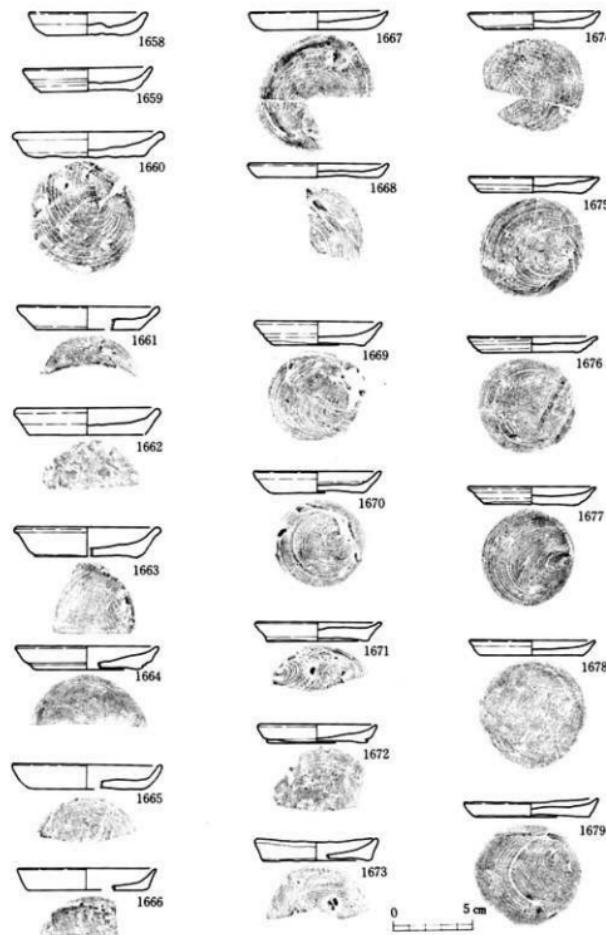
第36表 土師器出土地区及び計測表(1)

図番	器種	出土区層	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	図番	器種	出土区層	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)
1724	壺	30F-2	(15.6)	(8.2)	(4.1)	1757	壺	8E-2b	12.0	7.8	3.0
1725	*	27H-2	11.6	6.0	4.4	1758	*	8G	11.6	7.8	3.5
1726	*	10E-1	12.7	6.0	4.1	1759	*	7E-2c	12.7	9.5	3.4
1727	*	9E-2	13.7	6.8	4.1	1760	*	31G-2	12.7	8.7	3.3
1728	*	31F-2	14.3	8.8	4.0	1761	*	21H-1	12.1	7.8	3.3
1729	*	22C-2	(13.6)	(8.0)	3.9	1762	*	8G-2	11.4	7.0	3.3
1730	*	27H-2	13.7	7.1	4.0	1763	*	27K-2	14.0	10.1	3.6
1731	*	15H-1	13.6	6.6	3.5	1764	高台付壺	24D-2	15.8	10.0	6.7
1732	*	25F-2	13.4	5.5	5.9	1765	*	29F-1	—	8.2	—
1733	*	22F-1	13.8	10.3	2.5	1766	*	31I-2	—	(9.3)	—
1734	*	16F-2	(13.0)	(9.8)	2.4	1767	*	27I-2	13.6	6.0	3.3
1735	*	23I-2	13.1	9.1	3.0	1768	*	27K-2	12.2	6.2	4.0
1736	*	35I-2	14.1	9.4	2.75	1769	*	12E-1	15.4	—	—
1737	*	18D-2	12.7	8.5	2.7	1770	*	28H-2	15.4	—	—
1738	*	16E-2	12.6	7.5	2.9	1771	壺	29F-2	12.2	6.0	5.5
1739	*	30F-2	12.8	8.8	3.4	1772	*	25F-2	12.6	6.0	5.0
1740	*	26J-2	13.5	9.6	3.2	1773	*	26G-2	12.2	5.8	5.3
1741	*	22H-2	13.4	8.4	3.2	1774	*	9H	11.5	6.0	5.5
1742	*	28J-2	13.8	9.4	3.7	1775	*	9F-2c	11.9	5.0	5.4
1743	*	17D-2	(13.8)	(8.4)	2.6	1776	*	26G-2	12.7	5.2	5.1
1744	*	8G-1	(14.2)	(9.0)	2.9	1777	*	11E-3	13.1	5.4	5.1
1745	*	16F-2	12.4	8.4	2.1	1778	*	12D-2	—	5.0	—
1746	*	12F-2	12.8	8.8	2.4	1779	*	10D-1	—	5.6	—
1747	*	17D-2	11.9	8.7	2.7	1780	*	28H-2	—	6.2	—
1748	*	16D-2	12.8	8.7	2.4	1781	*	19I-2	—	7.0	—
1749	*	18D-2	12.1	8.8	2.3	1782	*	27H-2	—	6.0	—
1750	*	22J,K-2	12.2	8.8	2.6	1783	*	33H-2	—	5.0	—
1751	*	表採	(13.0)	(9.2)	2.4	1784	*	11D-1	10.8	—	—
1752	*	36K-1	(12.2)	(8.8)	2.8	1785	*	23E-2	12.4	—	—
1753	*	18P-2	11.9	9.2	2.9	1786	*	11D-2	12.4	—	—
1754	*	27,28G-2	11.6	7.9	3.0	1787	*	22C-2	14.4	—	—
1755	*	17D-2	11.6	9.1	2.4	1788	*	11D-1	13.6	—	—
1756	*	27J-2	(13.4)	9.4	3.8	1789	*	29I-2	14.4	7.0	5.7

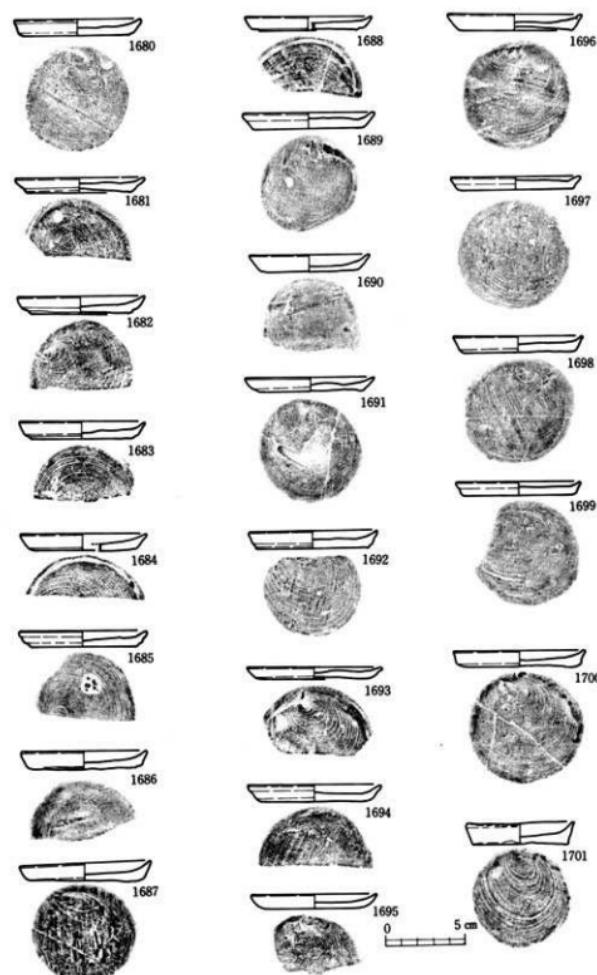
第37表 土師器出土地地区及び計測表(2)

図番	器種	出土区層	口径 [cm]	底径 [cm]	器高 [cm]	図番	器種	出土区層	口径 [cm]	底径 [cm]	器高 [cm]
1790	高台付甕	10I-2	15.0	—	—	1823	甕	23F-2	(16.5)	—	—
1791	*	29H-2	—	7.0	—	1824	鉢	31K-2	(29.4)	—	—
1792	*	8F-2c	—	7.2	—	1825	*	27J-2	(23.2)	—	—
1793	*	30H,1-2	—	7.0	—	1826	*	31F-2	(22.5)	—	—
1794	*	29G-2	—	7.0	—	1827	*	10F-1	(18.2)	—	—
1795	*	31I-2	—	7.0	—	1828	*	23F-2	(12.7)	—	—
1796	*	8I-2	—	7.0	—	1829	*	28H-2	(11.2)	—	—
1797	*	27H-2	—	8.0	—	1830	*	27,28G-2	(9.2) (6.6) (6.5)	—	—
1798	*	25H-2	—	7.0	—	1831	無頸壺	22C-2	18.2	—	—
1799	*	9D-2	—	8.8	—	1832	短頸壺	25I-2	12.0	—	—
1800	蓋	11E-1	—	—	—	1833	*	26I-2	9.4	—	—
1801	*	24E-2	—	—	—	1834	壺	9D-2c	9.0	—	—
1802	*	22C-2	—	—	—	1835	*	8F-2c	—	—	—
1803	*	8G-2	13.4	8.0	1.6	1836	甕?	28H-2	19.0	—	—
1804	*	21C-2	(15.0) (8.0)	2.3	—	1837	胴・破片	31J-1	—	—	—
1805	*	31H-2	(14.6) (9.8)	2.3	—	1838	*	13G-3	—	—	—
1806	*	31H-2	(13.2) (10.0)	2.1	—	1839	*	16D-2	—	—	—
1807	甕	11E-2	(36.8)	—	—	1840	*	10E-2c	—	—	—
1808	*	29F-2	(30.0)	—	—	1841	底 部	29J-1	— (7.4)	—	—
1809	*	21D-2	(28.0)	—	—	1842	*	23C-2	— (6.0)	—	—
1810	*	24D-2	(27.0)	—	—	1843	*	23H-2	— (11.0)	—	—
1811	*	31F-2	(23.2)	—	—	1844	*	27,28G-2	— (14.4)	—	—
1812	*	31I-1	(23.8)	—	—	1845	*	11G-2c	— (19.8)	—	—
1813	*	23B-1	(27.0)	—	—	1846	*	26I-2	— (13.6)	—	—
1814	*	30J-2	(25.4)	—	—	1847	把手	30F-1	—	—	—
1815	*	27G-2	(26.8)	—	—	1848	*	8C	—	—	—
1816	*	23D-2	(25.4)	—	—	1849	布痕土器	—	—	—	—
1817	*	30K-1	(25.5)	—	—	1850	*	—	—	—	—
1818	*	30H-2	(26.0)	—	—	1851	*	—	—	—	—
1819	*	8B-3	(22.8)	—	—						
1820	*	29I-2	(23.5)	—	—						
1821	*	27J-2	(27.2)	—	—						
1822	*	31F-2	(20.5)	—	—						

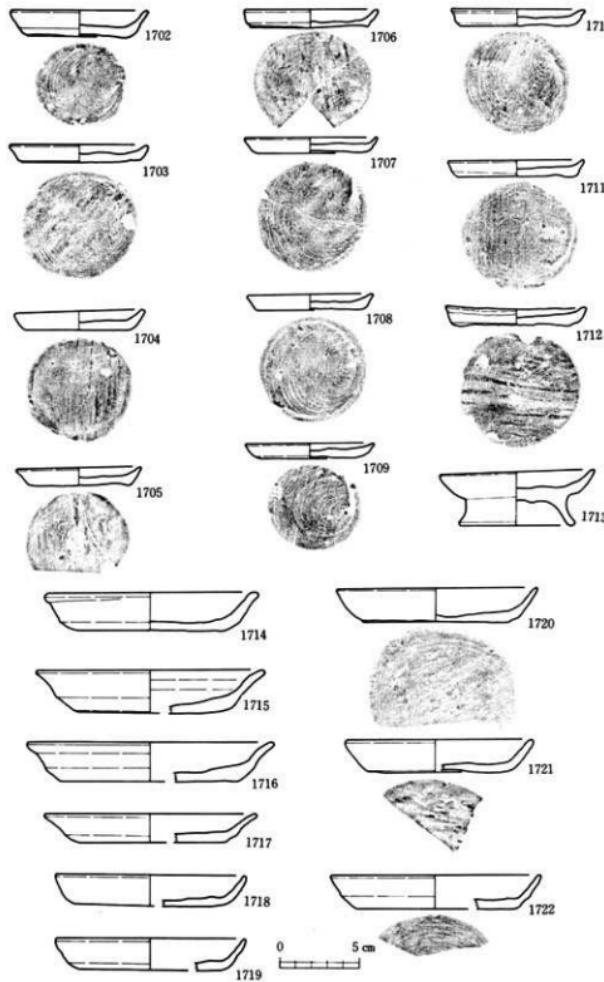
第38表 土器器出土地区及び計測表(3)



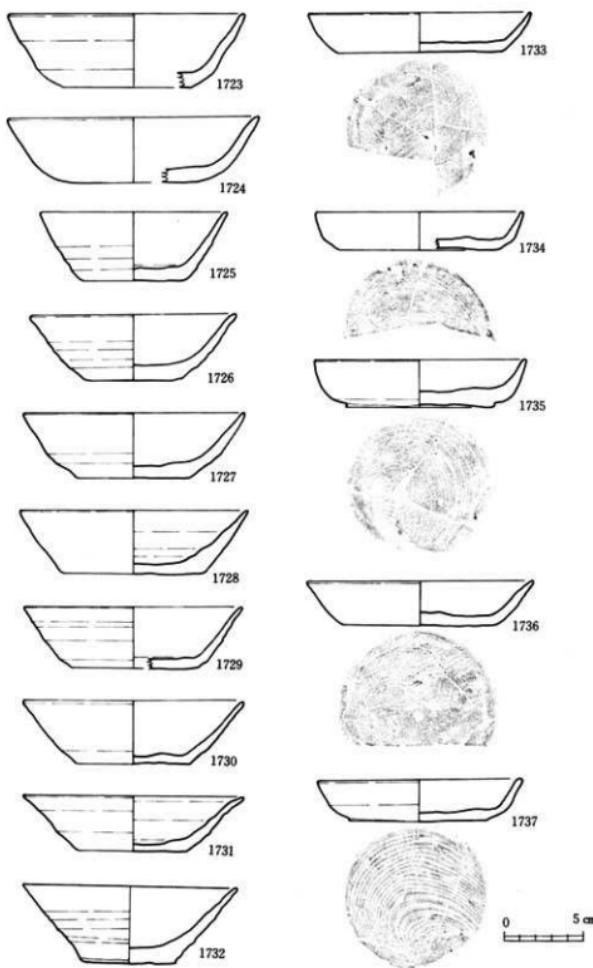
第241図 土師器(1) (III)



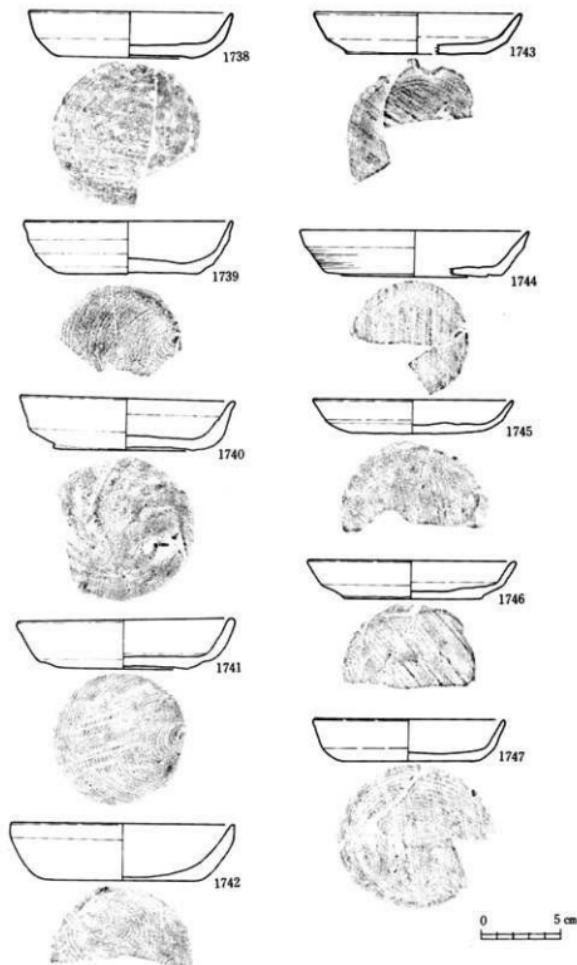
第242図 土師器(2) (三)



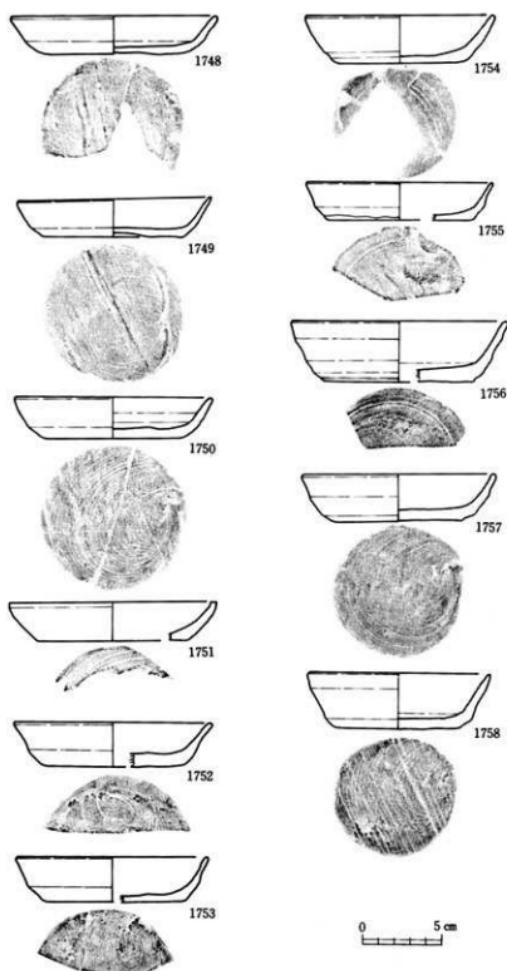
第243図 土器群3) (III)



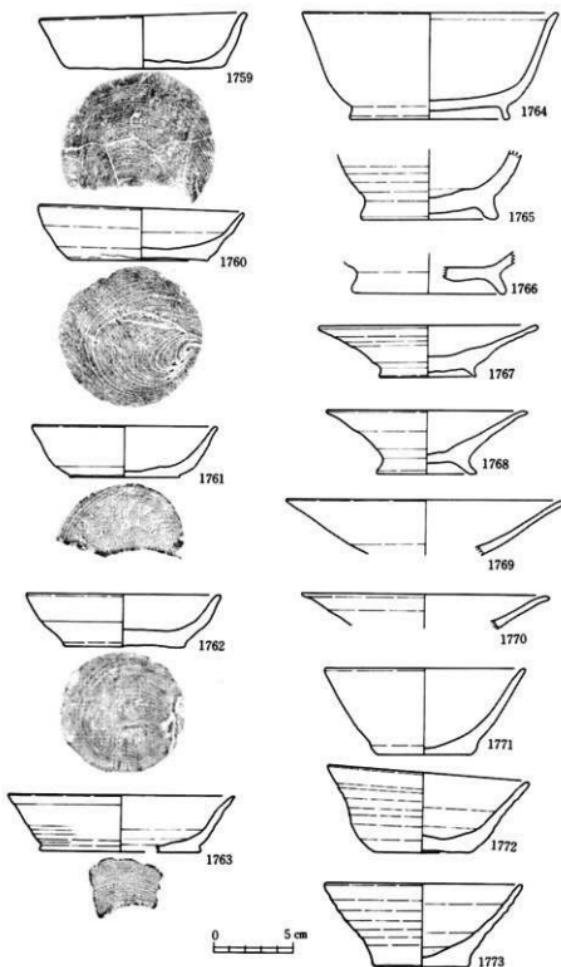
第244図 土器類4(环)



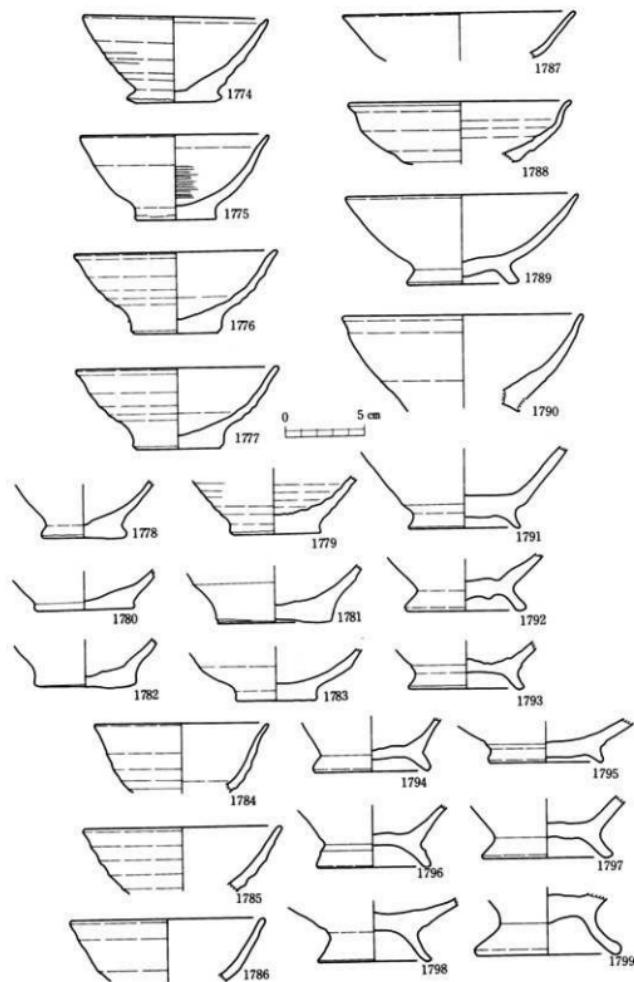
第245図 土器器5(环)



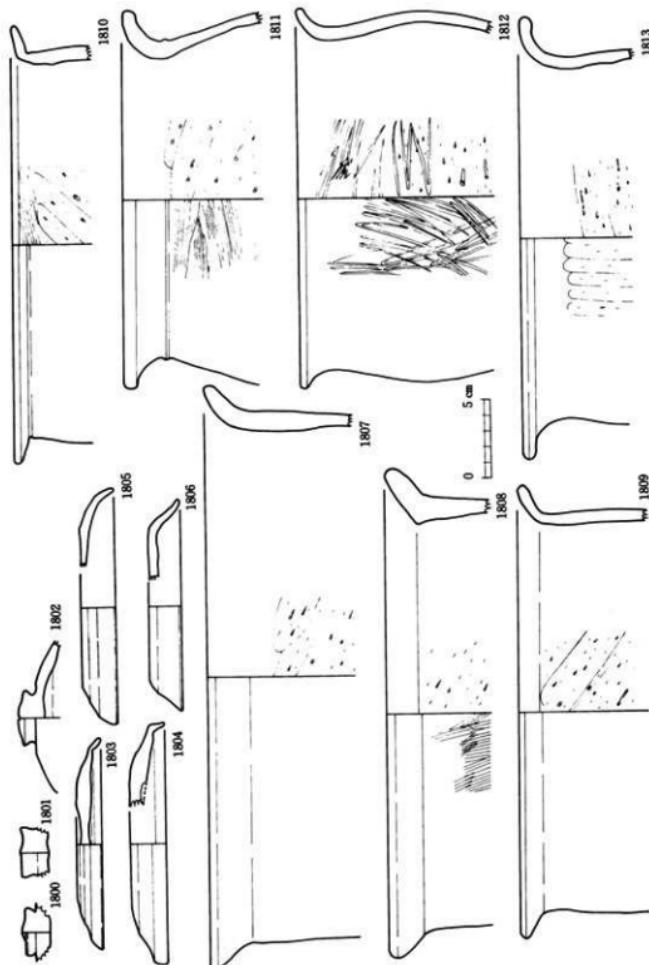
第246図 土師器(6)(3)



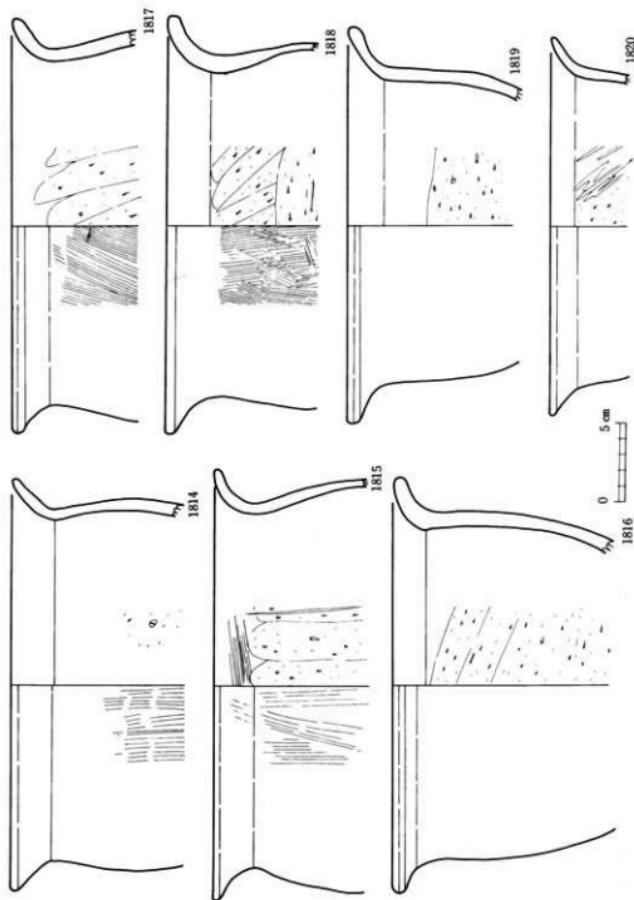
第247図 土師器(7)(壺・境)



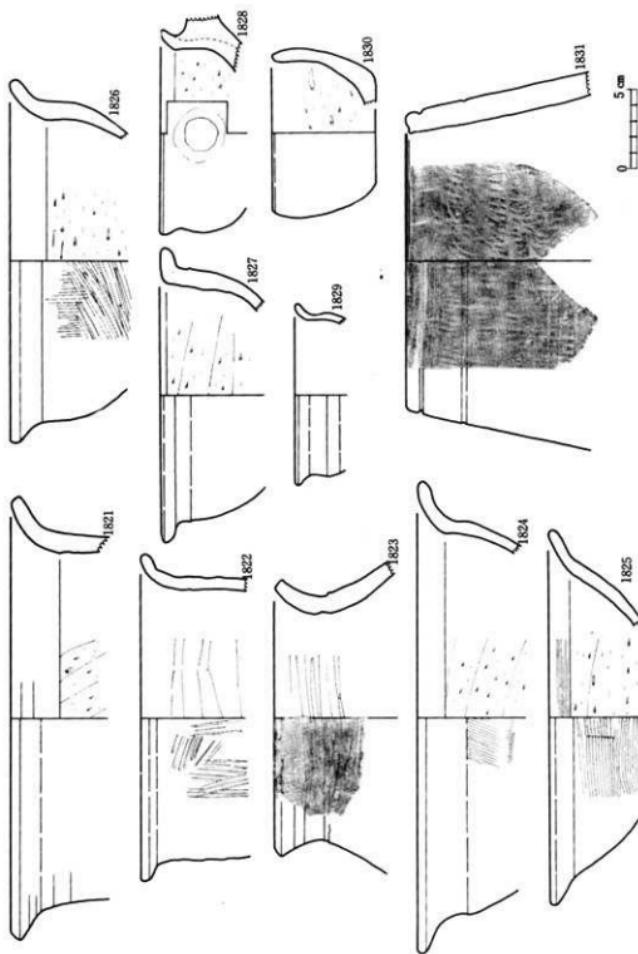
第248図 土器図(8)(塊)



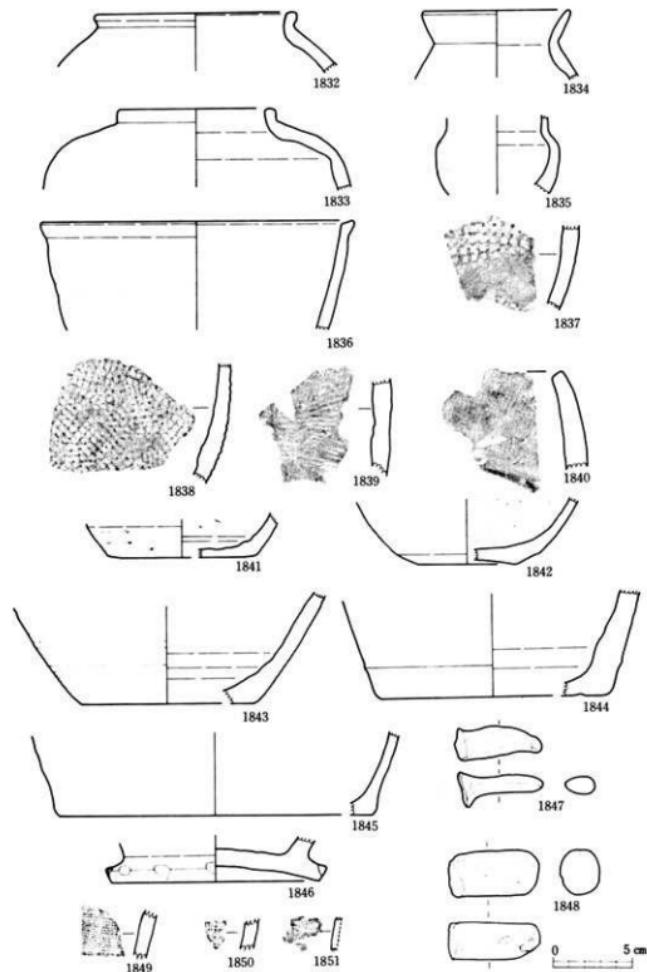
第249図 土師器9(蓋、甌)



第250図 土師器10(變)



第251図 土師器II (甌・鉢)



第252図 土器器口 (茎など)

(2) 黒色土器

黒色土器の仲間に内面・外面とも黒く研磨したもの、内面のみ黒いもの、内面・外面ともていねいに研磨したもの、内面のみ赤く研磨したものがいる。器形としては皿・环・壺などの小型品のみである。

(1) 小皿 (第253図 1852~1871)

内・外面とも黒色で、ヘラミガキされ、胎土はよく精選されて、砂粒をほとんど含まない。底面もヘラミガキされているが、確認される範囲では、すべて糸切り底であった。口径は、9cm前後が最も多い。口縁端部は、すべて、先に行くに従って細く、ひき出され、やや丸味をもつ。内・外面、ヘラミガキされるが、内面と、底面が特に顕著で、側面には横ナデを残すものもある。内底面でのヘラミガキは、一方向性をもつ。

(2) 环 (第253図 1872)

内黒土器で、外面は黄灰色を呈し、胎土はよく精選されていて、わずかに砂粒を含む。内面は放射状にヘラミガキがされ、外面は横ナデされる。口径が大きく、底径は小さい。内弯気味の大きく開いた器体である。

(3) 壺 (第253図、第254図 1873~1885、1888~1897)

ほとんどが、内黒土器で、壺部内、外面はヘラミガキされ、高台部の内・外面は横ナデされている。外面は、一般に黄灰色を呈する。胎土は、よく精選されていて、ほとんど砂粒を含まない。

1873~1878は、図上復元を含めて、完形として図化したものである。ヘラミガキは、横方向に行なわれている。1873~1876は、低い高台が直立して、体部から口縁部まで、内弯して立ち上がる。1877~1878は、外方に開く低い高台に、内弯して立ち上がった体部が、内側に棱をつくって、外方に屈曲し、口縁部に至る。1877は、口縁下 1.6cm から、1878は、口縁下 3.7cm から、体部下半を、黒色となしておあり、器形の違いと、何らか、関係をもつものであろうか。

1879~1885は、壺部で、1879~1882は、口縁部が、体部から内弯して立ちあがるもの、1883~1884は、わずかに外反する。1885は、器高が高く、外弯気味に開く壺である。1885は、また、外面を調整している。

1888~1897は、高台部分で、1873~1878の高台部分と比べて、高い。1897を除いて、内黒土器で、1897は、内・外面とも黒色を呈している。1889~1894は、高台付环の高台部分の可能性もある。1893は、特に高く、段を有している。1895~1896は、底面に、十字状の沈線を施してあり、窓印であろう。他に3・4点、見受けられた。1897は、底部中央に、穿孔を施してある。

(4) 高台付环 (第254図 1886~1887)

内面は黒色、外面は淡赤褐色を呈し、胎土に、わずかに砂粒を含む。器高が低く、体部から口縁部へ、外弯気味に大きく開く、土師器にも、同じ器形のものが見られる。环部内面が、放射状にヘラミガキされ、外面及び高台部は横ナデによって調整される。

(5) 底部 (第254図 1898~1899)

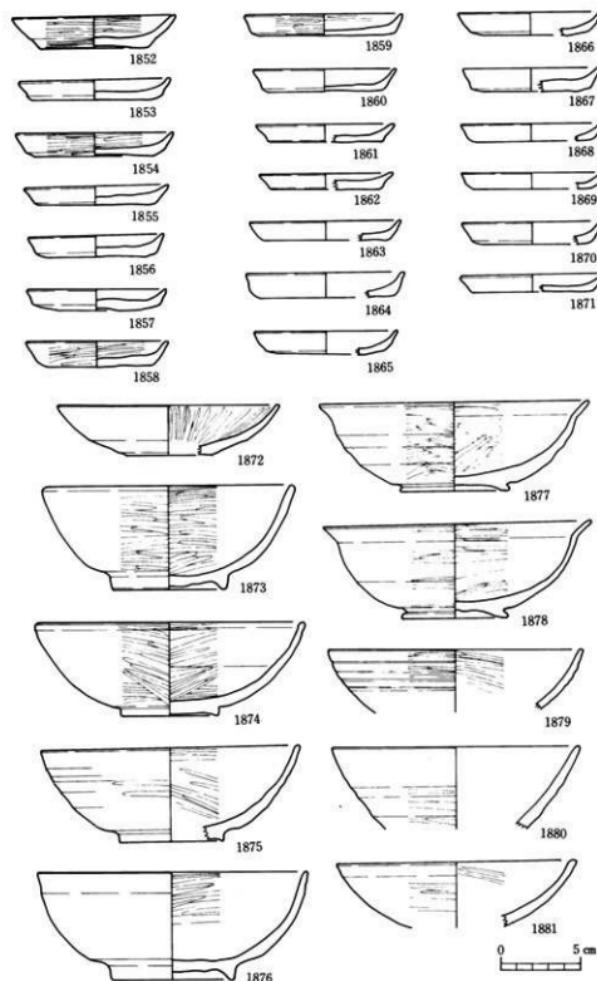
器形は不明であるが、平底の底部で、内面黒色、外面黄灰色を呈す。胎土は、わずかに砂粒を含み、内面ヘラミガキ、外面横ナデによって調整される。

⑥内朱土器 (第254図、1900～1903)

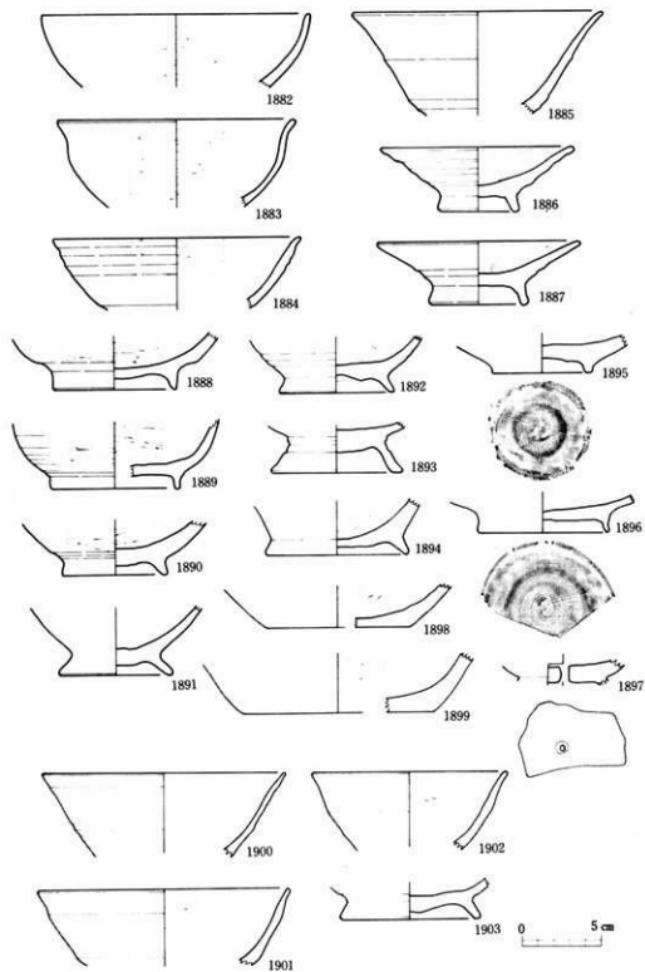
内面に、黒色土器と同じ手法で、赤色顔料を塗り込めたもので、外面は黄灰色、胎土は、わずかに砂粒を含む。内面をヘラミガキ、外面を横ナデによって、調整している。1900～1902は壇部、1903は高台部分である。1901のみ、内面も横ナデされている。

図番	器種	出土区層	口径 cm	底径 cm	器高 cm	図番	器種	出土区層	口径 cm	底径 cm	器高 cm
1852	小皿	23F-2	10.1	6.8	2.1	1878	壇・壇部	8J-2	17.0	6.4	6.0
1853	々	16G-2	9.2	7.0	1.3	1879	々	29K-1	(16.8)	—	—
1854	々	16E-2	9.8	7.2	1.5	1880	々	26F.G-1	(15.4)	—	—
1855	々	不 明	9.0	7.0	1.2	1881	々	27J-2	(14.8)	—	—
1856	々	16F-2	8.6	6.6	1.4	1882	々	25H-2			
1857	々	15E-2	8.8	4.8	1.4	1883	々	9B			
1858	々	10D-1	8.8	6.8	1.7	1884	々	27K-2			
1859	々	16G-2	9.8	8.8	1.4	1885	々	28H-2			
1860	々	16F-2	8.8	7.2	1.5	1886	高台付壠	29D-1			
1861	々	16F-2	(8.6)	(7.2)	1.2	1887	々	28J-2			
1862	々	16F-2	(8.4)	(7.0)	1.0	1888	高台部分	22F-2			
1863	々	16F-2	(9.2)	(7.6)	1.2	1889	々	17F-1			
1864	々	16G-2	(9.8)	(8.4)	1.6	1890	々	30H.I-2			
1865	々	16F-2	(8.8)	(7.0)	1.5	1891	々	33I-2			
1866	々	16F-2	(9.2)	(7.0)	1.6	1892	々	28I-2			
1867	々	16E-2	(8.4)	(6.0)	1.5	1893	々	7F-2			
1868	々	15E-1	(8.8)	(7.4)	1.1	1894	々	11F-2			
1869	々	15E-2	(8.8)	(7.2)	1.1	1895	々	9I-2			
1870	々	16F-2	(8.6)	(7.0)	1.5	1896	々	9E-2b			
1872	々	16F-2	(8.8)	(7.4)	1.1	1897	々	8F-1			
1873	壠	9D	12.8	5.2	3.2	1898	々	24D-2			
1874	高台付壠	8G-1	15.4	7.2	6.6	1899	々	29H-1			
1876	々	25F-2	16.6	6.0	5.9	1900	内朱土器	26C-2			
1877	々	27G-2	(16.2)	(6.4)	6.0	1901	々	33J-1			
1878	々	16F-2	16.8	7.6	6.8	1902	々	29F-2			
1877	々	9G-1	17.0	6.8	5.6	1903	々	29F-2			

第39表 黒色土器出土地区及び計測表



第253図 黒色土器(1)



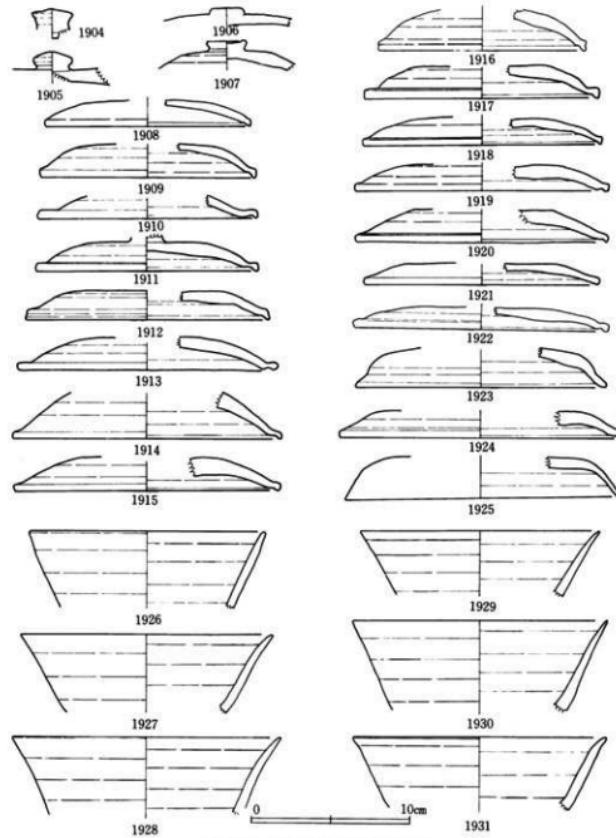
第254図 黒色土器(2)

(3)須恵器

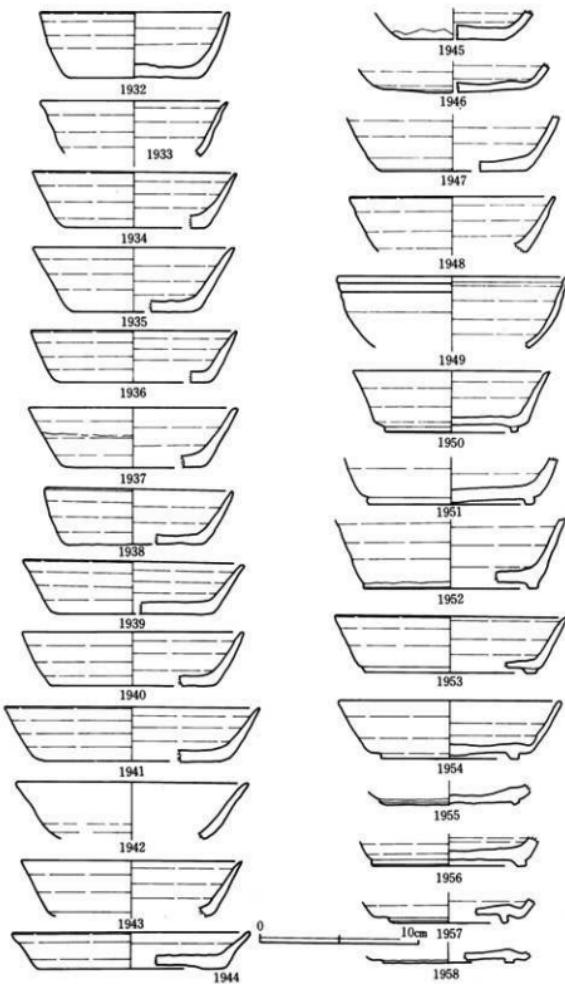
須恵器には壺蓋・壺身・壺・甕・鉢がある。

(1)壺蓋 (第255図)

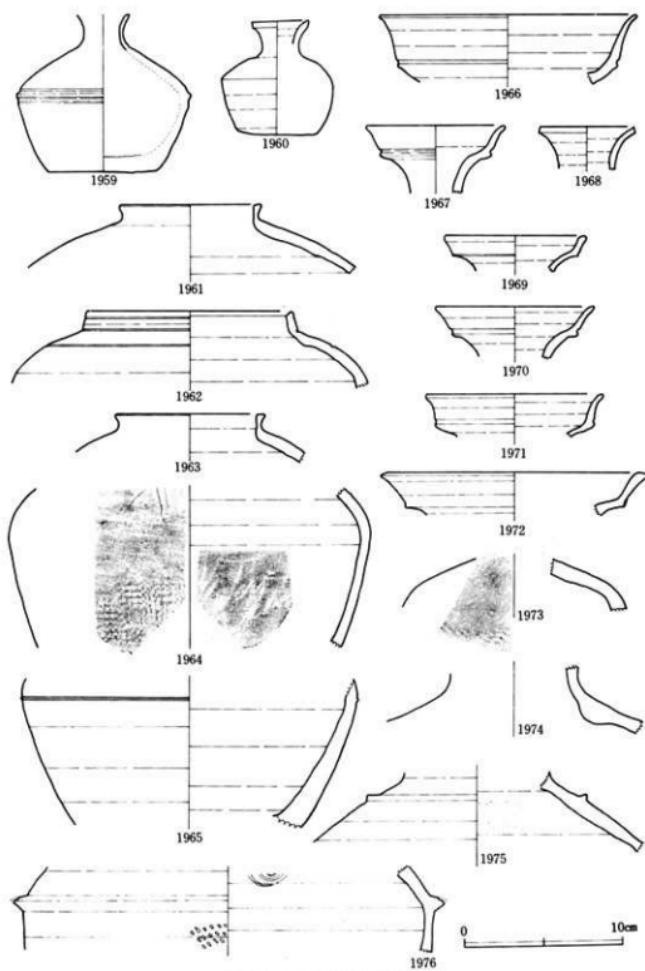
1904・1905は宝珠様のつまみを有する壺蓋片である。1906のつまみは円板状にハリツケた簡単なものである。1907はつまみをハリツケた後ナデ調整を施し上を凹形にしている。1908は天



第255図 須恵器(1)(壺蓋・壺身)



第256図 須恵器(2) (杯身)



第257図 須恵器(3) (壹)

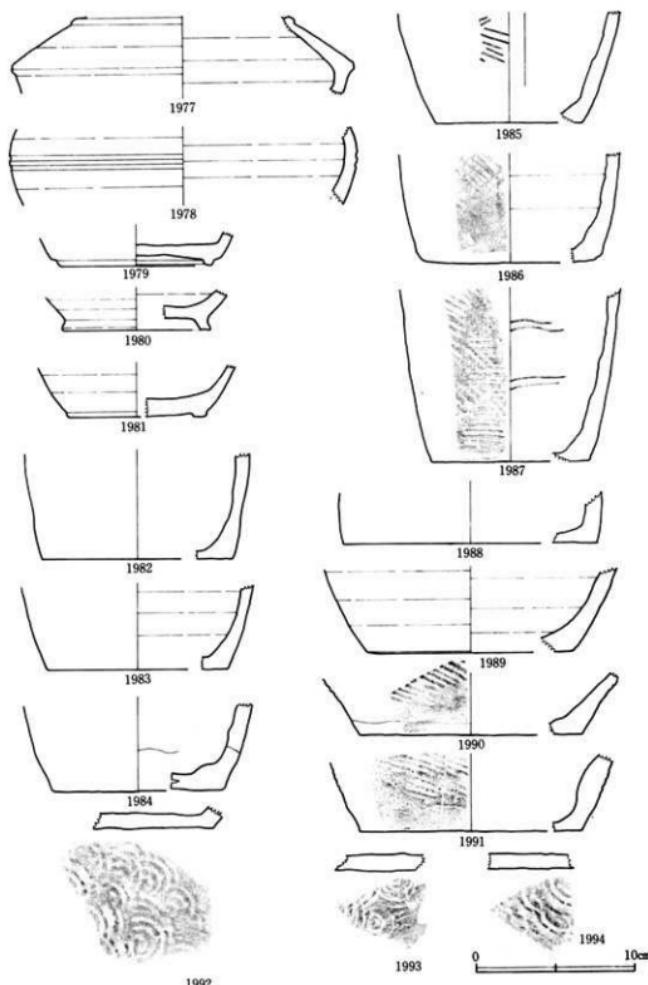
井部からならかな曲線で下方に開き口縁部をつくる。口縁部は内弯し、端部内側がわずかに段をもつ。径2~3mmの砂粒があるが焼成は良好である。1909・1912は口縁部が外反し、端部近くで水平気味になり、屈曲して下方に下がり端部になる。端部は丸い。外面は天井部近くが回転ヘラ削り、口縁部は回転ナデ調整である。1911は天井部の中央がわずかに低く、口縁部は外反し端部近くで水平になり、下方に屈曲して端部になる。外面は天井部が回転ヘラ削りの後回転ナデ調整、口縁部の内外面は回転ナデ調整である。1913・1919は端部近くの口縁部内側ではっきりとした稜ができる。1914は他と比べて深い。1923は口縁部が外反し、端部内側には他のような凹みはない。天井部は回転ヘラ削り、口縁及び内面は回転ナデ調整である。焼成はやや軟質。1925は水平な天井部から外反気味に口縁部になる。天井部外面は回転ヘラ削り、口縁部は自然釉がかかっている。内面は回転ナデ調整。焼成は良好である。

② 坏身 (第255図・第256図)

1926は口縁部が外反して伸びるが端部近くで少し口がすぼむ。内外面とも回転ナデ調整である。1927・1928・1929・1930は口縁部が外反したまま直行する。共通して外側は青灰色で、内側は黄褐色であるが、その中で1928と1930は口縁端部から約5mmの内面も青灰色である。胎土はち密であり、内外面とも回転ナデ調整である。1931は口縁の端部が外に開く。1932は口縁部が内弯気味に立ち上がる。底部はヘラ削りの後ナデ調整、口縁部及び内面は回転ナデ。これは火棒文様がある。1934は焼成がやや軟質である。1936も火棒文様がある。1944は口径は大きいが浅い。口縁は外反し外側に開く。底部は回転ヘラ切りの後回転ナデ調整、内側はナデ調整、口縁部は内外面とも回転ナデ調整である。1945は土師器様の色調を呈している。底部は回転ヘラ切りで口縁部外面も回転ヘラ削りであるが、部分的に静止ヘラ削りが施されている。内側は底部がナデ、口縁部は回転ナデ調整である。1949は深い器形であり、口縁部は内弯気味に立ち上がり端部近くで外反する。端部近くの外面に2条、内面に1条の凹線がある。調整は口縁部下半が回転ヘラ削り、上半及び内面は回転ナデである。1950は口縁が外反し、底部にハリツの高台がある。1951は底部が厚く、その中央部が下がっている。1957は底部と口縁部の境の部分が下がっており、高台の外側が溝状になっている。

③ 窯 (第257図・第258図)

1959は口縁部上半を欠損するがほぼ完形である。体部中央に上下二条の凹線のある肩があり、底部及び体部下半は回転ヘラ削り、他は回転ナデ調整である。1960も小型の完形窯である。体部上半に肩をもつ。1961は口縁が短く直立し、端部が水平になった短頸窯である。肩に近い部分は外側の格子タタキがナデによって消されている。内側は回転ナデによってタタキ痕は消されている。1962は口縁が内弯し、端部は内に向いている。口縁部及び口縁と胴部の境それに肩に近い部分に計3本の凹線がある。内外面とも回転ナデ調整。1964は上半に肩をもつ胴部である。最終的にはナデによって調整されているが部分的にタタキ目が残っている。1965は外面が回転ヘラ削りの後ナデ調整、内面は回転ナデ調整である。胴部の張り出した部分に凸線がある。1966は口頸部が「くの字」状になって外反している。内外面とも回転ナデ調整である。1974は

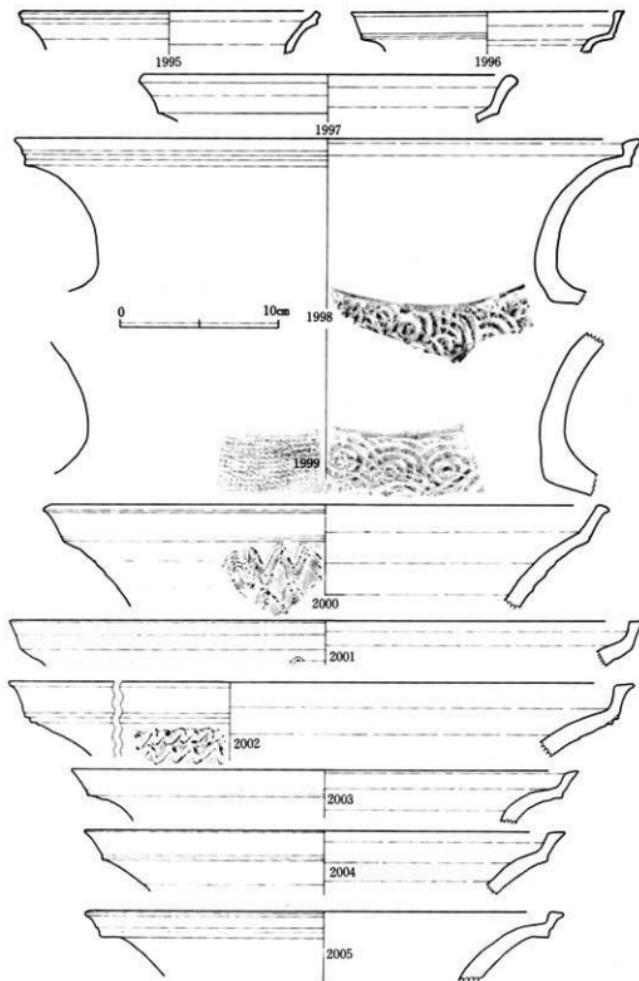


第258図 須恵器(4) (壹)

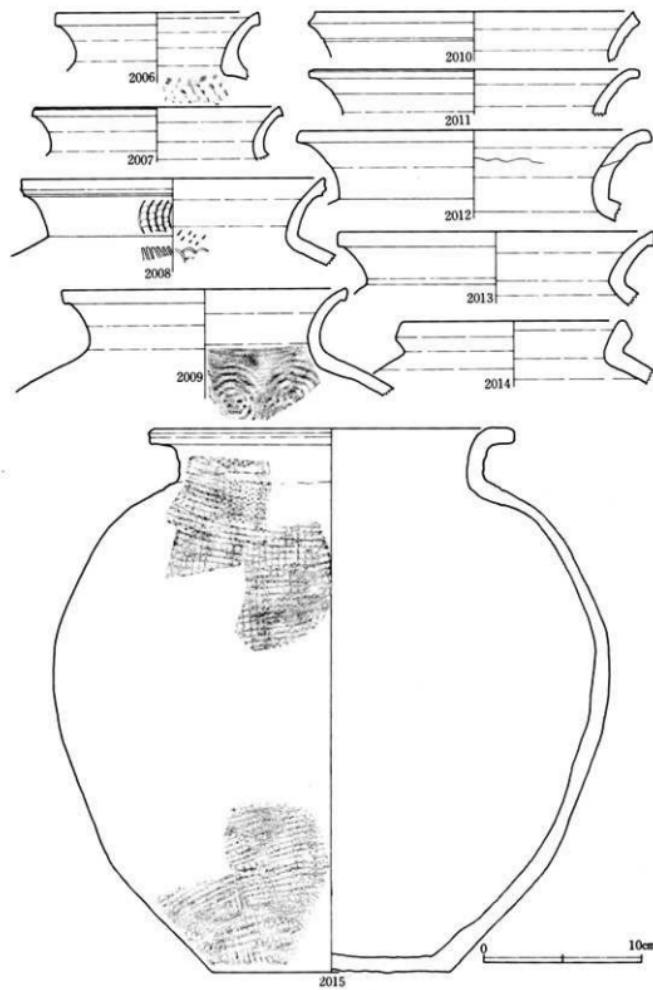
緑色の自然釉がかっている。1975は肩上部にハリツケの凸帯がある。1976も胴部に断面三角形のハリツケ凸帯があり、タタキ目はナデ調整によってほとんど消されている。1977はほぼ直角状に屈曲した肩部で、その上部にも断面三角形のハリツケ凸帯がある。内面上部にタタキ痕が残っている。1980は高台の中央が凹状になっている。1981は土師器様の色調を呈し、低い高台がつき底部中央が下がっている。1982は底部がうすく胴部は直立に近い立ち上がりである。内外面ともタタキ目をナデにより消している。1983は外面が回転ヘラ削り、内面は回転ナデ調整であり、底部の残部は少いがタタキ痕が外側にある。1984は内面に輪積み痕が残ってナデ調整がある。外面はタタキの後ナデ調整。1988は底部が広く胴部は内窓気味に直立して立ち上がっている。1989は胴部が広い角度で立ち上がり、内外面とも回転ナデ調整、底部は回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整が施されている。1990は土師器様の色調を呈し、胴部の立ち上がりは外側に広い。外面は平行タタキ、底部に近い部位及び底部はナデ調整、内側はナデ調整が行なわれている。1992・1993・1994は底部片であり、外面に同心円タタキがある。いづれも底径は不明であるが、1992はヘラ削りされた胴部が若干残っている。

③ 麋 (第259図～265図)

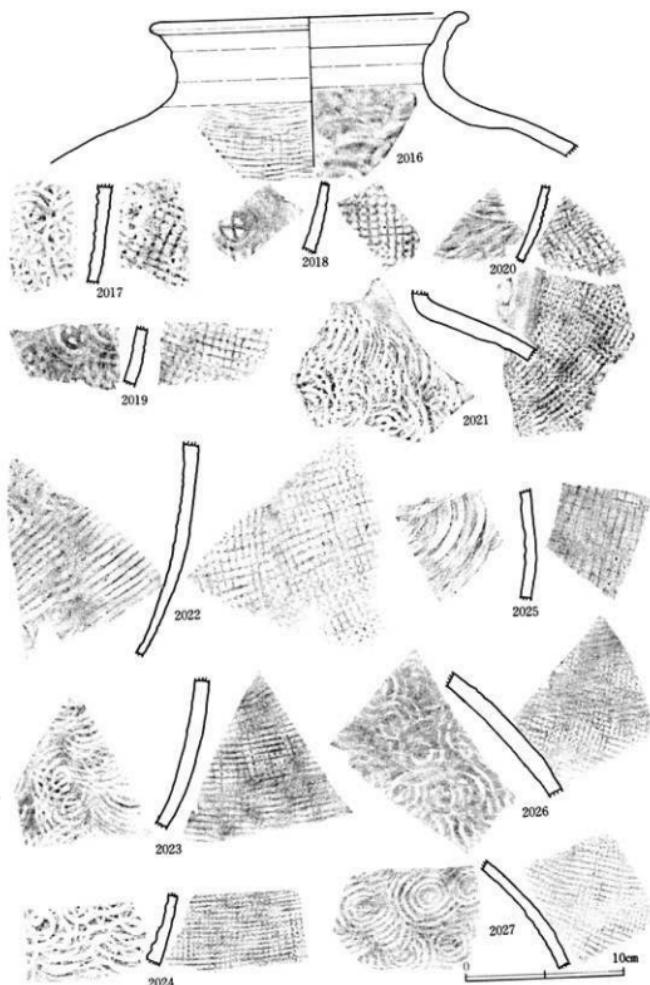
1995は口縁が外反して立ち上がり、端部近くで垂直になる。内外面とも回転ナデ調整。1996は口縁部が「くの字」状になり、その部分に凹線がある。1997は口縁上半が厚く、端部は丸い。1998は口頭部が大きく外反し、その後直角に立ち上がる。口縁には2条の凹線がある。胴部は水平気味に張り出す。外面は平行タタキの後ナデ調整、内面は口頭部がナデ調整で、胴部が同心円タタキ目がある。1999もほぼ同形の大形甕である。2000は外反する口頭部に波状文が、施されている。2001も口頭部に波状文をもつが小片であるため文様の全体は不明である。2002は口径が約51cmと大きく、口頭部の上部にハリツケによる2条の凸線をもつ。内外面とも回転ナデ調整で、口頭部に波状文がある。2003・2004・2005は「くの字」状に外反する口頭部が屈曲して立ち上がる部分に1条の凹線をもつ。2006から2013の口頭部は短く外反し、「くの字」状にならない。2008は口頭部の屈曲した部分に断面三角形のハリツケ凸線があり、頭部はタタキ目を回転ナデ調整により消している。胴部は外側が平行タタキ、内側が同心円タタキである。2009の胴部外側は格子タタキの後ナデ調整を行なっている。内側は同心円タタキである。2012は口頭部内部に輪積みの痕跡が残っている。2014は口縁が短く外反し、その中央部が厚くなり、端部は丸い。口縁部はハリツケであり、内外面とも回転ナデ調整である。2015は亀山焼である。球形に近い胴部から外反する短い口頭部が垂直気味に立ち上がり、すぐに外側に水平に伸びて端部になる。外面は格子タタキが全面に施こされ、口頭部のみナデが行なわれている。器壁断面には特徴のあるシマ模様が見られる。2017から2054は麁の胴部片である。麁の胴部はタタキ技法により整形されており、外面と内面がそれぞれ格子タタキと同心円タタキ・格子タタキと平行タタキ・平行タタキと同心円タタキ・平行タタキと平行タタキの組み合せがある。2017・2018・2019は外面が格子タタキで内面は車輪文である。車輪文はこの3点のみである。2042・2054は底部である。



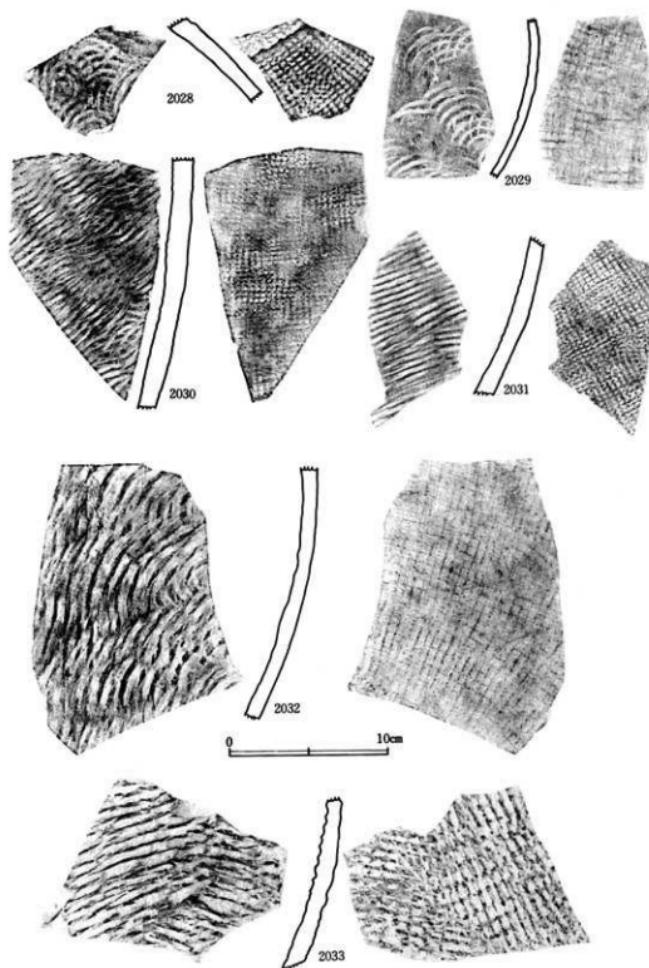
第259図 須恵器(5) (變の口縁)



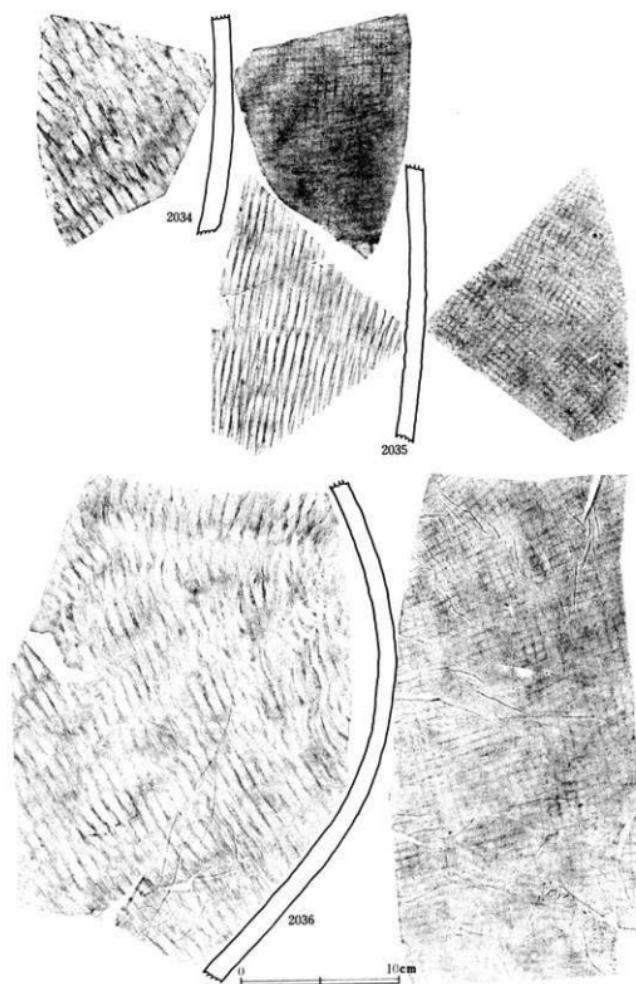
第260図 須恵器(6) (變)



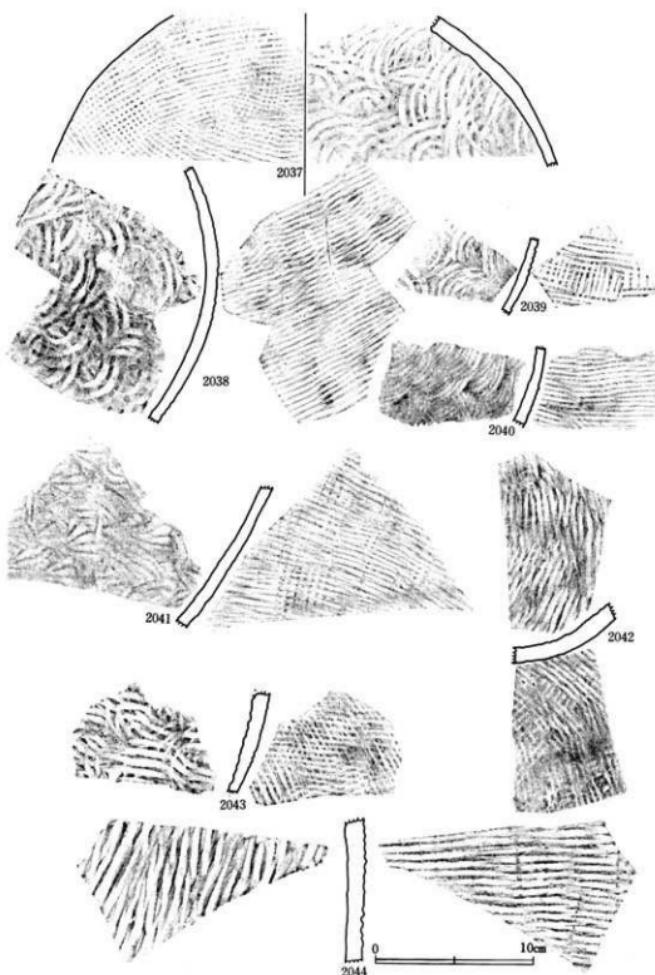
第261図 須恵器(7) (變)



第262図 須恵器(8) (鏡)



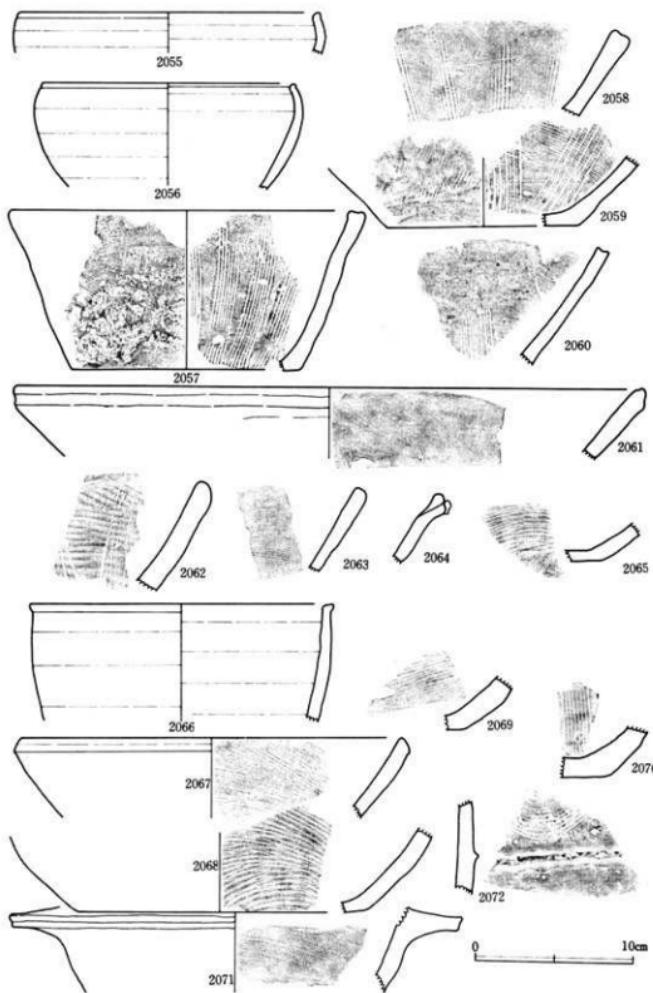
第263図 須恵器(9) (斐)



第264図 須恵器10(斐)



第265図 積石器(II) (斐)



第266図 須恵器(2) (鉢)

(4) 鉢等 (第266図)

2055・2056は鉢である。2056は口縁部が内弯して立ち上がり、体部はなめらかな曲線を描く。最大径より下は外面が回転ヘラ削り、内面は斜め方向のナデ調整であり、その上部は内外面とも回転ナデ調整である。2057は口縁上部が開き端部は広く平らになる捕鉢で、単位7本の条線がある。2059はハケ目以後、単位6本の条線が施されている。外面にもハケ目調整が残る。2061は内面がナデ調整の後、条線が施されており、外面は輪積み痕を約4cmおきに指で押し、その後ナデ調整をしている。2064は片口の部分であり内外面ともナデ調整である。2065は、内面にハケ目が施されており、器壁断面は2015の姿と同一であり亀山焼と思われる。2066は体部が垂直に立ち上がり、内外面とも回転ナデ調整である。2068は器壁断面にシマ模様があるが、2065とは異なる。2071は、内面に細いハケ目調整が施されている。全体の器形は不明である。2072は胴部に断面三角形のハリツケによる凸線と8条の波状条線がある。

番号	種	出土区層	口径	高さ	底径	備考	番号	種	出土区層	口径	高さ	底径	備考
1904	蓋	22D-2					1926	壺	24E-2	14.9			
1905	々	30H-2					1927	々	9E-1	16			
1906	々	25H-2					1928	々	29F-2	17			
1907	々	28H-1					1929	々	27H-2	15.1			
1908	々	24D-2	12.9				1930	々	28J-2	16			
1909	々	30K-1	13.4				1931	々	9H-2	16			
1910	々	表採	13.9				1932	々	30K-1	15.7			
1911	々	26H-2	14				1933	々	24D-2	11.9			
1912	々	31K-1	15.4				1934	々	24D-2	12.7	3.6	8.6	
1913	々	21D-1	16.1				1935	々	24D-2	12.6	4.1	7.5	
1914	々	24D-2	17				1936	々	23H-2	12.9	3.3	9.5	火棒
1915	々	24D-2	16.7				1937	々	8F-2	13.1	3.8	8.8	
1916	々	12F-1	13				1938	々	24D-2	11.8	3.5	8.5	
1917	々	26JK-2	14.6				1939	々	23K-2	13.9	3.3	9.5	
1918	々	27J-2	14.9				1940	々	21C-1	13.9	3.5	10.1	
1919	々	23P-2	15.8				1941	々	31S-2	16	3.5	11.3	
1920	々	33H-2	15.6				1942	々	17H-1	14.5			
1921	々	21C-2	14.5				1943	々	31G-1	12.6	4.1	7.3	
1922	々	26J-2	15.7				1944	々	8D-2	14.9	2.3	11.6	
1923	々	27K-1	15.6				1945	々	10J-2			6.5	
1924	々	24G-2	17.6				1946	々	9I-2			8.8	
1925	々	22D-2	17.3				1947	々	24K-1			9	

第40表 須恵器一覧表(1)

(単位 cm)

番号	種	出土区層	口径	高さ	底径	備考	番号	種	出土区層	口径	高さ	底径	備考
1948	环	26H-2	12.8				1981	壺	24D-2			13	
1949	フ	23D-2	14.3				1982	フ	23C-1			12	
1950	フ	25G-2	12.3	3.9	8.3		1983	フ	25I-2			11.4	
1951	フ	8G-2			10.2		1984	フ	22G-2			10.9	
1952	フ	27H-2			10.9		1985	フ	24F-2			9.2	
1953	フ	23F-2	14.5	3.6	10.7		1986	フ	21C-1			11.5	
1954	フ	30J-2	13.9	3.7	8.6		1987	フ	24G-2			10	
1955	フ	10J-2			8.1		1988	フ	8E-2			16	
1956	フ	24D-2			9.5		1989	フ	10F-2			13	
1957	フ	23G-1			7		1990	フ	30H-1			12	
1958	フ	90-2C			8.2		1991	フ	14区以南			14	
1959	壺	29G-2			6.8		1992	フ	8J-2				
1960	フ	25G-1	3.6	7.1	5		1993	フ	26H-1-2				
1961	フ	24D-2	8.9				1994	フ	22E-1				
1962	フ	21C-2	13				1995	甕	22E-2	19			
1963	フ	24D-2	9.4				1996	フ	29J-2	17.1			
1964	フ	26C-2					1997	フ	27I-2	23.8			
1965	フ	26H-2					1998	フ	12-1	39.4			
1966	フ	30J-2					1999	フ	30F-1				
1967	フ	31J-1	8.7				2000	フ	9E-2C	35.6			
1968	表 採	5.9					2001	フ	9G-2C	39.8			
1969	フ	6H-1	8.9				2002	フ	27G-1	50.8			
1970	フ	30J-2K-2	10				2003	フ	34J-2	32			
1971	フ	33H-2	11.1				2004	フ	8F-2C	30.3			
1972	フ	8I-1	16.9				2005	フ	8G-2C	30.1			
1973	フ	17E-2					2006	フ	22C-2	12.9			
1974	フ	27H-2					2007	フ	8E-2I	15.5			
1975	フ	24G-2					2008	フ	24E-2	19.1			
1976	フ	24F-2					2009	フ	8G-2C	18			
1977	フ	7D-2					2010	フ	22E-1	20.1			
1978	フ	24F-2					2011	フ	表 採	20.8			
1979	フ	22E-2			9.6		2012	フ	70-2	21.9			
1980	フ	8DE-2			9.2		2013	フ	21E-1	20			

第41表 須恵器一覧表(2)

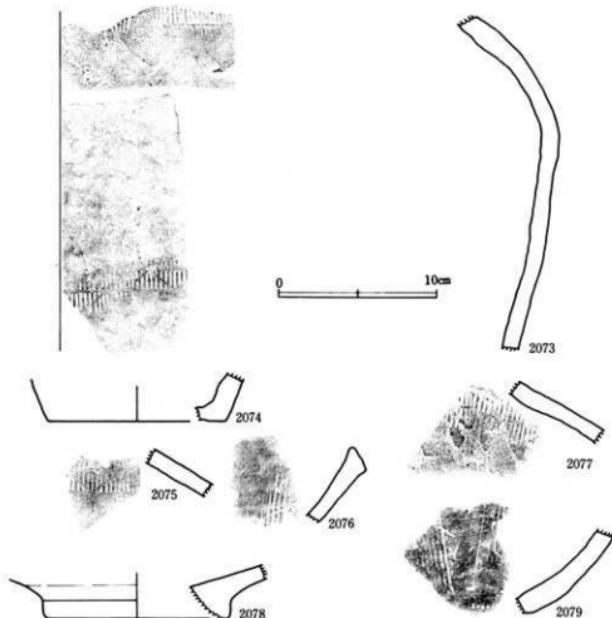
(単位 cm)

番号	種	出土区層	口径	高さ	底径	備考	番号	種	出土区層	口径	高さ	底径	備考
2014	甕	27F-2	14				2047	甕	13H-2				
2015	々	17D-2	23	34.4	15	亀山燒	2048	々	32I-1				
2016	々	10D-2	20				2049	々	24H-2				
2017	々	8E-2					2050	々	30F-2				
2018	々	13E-1					2051	々	30F-2				
2019	々	22D-1					2052	々	11F-2				
2020	々	23IP1					2053	々	表 採				
2021	々	30I-2					2054	々	27I-2				
2022	々	7D-2b					2055	鉢	31G-2	19			
2023	々	31G-2					2056	々	25J-2	15			
2024	々	29J-2					2057	擂鉢	28F-2	22.5	10	14.3	
2025	々	21C-1					2058	々	22D-1				
2026	々	表 採					2059	々	17F-1			12.1	
2027	々	11F-1					2060	々	24H-1				
2028	々	26H-2					2061	々	17F-9	39.8			
2029	々	25E-1					2062	々	16G-1				
2030	々	31H-1					2063	鉢	18D-1				
2031	々	28H-1					2064	々	17J-1				
2032	々	8H-3					2065	々	25I-2				亀山燒
2033	々	23D-1					2066	々	28F-1	19.2			
2034	々	11F-3					2067	々	16G-2	24.2			
2035	々	31I-1					2068	々	15H-1			18	
2036	々	9I-3					2069	々	18H-1				
2037	々	31I-2					2070	擂鉢	25, 26G				
2038	々	31I-2					2071	不明	表 採	28.6			
2039	々	29G-2					2072	不明	29E-2				
2040	々	26H-2					2073	甕	表 採				常滑燒
2041	々	9H-2					2074	壺	21F-1			11.2	
2042	々	29J-1					2075	甕	6J-2				常滑燒
2043	々	10D-1					2076	擂鉢	23D-2				備前燒
2044	々	KM59					2077	甕	17D-2				常滑燒
2045	々	10I-1					2078	壺	10J-1			11.6	
2046	々	31K-1					2079	擂鉢	24D-2				

第42表 須恵器一覽表(3)・陶器一覽表 (単位 cm)

(4)陶器 (第267図)

2073は常滑焼の大甕である。最大腹径は63cmあり、なだらかな曲線で肩部を形成している。外面は茶褐色を呈し、肩の上部は自然釉が粒状に付着している。肩の上部と下部にそれぞれ同一の押印文様がある。内面は暗褐色を呈し、輪積み痕をふさぐように粘土をすり付けナデしている。2075及び2077も同様の押印文様が外面にあり、肩部の上部に相当する破片と考えられる。2074は胴部が直立に近い立ち上がりであり、外面は回転ヘラ削りが施され、内面はナデ調整が行なわれている。2076は備前焼の擂鉢である。口縁は内弯気味に立ち上がり、上部になるほど厚くなる。口縁の断面は三角形状になる。内外面とも細いハケ目調整が行なわれ、内面には条線がある。条線の単位は不明。2078は高台の部分である。外面は回転ヘラ削りによって整形されている。胎土は密であり焼成は堅緻である。2079は内弯状に立ち上がる擂鉢である。内外面ともナデ調整が行なわれ、内面には、条線が施されている。条線の単位は不明である。胎土は粗いが焼成は堅緻である。



第267図 陶器

(5) 磁器

磁器には青磁・白磁・青白磁がある。

① 青磁

碗は6種類に分かれる。1類は直線的に外へ開く口縁部をもつもので、胎土・底の違いなどによって2つに分ける。aは蛇の目高台をもつもので、黄緑色を呈する。bは平底・高台付きのもので、口縁は玉縁状を呈するものがある。2類は内面・外面ともクシ描き文などが描かれるもので、内底と立ちあがりの境に段を有する。3類は内反ぎみの器形をしており、低い高台が付く。内面に花文のあるもの(a類)、雲文のあるもの(b類)、無文のもの(c類)がある。4類は口縁がやや外反し、内底部の軸がかきとられるもので、高台部分は露胎である。5類は内反ぎみの器形をしており、高台は低い。高台内面には軸がかからず、体部外面に片彫りによるしのぎ蓮弁がみられる。蓮弁の間にクシ描きのあるものもある。6類は蓮弁が丸くなり口縁はやや外反する。豊付部分を除き軸がかかっている。2119は内底部の軸が一部とけている。口縁はやや外反する。豊付部分を除き軸がかかっている。2119は内底部の軸が一部とけている。

皿は4種類に分かれる。1類は直線的に外へ開く口縁部をもつが、やや外反するもの(b)もある。底部付近は露胎となる。2類は安定した平底から外へ開き、屈曲して上方へ立ち上る。下半部は露胎で、内面にくし描き文がかかる。灰色がかった軸がかかっている。3類も2類

番号	出土品番	器種	類	番号	出土品番	器種	類	番号	出土品番	器種	類	番号	出土品番	器種	類	
2080	28I-2	碗	1 a		15E-2	碗	1 b		36K-2	碗	2		22H-2	碗	3	
2081	24J-2	*	*		23I-1	*	*		表 採	*	*		23B-1	*	*	
2082	11E-1	*	*		24F-1	*	*		9G-2a	*	*		24I-1	*	*	
2083	8G-2	*	*		26G-2	*	*	2089	9 G-1	*	3 a		27J-2	*	*	
	9D-2	*	*		27G-1	*	*	2090	30H-1	*	*		29D-2	*	*	
	11D-満	*	*		29H-2	*	*	2091	11D-1	*	*		29-	30G-2	*	*
	12E満	*	*		表 採	*	*	2092	7F-1	*	*		29H-1	*	*	
	12F-p6	*	*	2088	8D-G-1	*	2		7G-1	*	*		29J-2	*	*	
	23E-2	*	*		7H-1	*	*		7G-1	*	*		29K-1	*	*	
2084	25J-2	*	1 b		8E-2b	*	*		7J-1	*	*		30G-1	*	*	
2085	25H-2	*	*		9H-2	*	*		8D-2b	*	*		30H-1	*	*	
2086	10I-2	*	*		13G-1	*	*		8-10F-2	*	*		30H-1	*	*	
2087	14H-1	*	*		13HI-2	*	*		8G-1	*	*		34I-1	*	*	
	8F-2	*	*		16F-2	*	*		9D-2c	*	*	2093	9G-1	*	3 c	
	9D-2	*	*		18I-1	*	*		11N-1	*	*	2094	17D-2	*	*	
	9E-1	*	*		26J-2	*	*		12G-2	*	*	2095	7F-1	*	*	
	9J-1	*	*		26J-2	*	*		12E満	*	*	2096	9D-1	*	*	
	11D-満	*	*		35K-1	*	*		13HI-2	*	*	2097	26DE	*	*	

第43表 青磁出土地区表(1)

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
5H-1	碗	3 c		25D-1	碗	3 c		表 採	碗	3 c		28K-2	碗	4	
5H-1	♦	♦		25G-2	♦	♦		2098	24D-2	♦	4	29G-1	♦	♦	
8F2c	♦	♦		25I-1	♦	♦		2099	28I-2	♦	♦	30D-1	♦	♦	
8-10F2	♦	♦		25I-1	♦	♦		2100	8D-2a	♦	♦	30F-2	♦	♦	
8-10F2	♦	♦		26B-2	♦	♦		2101	23D-2	♦	♦	2105	17G-1	♦	5
9I-2	♦	♦		26B-2	♦	♦		2102	25G-2	♦	♦	2106	17F-2	♦	♦
10D-2	♦	♦		26H-2	♦	♦		2103	28I-2	♦	♦	2107	17D-2	♦	♦
12D-1	♦	♦		26H-2	♦	♦		2104	8F-1	♦	♦	2108	7D-2e	♦	♦
12F-1	♦	♦		26H-2	♦	♦			8DE-2	♦	♦	2109	17E-2	♦	♦
12F-1	♦	♦		26JK-2	♦	♦			8F-2c	♦	♦	2110	30I-1	♦	♦
13G-1	♦	♦		27D-1	♦	♦			9D-2b	♦	♦	2111	16G-2	♦	♦
13G-1	♦	♦		27F-1	♦	♦			9E-2c	♦	♦	2112	16G-2	♦	♦
13H-1	♦	♦		27F-1	♦	♦			9E-2e	♦	♦	2113	17F	♦	♦
13H-1	♦	♦		27F-1	♦	♦			11D-1	♦	♦	2114	9D-2b	♦	♦
14D-1	♦	♦		27H-2	♦	♦			15E-2	♦	♦	2115	21J-P12	♦	♦
14D-1	♦	♦		27H-2	♦	♦			15G-1	♦	♦	2116	10F-2e	♦	♦
14D-1	♦	♦		27I-1	♦	♦			16H-1	♦	♦	2117	22JK-2	♦	♦
14D-1	♦	♦		27I-1	♦	♦			17D-2	♦	♦		表 採	♦	♦
14F-1	♦	♦		28I-1	♦	♦			17E-1	♦	♦		7E-2	♦	♦
14F-1	♦	♦		27K-1	♦	♦			18D-2	♦	♦		7F-2	♦	♦
16F-2	♦	♦		30Kp2	♦	♦			21J-1	♦	♦		7H-1	♦	♦
16F-2	♦	♦		33H-2	♦	♦			22I-1	♦	♦		8D-3	♦	♦
18I-1	♦	♦		35J-2	♦	♦			23E-1	♦	♦		8DE-2	♦	♦
18I-1	♦	♦		36J-2	♦	♦			23J-1	♦	♦		♦	♦	♦
21J-1	♦	♦		表 採	♦	♦			24F-2	♦	♦		8DG-1	♦	♦
21K-2	♦	♦		南地区 表 採	♦	♦			24I-1	♦	♦		8E-1	♦	♦
21K-2	♦	♦		表 採	♦	♦			25H-2	♦	♦		8F-1	♦	♦
22D-2	♦	♦		♦	♦	♦			25K-1	♦	♦		♦	♦	♦
22H-1	♦	♦		♦	♦	♦			26D-1	♦	♦		♦	♦	♦
22K-2	♦	♦		♦	♦	♦			26K-2	♦	♦		8G-1	♦	♦
23E-2	♦	♦		♦	♦	♦			27H-1	♦	♦		♦	♦	♦
23E-2	♦	♦		南地区 表 採	♦	♦			27J-1	♦	♦		♦	♦	♦
24I-1	♦	♦		表 採	♦	♦			27	♦	♦		♦	♦	♦
									28G-2	♦	♦		♦	♦	♦

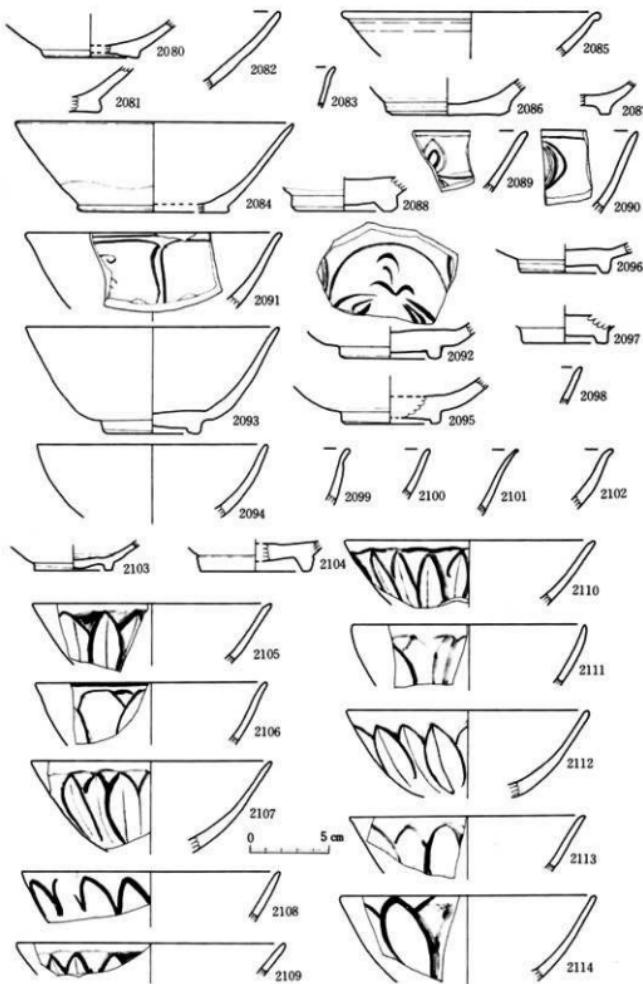
第44表 青磁出土地区表(2)

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
8 G-1	碗	5		12F-P6	碗	5		16E-2	碗	5	
タ	*	*		12F-1	タ	*		タ	*	*	
8 H-1	*	*		*	*	*		*	*	*	
9D-2b	*	*		*	*	*		16F-2	*	*	
タ	*	*		12F-P9	*	*		タ	*	*	
9E-2c	*	*		12G-2	*	*		タ	*	*	
9F-2c	*	*		*	*	*		タ	*	*	
9 G-1	*	*		12H-1	*	*		タ	*	*	
9 H-2	*	*		*	*	*		タ	*	*	
9H-P6	*	*		*	*	*		タ	*	*	
9 H-1	*	*		*	*	*		タ	*	*	
9 I-1	*	*		13E-1	*	*		タ	*	*	
9 J-1	*	*		13F-2	*	*		16G-1	*	*	
9 J-2	*	*		*	*	*		タ	*	*	
10D-2	*	*		*	*	*		*	*	*	
タ	*	*		14F-1	*	*		16G-2	*	*	
タ	*	*		*	*	*		16H-1	*	*	
タ	*	*		*	*	*		16I-1	*	*	
10E-1	*	*		*	*	*		16J-1	*	*	
タ	*	*		15D-1	*	*		17D-2	*	*	
10E-2c	*	*		*	*	*		*	*	*	
タ	*	*		15E-1	*	*		*	*	*	
10G-1	*	*		15E-2	*	*		17E-1	*	*	
10H-2	*	*		*	*	*		*	*	*	
10I-1	*	*		*	*	*		17E-2	*	*	
タ	*	*		*	*	*		*	*	*	
10I-2	*	*		*	*	*		*	*	*	
11D-1	*	*		*	*	*		*	*	*	
タ	*	*		15F-1	*	*		*	*	*	
11F-1	*	*		*	*	*		17F-1	*	*	
タ	*	*		15D-娃	*	*		*	*	*	
11F-2	*	*		16D-2	*	*		17F-2	*	*	
12F-P6	*	*		16E-1	*	*		17G-1	*	*	

第45表 青磁出土地区表(3)

番号	出土区層	器種	類	番品	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	
	22H-2	碗	5		26H-2	碗	5	31E-2	碗	5			表 採	碗	5	
	22HI-2	+	+		+	+	+	31F-2	+	+			+	+	+	
	+	+	+		26I-2	+	+		+	+			+	+	+	
22I-1	+	+	+		+	+	+	31G-1	+	+			+	+	+	
23E-2	+	+	+		+	+	+	31K-1	+	+			+	+	+	
23F-1	+	+	+		+	+	+	32K-1	+	+			+	+	+	
23G-1	+	+	+		26J-2	+	+	33H-1	+	+	2118	11E-P7	+	6		
23· 24G-2	+	+	+		26J-K2	+	+	33H-2	+	+	2119	10E-1	+	+		
23H-1	+	+	+		27D-2	+	+	33J-1	+	+		9I-1	+	+		
	+	+	+		27H-1	+	+	34K-1	+	+		12D-1	+	+		
22I-1	+	+	+		27I-1	+	+	34K-2	+	+	2120	16D-1	■	1a		
	+	+	+		27J-1	+	+		+	+	2121	27· 28G-2	+	+		
24D-1	+	+	+		27K-2	+	+	35J-1	+	+	2122	32J-1	+	1 b		
	+	+	+		28D-1	+	+	35K-1	+	+	2123	27K-1	+	2		
22C-1	+	+	+		28E-2	+	+	35K-2	+	+	2124	24G-2	+	+		
23B-1	+	+	+		28E-1	+	+	35L-2	+	+	2125	29· 30G-2	+	+		
23C-1	+	+	+		+	+	+	36J-1	+	+	2126	11F-1	+	+		
24F-2	+	+	+		28G-1	+	+	36J-2	+	+	2127	9F-1	+	+		
24H-2	+	+	+		28H-2	+	+	36K-1	+	+	2128	36J-2	+	+		
	+	+	+		28I-1	+	+		+	+	2129	31K-1	+	3		
	+	+	+		28I-2	+	+	36K-2	+	+	2130	11G-1	+	+		
	+	+	+		+	+	+		+	+	2131	31F-2	+	4		
24J-1	+	+	+		28J-2	+	+	36L-2	+	+	2132	25J-2	+	+		
24J-2	+	+	+		28K-1	+	+		+	+	2133	30H-1	+	+		
25D-1	+	+	+		29C-1	+	+	37L-1	+	+		9I-2	+	+		
25I-2	+	+	+		29D-2	+	+	37N-1	+	+						
25J-1	+	+	+		29H-1	+	+		表 採	+						
	+	+	+		29J-2	+	+		+	+						
17K-1	+	+	+		30D-1	+	+		+	+						
26D-1	+	+	+		30G-2c	+	+		+	+						
26G-2	+	+	+		30HI-1	+	+		+	+						
26H-1-2	+	+	+		30I-1	+	+		+	+						

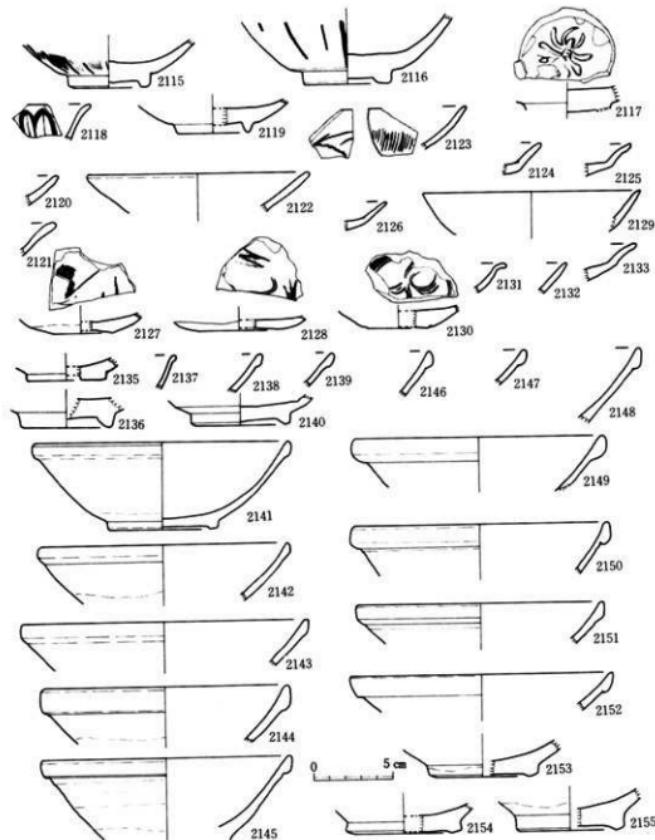
第46表 青磁出土地区表(4)



第268図 青磁(1)

に似た器形をしており、内底部にくし描き文が描かれる。やや明るい緑色釉がかかる。4類は外反する口縁をもち、底部付近は露胎である。内面かきとり皿である。

皿1～4類はそれぞれ碗1～4類に対応するもので、1類が越州窯系、2類が同安窯系、3類～6類が龍泉窯系のものである。



第269図 青磁(2)・白磁(1)

② 白磁

塊が7種類ある。1類は口縁部が玉縁状となるもので、胎土、玉縁の形態等によって3種に分けられる。2類は端反り口縁、3類は直立口縁で胴下半部は露胎である。4類は外反する口縁で低い高台をもつ。5類は内底部にクシ描きがあり、6類は口はげ口縁である。7類も外反する口縁で、下半部は釉がかからない。皿は4種類ある。1類は下半部が露胎である。2類は外底部の釉がかきとられる。5類は内底部に蓮花文が描かれ、6類は口はげ口縁である。

③ 青白磁

壺・合子蓋・壺蓋がある。蓋は天井部に蓮花文などが描かれている。

番号	出土場所	器種	類	番号	出土場所	器種	類	番号	出土場所	器種	類
2135	11F-2c	碗	1 a	9 E-1	碗	1 c		23F-2	碗	1 c	2160
2136	9 D-2	*	*	10F-2c	*	*	*	*	*	*	2161
2137	23E-1	*	*	10D-1	*	*		23H-1	*	*	2162
2138	8DE-2	*	1 b	10D-2	*	*		23J-1	*	*	16J-2
2139	9E-2 b	*	*	10D-1	*	*		24D-2	*	*	17J-1
2140	8H-3b	*	1b'	10D-2	*	*		24E-2	*	*	22H-1
2141	8D-2b 7E-2b SGN通跡 9 F-2	*	1 b	12F-1	*	*		24H-1	*	*	24J-2
				12G-2	*	*		25K-2	*	*	28D-2
2142	23E-2	*	*	13F-2	*	*		26H-2	*	*	2163
2143	24C-2	*	*	14D-1	*	*		26H-2	*	*	26HI-2
2144	28K-2	*	1 c	15E-2	*	*		26HI-2	*	*	10D-1
2145	20 -1	*	*	16E-2	*	*		26JK-2	*	*	2164
2146	21F-1	*	*	16F-2	*	*		28D-1	*	*	2165
2147	9E-2c	*	*	17D-1	*	*		28I-1	*	*	2166
2148	22F-2	*	*	17E-2	*	*		29F-1	*	*	2167
2149	23F-2	*	*	17H-1	*	*		表 採	*	*	2168
2150	30K-1	*	*	17K-1	*	*		*	*	*	8 F-1
2151	21I-1	*	*	19H-1	*	*	2156	28D-1	*	2	15D-2
2152	25-26G	*	*	19H-1	*	*	2157	10F-2c	*	*	7 D-1
2153	8E-2b	*	*	19J-1	*	*		16G-1	*	*	7 E-1
2154	22D-1	*	*	21C-1	*	*		表 採	*	*	8 G-1
2155	9G-2c	*	*	22D-2	*	*		*	*	*	8 G-1
8 F-1	*	*		22F-2	*	*	2158	21D-1	*	3 a	8 H-1
9 I-1	*	*		22G-1	*	*	2159	32H-2	*	3 c	9DG-1
9 H-2	*	*		22K-1	*	*		11J-1	*	*	9G-2c

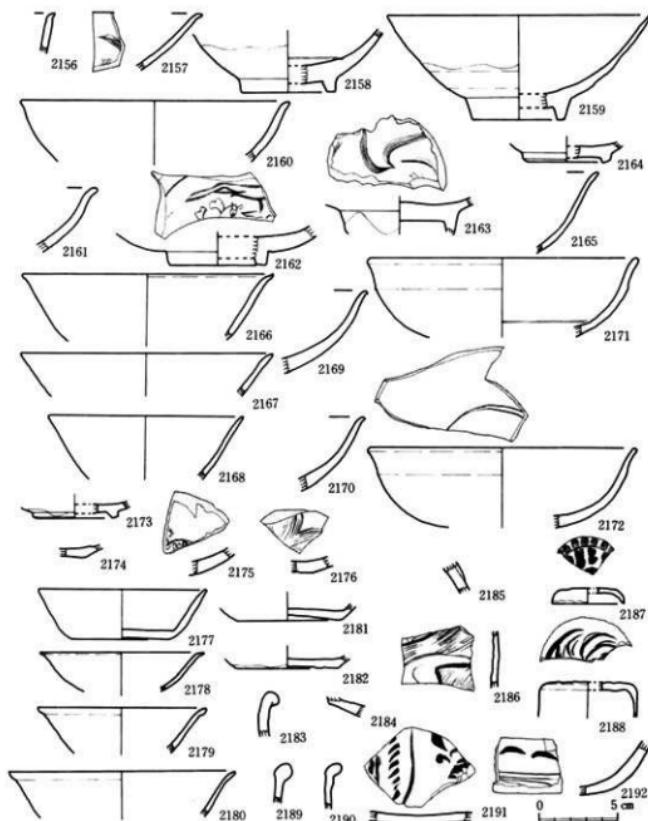
第47表 白磁出土地区表(1)

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
10G-2c	碗	6		17F-1	碗	6		33H-1	碗	6		8D-E-2	四耳壺		
10G-2c	*	*		17G-1	*	*		34J-2	*	*		9J-2	*		
11F-1	*	*		17H-1	*	*		35K-2	*	*		15E-2	*		
12D-1	*	*		18D-2	*	*		35L-2	*	*		16F-2	*		
12E-溝	*	*		18I-1	*	*		36J-1	*	*		17E-1	*		
12F-1	*	*		19H-1	*	*		36J-2	*	*		23F-2	*		
12G-2	*	*		*	*	*		36L-1	*	*		23J-1	*		
12H-1	*	*		20I-1	*	*		36L-2	*	*		24J-2	*		
13E-1	*	*		*	*	*		37L-2	*	*		25I-2	*		
13F-1	*	*		20J(南表採)	*	*	表採	*	*		26I-1	*			
13F-2	*	*		21J-1	*	*		*	*		31E-2	*			
13K-2	*	*		22J-2	*	*		*	*		36J-1	*			
14D-1	*	*		24G-2	*	*		*	*		2186	17I-1	青白磁壺		
14F-1	*	*		23I-1	*	*		2169	24I-P-1	*	7	10F-1	*		
15D-1	*	*		23J-1	*	*		2170	*	*		11F-1	*		
15E-1	*	*		24D-1	*	*		2171	*	*		16G-1	*		
15E-2	*	*		24J-1	*	*		2172	*	*		17D-2	*		
15E-2	*	*		26G-2	*	*		10F-2c	*			17I-1	*		
15E-2	*	*		25J-2	*	*		2173	22J-2	皿	1c	18D-1	*		
16D-1	*	*		26H-2	*	*		2174	22K-2	*	2	18I-1	*		
16D-2	*	*		26J-2	*	*		2175	KM69-表	*		2187	28K-2	合子壺	
16E-2	*	*		27C-2	*	*		28J-2	*	*		2188	15D-1	壺蓋	
16F-1	*	*		27-	*	*		35D-1	*	*		17D-2	*	青白磁鉢	
16F-2	*	*		27J-1	*	*		2176	12E-溝	*	5	2189	29G-2	大皿	
16F-2	*	*		*	*	*		2177	17E-1	*	6	2190	29I-1	*	
16G-1	*	*		28F-1	*	*		2178	17D-1	*		2191	26I-2	*	
16G-2	*	*		31G-1	*	*		2179	11F-1	*		2192	26K-P6	*	
*	*	*		28H-2	*	*		2180	38I-1	*		21G-1	*		
16I-1	*	*		28I-2	*	*		2181	35L-2	*		24E-2	*		
15G-1	*	*		29E-1	*	*		2182	19H-1	*		25G-1	*		
17D-2	*	*		29K-1	*	*		2183	28D-1	青磁		26H-2	*		
17E-1	*	*		*	*	*		2184	24J-1	*		8F-1	壺		
*	*	*		32I-1	*	*		2185	15J-2	*		33I-1	*		

第48表 白磁出土地区表(2)

(6) 楊釉陶器

口縁部が玉縁状を呈する盤で、灰緑色の釉がかかっているが、外面底部は露胎である。内底部には船軸で半月形、横線などの文様が描かれている。童子山窯のものである。



第270図 白磁(2)・青白磁・楊釉陶器

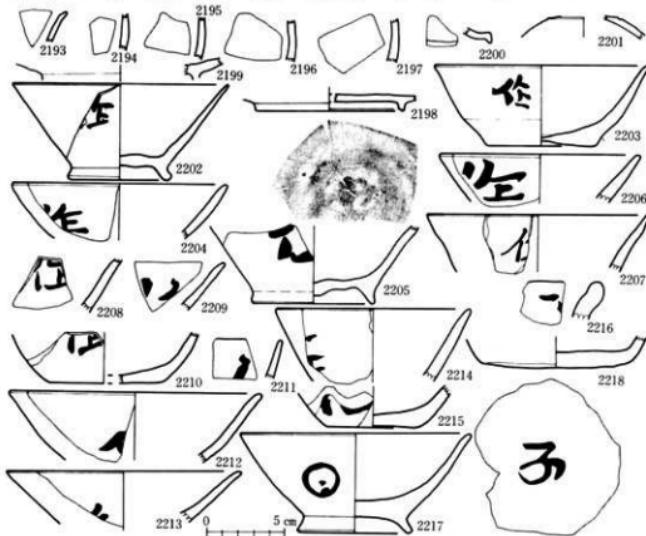
(7) 緑釉土器 (第271図)

施釉土器のうち緑釉土器8点、二彩土器1点が出土した。

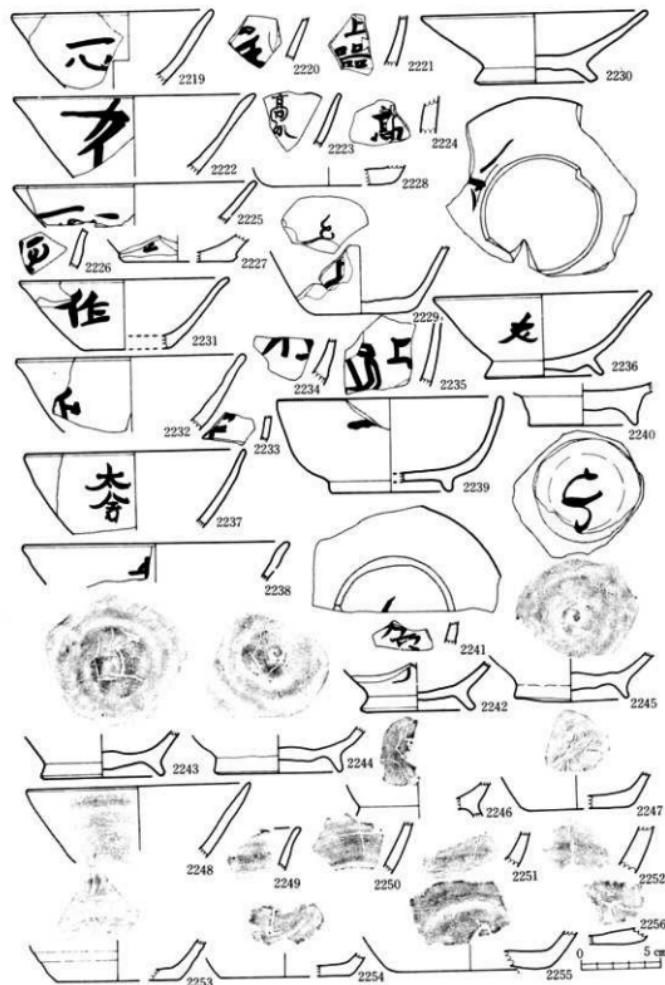
2193は口唇部が舌状にすぼまる境で、白色の胎土は土師質に焼ける。内外とも緑釉が薄くかかる。2194～2197は、壇破片である。胎土は2193と同様、内外に緑釉がかかる。色調はやや淡い緑色を呈する。2198、2199はそれぞれ復元底径9.3cm、10cmを測る皿である。いずれも胎土は白色で、土師質に焼ける。発色の良い緑釉が全体にかかり、微細貫入が入る。ことに2198の緑釉は良く胎土にもなじみ、光沢のある緑釉皿となっている。2200は器種が詳らかでない緑釉土器である。胎土、施釉、微細貫入、いずれも上記のものと同一である。2201は蓋かと考えられる二彩土器で、白釉部に鉄釉で文様を画く。胎土は白色でやや硬質に焼けている。

(8) 墨書き土器・刻書き土器 (第271図、272図)

墨書き土器100点刻書き土器15点が出土した。多くは「作」字が書かれたり、「日」「子」「高分」「太舎」などと読めるもののほか、判読不能なものも多い。2202～2242は墨書き土器で、そのうち2231～2242は内黒土器、2243～2256は刻書き土器である。墨書き土器のうち2202～2216、2231～2234は「作」およびそれと推定される文字が書かれている。「作」字の2画目の縦画を短く丸めること、7画目の横画が5画目の縦画に乗せる形で書くのが特徴である。2203は2202



第271図 緑釉土器・墨書き土器



第272図 墨書・刻書土器

と同様な筆致で壇の胴部に墨書きする。底部は厚さが不均等なため焼成時に収縮して変形し、一部に割れを起こす。2205には「作」の刻書も付される。2207は細字で他と筆致が異なる。2216は甕の口縁内面に墨書きする。2218は壺の外底に「子」、2217は「日」と推定され、2219は「一心」、2223は「高分」、2224は「高」と読み、2221は「作器」と思われる。内黒土師器の中で2231は「作」の周囲が黒色化する。2232は内面に丹が塗付され、2236はヘラ削りが施されている。2235・2239は外面ヘラ削りである。2237は明快に「太舎」と墨書きする。刻書土器は見込み面の「作」字が極めて多く、焼成前に刻書きされ、胎土の盛り上りおよび焼成時の収縮による線の接着が見られる。書風は墨書き土器とほぼ同様であるが、筆致は微妙に異なる。2248～2252は外面に「土」「十」「丨」、2253～2256は内面にハネまたは折しの文字あるいは記号を刻んでいる。

遺物番号	出土区層	種類	器形	備考	遺物番号	出土区層	種類	器形	備考	遺物番号	出土区層	種類	器形	備考
2202	27K-2	土師	壺	作	261-2	土師			作	151-2	土師			高
2203		*	*	*	26H-2	*			*	10G-3直上	*			
2204	28H-2	*	壺	*	26FG-1	*			*	28K-2	*			
2205	31J-P3	*	*	*	2217	7D-2d	*	壺	日	10I-2	*	壺		
2206	26K-2	*	*	*	2218	9D-2c	*	壺	子	26J-2	*	*		
2207	27H-2	*	*	*	2219	29-30G-1	*		一心	30J-2	*	*		
2208	27G-P2	*	壺	*	2220	29I-2	*			10E-1	*	*		
2209	31H-2	*	*	*	2221	29F-2	*		作器?	22J-1	*	壺		
2210	30G-2	*	*	*	2222	26F-P2	*	壺		31I-2	*	*		
2211	31I-2	*	*	*	2223	28H-P4	*	*	高分	8I-P4	*	*		
2212	29G-P1	*	壺	*	2224	32I-2	*	*	高	21C-1	*	*		
2213	8F-2e	*	壺	*	2225	27H-2	*	*		27H-P5	*	*		
2214	29I-2	*	*	(No.1)	2226	29H-P3	*	*	日?	28J-2	*			
2215	33J-1	*	*	*	2227	12E-直上	*	*		27J-2	*			
2216	33H-2	*	カメ	*	2228	21C-1	*	*		26J-2	*			
	29H-P6	*	壺	*	2229	16K-1	*	*		26J-2	*			
	27G-2	*	壺	*	2230	29I-2	*	壺	No.1	26J-2	*			
	29I-2	*	壺	*	27H-2	*	壺			29-30G-2	*			
	35J-2	*	*	*	27H-P10	*	*			25G-2	*			
	30H-2	*	*	*	27F-P3	*	*			25I-2	*			
	10H-1	*	*	*	26H-2	*	壺	日		25H-2	*			
	31I-1	*	*	*	9D-3直上	*		日?		28H-2	*			
	26I-2	*	*	*	26I-2	*		日?		29G-2	*			
	*	*	*	*	36K-2	*	カメ	日?		29G-2	*			

第49表 墨書き・刻書き土器出土地区表(1)

遺物番号	出土区層	種類	器形	備考	遺物番号	出土区層	種類	器形	備考	遺物番号	出土区層	種類	器形	備考
	12E	土師			27G-2	内黒	壺	作		2244	23D-2	土師	壺	作 刻書No.2
	D-2C	*	カメ		27H-2	*	*	*		2245	34K-2	*	*	刻書
2231	31I-1	内黒	環	作	25C-2	*	*	*		2246	31J-P3	*	环	*
2232	26I-2	*	壺	*	13H-P8	*	*	作?		2247	25H-2	*	*	*
2233	31J-P4	*	环	*	15F-P4	*	*	†		2248	23J-2	*	†	*
2234	31 G-2	*	壺	*	27D-2	*	*			2249	22F-1	*	*	*
2235	36 K-2	*	*	上?	25J-P6	*	*			2250	23F-2	*	*	*
2236	27 K-2	*	*		29G-2	*				2251	23H-1	*	*	*
2237	29 F-2	*	*	太舟	26J-2	*				2252	24E-2	*		*
2238	26 F-2	*	*	†?	26FG-2	*				2253	30F-2	*	环	*
2239	*	*			17F-2	*				2254	9D-2c	*	*	*
2240	29 I-2	*	*		建I-P4	*				2255	27I-2	*		*
2241	26 J-2	*	*		26I-2	*		作(丹)		2256	1E-3上	*		*
2242	26 K-2	*	*		2243	28J-2	土師	壺	作 刻書No.2		25E-1	*	カメ	*
	29 I-2	*	*	作										

第50表 黒書・刻書土器出土地区表(2)

(9) 陶硯 (第273図)

硯は須恵質の円面硯2面と、須恵器蓋を転用した硯3面、合計5面出土した。

2257は復元径9.8cmを測る須恵質の円面硯で、様をもった外縁から、台脚に至る部位にも稜が巡る。台脚部は欠損しているが、残存部に幅1.4cmの透し部分が認められる。矩形の透しであろう。海部の深さは3mmを測る。2258は復元径11.6cmを測る須恵質の円面硯で、中央部が高くなり陸部、外周に海部がある。台脚は欠損するが、残存部に離位のヘラ刻目があることから、透しのある台脚を持つものと思われる。2259～2261は須恵器蓋の転用硯である。陸部として使用した個所には磨耗部がみられ、また朱墨がわずかに付着しているのが認められる。

(10) 紡錘車 (第273図)

2262～2266が土師器及び土師質の紡錘車で径5.6～7.2cmを測る。中央に孔を穿つが、2263は孔の両側に円形の溝みがある。2262、2263は土師器環の転用、2264～2266は頭初より紡錘車として製作されたものである。

(11) 土錘 (第273図)

2267～2275が土錘で全長3.5～4.5cm、幅1.1～1.7cmを測る。中央部がふくらむものと細身とがあり、縦位に孔を穿つ。いずれも土師質である。

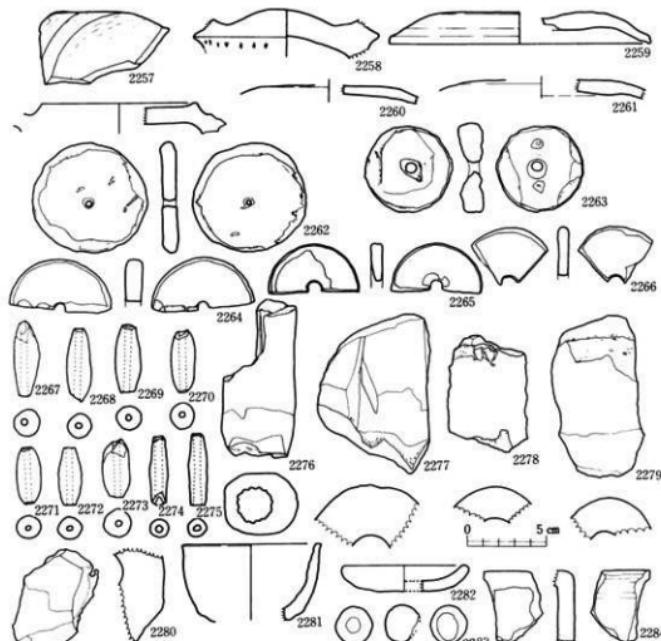
(12) ふいご口・増堀 (第273図)

2276～2280がふいご口で、土師質に焼けたものである。全長及び幅は不明であるが、中央部には孔があり、2276を除く他のふいご口の端部にはかなくそが付着し使用されたことがわかる。

2281, 2282は培塿場で、器面には自然吹出軸が厚くかかる。器種は壺と皿である。

(13) 土弾・その他 (第273図)

2283は径23cmを測る球形の土弾、2284は土師質に焼けるが、器種、用途は不明である。



第273図 土製品

遺物番号	出土区	備考	種類	備考	遺物番号	出土区	備考	種類	備考	遺物番号	出土区	備考	種類	備考
2262	32J-1		縦縫車		2268	17E-1		土鍋		2274	9G-1		土鍋	
2263	16H1-2	*			2269	30G-1	*			2275	10E-1	*		
2264	27J-2	*			2270	11G-1	*			2276	30G-2	△11.2 羽1.1		
2265	25H-P6	*			2271	9G-2	*			2277	8E-1	*		
2266	24I-2	*			2272	31F-2	*			2278	27E-1	*		
2267	7D-2c	土鍋			2273	10G-2	*			2279	23C-1	*		
														No.1

第51表 土製品出土地区表

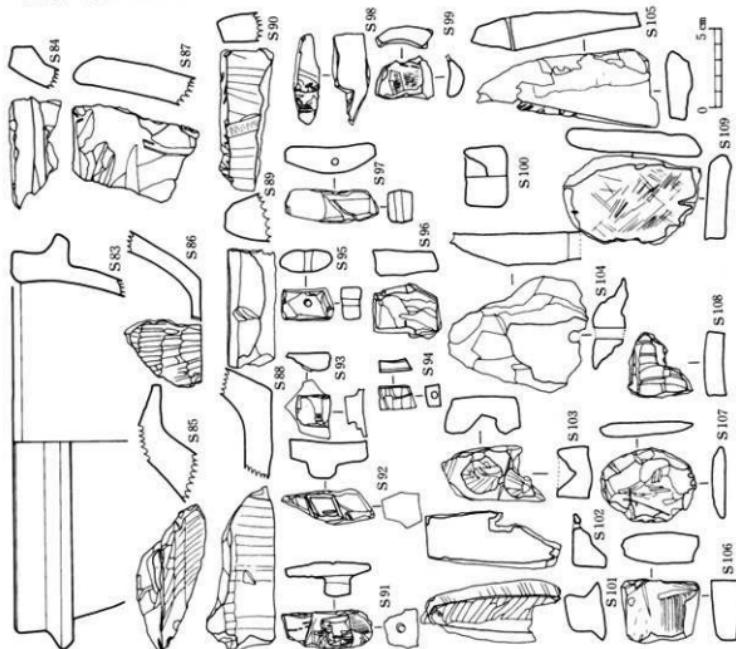
(1) 石製品 (第274図、275図)

石製品には滑石製石鍋、滑石製有孔鉢付製品、同製有孔方形板等のほか、砥石が出土した。S 83～S 90は滑石製石鍋である。このうちS 83は復元口徑23.9cmを測り、断面が台形状の鉢状突帯が巡る。器面には煤が付着する。ノミ痕は概位にある。

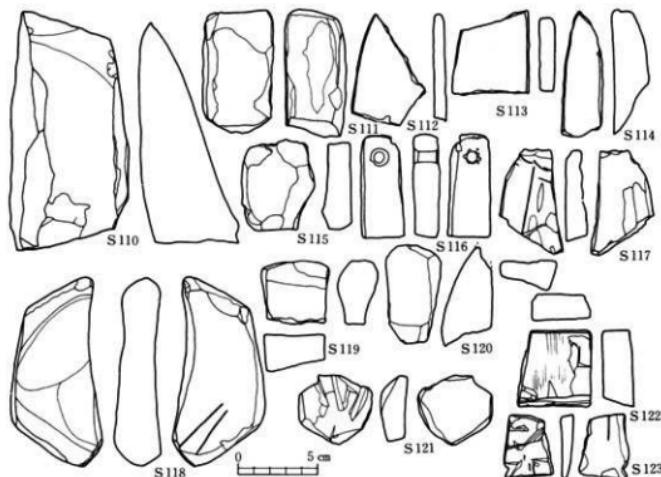
S 84は口縁部断面が三角形を呈するもので、煤が付着する。S 85～S 90は石鍋片である。

S 91は鉢に孔を穿つ有孔鉢付製品、S 92、S 93は鉢に孔の無いものである。S 94、S 95は長方形のものに孔を穿つ有孔方形板である。その他は円板状あるいは長方形に仕上げた製品である。ことにS 104には中央部に孔を穿つが、この孔より欠損する。

S 110～S 123は砥石である。このうちS 110～S 117までは砂岩、S 118～S 121が凝灰岩、S 122、S 123がシルト岩である。形状は棒状、板状等があるが、端部に孔を穿つもの (S 116)、放射状に数条の切込み溝を有するもの (S 121) もある。



第274図 石製品(1)一滑石製品



第275図 石製品(2)－砥石

遺物番号	出土区	種類	備考	遺物番号	出土区	種類	備考	遺物番号	出土区	種類	備考	遺物番号	出土区	種類	備考
S 83	16G-1	滑石	石鏡	S 93	23D-2	滑石	ツマミ	S 105	32I-2	滑石		S 115	8E-2C	砥石	
S 84	31G-1	*	*	S 95	35A-1	*		S 106	22J-2	*		S 116	7D-2b	*	
S 85	20K-1	*	*	S 97	9G-1	*		S 107	28B-2	*		S 117	22JK-2	*	
S 86	31I-1	*	*	S 98	8-10F-2	*		S 108	11F-1	*		S 118	25G-2	*	
S 87	37M-2	*	*	S 99	26I-2	*		S 109	5	*		S 119	11P	*	
S 88	27I-2	*	*	S 100	9E-2-B	*	容器	S 110	26E-2	砥石		S 120	8F-2c	*	
S 89	24G-2	*	*	S 101	9D-1	*	舟	S 111	24F-2	*		S 121	29D-2	*	
S 90	22E-2	*	*	S 102	27I-2- No.2	*	*	S 112	26H-2	*		S 122	28H-2	*	
S 91	21F-2	*	ツマミ	S 103	4D-2b	*	*	S 113	23D-2	*		S 123	28-29C	*	
S 92	9I-1	*	*	S 104	10F-2	*		S 114	10F-2C	*					

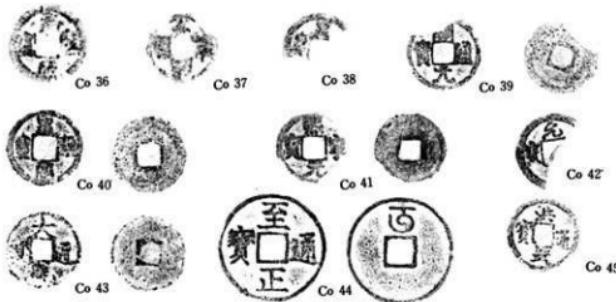
第52表 石製品出土地区一覽表

(15) 古銭 (第276図)

Co 36～Co 38は建物3に出土したものである。Co 36, Co 38は「皇宋通寶」で径2.6cmを測る。書体は篆書体である。Co 39は径2.4cmを測る隸書体の「開元通寶」。Co 40は径2.5cmを測る篆書体の「皇宋通寶」。Co 41は径2.3cmを測る楷書体の「熙寧元寶」である。

Co 42は半欠であるが、残存部から「元祐通寶」で書体は行書体である。Co 43は径2.3cmを測るもので楷書体の「大觀通寶」である。

Co 44は径3.4cmを測る「至正通寶」で背上に「貞」がある。Co 45は無背の「洪武通寶」である。他に古銭片が出土したが判読不可能であった。

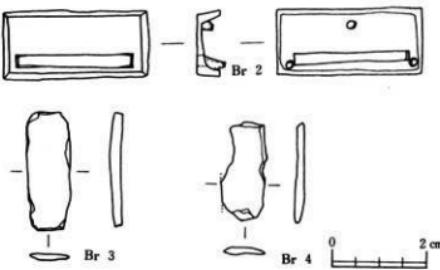


第276図 古銭

(16) 帯金具および青銅製品 (第277図)

Br 2は建物7の柱6にあった銅製帶金具である。横3cm, 縦1.4cmを測る横長の巡方で、下方に横2.4cm, 縦0.2cmの透し穴がある。やや裏側が広がっている。裏面の三方に鋲足を取り付けた表金具である。

頭著ではないが、表面の一部に黒漆膜が残っている。Br 3が25H区の包含層から、Br 4が27I区の包含層から出土した銅製品で、長さ2.5cm、幅0.8cmほどを測る。似た形をしており、裏面は平坦で、表面はややふくらんでいる。



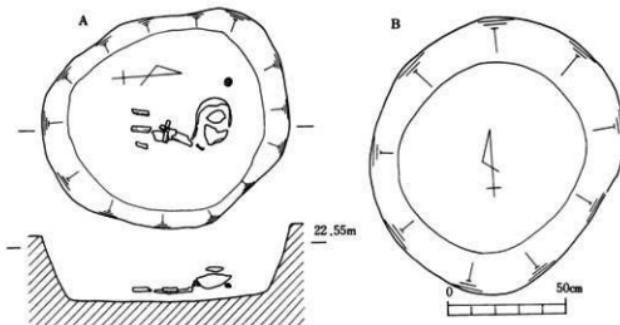
第277図 帯金具および青銅製品

第6章 室町・安土桃山時代

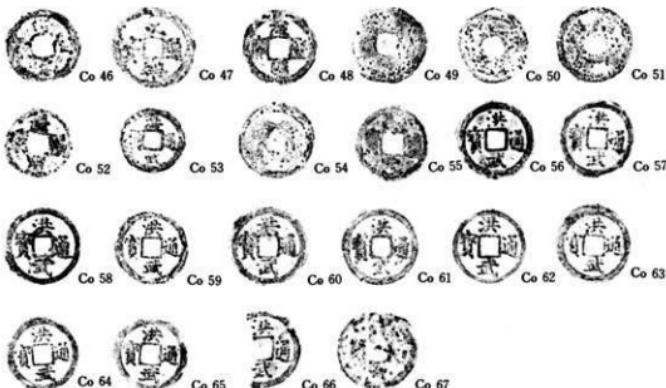
この時代の遺構は墓塚・火葬遺構が検出された。遺物は、遺構に伴う古銭・青磁、擾乱層出土の青磁・白磁・染付等がある。また、21D区からは「氏神」として祭られていた自然石の下の土中に中世の石塔が埋っていた。

1 中世墓塚

中世墓塚としたものは、副葬品に「洪武通宝」をもつものである。



第278図 中世墓A・B



第279図 古銭拓影 (2/3)

(1) 中世墓塚A (1号人骨)

25J区に検出されたもので、長軸 150cm 短軸90cm、深さ30cmを測る。平面形は円形に近い梢円形を呈し、長軸は南北にとる。人骨の残存は良くなかったが、頭位を北にとり、上肢骨と下肢骨が重なり合う状態で出土したことから座棺で埋葬されたものと思われる。古錢を10枚 (Co46~Co55) 副葬してあり、「元豐通宝」1枚、「紹聖元宝」1枚、「洪武通宝」2枚、「永樂通宝」1枚、「朝鮮通宝」1枚を判読できたが、残り4枚は腐蝕が進んでいた。

(2) 中世墓塚B (3号人骨)

26E区に検出された。長軸 117cm、短軸 100cm、深さ40cmを測る平面形が円形に近い梢円形を呈する。人骨の保存状態は悪く、残存量が少なかった為、実測は行わなかつた。副葬品は、「洪武通宝」が5枚検出された (Co56~Co60)。木片の付着した鉄釘が11本出土しており、木棺であったらしい。

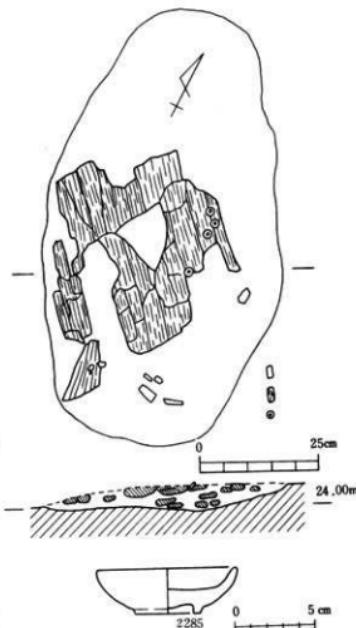
2 火葬遺構 (2号人骨)

25・26K区に検出された火葬場跡である。木材を十字に組んで焼いたらしく、木炭がならんだ状態で50cm四方に残っており、周囲に炭・灰が点在していた。人骨は、木炭の間に小片となって多数散乱していた。「洪武通宝」が7枚 (Co61~Co67) と青磁の碗が副葬されていた。

3 摂乱層出土の遺物

(1) 層塔

21D区に出土した石塔は、層塔の一部と思われるもので、「相輪」が2個、「笠」が6個、「軸部(塔身)」が5個、「基壇」が3個である。これらは1個所に積み上げられた状態で、樹根がからんでいたので、現位置にあったのが崩れたのか、移動されたものかは不明である。相輪は上部を欠いていた。笠はわずかに弓なりを呈しており、幅は、40cmが2個、他は44cm、46cm、54cmを測る。軸部(塔身)は四角柱を呈し、側面の四方に墨で「ア」(胎藏界大日如来)の種子(梵字)を書いてある。これらを復元すると3重か5重の層塔となり、造立年代は鎌倉時代後期~南北朝時代と推定される。



第280図 火葬遺構とその出土遺物

(2) 磁器

青磁碗は外面に蓮花文のあるもの（7類）、無文で内反するもの（8類）、無文で外反するもの（9類）、雷文帯をもつもの（10類）がある。青磁小碗も外面に蓮花文のあるもの（7類）、



第281図 青 磁

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
2286 14-15E 8D-E2	P6	碗	7a	2287 11 E-1 表 探	7a	2288 13 F-2 21 J -1	7a	2291 7b-1	25 G-1 26 D-1	碗	7b-1

第53表 青磁出土地区表(1)

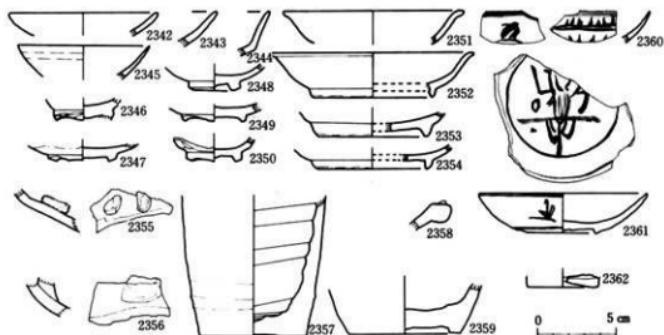
番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
2287	31E-2	碗	7b-2	181	-1	碗	7 c	2308	25K-1	碗	8 b	23J	-1	碗	8 b
2288	23C-2	*	*	21B-1	*	*	*	2309	35L-1	*	*	24H-1	*	*	*
2289	23C-1	*	*	21G-1	*	*	*	2310	21D-1	*	*	24J-2	*	*	*
2290	24H-1	*	*	21G-12	*	*	*		6 J-2	*	*	25E-1	*	*	*
2292	21I-1	*	*	21I-1	*	*	*		6 J-2	*	*	25G-1	*	*	*
2293	16K-1	*	*	21J-1	*	*	*		7 H-1	*	*	25H-1	*	*	*
	13E-1	*	*	21J-2	*	*	*		7 J-1	*	*	25H-2	*	*	*
	15G-1	*	*	21K-1	*	*	*		7 J-2	*	*	25J-1	*	*	*
	15H-1	*	*	21G-1	*	*	*		8 D-1	*	*	25J-1	*	*	*
	16HI-2	*	*	23H-2	*	*	*		8 F-1	*	*	26H-2	*	*	*
	21J-1	*	*	23F-1	*	*	*		8 J-1	*	*	26J-1	*	*	*
	23J-2	*	*	24D-1	*	*	*		9 G-1	*	*	26J-2	*	*	*
	24I-1	*	*	24H-1	*	*	*		9 J-2	*	*	27H-2	*	*	*
	27K-1	*	*	25I-2	*	*	*		10G-1	*	*	27I-1	*	*	*
	28K-1	*	*	25K-1	*	*	*		11F-1	*	*	27J-1	*	*	*
	29H-2	*	*	26G-1	*	*	*		11J-1	*	*	28K-2	*	*	*
	29H-2	*	*	27C-1	*	*	*		12E-1	*	*	29F-1	*	*	*
	35J-1	*	*	27F-2	*	*	*		12G-2	*	*	29K-1	*	*	*
2294	27E-2	*	7 c	28K-1	*	*	*		13D-1	*	*	29K-1	*	*	*
2295	17E-1	*	*	29C-1	*	*	*		14E-2	*	*	30D-2	*	*	*
2296	33H-2	*	*	29F-2	*	*	*		14F-1	*	*	30H-1	*	*	*
2297	29C-1	*	*	30H-1	*	*	*		14F-1	*	*	31F-2	*	*	*
2298	27C-1	*	*	30J-2	*	*	*		15G-1	*	*	34H-1	*	*	*
2299	27H-1	*	*	37L-1	*	*	*		15K-1	*	*	表 採	*	*	*
2300	37L-1	*	*	表 採	*	*	*		17E-1	*	*	表 採	*	*	*
2301	18E-1	*	*		*	*	*		17I-1	*	*		*	*	*
	7 G-2	*	*		*	*	*		17J-1	*	*	表 採	*	*	*
	9 J-2	*	*	2302	8 I-1	*	8 b		18E-1	*	*		*	*	*
	10D-2	*	*	2303	23H-2	*	*		18I-1	*	*		*	*	*
	12D-1	*	*	2304	9 I-1	*	*		18F-1	*	*	2311	35L-1	*	9 a
	12D-1	*	*	2305	10F-1	*	*		22F-2	*	*	2313	15H-1	*	*
	12E-1	*	*	2306	21H-1	*	*		23E-1	*	*	2314	8 J-1	*	*
	12I-2	*	*	2307	9 H-2	*	*		23J-1	*	*	2328	25G-2	*	*

第54表 青磁出土地区表(2)

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
	6J-1	碗	9b	10J-2	碗	9b		25I-2	碗	9b	2326 16E-2 小碗 7
	7J-1	々		10J-満	々	*		26B-1	々	*	2325 29D-2 々
	9J-2	々		12D-1	々	*		26G-1	々	*	2327 16F-2 々 9
	20H-1	々		12G-1	々	*		26FG-1	々	*	2329 15E-2 々
	24F-1	々		13E-1	々	*		26H-1	々	*	16F-2 々
	24J-1	々		14F-1	々	*		26HI-2	々	*	2330 31K-1 皿 7
	25D-1	々		15D-2	々	*		26K-2	々	*	2331 25J-2 々
	25E-1	々		16D-1	々	*		26E-2	々	*	2332 26B-1 々
	27I-2	々		16D-2	々	*		27H-1	々	*	2333 26B-1 々
	28I-1	々		16H-1	々	*		27H-2	々	*	2334 9G-2 々
	29E-1	々		17E-1	々	*		27I-2	々	*	9D-1 々
	30I-1	々		17E-2	々	*		27I-2	々	*	9G-1 々
	31G-2	々		17F-1	々	*		27D-1	々	*	11D-1 々
	33H-1	々		17J-1	々	*		28H-1	々	*	12D-1 々
	33J-1	々		17L-2	々	*		29H-1	々	*	12E-1 々
	35J-1	々		18H-1	々	*		29H-2	々	*	13F-2 々
	35K-1	々		19I-1	々	*		29J-2	々	*	14D-1 々
	35K-1	々		20H-2	々	*		29K-1	々	*	24G-1 々
	35K-1	々		20E-1	々	*		29K-1	々	*	24L-1 々
	37L-1	々		21G-1	々	*		31G-P3	々	*	28C-1 々
	表 採	々		21G-1	々	*		33C-1	々	*	29C-1 々
2312	16K-1	々	9a	22I-1	々	*		33D-1	々	*	29G-1 々
	2315	16DE	々	22F-2	々	*		33I-1	々	*	29J-1 々
	2316	15F-1	々	23I-1	々	*		33I-1	々	*	20I以南 表 採
	2317	29E-1	々	23J-1	々	*		表 採	々	*	表 採
	2318	26I-1	々	23E-2	々	*	2320	29D-2	々	10	2335 々 8
2319	10I-1	々		24H-2	々	*	2321	30K-1	々	*	2336 13E-1 々 9
	5J-2	々		24C-2	々	*	2322	以南表採	々	*	2337 9G-2c 盤
	8H-1	々		25D-1	々	*	2323	28E-2	々	*	2338 21I-1 々
	8G-1	々		25D-1	々	*		26P-2	々	*	2339 25J-2 々
	9G-1	々		25E-1	々	*		32I-1	々	*	2340 20I上-2 々
	10D-満	々		25G-2	々	*		表 採	々	*	2341 香炉
	10I-1	々		25H-1	々	*	2324	16D-2	小碗	7	

第55表 青磁出土地区表(3)

と無文で内唇するもの（9類）がある。青磁皿も棲花皿などがある。他に青磁は盤・香炉がある。白磁は高台に挟りのある壺・皿（9類）と外反する口縁をもつ皿がある。褐釉陶器の壺・盤がある。染付は葵瓣底の皿で、天目小碗もある。



第282図 白磁・染付・陶器・天目

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
2342	表 探 KM-63	小碗	9	30F-1	15E-1	小碗	9	9H-1	染付			34K-2	陶器		
2343	31K-1	*	*	2351	12J-1	*	*	10J-1	*			2355	22G-2	*	
2344	24H-2	*	*	2352	8H-1	*	*	32J-2	*			2356	15K-1	*	
2345	表 探 KM-58	*	*	2353	22G-1	*	*	23E-1	陶器			2357	22G-2	*	
2346	26K-2	*	*	2354	6J-1	*	*	24G-1	*			2358	15F-1	*	
2347	24H-2	*	*	7D-1	*	*		25J-1	*			9G-2a	*		
2348	12J-1	*	*	9H-2	*	*		28H-2	*			12D-1	*		
2349	16J-2	*	*	16G-2	*	*		35K-1	*			12G-1	*		
2350	22I-1	*	*	16K-1	*	*		2359	22F-1	*		13E-1'	*		
	14F-1	*	*	26D-1	*	*		7G-1	*			17D-1	*		
	22C-1	*	*	27K-1	*	*		7G-2	*			18I-1	*		
	23G-1	*	*	28F-1	*	*		7G-3	*			29J-1	*		
	24G-1	*	*	KM-64	*	*		32I-1	*			表 探	*		
	25E-1	*	*									*	*		
	26K-1	*	*	2360	23I-1	染付		34I-1	*			2362	27F-1	天目	
	28C-1	*	*	2361	26A-1	*		34I-2	*			10F-2c	壺		
	29K-1	*	*		8J-1	*		33H-2	*			23G-1	*		

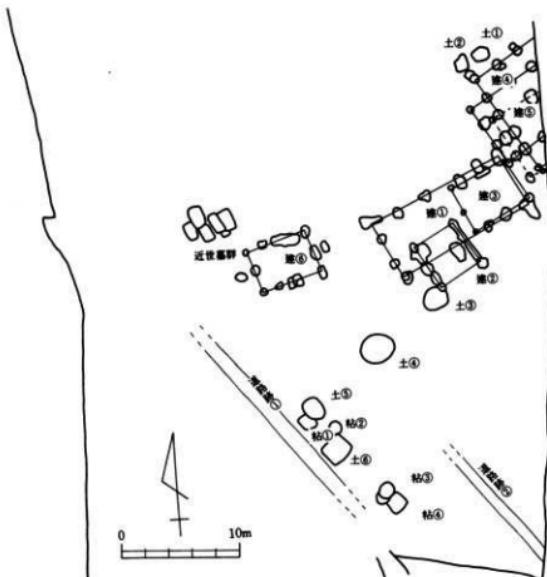
第56表 白磁・染付・陶器・天目出土地区表

第7章 江戸時代

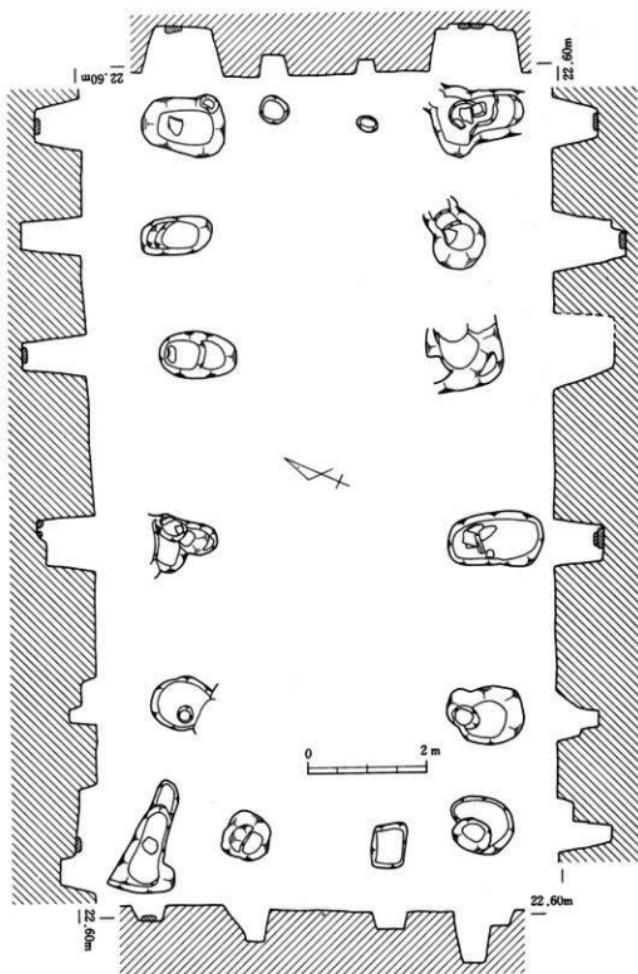
遺構は、掘立柱建物、かまど、粘土貼り遺構、土塙、墓塚が検出されたが、建物は礎石を用いたものもあったと思われる。遺物は、これらの遺構周辺のIc層に多数散布していた。

1 掘立柱建物

掘立柱建物は、20~22G~K区付近に6棟検出された。20~22G~K区の建物は重複して柱穴が切り合っているが新旧関係は確認できなかった。17~23F~K区付近には多数の柱穴が検出され、この他にも掘立柱建物があったことが予想される。



第283図 江戸時代の遺構配置図



第284図 標立柱建物①

(1) 堀立柱建物①

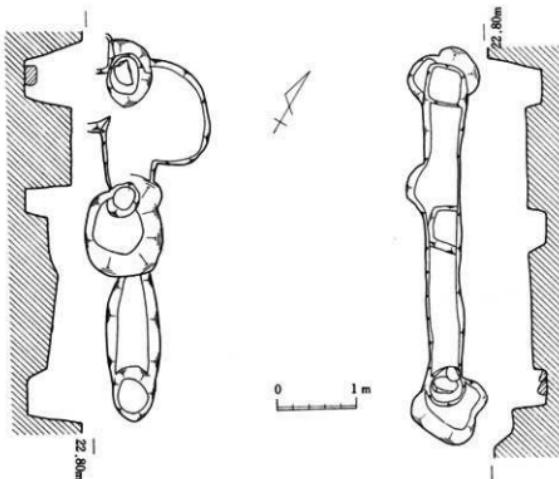
20・21H～K区に検出された、主軸をN 28° Wにもつ堀立柱建物である。柱間は南北方向に3間、東西方向に5間で、柱間隔は西側が1.5m + 2.2m + 1.8mの5.5m、東側が1.7m + 1.6m + 1.7mの5m、東西方向は2m + 3.2m + 2.8m + 2m + 2mの12mである。柱穴の直径は東西方向のものは1m前後であるが、南北方向のものは30cm前後を測る。深さは浅いもので15cm、深いもので110cmある。7本の柱穴には根石がある。柱穴には近世の陶磁器等が出土し、建物内の西端にはかまどが検出された。

(2) 堀立柱建物②

堀立柱建物①と南西部で一部重複する。主軸をN 31° Wにもち、柱間は南北方向に2間、東西方向に1間で、柱間隔は南北方向が2m + 2mの4m、東西方向が4mを測る。柱穴の直径は50cm前後で、深さは70cmほどである。南北方向の柱穴間に幅50cm～70cm、深さ30cm～50cmの溝を掘り込んである。

(3) 堀立柱建物③

堀立柱建物①と重複しており、主軸は堀立柱建物①と同じN 28° Wである。柱間は南北方向に2間、東西方向に3間で、柱間隔は南北方向が2m + 2mの4m、東西方向が1.4m + 2m +

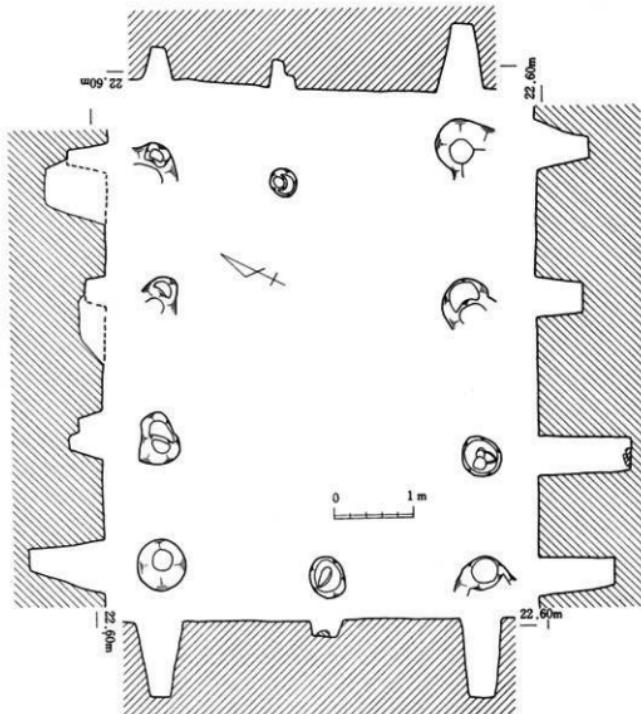


第285図 堀立柱建物②

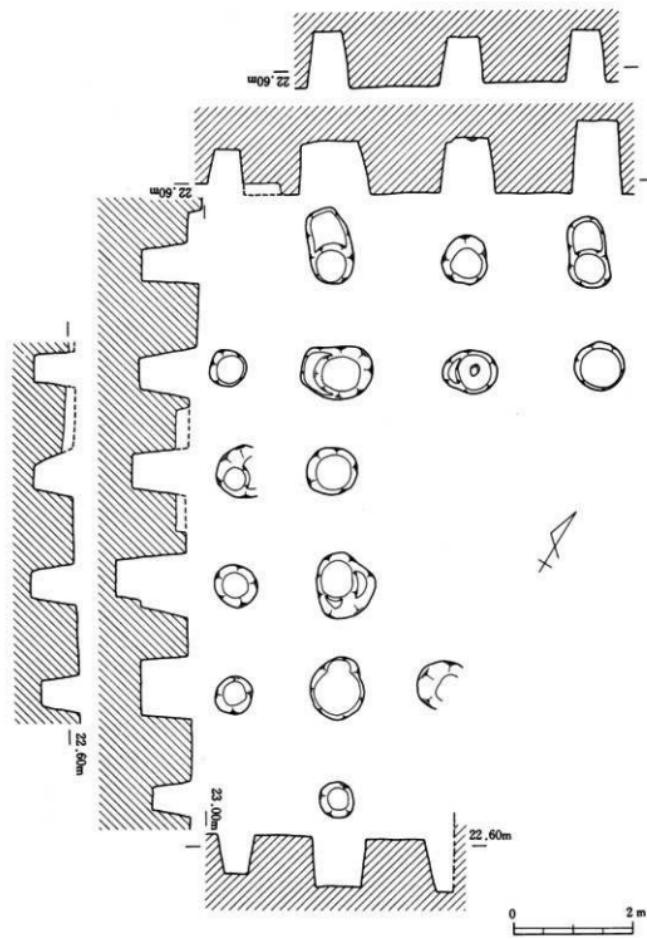
1.8m の 5.2m を測る。柱穴の直径は35cm~70cm、深さ40cm~120cmである。柱穴のほとんどは掘立柱建物①と切り合うが新旧関係は確認できなかった。

(4) 掘立柱建物④

21~23 J・K 区に検出された主軸をN 31° Wにもつ掘立柱建物である。柱間は南北方向に3間で、東西方向は用地外に延びるため不明である。北側、南側、西側にはひさしが出ている。柱間隔は西側が 1.8m 平均の 5.4m で、1.6m のひさしが出ている。北側の柱間隔は 2 m 平均で 1.8m のひさしが出る。柱穴の平面形はほぼ円形を呈し、直径は60cm~90cm、深さは60cm~120cmを測る。柱穴のなかから陶磁器などが出土した。



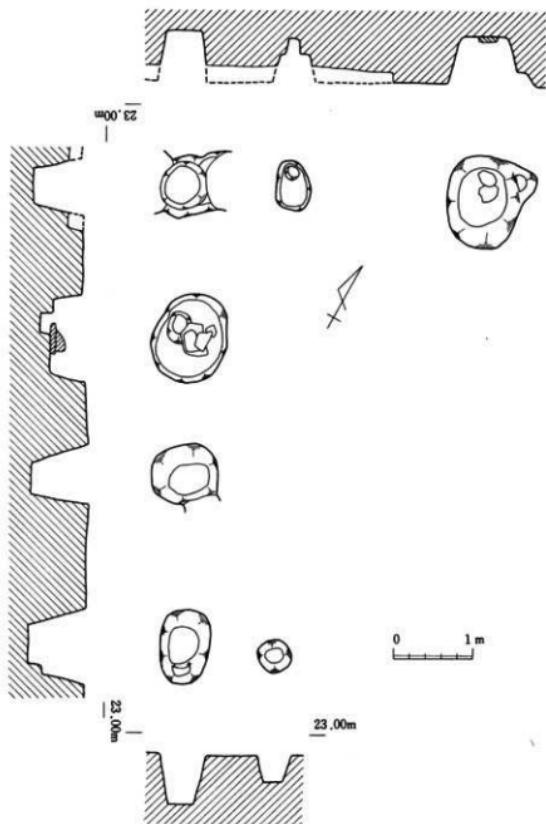
第286図 掘立柱建物③



第287図 捕立柱建物④

(5) 挖立柱建物⑤

掘立柱建物④に重複して検出された、南北方向に3間で、東西方向は東側が用地外にのる。主軸はN 28° Wを測る。柱間隔は西側が1.8m + 1.8m + 2.2mの5.8mで、北側は1.3m + 2.4m + ?を測るがしっかりしない。柱穴の直径は40cm~100cm、深さは40cm~80cmを測る。

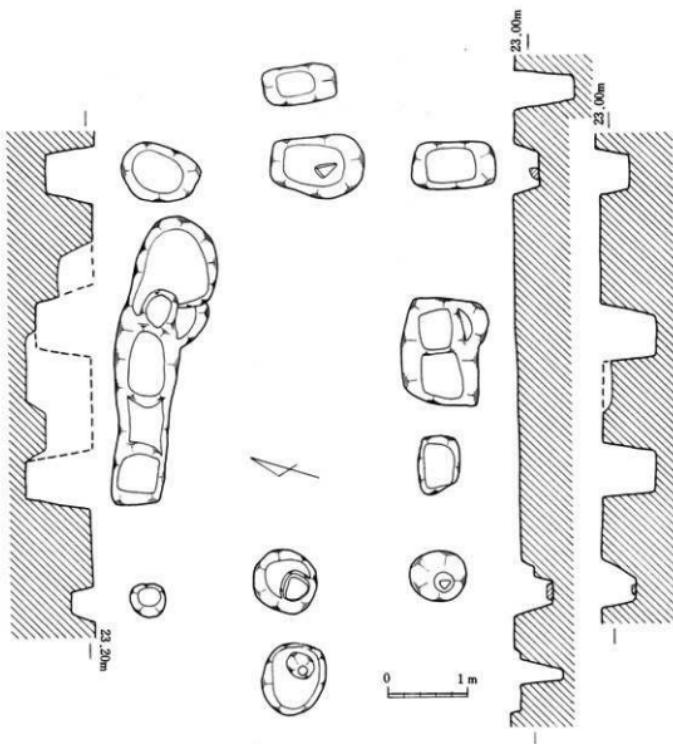


第288図 挖立柱建物⑤

柱穴の2本には根石が複数個ある。柱穴の中には遺物は含まれていなかった。

(6) 振立柱建物⑥

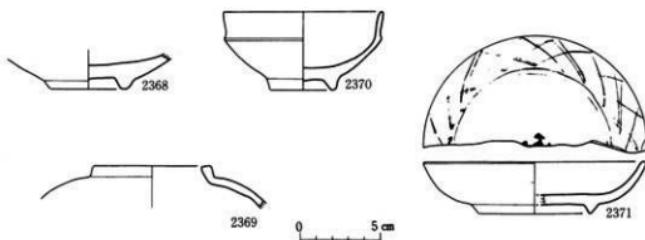
19・20F・G区に検出された主軸をN18°Wにもつ振立柱建物である。柱間は南北方向に2間、東西方向に3間あり、柱間隔は南北方向に1.9m + 1.9mの3.8m、東西方向に1.6m + 1.6m + 2.1mの5.3mを測る。梁間には棟持ちと考えられる柱穴が東西にそれぞれ1本ある。柱穴の平面形は円形あるいは方形を呈し、直径は40cm~70cm、深さは40cm~80cmを測る。柱穴内には遺物は検出されなかった。



第289図 振立柱建物⑥

2 掘立柱建物の出土遺物

掘立柱建物跡の柱穴中より出土したもので、2368は磁器染付皿、2369は陶器壺であり、掘立柱建物①、2370は白濁釉のかかる碗、2371は磁器染付皿で、掘立柱建物跡④に出土した。2371は見込みに斜格子、團線、五弁花文、裏面に團線及び松葉文を画く。



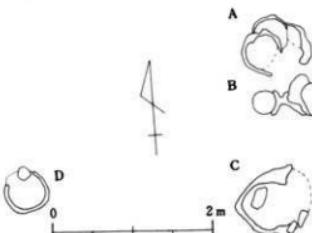
第290図 掘立柱建物①・④の出土遺物

3 かまど

20H・I 区に炉壁に粘土を用いたかまど 4 基、18F・G 区に石組みのかまど 1 基が検出された。かまど A～C は掘立柱建物①内に位置するが、かまど D・E は、これをとり囲む建物を検出することができなかった。

かまど A～C は 221 区に検出され、掘立柱建物①の西端に位置しており、南北方向にならんでいる。

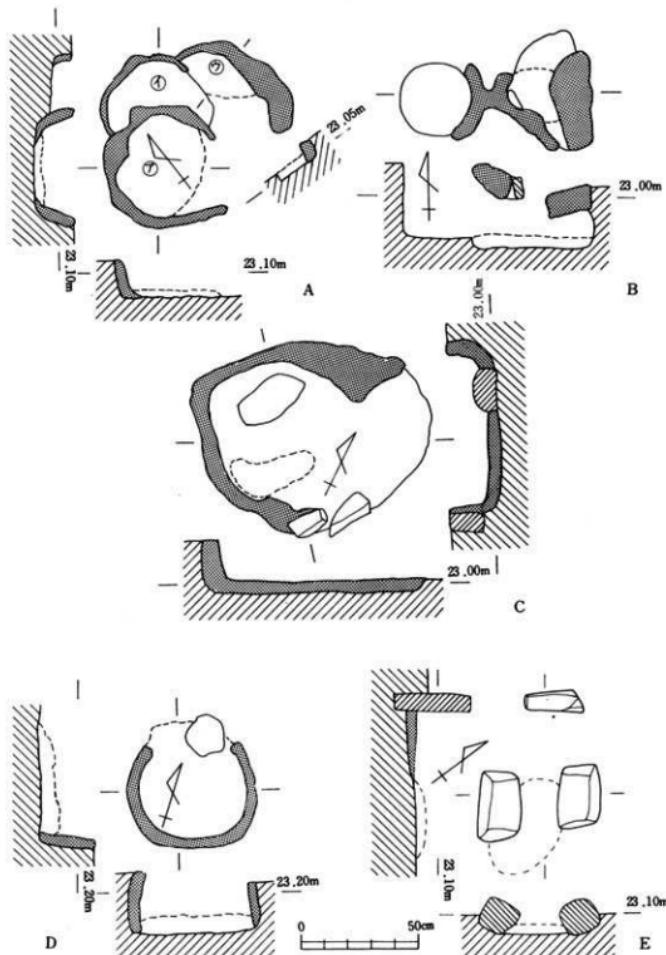
かまど A は、炉壁に切り合がみられ、3 回にわたって移動して使用したことが考えられる (⑦⑧⑨)。⑦のたき口は南東側にあり、炉壁の粘土は火を受けて赤変している。かまど B は、かまど A の南 50cm の位置にある。たき口は東側で、かまとトンネルで通じている。



第291図 かまど A～D配置図

かまど D は柱穴状の円形を呈する。かまど C は、たき口を東側にもち、長さ 100cm、幅 80cm を測る。かまど内には 20cm 大の礫があり、床面には焼土・炭・灰が堆積している。かまど D はかまど A～C の西 3m のところにある。平面形は円形を呈し、直径は 50cm を測る。たき口は北西側にあり、炉壁は袋状を呈している。床面には炭が 10cm ほど堆積していた。

かまど E は、18F・G 区に検出された石組みのかまどである。たき口は南西側で、側面と後方には角礫を置いてある。床面には焼け土と炭が堆積していた。



第292図 かまど A～E 実測図

4 粘土貼り遺構

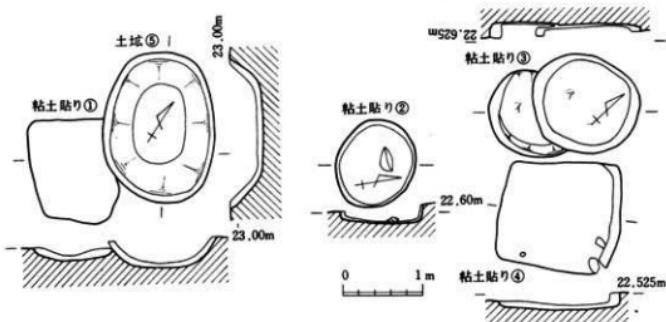
17G区・16H・I区には平面形が円形あるいは方形を呈する用途不明の粘土貼り遺構が検出された。粘土貼り遺構①・②は、隣接して土塙⑤・⑥があることから、これらと関連があるかもしれない。ただ、これらを囲む柱穴はまとまらず、建物外につくられたものと思われる。

粘土貼り①は、17G区に検出されたもので、100cm×130cmの方形を呈し、中央部はややくぼんでいる。粘土の厚さは5cm～10cmを測る。土塙⑤と隣接している。粘土貼り②は、壁と床面に粘土を貼っている。平面形は楕円形を呈し、長径110cm、短径96cm、深さ20cmを測る。南側に土塙⑥が隣接する。粘土貼り③は、2基が重複するものである(⑦⑧)。⑦が①を切るのか、同時期のものは不明である。いずれも、壁面、床面は粘土を貼っており、⑦の平面形は円形に近い楕円形を呈し、長軸140cm、短軸120cm、深さ10cmを測る。粘土の厚さは、壁面で10cm、床面で5cmを測る。

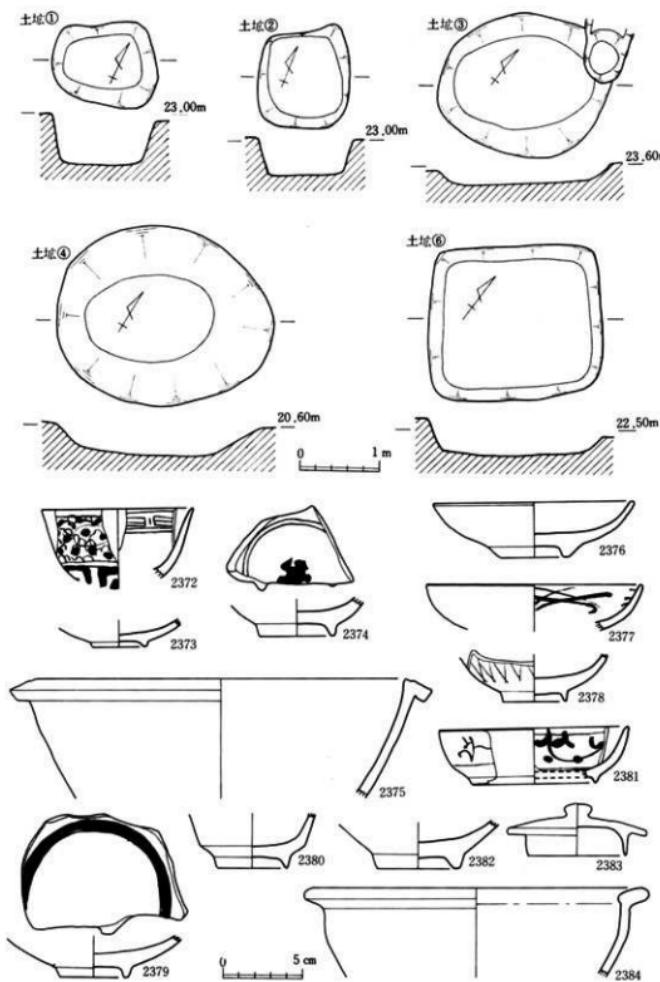
5 土塙

近世の土塙は、17～23F～K区付近に多く検出されたが、ここでは6基について述べる。

土塙①・②は、23J区で掘立柱建物④の北側に検出された東西方向にならぶ土塙群の2つである。①は、平面形が隅丸方形を呈し、長軸130cm、短軸100cm、深さ60cmを測る。②は、平面形が1辺120cmのほぼ正方形を呈し、深さ50cmを測る。①・②とも遺物を含んでいた。土塙③は、19I区に検出されたもので、掘立柱建物③の南西隅に位置する。平面形は楕円形で、長軸2.1m、短軸1.8m、深さ20cmを測る。遺物は出土しなかった。土塙④は、18H区に検出され、長軸2.8m、短軸2.3mの楕円形を呈する土塙である。土塙⑤は、粘土貼り遺構①に隣接するもので、約8cmの厚さで砂礫をめぐらしてある。平面形は楕円形を呈し、長軸1.9m、短軸1.4m、深さ40cmを測る。土塙⑥からは多くの近世磁器が出土した。



第293図 粘土貼り遺構と土塙⑤



第294図 土塙①～④・⑥と土塙出土遺物

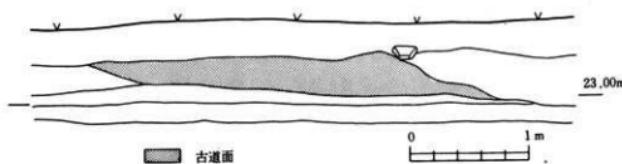
6 土塙の出土遺物

土塙の埋土中に出土したもので、2372～2375は土塙①内出土で2372は唐草文、見込み口縁に雷文を画く磁器染付碗、2373は貢入の入る磁器碗、2374は青磁染付碗で見込み底に圓線及び五弁花文を画く。2376～2378は土塙②で2376が白磁器染付皿、2378が同碗である。

2379～2384は土塙⑥に出土したものである。2379は磁器皿、2380は磁器碗で胴部が直線的に外反する器形を呈する。2381は唐草文をあしらう磁器染付皿、2382は褐釉を施す陶器碗、2383は茶家蓋、2384は措鉢であり、2383～2384は薩摩焼である。

7 道路跡

道路跡は、北西—南東方向のものが2本検出された。道路跡①は、19D区から16H区にかけて検出されたが、南東側は現在使用されている掘り切りの登道に続いている。道路幅は約1.7mを測る。道路跡②は、17I区から15K区にかけて検出された。道路幅は1m前後で、南東側へ延び、北東側は耕作による削平で確認できなかった。



第295図 道路跡断面図

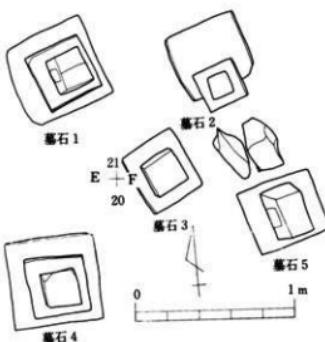
8 近世墓

(1) 墓石

墓石は5基あり、すべて西向きに建てられている。墓石との重なりは一致せず、



第296図 近世墓群配置図



第297図 近世墓群墓石平面図

5基とも1号墓と3号墓の地表面に集中していた。台座は平均が55cm四方のものと、40cm四方のものとがある。墓標の平均は、長さ40cm、幅20cm、厚さ20cmで、四角柱を呈する。墓標にある刻字および墨書きは次のとおりである。

墓石1 正面「心 雪窓桜定尼 寛延4年未2月9日」 側面「春蘭之右衛門 母」

墓石2 正面「甲世 幼性妙童□ 寛政6年天寅2月11日」 側面「原之口之娘」

墓石3 正面「悟山桜定門 天明6年8月13日」 側面「父 七右衛門 原口名□」

墓石4 正面「悟心桜定門 安永6年天丁酉正月13日」 側面「父 原之門仁兵衛」

墓石5 正面「良久桜定門 享保14西未4月19日」

これらの墓石で、最も古い墓標は墓石5の享保14年（1729年）で、最も新しい墓標は墓石2の寛政6年（1794年）である。

(2) 墓域

近世の墓域は、20・21E・F区に隣接して6基検出された。長軸はN 18° ~ 38° Wである。

1号墓（4号人骨）

長軸 170cm、短軸 108cm、深さ 105cmを測る。平面形は方形を呈し、長軸はN 28° Wをとる。人骨は、頭蓋・上肢骨・下肢骨が残存しており、頭位は北にとる。副葬品は「寛永通宝」が7枚で、木製の数珠が3個付着していた。「寛永通宝」の3枚には「文」の背文がある。

2号墓（5号人骨）

長軸 182cm、短軸 92

cm、深さ 103cmを測り、

平面形は方形を呈する。

長軸をN 28° Wにとる。

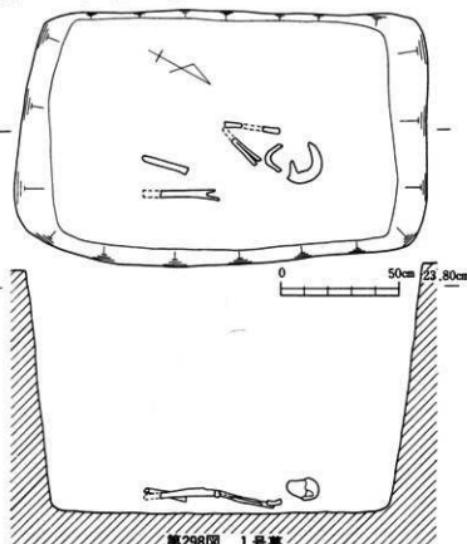
1号墓と接し、3号墓と切り合っている。新旧関係は、1号墓とは

不明、3号墓よりは古い。副葬品は「寛永通

宝」が7枚で、1枚は腐蝕が進んでいる。

3号墓（6号人骨）

2号墓の南側に切り合っている。人骨の保存状態は悪く、頭蓋の一部と歯が残存し、「寛永通宝」が7枚副葬されていた。人骨・古



第298図 1号墓

銭の残存状況から2号墓より新しい墓塚である。

4号墓（7号人骨）

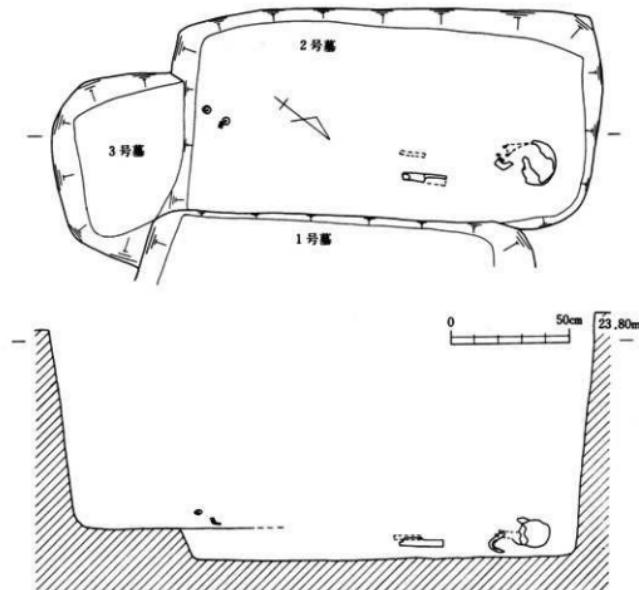
5号墓と南壁を切り合っているが新旧関係は不明である。長軸193cm、短軸134cm、深さ128cmを測り、平面形は隅丸方形を呈し、長軸をN 29° Wにとる。人骨は、頭蓋・下肢骨が残存していた。副葬品の「寛永通寶」は6枚検出された。

5号墓（8号人骨）

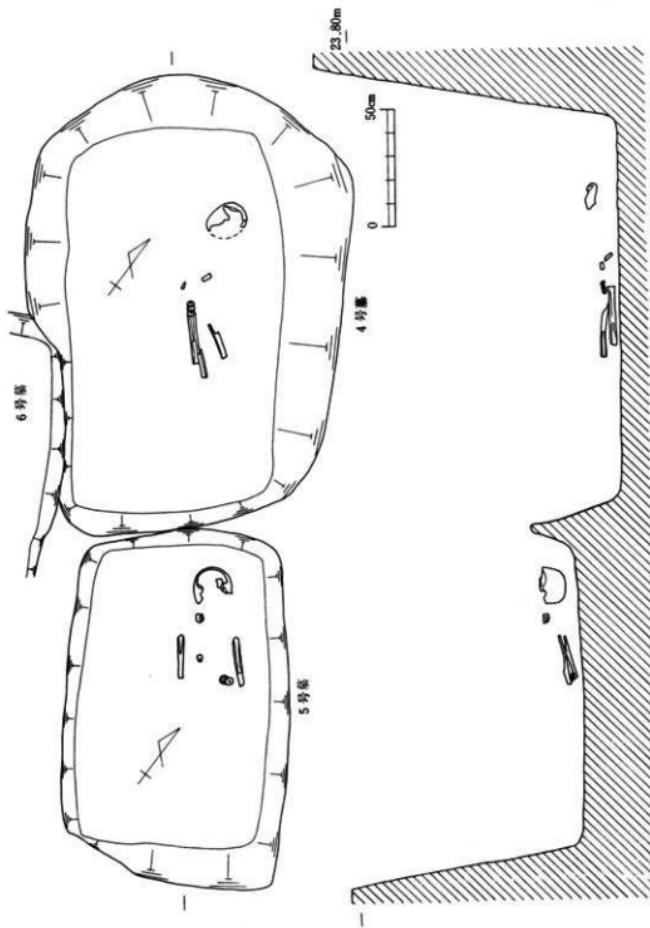
長軸150cm、短軸93cm、深さ100cmを測る。平面形は方形を呈し、長軸をN 28° Wにとる。副葬されていた6枚の「寛永通寶」の周囲には布きれが付着して錆ており、古銭2枚は腐蝕が進んでいた。

6号墓（9号人骨）

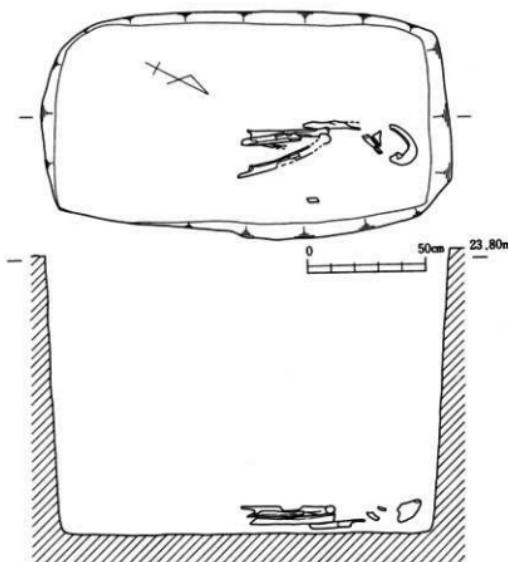
北西壁は4号墓と切り合っているが、新旧関係は不明である。長軸173cm、短軸95cm、深さ120cmを測る。平面形は方形で、長軸をN 18° Wにとる。副葬されていた古銭は「寛永通寶」が6枚、「景德元寶」が1枚であった。



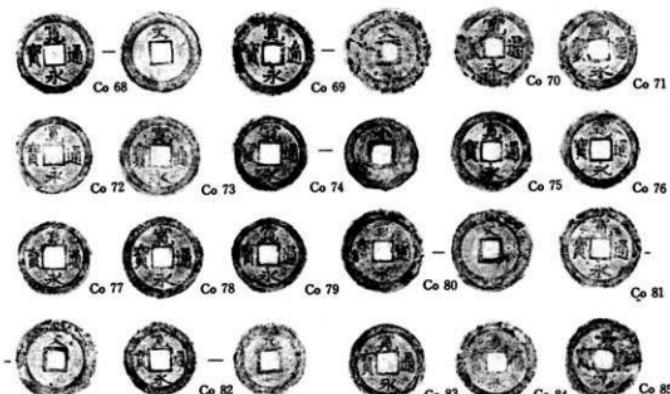
第299図 2・3号墓



第300図 4・5号墓



第301図 6号墓



第302図 墓出土古銭拓影 (2/3)

番号	図番	墓塚	外径(cm)	厚さ(cm)	備考	番号	図番	墓塚	外径(cm)	厚さ(cm)	備考
1		1	2.61	0.16	背上に「文」	21		3			腐蝕が進む
2		1	2.54	0.15	背上に「文」	22	Co74	4	2.31	0.14	背上に「小」
3		1	2.55	0.15	背上に「文」	23	Co75	4	2.55	0.14	
4		1	2.33	0.13		24	Co76	4	2.35	0.12	
5		1	2.43	0.13		25	Co77	4	2.30	0.12	
6		1	2.42	0.17		26	Co78	4	2.60	0.12	
7		1	2.54	0.12		27	Co79	4	2.37	0.14	
8	Co68	2	2.52	0.14	背上に「文」	28		5	2.52	0.15	背上に「文」
9	Co69	2	2.55	0.17	背上に「文」	29		5	2.47	0.11	
10	Co70	2	2.51	0.14		30		5	2.48	0.16	
11	Co71	2	2.52	0.15		31		5	2.42	0.19	布きれが付着
12	Co72	2	2.45	0.14		32		5			腐蝕が進む
13	Co73	2	2.47	0.12		33		5			腐蝕が進む
14		2			腐蝕が進む	34	Co80	6	2.55	0.15	背上に「文」
15		3	2.52	0.15	背上に「文」	35	Co81	6	2.53	0.13	背上に「文」
16		3	2.57	0.14		36	Co82	6	2.29	0.13	背上に「元」
17		3	2.46	0.14		37	Co83	6	2.41	0.11	
18		3	2.42	0.12		38	Co84	6	2.52	0.15	
19		3	2.36	0.14		39	Co85	6	2.43	0.14	「景德元宝」
20		3	2.32	0.14		40		6	2.48	0.15	

第57表 墓塚出土古銭一覽表

(3) 副葬品

古銭は、6号墓で出土した「景德元宝」1枚の他はすべて「寛永通宝」であった。1基の墓塚に6枚か7枚、胸の部分に1つに固まって出土し、布きれも付着していることから、布袋に入れて首にかけて副葬したものと思われる。

数珠は、1号墓で出土し、古銭に付着していた。他の墓塚から検出されなかったのは、木製の数珠のため腐蝕してしまったのであろう。

9 掘乱層出土の遺物

I層（表層）より出土したもので、磁器、陶器類である。

器種は碗、皿、鉢、猪口、高环、茶家及び茶家蓋、摺鉢、鉢、壺等で、伊万里焼、薩摩焼が主体である。



第303図 墓書土器

(1) 墓書土器

2363～2366は焼成の良い土師質の壺で、同一個体と思われる。小片ため全体の構図は不明だが、戯絵と思われるものを画く。2367は見込み底に墨書するが、細片で判読不可能である。

(2) 碗類(第304、305図)

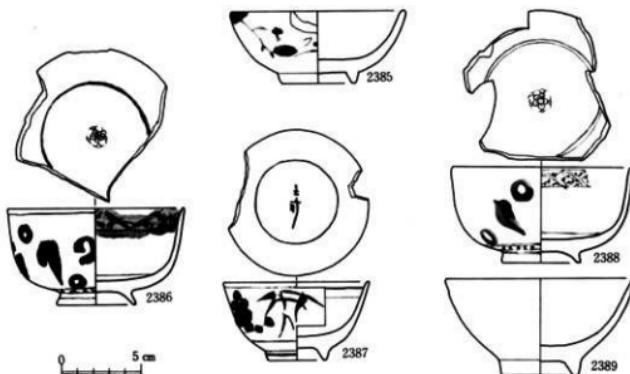
磁器染付碗が主体で、器形は碗形、端反、筒形である。碗形は口径9～11.5cm、器高5～6.1cm、底径3.4～5cmを測る。2385は抽象化した梅を画く厚手のものである。2386、2388は鳥と幾何学文を交互に配し胸部下位には3条の圈線内に「○」、「×」を巡らす。2387は竹、梅を引き見込み口縁及び底には圈線、「壽」を画く。2389は褐色釉の陶器碗である。見込みに重ね焼痕がある。2390～2392は礎浜を画く。2391の見込み底には4個の目痕、2392は礎浜を画く。

2394～2397は端反碗で口径10.3～11cm、器高5～5.5cm、底径4.5～5cmを測り、唐草文及び幾何文、見込み底には礎浜、見込み口縁部には雷文、櫛文を巡らす。2397は鼻須が流れ良くな。また、2396の胸部には焼成時において他の碗片が付着している。2398は圈線内に唐草文、見込み口縁部に圈線、文字を画く。

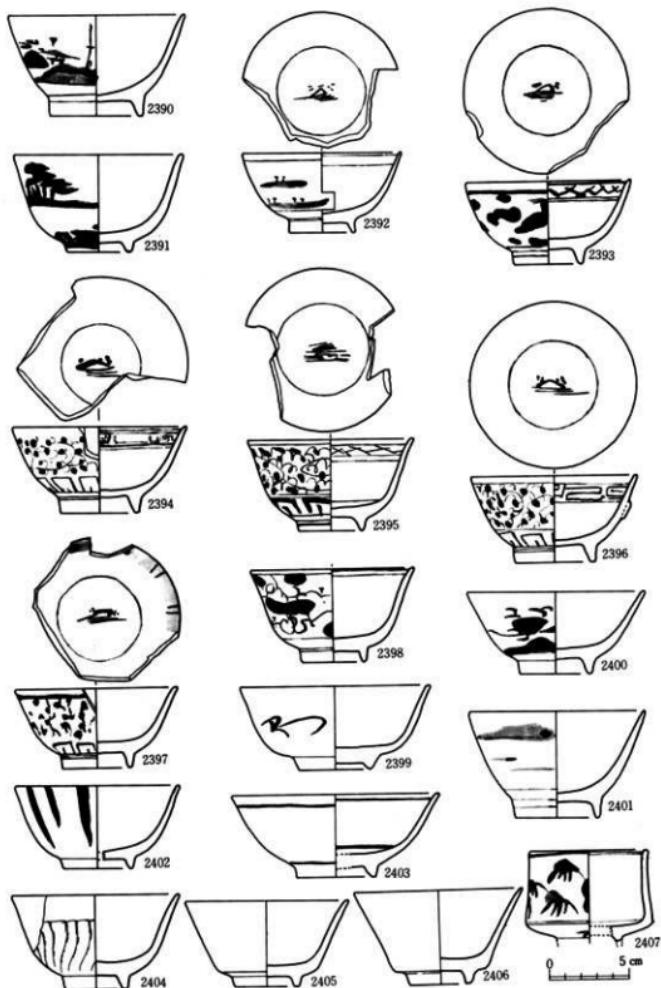
2399は草文を画くもので見込みには粗い重焼の痕が残る。内外面とも貫入が入る。

2400、2401は礎浜を画いたもので、2400の見込みには重ね焼痕が残るほか、文様は画かれていない。2402は口縁部から胸部にかけ竹笠様の文様を長短交互に画く。内外面とも貫入が入る。

2403は内外面とも圈線を巡らすだけの碗である。高台はちりめんじわ状である。2404は胸部に面取りされたもので白釉も良くなる。2405、2406は器体が直線的に開き、高台際も稜をもつ。2407は筒形碗で雪持笹の文様をあしらう。



第304図 碗類(1)



第305図 碗類(2)

(3) 盆 (第306・307図)

2408~2422が盆である。

2408は幕苟底状を呈するもので口径13.7cm~14.2cm, 器高3cm~3.7cm, 底径4.5cm~7.5cmを測る。見込み口縁部には唐草文、松葉文及び團線を画く。2408, 2409の見込み底には五弁花文を画くが、2410にはない。また重ね焼の痕がみられ、厚手の作りである。2411は高台になり、見込み口縁に樺文を画く。還元焼成のためか灰色に近い色調を呈する。

2412は裏文に唐草文、見込み口縁部に唐草文、樺文、見込み底には簡略化された松竹梅を画く。2413は小形の皿で見込み口縁部に松皮蔓、底に團線及び松竹梅を画く。裏文に桐と幾何学文を濃く画く。2414~2418も小形の皿で口径8.8~9.7cm, 器高2.8~2.9cm, 底径3cmを測るもので、2414は團線と斜格子文、裏文に斜格子文、2415は團線と文字、裏文に唐草文を画く。

2416は見込み口縁部の菊花は赤釉、底の松團文及び葉文は綠釉を使用する。

2417, 2418は裏文に5条の曲線文を口縁部から底部にかけて画く。2418は粗い貫入が入る。

2419は見込みに鳥を濃い呉須で画く。2420, 2421は見込みに山水画を画くもので、2420は淡く画かれ口唇部は鉄釉で縁取りをする。2421は濃く書き上げ、裏文には團線と唐草文を画く。

2422は見込み底に正円を重ね、周辺には礎と思われる文様を画き、口唇部に鉄釉を塗る。

(4) 鍋 (第307図)

2423は復元口径15.6cmを測るものである。文様は胴部、見込みとも破片のため詳細は不明である。2424は復元口径15cm, 器高7cm, 底径5.7cmを測るもので、胴部には花文を散らし、見込み口縁部には波状の口縁に合わせ花弁状に区画し、底には松と思える文様を圓形に配する。いずれも赤釉を用いる。

(5) 猪口 (第307図)

2425~2435までが猪口である。器形は碗形、筒形、端反等に分けられる。2425~2430は口径6.4~8.8cm、器高4.7~5.1cm、底径2.9~4.5cmを測る。文様は雲あるいは松様の文様を画く。

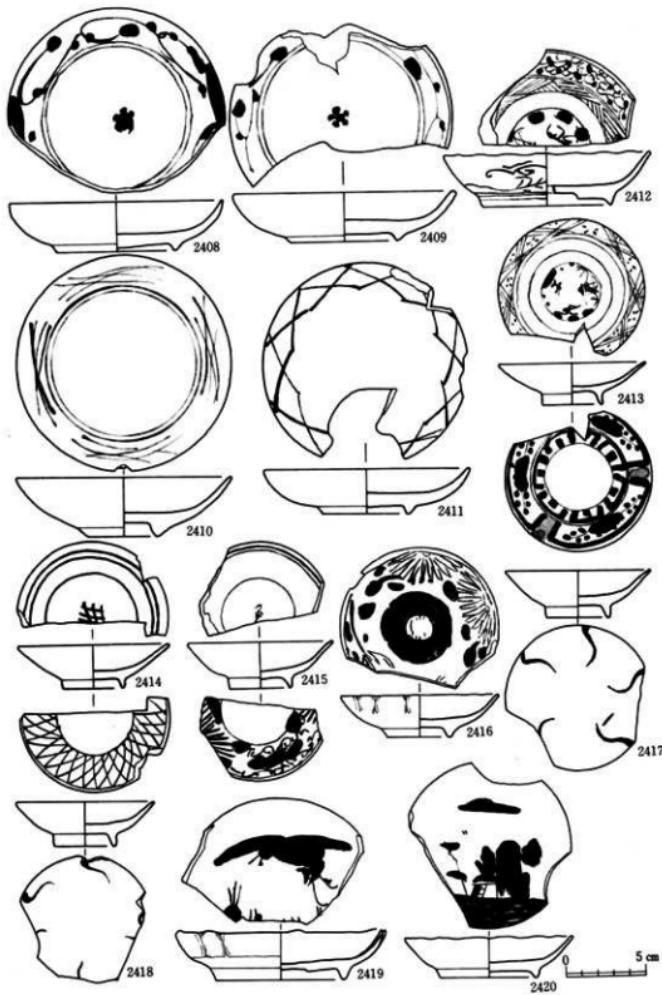
2431はこうもり、2432は内外とも唐草文を画き、高台内には文字を画くもので、2433の磯浜文をもふくめ端反となる。2434, 2435は筒形で、口径6.6, 7.1cm, 器高6, 5.8cm, 底径5, 4cmを測る。2434の文様は全体を欠き不明、2435は唐草文、見込み口縁部に松皮蔓、見込み底に五弁花文を画く。2436~2440は口径3.7cm, 器高2.7cm, 底径1.7cm前後を測る小形のもので、文様は画かれていません。

(6) 高杯 (第307図)

2445~2447は高杯形の碗器で、口径6~7cm, 器高5~6cm, 底径4cmを測る。脚部を除き白釉がかかる。

(7) その他 (第307図)

2441は鉢形の土器である。2441, 2442は染付、2443は青磁である。なお2442の見込み底には径2cmの孔がある。2444は酒器と考えられるもので、器面には草花文を呉須で画く、2448は褐釉がかかるものである。



第306図 皿



第307図 皿・鉢・猪口・高坏・その他

(8) 茶家・茶家蓋 (第308図・第309図)

2449～2463, 2466, 2467は茶家及び茶家蓋である。茶家は胴部が丸いものと、尖り稜線をもつもの、大形で、注口をつまみ出したもの等がある。いずれも薩摩焼である。蓋も同様に薩摩焼であり、2462, 2463はいわゆる山茶家の蓋であり大形である。

(9) 茶入・蓋置 (第308図)

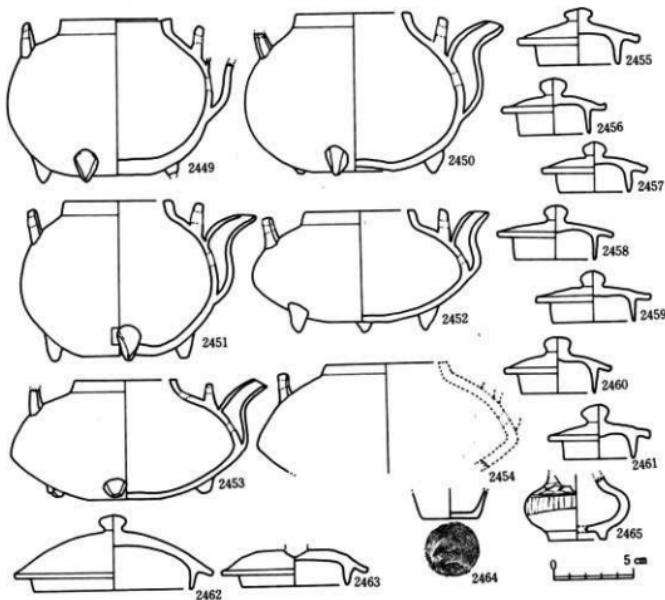
2464, 2465がそれで、2464は陶器、2465は磁器である。いずれも薩摩焼である。

(10) 鉢・摺鉢 (第309図)

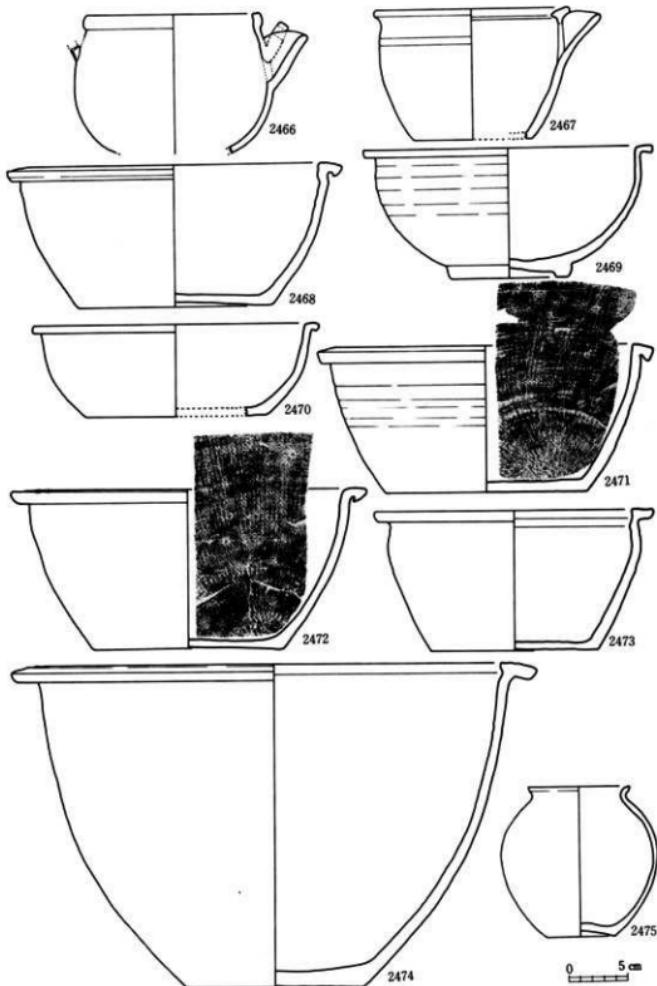
2468～2474が鉢及び摺鉢である。いずれも薩摩焼である。カキ目は見込み底から口縁部にかけて細く刻まれていた。

(11) 壺 (第309図、第310図)

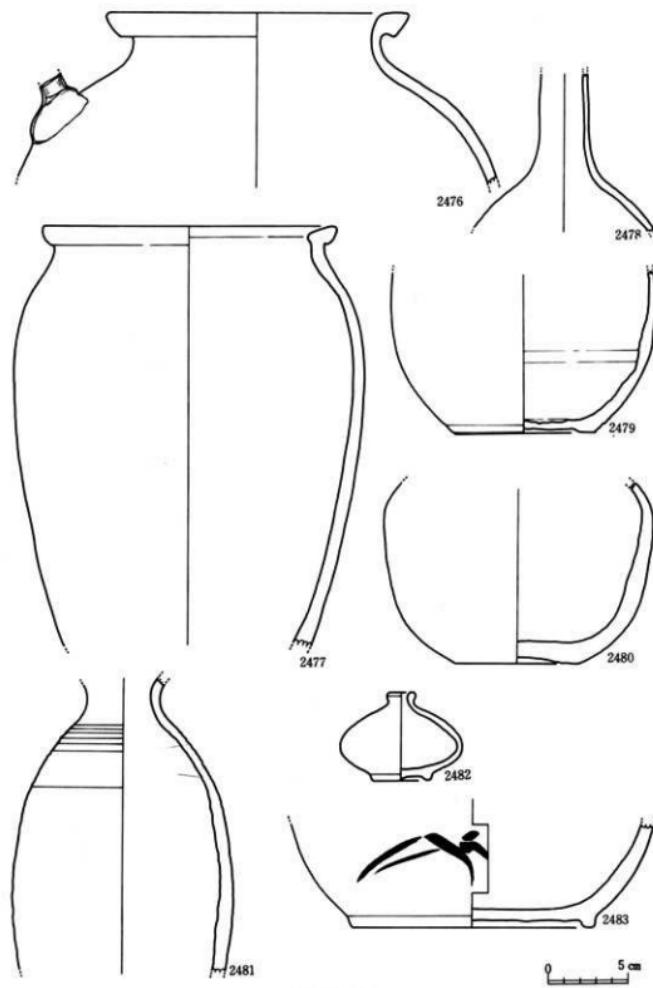
2475～2483までが壺である。このうち、2481は琉球焼の壺、2482は還元焼成された油壺、2483は染付壺である。他は褐釉がかかる薩摩焼と考えられる壺である。



第308図 茶家・茶家蓋・その他



第309図 茶家・振鉢・鉢・壺



第310図 叠